

バストス二十五年史(2)



(注・(2) では「草分けの思いでを語る」から収録)

バストス二十五年史 目次

畑中仙次郎氏 序に代えて

谷口 章氏 「バストス二十五年史」刊行を後援して

宮坂国人民 題 字

開拓 初期 (注・数字は原本のページ数です)

第一章 移住地の沿革 一

第二章 開拓への第一歩 二

第三章 計画と現地の事情 一五

第四章 搖籃期の産業 三三

第五章 社会秩序の建設 三八

開拓第二期・

第一章 飛躍の段階へ到る産業 五三

第二章 社会性を帯びる移住地 七〇

開拓第三期

第一章 転換期に立つ産業 八〇

第二章 ブラ拓より植民者へ 八六

第三章 国粹主義下の移住地 九七

第四章 衰退の兆頻りの産業 一〇九

戦時中及び戦後

第一章 戦時下の移住地 一一五

第二章 自立経済の確立

一二〇

第三章 衰退期の産業

一三〇

第四章 各産組の進出

一四三

第五章 完成期に向かう移住地

一五三

スポーツ・文芸史

一七四

野 球

一七四

陸上競技

一八六

俳 句

一九二

短 歌

一九八

川 柳

二〇二

各区開拓小史

二〇四

グローリア第二

二〇四

ブログレツソ

二二二

カスカッタ

二二三

グローリア第一

二三三

ウニオン第一

二三九

ウニオン第二

二五四

サウーデ

二五四

ファルツーラ

二六二

ボンフィン

二六八

アルト

二七五

エスペランサ

二八二

ノーバ・エスペランサ区

二八八

エスペランサ更生 区

二九四

(注・以下の数字は本文庫のページ数です)

草分けの想出を語る座談会

4

功績多き三故人

24

移住者閲歴編

34

移地居住者名簿

363

編集後記

494

草分けの想出を語る座談会

・出席者・

(イロハ順)

石田 光助

吉田興三吉

井上 孫六

吉浦秀次郎

畑中仙次郎

桑原久次郎

本田一男

山中 三郎

時川一馬

古川 誠三

味野 謹子

佐藤福太郎

司会 本田正雄

谷口 章

谷口（連合日本人会長）バストス移住地創設満二十五年を迎えた今年、元ブラ拓本部歴史編纂課主任の要職に在られた水野昌之氏からバストス二十五年史編纂の話がありましたので、聯合日本人会の方でこれを後援致すことになりました。今日はバストス草分けの方々にその当時の事をそれぞれの立場からお話し願いたいと存じます。司会を本田正雄氏にお願いします。

本田 それでは、まず移住地開設の事から始めますが、移住地の産婆さんの役目をされた畑中氏にバストスの土地撰定の前後の経緯並びに開拓当初の思い出や苦心談、いろいろのエピソードを話し



出席者左より、時川、佐藤、山中、味野、井上、古川、桑原、本田、織田、畑中、吉浦、石田、吉田、本田、谷口、

ていたゞきたいと思います。

畑中 海外移住組合聯合会が創立されて、まず購入土地選定のため梅谷専務が来伯することになっていたが、武石仙達という秘書が先に来てことに当たっていた。しかし、一切のことは総領事館に委嘱しており、土地の撰定などは、あちこちに手を廻わして調べ、約二十程の候補地を得ておりました。昭和四年に梅谷専務が来てその調査をもとに土地撰定をはじめたが、当時は、移住組合というものが出来て、今度大きな仕事をするそうなので、えらい評判でした。ノロエステ、ソロカバナ、パウリスタ延長線、パラナと各方面に候補地があったが、その地方の住人の要望なども考慮に入れておりました。私はその頃、総領事館の移民課に勤務していましたが、たまたま高岡ドートルのマレッタ研究を手伝い、衛生技師として奥地を廻っていた古關徳彌君と私に土地調査撰定の命が下りたんです。古關君と私は一九二八年一月からノロエステ根を振り出しに調査にかゝったのですが、聯合会の原則的な土地撰定方針が、一ヶ所に一万域以上まとまっていること、これは植民地建設の対象として絶対に必要で、施設をする上に小さくてはどうにもならんからです。それに、いうまでもなく健康地、土地のよいこと、価格は二百五十ミルレイスまでで、珈琲が植えられ、地権が確實で、交通が便利な処というのであったから、なかなかそう易々と見つからなかった。ノロエステ線プラスミチーナの視察地は、面積一万二千域位で、マリリア、オリエンテ方面まで伸びていて、良い土地であったが、価格が当時四百ミルレイスだったので、切り上げてソロカバナ線に足を移した。ソロ線は六ヶ所調べた。しかし、こゝも理想的と思われる土地は高価で、ア・マツシヤード邊は四百ミルレイスで手が出ない。バストスだけが二百

五十ミルレイスで可能性がある、というので、綿密に調査にかかった。当時バストスに入るにはクワタ道であるが、途中までしか入れなかったが、既に珈琲を植えていた伊大利人ピーバ氏にピカードを頼んで開けてもらい、古關君がカマラーダを連れて、カスカッタ道から一直線につけたピッカードを歩いて、アルト方面まで踏査したのです。私はソロカバナ線奥の調査中、落馬してひどく腰を打ったため、クワタの宿屋で横になって苦しんでいたのです、バストス最初の踏破者は古關君です。二七年二月中旬でした。これより総領事館及び聯合会梅谷専務の間で、バストス購入の商談が検討され、遂に移住地を撰定するに到ったわけです。そして話は急速に具體化して、私が開拓主任を命ぜられ、一たん、ノロエステ線カフエランジャにあった家族のもとに帰り、そこより山中權吉氏、故吉永君といった協力者を求めて、開拓準備を整え、一行トラックに便乗してコパイーバ川を渡った川岸に掘立小屋を建て、そこを前進基地に開拓の第一斧を打ち込んだのです。二七年八月十日頃でした。これが大體、開拓までのアウト・ラインです。

司会者 第一回植民の着く頃の施設は？

畑中 まだ何もなかったね。ガラージと收容所位のものだった。それも第一回入植者が、日本を出発していいよ現地へ乗込む三日前に、やつと收容所が出来上ったようなわけだ。

床板なぞ生木のペローバだから、六月頃の寒さで冷々とし、さぞ酷かったらうと思う。

山中 しかし、当時の事務所側は全く緊張そのものでした。

朝早くから仕事にかゝり、夜は十二時過ぎまで翌日の準備打合せをするというあんばい。入植者受入れ態勢整備に、それこそ全員

が火の塊となって働いていた。その間にあって畑中支配人は、入植者の不平組が言うようには決して専制的ではなかった。従業員の合議制で、毎夜必ず事務所に集合して、方針を立てて、翌日の仕事にかゝるといったやり方であった。

畑中 榛葉副支配人は、暗いうちから仕事の指揮をしたし、松本さんは毎夜十二時過ぎまで机を離れない。各主任は必ず夜事務所で相談打合せをやり、全く一心一體となつてやったものです。

司会 受入側が眞剣であつたことは、今日となつて誰しも認めるところですが、当時、密森地帯の眞ん中へ、斧一丁を興えられて放り込まれたような恰好にあつた直来入植者の感想はどんなでしたか。

石田 私は北米生活二十三年を経験して来ているので、植民地に対する智識を有っていた故でしょう、バストスの新入植者受入態勢は誠に結構であつたと思つており、自分としては不服を言うところはありませんでした。しかし、家内どもはなかなか承知しません。そこで、ともかく一年辛棒してみよ、きつと満足するようになるから、と申して仕事に着手しました。こうした私を、不平組の先輩の方々は、馬鹿なことを言うな、と怒られました。私は入植體驗を県庁に報告して、後進の人の参考にしてもらいました。

古川 僕は伯国に対しても、移住地に対しても、予備知識はなかった。開拓資金と仕度金だけはどうやらあつた。いよいよ出発のとき、和歌山県移住組合で送別会をしてくれて、主事がこういうことを言つた。移住地にはもう何もかもちゃんとしてある。学校、病院、シネマ館もできている。供託金は現地で引替えてくれるから何の心配もない、たゞ行きさえすればよいとの事だつた。

僕は金がなかった。伯国へ着いたが梅谷専務は既に帰国しており、武石秘書がいたが交渉しても埒はあかない。また、移住地の幹部というものが、誰一人我々の出迎えにも来なければ敬意を表しに来ておらぬ。というわけで最初から少々面白くなかった。移民列車は四時間遅れてクワタ駅へ着いたが、町にはランプが灯っているじゃないか。これはひどいところへ来た、と思っているうち、迎えに来たトラックに貨物扱いでむりやりに乗せられた。ペーシ河の所まで来ると、前の車が止まった。バストスが見えるといって騒いでいる。バストスへ着いたときは恰んど夜明けであつた。トラック十一台ならんで到着したわけだが、乗っている我々はまるで豚のようにぎっしり詰められて、腹を立てるよりも何か悲しかったよ。収容所はまだ出来たばかりで、目板が打ってないので外から丸見えだった。そのうち大工が来てバタバタやったが、床板は生板だから背中が濡れて眠られない。焚火をして一夜をしいだ。国を出発するときの県組合主事の言葉が、ときたま頭の中をぐるぐると駆け巡った。

グローリア第一区は、町に近い方から伐採したが、急に山焼きしたので住宅地も山もひどい不焼であつた。畑中支配人に金を下さい、というと、『何で 金など渡せるものか。』という。現地に来れば供託金が受取れる筈なのに畑中氏は『聯合会は聯合会、ブラ拓はブラ拓だ。』というので、とうとう喧嘩をやってしまった。

畑中 何しろ殺伐でしたよ。新来者が五百円よこせ、何に使うんだ。新開地で物騒でいかん。ピストルを買うんだ。いや必需品買うならともかくそんなもの余分な金は渡せぬ。俺の金だ何故渡さんのか。いや渡せぬ。で、とうとう渡さなかったことがあつたが、今考えると全く親心であつたと思いますな、いやもうえらい見幕で

したよ。当時は：。

司会 県組合の主事の言葉が全く出鱈目だったように思われますが、現地との連絡はなかったのですか。

畑中 全く大切な事なんですが、連絡はなかったのです。その為に色々思い違いを生じ、不平をつのらせたのですが、しかし、あまり事實を伝えていては、折角の渡伯意慾も二の足を踏まされるようになったでしょう。一人でも多く送り出せばよい、といった、いわば無責任が送り出された者を、受け入れた側との間に悲劇を生じさせたのだと思う。

古川 入植翌年の三月、僕は畑中支配人に事務所へ呼び出され、今後食料と医療費は一切現金で支払ってくれといわれた。金がなければ医者は診てくれんのか、医は仁術ではないか、と喰つかゝつた。その頃、事務所関係のある人が僕にこんなことを話してくれた。矢崎さん（ブラ拓本部柘植主任）が畑中氏に言うには、『金をもった移民は大體しまつが悪い、預った金があるなら皆渡してしまえ、困ってくる」と自然に地区に入って就働するようになる』とうとうとう僕も山へ入り稲を作った。よく出来た。石田光助さんに稲刈を教えてもらった記憶があります。

吉浦 私は直来で入植するまで、かなり認識を深めて来たつもりであったが、現實の相違には少からず驚いた。県移住組合の宣伝では、バストスに於ける農収益を最も低く見積つても六年後には約一万七千円の純益を挙げる計算がなされていた。しかし、着伯して、その当時の直来者の空気にはびっくりした。何れも不平だらだらで、バストスは瘦地だ、慌てゝ土地をとるな、と異口同音にいう。六ヶ月前に来た小谷氏という同県の人に会いましたが、身装りは乞食のようにみすばらしく、顔色もひどく悪いようでし

た。ともかく入植早々悪い印象ばかりでした。直来者の不平が昂じて、入植年の十二月二十日頃、梅谷専務を吊し上げる梅谷事件が持ち上ったのですが、これは結局、聯合会と現地ブラ拓との連絡の喰い違いから生じたものでした。

畑中 梅谷事件の真相というのは、植民者側の不平『嘘を言って我々を騙した』という愚痴の爆発ですよ。昭和四年十二月末で、梅谷さんがバストスの視察に見えたとき、これを機会に不平組が梅谷をとつちめてやろうと、收容所の一室に呼び入れて喧しいことを言い寄った事件です。

吉浦 梅谷さんが席につくと霜出静二氏がいきなり『梅谷！貴様人間の生血をすゝる気か！』といった。すると温厚な梅谷さんは「何つ！」と立ち上つて怒られたことを憶えておりますが。

古川 各県移住組合の方針は、最初のうちは各県の移住地を作るのが目的でした。岡山県代表の松本圭一さんたちもそれを主張していたし、小谷氏は広島村の村長になる積りだったし、本田彦右衛門氏は知事以上の人物だったから、全バストス移住地を牛耳る野望をもっていたらしい。そういう連中が一つ梅谷を呼付けていじめてやろう、とかゝつたのです。植民者大会を、收容所の狭い一室で開いて氣勢を挙げ、梅谷専務を呼びに行った。室内には立錫の余地もない、外には大勢の院外団が取り巻いて、何しろ険悪な空気でした。まず、ブラジルから日本へ行っている報告と實際の現地の事情がひどく喰い違っている、といって喰つてかゝつた。梅谷さんは汗を拭き拭き答弁するが、却々気の荒い連中で、そんなこと聞かない。その上ピンガ（火酒）が入っていたから勢は強かった。で、結局、会見はうやむやに終ってしまった。梅谷さんは夕方開放されて帰ると、植民者の誰かゝピストルを放って氣勢

をあげ、このまゝでは駄目だ、決意文を突き付けよ、ということになって諸田氏の指名で代表者、諸田、古川、有川の三人が事務所へ行き梅谷さんに面会し、とにかく決議文を手交したが、そのときの梅谷さんの態度は余程くだけていた。そして、俺は今日ではできるだけ忍んだつもりだ。かつて長野県知事時代に教育問題で多勢を相手に弾圧をしたこともあるんだ。まだ君たちは俺をせめるのかと言っていた。

畑中 不平組が騒然化したのには、一つには経済的な不安が誰にもあった原因である。それが證據に、間もなくバストス会という自治団体を組織するや、まず経済問題や出身県へ働きかける運動を採り上げてやった。有川事件といわれる有川氏も帰国したかったのだでしょう。表面は鹿児島県庁へ談判する使となっていたが、しかし、帰国中の動静は、不得要領でした。この旅費は皆がいくらか宛寄附していたようです。

吉浦 有川事件は梅谷事件の延長ですね。

畑中 それに続いて小田耕助追放事件というのがあったが、この小田という男は独身で、中島総領事の先輩とかいつていました。日本でも面白いことがなかったので、何かブラジルで一旗と思っただが何も無かった。バストスで何かと策動したが物にならず、遂に総領事が旅費を出して帰国させましたが、別に植民者とは関係がなかったようです。

古川 その後も不平組は、絶えず何かと策動しました。土地代金不払問題でカスカッタ区から代表がグローリア区へ来て、共同戦線の申出があったりして、不得要領のまゝブラ拓攻撃に生き甲斐を感じていたようです。

時川 私は小学校を出たばかりの少年でしたが、当時の空気は感

じとつていました。事動所側が何とかして植民者をなだめようと
していること、植民者に無法なのがいて、色々な要求を出して、事
務所を困らせること、同じ植民者でも直来は在伯舊移民を馬鹿に
したような風で、いわゆる新舊移民の感情的対立というような細
いことまで知っていました。双方気が立っている中で、畑中さん
はよく辛棒してやり通したものと、苦心のほども判り感心したも
のです。

司会 では、この邊で直来者ではなく、舊移民として入植された
方々の当時の御感想を：・吉田 私はアバレーで綿花を五年続け
ていたが、同地の綿花減収が目立つようになったとき、何でも奥
地に大した植民地が開ける相な、と聞いて、バストスへ単なる百
姓としてではなく、酒醸業か煉瓦工場を企業して入植して来まし
た。直来者が不平を訴えている当時、私たちは次期への足場を築
くに懸命だったのです。

佐藤 ペーシ河の架橋請負するのが最初の目的で、私はバストス
に移って来た。いよいよ仕事にかゝるまでは、ノロエステ線ガイ
サーラからポロ自動車で三回ほど往復したもので、入札前に畑中
支配人とも面会していた。日本語学校の出来ることなども私に
とっては大きな魅力でした。ちょうど上の娘が学齢に達してい
たんでね。

味野 私ら同県人五家族は、モジアナ線の珈琲園で三年働いた
が、伯人の間では、何かとうるさい。そうしたときバストスの話
を耳にしたので、入植を希望したが、在伯者は入植させない、と
いうことであつた。在日の兄や親戚の者は移住組合員になつてい
るのに、自分だけ除け者扱いは承服できぬので、聖市に、梅谷専
務を訪ねて交渉したところ、それなら試験的に入植させるから一

地区二コントスの入植金を持って来い、といわれ、一旦疎球園に帰って十コントスを揃え、五家族入植する約束をしたわけでした。入植の動機となったのはモジアナ線の珈琲生活を解放される喜びにあつたといえるかも知れない。

司会　入植当初、皆さんが経験された幾多の困難のうち、とくに困ったことを……本田　農産物の安値であつたのは困った。何しろ粃が一俵(六十キロ)八ミルレイス、珈琲一俵六ミルレイス、フエイジョンが四ミルレイスであつた。ブラ拓購買部へ特に頼んで白米を買ってもらつたら一俵二十五ミルレイスで、袋代を差引き手取十八ミルレイスにしかならなかつた。初めて棉作して出荷したらアローバ　(十五キロ)六ミルレイスで運賃一ミルレイス差引かれた。あゝこんな馬鹿らしいことはない、これでは俺の家族は養つて行けない、と思い、百姓を止めることを決心した。ともかく入植当初は農産物の一般的不況から、経済問題で植民者は深刻に苦しめられた。

時川　全く経済問題には苦しんだ。入植間もなく、日本からもつて来た編上げ靴もボロボロとなり、地下足袋には穴があく、畑の殆んどが茅畑で、草鞋を作つてはいてはみたが足裏にチクチクさゝつて歩けない。靴が買いたいと思つても金がない。大豆を栽培したが、少し穫れて一俵六ミルレイスなんだ。靴は当時十三ミルレイスしていた。日雇い労働者の日給が七から十ミルレイスだった。仕事に追われても日雇いを置くわけにはゆかない、誰か金を貸してくれんかなあと近所の人に頼んだら、同情して五ミルレイス貸してくれたが、それが運悪く贋札だった。

吉浦　昭和五年に入植したが粃一俵十ミルレイス、玉蜀黍が八ミルレイスでは老母と子供三人の五人家族では生計の樹てようがな

かった。あるときブラ拓の青木指導員が、私の家計一ヶ月八十ミルレイスと開いて驚き、一年一コントスの生活費では暮らせまい、というのです。しかし、収入がないため、暮らせようが暮らせまいが、それ以上の支出が許されなかったのです。そのうちブラ拓の奨励で煙草栽培をはじめ、品質が認められて農務局の買上げ品となり一コント二百ミルレイスを受け取ったのですが、貧乏どん底時代のこと、この大金には思わず嬉し涙がこぼれたね。

司会 では農事関係の話をー。まずバストスへ苗木類を運び込んだ経路について：・一山中 トロロ芋、蜜柑、アバカシ、バナナ、皆レトニア植民地から持って来たものです。

桑原 高山某という男がペンナから苗木を売り込みに来ていた。その男、腰にピストルを下げて来たので事務所で叱られたことがある。

時川 アルバレス・マツシャードの小笠原耕地から鶏や豚を汽車で澤山送り込んで来たことがある。

本田 しかし、大半はバルパから貰ったり、買ったりしたものだ。井上 バカシーの芽が五百レイス、バナナの株は二ミル五百レイスだった。

味野 猫を一匹五ミルレイスで買って来た。当時の金では大金だった。

山中 加納要助氏を連れてトラックでバルパへ行ったことがある。苗木や家畜の買い出しだったが、夕方になっても加納君どこかへもぐって出て来ない、遂に私はトラックで先に帰ってしまった。すると彼、鶏を四、五羽かついで夜どうし歩いて三十料の道を戻って来よった。元気なもんでしたな。

古川 バナナの芽やアバカシーの芽が欲しくて、レトニアに多勢

で買いに行ったことがあったが、戻つて来ると事務所に呼び出され、松本さんから、今日レトニアから抗議を受けた。君たちは苗木の芽を盗んで来たそうじゃないか、と叱りつけられた。一同不注意を詫びたが、これをカスカッタ区在の、日頃から和歌山県人を面白く思わぬ連中が採り上げて問題化した。和歌山県人は泥棒だ、と排斥運動を起し、彼らを移住地より追放せよ、と事務所に怒鳴り込んでくるものもあったという。それで松本さん曰く、グロリア在の和歌山県人はもうバルパへ行つてはならぬ、それでないとカスカッタの連中が治まらん……本田 私は川股さんと二人でレトニアに豚を買いに行つて、毛並のよい仔馬が走っているのを見て急に欲しくなり、売らんか、と訊くと、馬主が売るといふ。バストスまで連れて来れば買うといつて川股さんが百五十ミルレイスならよからう、と後払いで商談した。まさか連れてくるような事はあるまい、と思つていたら三日後に事務所まで連れて来やがった。事務所でさんざん叱られた。こんな仔馬を買つて何にする。乗れるように馴らすまでには、お前達素人には命がいくらあつても足らんぞ、返しなさい。こちらで話をつけてやるというので二十、ミルレース罰金を払つて追ひ返えしたことがある。これなど言葉が通じぬのと、事情に暗いところから生じた喜劇です。もう一つ失敗がある。やはりレトニアに豚を川股さんと一緒に買いに行つて一夜泊めてもらった伯人の家の娘に、お礼のつもりで絹のハンカチと香水をやったことがある。それが悪かった。翌日次の家へ行く途中、後から追いかけてくる伯人があつて、そのいうことには、お前だろう、あの娘に香水やハンカチをやったのは。あの娘は大変お前を好いているから夫婦になつてやってくれ。これには私ア参った。俺は妻子があるという、それでは川股さん

に、お前貰ってやってくれと言った。川股さんと二人であやまつて逃げ帰ったことがある。

畑中 レトニアには大変お世話になったものですよ。昭和五年七月、製材所が完成するまでというものは、建築材料は板切れ一つまで皆レトニアの厄介になった。植民者の住宅の屋根板などを始めとし苗木、食料品、花類その他一切のものを移入した。彼らもまた民族を越えた愛情を以って我々の面倒を見てくれた。開植四、五年後まで盛んに往来していたが、その後移住地の施設が完備するにつれ、行かなくなったが、レトニアから受けた恩恵は大きい。司会 こんどは開植初期の物資缺乏下に於ける食料状態に就いて話して下さい。

山中 穀類はブラ拓販売部で売っていたし、野菜類の供給は事務所側で心配し、高橋職員が専門担当で蔬菜栽培してくれたので、当初は充分だった。

本田 千田寓真屋のお父さんが野菜を栽培して収容所時代にもう売り歩いていたことを覚えているよ。

桑原 事務所の売店から家族人数の大小にかかわらず黒砂糖を一俵ずつ各戸別に配給したことがあるが、あれには困った。灰汁が強くて珈琲を湧すこともできない。

時川 しかし、当時白砂糖を使ったものはいなかったけ

井上 白砂糖を要求すると事務所で叱られたものだ。

時川 収容所時代によく千田さんの畑へ行って勝手に野菜を引き抜いて袋に入れて、これでいくら？ というように買って来た記憶がある。

吉浦 それをまた盗りに行く者がおったよ。

古川 大根などは大根の形になるのを待たずに引き抜いて食べた

ものだった。

本田 ウルブーを撃って来て、これは大きな鳥だ、食いだがあると喜んでいたものもあつたなあ。

石田 高柳武七郎さんが蓮根の苗をノロエステから取り寄せて分けて貰いましたが二本芽が出ましたよ。それをだんだんだん殖して林大使が来植されたとき、畑中支配人の注文で十キロほど出荷したことがあります。

畑中 その石田さんの蓮根をサン・パウロ市のオルト・フロレスタル公園の池に寄附して繁殖させたところ立派に育った。しかし、後ガンソを放飼したら皆食い荒した相です。

吉浦 入植当時、松茸の一種で美味しいのが生えまして、大きいのは二キログラム位のが澤山ありました。

井上 森の中の蟻山によく生えていましたな。

吉浦 しかし、最初は食べられるか、どうか疑問でして、家族は誰も食べようとしなない。で、俺が毒味をしてやる、と食べると主人が食べるものなら私もと、家族中で食べたが美味しかった。香りは松茸に比べて落ちるが。

時川 フイゲーラの大木に茸が生えているが毒味をして見たいけれどその知識がないので悪いとは思いながら隣家の伯人労働者に煮てご馳走してやった。その反応を見ていたが、別に中毒した様子もないので、自分も食べてみると美味しい。あとでそのことをテストの伯人に知らせると、驚いて忽ち腹痛を起しておった。

司会 こんどは朗かな話をどなたか…

石田 私はオンサを撃ったことがございます。入植二年目でした。珈琲のコーバを掃除するため、夜明け前四時頃家を出て森の附近へ来ると、前方に大きな野獣がいるので、びっくりして家に引き

返えし、十一連発の鉄砲を持って出かけると、まだこちらに向つて捻っている。もうその時はよほど明かるくなって、獣の姿も判ったがオンサとは知りませんでした。一発で鼻を射抜き射止めました。伯人がオンサ・ピンターダと教えてくれました。また、畑へ行こうとしているとき、近所の伊勢島さんの娘が金切声でよぶので、駈けつけると、木の枝に半身からませた大蛇がいまにも飛びかゝらんとしていました。そばで犬が吠え立てております。二発打ちますと命中してだらりと下った。頭の大きさ五糎以上ありました。かつらで縛つて三人でかついで帰りましたが、大蛇の名はジポイヤとかいう事でございました。

本田 私鉄砲を買つて一週間目です。松田民蔵さんの所へ象が出るというので行つて見るとタツーでした。尻尾の恰好が象の鼻に似ていると松田さんの娘が見間違えて、象と告げ

たものでした。タツーの穴へ一発ドンと打ち込むと、ガーンと耳に應え、痛み出したので内田医師に診てもらうと鼓膜が破れているといつて薬を塗ってくれたが一晩中痛むので、また診てもらつたら、医者が誤つて劇薬を用いていたとのこと、いやはや、ひどい象狩りになりました。

山中 獣の話ではないんですが、クワタ道のペーシ河縁の湿地帯の道路を修理に出かけたときのことです。畑中さんと私で二台のトラックを運転し、西日の射す道をそれぞれ労務者を乗せて帰る途中、畑中さん、あつという間に土堤にトラックをぶつけてしまったんです。トラックの上では皆疲れてうつらうつらしていたが、ジョゼという黒人が眠ったまゝはずみを喰つて車前の草むらの中へフアツと投げ出されてしまい、まだ眼が覚めないで伸びている。てつきり気絶したなと思ひ傍へ行くとズボンのボタンがは

ずれて道具を出している。その恰好の可笑しさに皆吹き出してしまった。誰かがビールを抜いて口に注いでやると、漸く眼を覚まし、こゝは何処だと聞くので、また一同大笑いしましたが、不思議にもかすり傷一つ負っていませんでした。

畑中 やあ、あれは一番の失敗の巻でしたなア、皆よく怪我せなんだものだ。

司会 植民者のうち一番最初の犠牲者つまり物故者は誰ですか。

山中 入谷君が最初の人だ。彼はブラ拓職員が入植者受入か整備に活躍した男だった。その死因がまた過失によるので諦め切れないものがある。当時職員は日曜日毎にピストルの射的会を行っていた。その日も日曜日の夜で、職員寮に集って皆雑談をしながらピストルの掃除をしていた。佐々木という同僚がその最中、誤って発砲、傍に本を読んでいた入谷君を負傷させてしまったんだ。弾は膀胱を射抜いていた。畑中さんと私でレトニアに軍医あがりの医者を迎えに行つて来た。

彼は治療し治るといったが容體は益々悪化し、頻りに讒言を連続的に言う、皆泣かされたな。そして三日目に横死したが、肉親とも離れ開拓地の先発隊の同僚に見守られて死んで行つた彼の無念さを見ると、今日でも涙を誘われるね。入谷君が最初の犠牲者だろう。

畑中 本当に可哀そうだった。あの頃は銃器は普通携帯具としていたので、それによる過失は多かった。

本田 元愛媛県選出代議士だった清水伴三郎氏が、愛媛県人を集めて何か話をしていたとき、銃をもち出し、装填してあるのを知らず引金を引いて塚本某に怪我させたこともあった。右手が微塵にくだけてしまった。手がなくては仕事ができぬから日本へ帰え

らせろ、ということになりグローリア区長松田民右衛門氏が清水代議士にかけ合って、とうく四コントス出させて帰国させたことがある。当時一円が三ミル七百レイスの換算だったから代議士も痛かった。

井上 犠牲者ではグローリア第二区の井上喜一郎氏の長女で名は知らんな、五歳だった。アミーバ赤痢で亡くなりレトニアに埋葬に行った。これが第一号だろう。

畑中 昭和五年正月、矢田貝という草分けの人が亡くなっている。その年の四月頃、名前は忘れたが原、亀山という人も物故した。井上 同年の八月に白井しなえさんの次女か三女のマリ子さんとかぶなくなっている。

司会 齋藤太郎氏の弟とかの首吊り事件というのは何時頃だったですか。

古川 何か家庭の事情で行方不明であつたが昭和五年正月に見つけた。

山中 何とかいう大工さん、家を建てる材料探しに森へ入った。夕方、足もとの椰子實を拾っているうち、靴があつたので何気なく上を見ると、ブラ下つているので腰を抜かして逃げ出した。這って歩いたそうです。

司会 ではこの邊で、バストス移住地総まくり、つまりブラ拓のとった移住地経営策に対して批判をして下さい。

畑中 それについては、移住組合の生い立ちから見ねばなりません。まず、日本移民のブラジルに於ける足跡を調べ、当時、珈琲園に苦勞していた邦人が約十万いたところから、土地を興えてこれを救え、という声があがり、内務大臣が人口問題の対策の一つとして採り上げ移住組合聯合会を作ったようなわけです。勿論、

民間では各県に移住機關設立に対する世論はあつたが、多くは事情に暗いまゝ内務省案に賛成していた。また移民も日本で二十四町歩の百姓になつてブラジルに行くのだという考えで出発したのです。こうして始まつた植民事業の結果がよかつたか悪かつたか、それは一般論になるが、大局的な立場で批判して貰いたいと思う。去年あたりから移民が再開している、今後もしどし来ることであらうから、ブラ拓の功罪は明かにする必要がある。それは移民送出に対して参考になるし、また参考とすべきだと思う。

吉浦 ブラ拓關係の農事指導を見ているすと、五年毎に方針が變つて来ています。まず、最初が珈琲でした。それから綿、次にマモナ、養蚕と、主作物が転々と變る。そこに一貫した指導性がなかつた。また植民自體にも、自主的な考えというものがなく、人が何かで儲けると皆どつとそちらへ傾いて、他人の眞似ばかりやる。自分で工夫するという氣風に乏しかつた。戦争景氣に乗つた養蚕業などそのよい例でした。その後、養鶏に代つたものの、たゞ鶏飼いが有利だからと眞似るのではなく、農魂に徹した産業として打込んで貰いたいと思います。今後もし新移民は続くことゝ思いますが、移植民事業は今後とも、三分の一の舊移民を交ぜて着手しないと悲劇の繰返えしになると思います。私たちとしても、これで移住地を築き上げたものではありません。お互いに體驗を生かし、研究して生産を挙げるようにしたいものです。

古川 僕の二十五年の過去の體驗では、どこまでも自己本位でやる。依存主義を棄て何事も自力でやる人でなければ駄目だという結論に、一応は達している。今後の移民も、どこまでも移民自身に自主的決意がなければ、移植民事業は成り立たぬ。土に親しみ、土に宗教を以つてかゝらねばならんと思う。これは、その人間の

質の良悪に帰結する問題だと思います。であるから移民の人は最も考慮されなければならぬ畑中　バストスの生い立ちを見ると、そこに自主性があつたか、どうか検討すると、疑問と思われる節があるようです。それかといって、果して温室移民であつたかどうか、それにも研究の余地はある、しかし植民者自体が温室移民であつたというのは可笑しいですね。

山中　古い事です、海興が植民地を開きましたが、その海興的事業に対する反海興的気分というものがあつた。ブラ拓がバストスを開発するという事は、そういう空気の中で在伯邦人に一つの希望をもたせたと思うのです。この期待に副う気持ち、私をブラ拓に参加させたのですが、考えて見るに、日本直来者と舊移民が偶然こゝに一つの植民地を作り上げたことは、新舊文化の花を咲せた結果となりました。途中で挫折した人、落伍した人、他へ転出した人も数多いがこゝに今日生き残つた人がバストスの花であり實であります。バストスには、最早、二世、三世が澤山栄えつゝありますが、この意識を呼び起さしめなければならぬと思います。バストスこそは父祖の地だという自覚を持たしめる、その基礎を我我の手で築き上げたいと思います。

司会　誠に同感です。我が愛するバストスをこの上とも住みよくするために御協力願ひ上げます。では、これで閉会します。皆様どうも長時間、いろくと有難うございました。

功績多き三故人

故脇山甚作氏



バストス移住地を訪問する来伯者は、戦後数十名に達するが、日本直来の移住組合員の手によって、最初の開拓が為された廿五年の歴史を有する此の移住地の産業文化教育衛生の諸施設を見て、感慨を深くすると共に、更に郊外に眠る二千余の先駆者の奥津城を一巡するに及んで、更に無限の哀愁を禁じ得ないものがあると思う。

その広い墓地の中央に、三基程際立つて立派な黒大理石の墓碑があり、それぞれ碑文が刻んであるが、その内の二基、即ちここに記す脇山甚作氏及び溝部幾太郎氏は、共に大戦後の思想混乱の犠牲として、凶弾に斃れたことを知るに及んで、今更の如く、当時の收拾すべからざりし世相も俚ばれるであろう。

死して尚一段の光彩を放った脇山甚作氏の碑文は次の様に記されてある。

「武人トシテ身ヲ君国ニ捧ゲ退役後渡伯スルヤ農人ト共ニ忍苦ノ道ヲ歩ミ遂ニ受難ノ生涯ヲ了エシ故脇山甚作氏ノ如キハ日本移民史ニ特筆銘記セラルル一偉材ト云フ可シ。

君ハ一九三一年一族郷党ヲ率イテバストス移住地ニ入植シ推サレテバストス自治会長並ニバストス産業組合長ノ要職ニ就キ移住

地ノ發展ト融和二盡瘁スルコト十余年、移住地黎明期ノ大指導者トシテ不動ノ功績ヲ胎シ産業組合中央会理事長ヲ兼職シテ全伯産組ノ進展ニ貢献スル等筵席ニ温マル事ナシ。

資性果斷情誼ニ厚ク惣慾ニ淡々タル恰モ古武士ノ風格ヲ備エ幾多ノ士ヲ薰陶シ円満ナル人格ハ夙ニ内外人ノ等シク敬仰措力ザル所ナリシモ第二次大戦ノ飛沫ヲ受ケテ監禁ノ不幸ヲ蒙リ終戦後思想混乱ニ乗ズル暴漢ノ襲撃ニ斃レテ熄ム 時二一九四六年六月二日享年六十七歳 噫君ニ一ノ寧日ナカリキ 本年聖市基地ヨリ遣骨ヲ此処ニ迎工君ガ永遠ノ安息所ト為ス 一九五一年十一月二日故元陸軍大佐脇山甚作氏墓碑建設委員会

委員長 石 橋 長 児

副委員長 味 野 謹 子

〃 霜 田 静 二

脇山氏は、佐賀県西松浦郡伊万里町字古賀の出身で、一九三〇年、陸軍予備大佐という変り種の移民として渡伯し、最初ノロエステ線グワランタン駅の耕地で、一年コロノ生活をなし、普通の移民とかわることなき苦難の途を歩いたが、バストス移住地が広く在伯移民にも門戸を開くと聞いて、三一年一党六家族と共に、バストス移住地ウニオン区へ入植した。

脇山氏の入植後間もなく、設立したバストス産業組合長に推され、又別に自治会長（日本人会）に選挙され、大戦勃発迄バストスの自治と産業の進展に文字通り全力を挙げて盡した。ウニオンの自宅から、組合事務所に通勤するのに五キロの道をいつも乗馬であつたが、弁当は必ず握り飯で、時には馬上悠々之を頬張り、組合事務所でお茶を飲むといった實に質素な日常で、極力浮華輕佻

を戒しめ、結婚式の披露宴が派手過ぎるといつて、警告を発し、身を以つて範を垂れたことは有名な語り草である。

皇紀二千六百年には全伯組合の代表として帰朝し、式典に列したが、此の年が氏の還暦で渡伯十周年という記念の年であつた。在伯中の功績は、単にバストス産業組合長としてのみならず、一九三五年創立の産業組合中央会（聖市）の理事長に推され、全伯産業組合の指針に競合して、よく統制の實を挙げ、在伯邦人産業組合運動の黄金時代を築き上げた觀があつた。

四一年末太平洋戦が始まると、伯国官憲より、氏が日本陸軍の上層者である事、及び前年帰朝した事實に意外の疑惑を蒙り、一片の呼出状と共に聖市に送られ、戦争終焉迄罪なくして、圀圍の月を眺める不幸な身となつた。此の爲めに、一家は聖市に移転を余儀なくされ、収入の途を断たれて、暗澹たる数年を送つたが、終戦二十年の春、やつと令閨の哀訴によつて釈放されたが、バストスに帰る事は頑として許されなかつた。

終戦後、思想対立するや、臣道聯盟關係と思われる一派は、脇山氏を先頭に立てて何事かを策したが、彼らと結ばんか再び獄窓行となるので、氏の身邊を氣遣う人々によつて、一時ミナス州の温泉地に逃避した。然るに、終戦詔勅及び在伯同胞に告ぐの外務省電が万国赤十字社より通達されると、該佛文を和譯し、之に署名する六名の内の一人として、脇山甚作氏の名が見えた。之が臣聯關係一派の憤激する原因となり、四二年六月二日、聖市ドミンゴス・デ・モフエスの仮寓に四名の邦人青年が訪問して、時局に關する問答をなし、帰途に就かんとする一瞬、彼等は三方より脇山氏を狙撃して即死せしめた。後日、犯人等は逮捕され、禁錮十四年の刑に処せられた由であるが、臣聯事件は邦人コロニアの信

を内外に問われたばかりでなく、バストスのみに限って之を見るも、重要な人物をあたら抹殺してしまつた事は、返すがえすも千歳の恨事と言わねばならない。

故溝部幾太氏



故溝部氏は渡伯前、山口県大津郡宇津賀村で助役を長くやり、渡伯後は一切そういう公職に就かぬと固く心に誓い、百姓一本で、余生を送る決心で、モジアナ線ノロエステ線で一年宛暮し、三年目にバストスへ入植した。グローリア第二区で、専心農業に没頭したが、バストス農業組合の創立されるや、すぐ理事に推され、翌年は専務理事の要職についてしまった。公職にはつかぬと言つても、当時溝部氏の如き有為の材を、打捨ておかず、遮二無二押し出してしまったのである。就職すると、持前の誠心誠意、我を没して鋭意、組合の発展に努め、脇山組合長を扶けて、バストス産業組合黄金時代を作り上げたのである。もし大戦後の邦人社会に、かの思想混乱が起らなかったならば、そして溝部氏に天命を籍すならば、バストス産業組合の末路は、あれ程深刻なものにはならなかつたろうとも言われるが、全く言いようのない悲惨な最期を遂げられた。傾きつゝあつた大厦の支柱を失つた組合は、想像以上の深傷を受けたようである。

一九四五年八月、終戦の頃には、組合は内憂外患の様相を呈し始

めたので、溝部専務は日夜苦慮を続け、善後策に生命を削る思いで奮闘した。氏の死因は勿論、時局認識運動であつたが、眞に組合を救う道は、在住組合員が正しい判断の上に立つて、組合に協力する一途あるのみと言う信念であつたが、自ら陣頭に立つて、採配を振ったわけではなかつた。四六年三月、病院隣りの新居に移り、七日の夜半、後庭に於いて、待伏していた暴漢に背後からピストルを射込まれて即死した。これがために生じた有形無形のバストスの受けた損害は、夥しいものであつた。氏は正直一途、些かの駆け引きもなく、お上手もない君子人であつた。家庭では酒を愛し、微醺を帯びると冗談も言う明朗な父親であり、二男三女の子福者であつた。

氏の葬儀は、組合葬を以つて執行され、五百を超える会葬者で盛大を極めたが、他殺である為め人々の心に何か割り切れぬ衝撃をのこした様子であつた。

氏の墓碑には、次の様な碑文が刻まれている。

『志業ニ堅ク身ヲ公ニ報ジテ憾ミ無クンバ夫子ノ本懐何ヲ以テカ之ニ比セン、故溝部幾大君五十五年ノ生涯ヲ偲ビ転タ此ノ感切實ナルヲ覚ユ、君ハ一九二七年一家ヲ挙ゲテ渡伯バストス移住地ニ入植シ克ク万難ニ耐エテ農果ヲ収メ声望夙ニ高シ、一九三三年産業組合創立次年輿望ヲ担ウテ専務理事ニ就任スルヤ一意組合ノ育成ニ専念シ逐次ソノ基礎ヲ固メ遂ニ組合長ヲ代掌スルニ至ル 時恰モ第二次世界大戦勃発シ組合法改訂制度改廃セラルルヤ名ヲ拾テ實ニ即キ組合ノ枢要ヲ確保シテ日伯人ノ融和二努メ内外ノ障礙ヲ突破シテ危機ヲ未然ニ防グ等其ノ功枚挙ニ遑アラズ一九四五年八月大戦終結ノ報ヲ聴取スルヤ直チニ全組合員ニ通達善処方ヲ要請スル所アリシモ時運遽ニ組セズ、暗雲低迷シテ揮沌タル世相ニ直

面スルニ至ル 則チ憂慮默シ難ク敢然トシテ大義昂揚ヲ唱ヘ筆舌ヲ盡、シテ余瀝ナカリシモ惜ムベシ業半ニシテ凶弾ニ斃レ復不起時局正視運動最初ノ犠牲者トナレリ 噫時ニ一千九百四十有六年三月七日ナリ 君資性温厚ニシテ篤實高邁ナル理想ヲ以テ日夜村民ノ福利ニ心膽ヲ碎キ特ニ産業組合ノ發達ニ心血ヲ注ギシ遺業ハ移住地建設史ニ燦然トシテ輝クノミナラズ組合運動史上亦赫々トシテ不朽ニ伝フルニ足ル、今次君ガ一周忌辰ニ値リバストス産業組合並全伯有志其徳ヲ追慕景仰シ碑ヲ建テ以テ永久ニ之ヲ記念スルモノナリ

一九四七年三月 發起人一同

故松本高信氏

バストス移住地と松本高信氏の名は切っても切れぬ密接な関係があるが、氏は自らの手塩にかけた移住地が、開拓廿五周年の祝典を挙げるのを見ないで、一九五〇年五月四日に亡くなった。

以下故人を歴史上の人物として記録するに当り、改めて稿を起すより、氏の葬儀当時、書き綴つてバストス週報紙上に発表された「故松本高信氏を偲ぶ」の一文を再録した方が、最も適切と信ずるのである。



故人略歴

一、明治廿四年十月一日、埼玉県児玉郡本泉村に隆恭氏の長男として生まる。

一、埼玉師範学校を卒え、暫く郷里に教鞭を執っていたが、大正八年五月、一家を挙げて渡伯し、ソロカバナ線セルケイラ・セザール駅アグア・ビラトード植民地に入り棉作農となる。

一、昭和四年六月、バストス移住地開発の報に接して来植。

移住地事務所に入りて庶務を担当し、後移住地副支配人となりしが、戦後同地に在りて終焉に到る。

当移住地に入植した人で、大なり小なり松本さんの世話にならない人は一人も無い、といってよい。降っても照っても事務所の机に、松本さんの坐っていない日はなく、二十年間精励刻苦、生字引的な存在となって、よく植民者の面倒を見、事務所側と植民者の板挟みとなって、苦しみながら、情理を盡くして事を裁いていた、實に徳望家であった。

氏の持味というのであろう。

殆んどどういふ層の人にも親しまれ、親交を結び、青年、婦人、老年からも愛慕されたが、こういう部厚な性格と言うものも少ないであろう。試みに移住地葬告別式の際、朗読された弔詞の一斑を見ても、いかに各方面の人々と交渉が深かったかを知るに足る。その内、最も松本さんと縁故の深い畑中氏が、松本氏の葬儀委員長として、次の様な挨拶をされた。

『只今より故松本高信さんの告別式を挙行するに当り、遠路御多用中をお厭いもなく、多数御参列下さいました事を係りの者と致しまして厚く御禮申上げます。御遺族の方々は申すに及ばず、故人もさぞや御満足の事と思います。月日の経つのは實に早いもので、

故人御一家が当地に移住せられてから既に二十年にもなります。私は当時移住地の急用で、出聖の途上、クワタ街道で偶然にも、松本御一家のムダンサに出会いましたのが、初対面でありました。其の時、既にバストスの地を墳墓の地として、一家を挙げて入植し、移住後は総べて其の覚悟を以って活動すると言う事を申されたのであります。当時から、其の堅い堅い御決心が、此の世を去られる今日迄、終始二十年間、眞のバストス愛の発露となつて光つたのであります。斯くして、故人は、開拓当初の苦難時代より、バストス全盛期の華かなりし時代を通じ、多事多難を克服し、終始一貫、我が移住地のために心魂を打ち込み寝食を忘れて、日夜総ゆる方面に亘つて接衝宜しきを得、私共が常常、拓植組合本部から受理致します指令遂行に対しても、良く劃策し、全力を傾注して、遺憾なからしめたのであります。私は常に、故人が貴き協力援助に対し感泣して居つたのであります。

又御性格上、實に細心なる注意と周倒なる用意とを以って、着々事務の整理をせられたので、同僚として私のような鈍才が、歪み乍らも職責を完うして参りましたのも、之れ全く故人の献身的御努力の賜ものに外ならないと、今以ってしみじみと痛感し、心からなる感謝を致して居る様な次第であります。

特に故人が、移住者諸君の相談相手として、愛敬されつつ、其の徳望を一身に集め、移住者全部と交渉を持たれ、経済問題にしろ、教育人事の問題にしろ、細大漏らさず一々其の衝に当たられ、テキパキと懇切に処理せられ、偉大なる推進力として、移住地の進行を円満に進められた事は、今も尚皆様の記憶に新たなるものがあるでしょう。

然るに、不幸にして、戦時中意外な誤解を受けて、久しく令圉

の身となられ、苦慮悶々の情やるせない当時の御心境は、想像するだに心の痛む思いでありましたが、又晩年、病魔の襲う処となり、長の病中焦心と諦めに、其の日を過された心事を偲ぶと、そゝろ落涙を禁じ得ません。

久しく苦楽を共にして来た同志として、誠に御同情に堪えず、民に寂寥の感転た深いものがありました。特に私の如く、公私共何彼と相提携して参りました者は、近年格別に何とも申し様のない寂しみを続けて参りましたが、私共が今日相集つて、告別式を挙げ、幽明境を異にして語らねばならない様な事にならうとは、更に思いも寄らなかつた事であります。我や先、人や先、転た人生の無常を痛感せざるを得ないのであります。往事茫として夢の如しと申しますが、過去二〇年を遡つて、往時を回顧を致しますと、全く一場の夢のような心地がするのであります。然し故人が、此の長の年月に移住地に残された偉大なる足跡は、永久に消えるものではありません。寧ろ、各方面に於て故人の残された数々の業績が、今や芽生え成長を遂げつゝあるのでありまして、必ずや永遠に生きてゆくものと堅く信じ、松本死すとも遺業は滅びず、と強調したいのであります。

斯様な次第で、今日移住地の者がこぞつて、故松本さんの告別式に列し、その道德を忍びつゝ、故人の御霊を御祀り致し、故人が斯くも愛せられた我がバストスの天地を、更に守り抜いて行く覚悟を新にして、御慰め申上げ度いと思います。』

これは、一九五〇年五月六日、産業会館に於いて移住地葬を執行し、その告別式の劈頭の発言であるが、続いてブラジル拓植組合代表宮坂国人（代読齋藤幸）氏。ジーマス市長（代読清原法学士）。自治会長石橋長児氏。友人総代上田平吉氏。聯合青年団長上

西泰治氏。ブラ拓従業員代表谷口章氏。報恩会代表本田正雄氏。仙人掌吟社代表佐々木久輔氏。その他エンリケ氏（バストス商業事務所）。俳人佐藤念腹氏等の弔詞があり。告別式後の光景を当時の週報紙は次の様に報じている。

「ジナジオ学生を先頭に、各団體及び個人より贈られた百数十の花輪の列が続き、葬列は肅々としてイグレージャに向い、最後の彌撒聖典に預ったのち、再び靈柩は生前特に故人と親しかった友人の手に昇がれ、基地に送られた。蜿蜒数百メートルに及ぶ葬列は美しくも亦壮批嚴限りなく、特に埋葬の儀に入るや哀悼の悲曲靜かに鳴り渡って、哀婉極りなく、会葬者の胸をうつものがあつた。因に当日の会葬者は一千名を超え移住地葬として稀れに見る盛儀であつた。」

移住者閲歴編

谷 口 章氏 (兵庫県氷上郡生郷村 字石生)



一九〇二年生まれ。栢原中学校卒業後、京都高等蚕麻学校に入学、これを卒業するや埼玉県蚕業技手を勤めること二年、辞して家業たる蚕種製造に従事した。

二七年、令弟夫妻と家族を構成して来伯、氏時に廿六歳。渡伯の動機は、蚕紙業の不振と、大製紙会社の蚕種進出とで小規模の蚕種製造業の前途に希望持てなくなり、海外の自由な世界で一大農場経営の理想を抱懷するに至ったからである、という。

ノロエステ線リンス駅の伯人珈琲園に配耕され、二年後、リンス周辺を三度転じ、約五年間を珈琲園に就働した。バストス移住地アルト区に入植したのは、三二年のことである。

最初は、土地を求めて農業を行うが目的であつたが、当時、バストスに製絲工場が設置され、養蚕の奨励される機運にあつた。主任上田平吉氏は谷口氏の技術を高く評価し、招聘した。氏は招きに應じ蚕種製造、養蚕指導を担当することとなった。バストス産の最初の蚕種は、かくて氏の手になるものである。三五年まで

之を継続した。

ポンペイア駅奥ノーポ・クラビンニヨの義弟に当る人の商業を助けに赴いて二年を送った。吉浦秀次郎氏の個人経営であった製糸工場の経営がうまく行かなかったもので、これに迎えられて再び、もとの仕事に立ち戻ることとなった。

かくするうち、蚕糸業組合を創立し、専務となる。が、資金難のためブラジル拓植組合に移管し、工場長に就任した。業績大いに挙り、工場の拡張を行いなどしているうちに、太平洋戦争となり、政府の管理下に入った。続いて清算人の手に移る。しかし、戦時下の好況の波に乗って工場はめざましい活動を示した。やがて来た戦争の終結と同時に、一大恐慌に見舞われ、養蚕家に、その生産した繭の代金の引出しを猶予してもらうことによつて辛うじて繰業が続けられる、という有様だった。組織は徐々に縮小されて行き、四九年に到つては省みる人さえないという非運な存在となつてしまった。

しかし、工場は当然、ある程度まで回復出来る。戦時中のあの好況こそ正常を缺いた、言わば馬鹿景気であつたのだ。そのような一時的な景気が永続するわけがない。暴落は当然の現象である。とは言え、ブラジルの蚕糸業は絶対に壊滅し去ることはない。国内の需要を満すだけの量は、最低水準として保持し得る筈である。氏はこのような不動の確信をブラジルの蚕糸業の将来に抱いていた。この堅實な、根強い樂觀の上に、氏の信念は微動だにしなかった。工場をその據城として黙々努力を傾注し続けた。

そうして遂に、暗い隧道を出る日が来た。五〇年をもつて一切の債務から解き放たれ、清算人は去った。凍結令の解除。待つていたかのように生糸の値が出て来た。政府は国内蚕糸業の保障策

に乗り出した。長い間の氷雪にめげず春に巡り合つて力強く芽ぶく草木のように、いま工場は逞しく立直つたのである。

うちに燃ゆるが如き熱意と誠實とを蔵し、しかも飽くまで謙虚な氏は、五三年に、選ばれてバストス連合日本人会長の重職に就き、着々として実績を収めつつある。

上西 泰治氏

(和歌山県海草郡長谷毛 原村)



農産学校中退後、大阪市笹村商事会社に入社し、満鮮貿易に従事していたが、一家がブラジル移住を決意したので、惜しまれながら退社し、大正十五年九月、家族と共にまにら丸で渡伯した。伯国には既に親戚中井氏が移住して、ノロ線ビラジュイー駅日の出植民地に居たので、同氏をたより、同地で珈琲を栽培したが、成績思わしからず、リンス駅サンパウロ耕地で、コロノニケ年、契約四ヶ年を終え、一九三二年にバストスのグロリア二区に入植した。入植三年後にブラ拓柑橘研究所に入所し、後独立して、シャカラ区に土地を求め苗木業をはじめた。ブラ招農業技師藤村、中村両氏の指導を受けた氏の腕は立派なものであり、何事にも研

究心の強い氏は、古川、梶山、佐野氏等と柑橘研究会を結成して益々技を磨き、一九五二年までに約五十万本の苗木を各方面に売り出し、好評を博して来た。最近は、植民者がポンカン村を作り度いという希望に應えて、ポンカンの接木及び育成の指導をし、バストスの興隆に心身を捧げている。

氏の郷土に対する貢献は、単に事業を通してのみでなく、特技とするスポーツを通して偉大な足跡を残した人で、三野氏と共にバストス陸上競技の育ての親といわれ、広くはコロニアスポーツ界の恩人として、無くてはならぬ人である。

陸上競技界への登場は、リンス時代に上塚植民地十周年記念マラソン大会に出場し四位に入賞したことにはじまる。一九三二年のノロエステ大会、日本陸上代表選手団を迎えての日伯対抗大会、などの長距離に出場し、一九三四年度以来、小田兄、三野、上西のソロカバナ長距離黄金時代を現出し、全伯に覇を唱えた。第一線を退いてからは、後進の指導に当り、バストス陸上軍代表、総監督をつとめ、戦後、スポーツによる植民地の明朗化に一役買い、陸上軍の再建を計り、崎田、森越、前山、三野、前野氏等と共に陣容を整え一九四七年には全伯陸上競技大会の復活運動を展開し、その成るに及んで、パウリスタ陸上競技連盟代表となり、只にバストスのみでなく、全パウリスタ線陸上界の重鎮として、その名を馳せ、全伯陸上界に重きをなした。氏は又陸上界ばかりでなく、五〇年にはバストス青年連盟の団長として青年を指導し、五一年以来、中学父兄会会計係、中央区副区長、連日会副会長などの公職に歴任し、バストス向上の一翼を担って大いに貢献する所があった。

一九三三年、リンスに於て坂口新之助氏の長女君子さんと結婚し、

繁行、寿雄、勉、昭四人の男子を挙げ、高等の教育をさづけつゝある。品性高潔にして進取の気性に富みかつ明朗な氏の如き人物は、バストスの至宝的存在というべきであろう。

氏の人生観は一言にいえば「スポーツ精神」の貫徹にあると言つてよい。氏は後進の指導に当つて、常に「より以上にスポーツ精神を家庭及び事業に加味し、進取的な気性を養ってもらいたい」と言っているが、これはスポーツ人上西氏においてのみ言えることであろう。かくほどまでに氏のスポーツを通した人生観はバストスの回生を願う気持ちに徹しているのである。また氏はバストスの将来に対して「多角的農業経営法を伸ばして行きたい」と事う希望を持っている。

重道 永栄氏（鳥取県東伯郡北谷村）

（重道 永栄―写真）

昭和九年、鳥取一帯をおそつた風水害の爲め北谷村の損害は甚大なものがあり、重道家の田畑は復舊工事さえ不可能とみられた。そこで一家をあげてブラジル移住を決意したのであった。これは永栄氏が高等学校の予備校二年生の時で、この風水害が氏の一生の転機となつたのであった。氏は郷里の小学校を卒業したが、「寒村に理もるに忍びずつてを求めて広島に出、弁護士 of 書生に住み込み、苦学しながら山陽中学校を卒業し、未来の弁護士、大臣を夢見ながら、更に高等学校、大学の門をくぐるべく、一心に勉学に努めていたのであったが、一家をあげての渡伯と決まり、志を大陸に遂げるべく、一九三五年四月、ぶえのすあいれす丸に乗込

んだのであった。

最初プロミッソン駅パルメイラ耕地に入り半年後には、ランシヤリア駅附近の太田耕地に移って、三年程を半教員、半百姓の生活を送った。その後、土地を求めて、アルバレスマツシャード町附近に入植したが、農業に馴れぬ為め、なかなかよい芽も出そうになかった。そこへ知人の桑原竹次郎氏から、ブラ拓事務員の話が持ち込まれたので、氏の世話でバストスのブラ拓事務所に入り、一九三九年、ガット調査係りとなって業務に励み、会計係りを経て一九四六年まで、ブラ拓製糸の会計を勤めた。次に友谷千丸氏と製糸直属売店部を共営したが、一九四七年十月より、重道氏独力経営となり今日に至っている。

一九三九年に、児島治八氏次女千代子さんと結婚した。子女は紀、領子、伸子、晃、栄子、伸夫の三男三女、いたって円満、特に夫人千代子さんは短歌をよくし、バストス短歌会の重要メンバーであり、母国一流歌謡アララギに度々入選作品が掲載されている。

重道氏は、渡伯後の数年こそ、半農半教員などをして転々と苦難の道を辿ったが、バストスに落着いてからは、順調な人生コースを歩み、独力売店経営まで漕ぎつけたが、しかし、人間の禍福はあざなえる縄の如きもので晴天あれば又雨天もある。戦後の繭価の暴落によりオカイコ景気に湧き立っていたバストスも日々さびれて、市街の商店で大戸を下すものが次々と現われ、街路には人影さえまばらな時代がやって来た。当然重道氏の売店も大影響を蒙って、門前にやぐらを張る凋落ぶりに、幾度か、閉店を思案したが、こゝが我慢のし処と隠忍を重ねる内一陽来復の春は来て、養鶏と牧畜によるバストスの更生は曙をつけ、現在の氏は経済的にも精神的にも充實した生活に入っている。戦後には連合青

年団長をつとめ、現在は中央区副区長と連合日本人会の書記長をつとめている。又氏夫妻は既に四十余組の媒酌をして居り、出雲の神様の名高く、若き青年男女にとつて頼もしい存在たることもバストスの将来を思えばこそその親心と知るべきである。

氏の公職人としての存在は、前述役員を務めているというばかりでなく、バストスの人望家として仰がれている点から見ても重きをなしている。その温和な性格は抱容力に富み、また義侠的でもある。バストス更生という移住地再建の推進機関、連合日本人会にはなくてはならない人の一人である。

藤原 直輔氏

(岡山県児島郡粒江村)

(藤原 直輔―写真)

一九〇七年、農家の四男として出生。神戸の商業学校を卒業すると、親類関係のゴム会社や運送店、貿易商館、繰綿工場などで働きながら、苦学力行した。徴兵検査に合格して姫路騎兵第十聯隊に入隊、二年を無事勤め上げて除隊した。これより先、末だ在営中、台滞総督府巡查を志して、除隊後その受験のため渡台することにしていたところ、同じ班の戦友で、熱心にブラジル事情を研究している者があり、これに刺戟されてブラジル渡航に關心が萌え始めた。たまたま、實兄も同じ志望を抱いておったので、除隊後一ヶ月して、台聘どころか、その西方を素道りして南支邦海から印度洋、大西洋を渡ってブラジルへ行くことになった。人生のこと、全く、測り難い。粒江村の人四家族、氏ら兄弟の渡伯に勇

気づけられて同行した。

移住組合員としてバストス移住地に入ったのは一九三〇年、日本なら桃の節句の三月三日。夫人八重子さんは、岡山市で雑誌記者をしていた人で、渡伯二ヶ月前に結婚したので、新婚旅行は南海航路で、ということになった。

バストス移住地はグロリア二区に入植。實兄を助けて珈琲植付けをした。農事に従うのは二年で止めにした。これは八重子夫人が病弱であったからである。請負仕事をしたり、農産物仲買、バー、果物店を経営したりした。一九三九年に夫人を日本へ帰国させ、再び帰伯と同時に、太平洋戦が勃発したり幸運というべきである。こせれと共に、氏はブラ拓バストス事務所の運転手として入所し、勤めること三年に及んだ。のち、千早パウロ氏と共営で金物店を始めたが、四九年からは分離して、個人経営とした。

終戦直後。中央区副区長の職に任ずること六年に及び、五三年、連合日本人会の副会長に推されて現在に到っている。

釣を趣味とし、温厚な人柄をもって親しまれてはいるが、開拓当時の、人心殺伐な空気の中にあつては、騎兵聯隊を出たばかりの血気にはやる時期ではあり、荒くれカマラーダたちを慄い上らせるような武勇伝も、二、三にとどまらなかった。

たゞ一人の男子孝君は、二十一歳で、サン・パウロ市のコンゴニヤス空港に勤務の傍ら、医科大学入学準備中である。

なお、八重子夫人は、戦後、バストス少年野球の復活に挺身し、遂に、パウリスタ新聞主催の全伯大会で三年連続優勝という偉業を打ち樹てさせた功労者の一人である。また、かつて在日時代に新聞社の婦人記者を勤めた経験のある人で、そのジャーナリク的な批評眼は、いまなお、往時の活躍振りを想わしめるものがあつ

て楽しい。戦後、日伯通商貿易の促進に一役買って来伯した岡山県選出元代議士多賀安部氏を激励して、氏の計画案を成就せしめた話は、あまりにも大きく知られている。また、藤原塾を開設し子弟の日譜教育に挺身して、たんにスポーツ面にとどまらず情操面に留意、今後の日系二世の進路に一つの指針を興えている。このように夫婦揃って公務に献身的な努力を傾注する一家は珍らしいというよりバストスにとっては尊い存在である。氏の家庭には、老若男女が恰も社交場の如くに集り昼夜、談笑の声が絶えないが、これなど氏夫妻の性格の在り方を明らかに物語るものであるといえよう。

本田一男氏（岡山県久米郡大坪和 村）

（本田一男―写真）

篤農家の長男として生まれた一男氏は、小学校卒業後、家業に従っていたが、友達にさそわれ、選挙演説を開きに行った。氏の郷里を地盤として立候補したのは、鶴見祐輔氏であった。鶴見氏は演説の中で「鉢の松はどんなに手入れしても育たない、鉢を破って大地に下せば亭々たる大樹となるであろう。青年よ狭い日本の鉢を破れ、破って海外に出よ、そして亭々たる大樹たれ」と叫んだ。この言葉に覺るところあって、氏はブラジル移住を決意した。若冠二十三歳で父母を説き弟妹をさとして、一家八人、昭和四年七月大農場主を夢みて、渡伯し、直ちにバストスはグロリヤ一区に入植した。初年度に十域の山を全部叩き切り、珈琲一万二千本を植え、牧場も作り牛豚の飼育にも乗出した。祖先伝来の田畑を売って来たので資金はあり、腕に覚えの農牧業であるか

ら充分に腕を振ったが、如何せん、珈琲は一俵六クルゼイロス、米は干魃で不作、という結果を見るに及び、はじめて将来に不安をおぼえ、資金の枯渴せぬ内にと、市街地に出て、アイスクリーム、飲食店をはじめた。何事でもやりはじめたら思い切りやらねば氣の済まぬ性質なので、二年目には特製アイスクリーム製造機を二台据つけ、ツパン、ランシヤリヤ方面まで売出す。次いで鮮魚店をもはじめ、一時は使用人も十人以上を置き、門前市をなす盛業を続けた。又、ボールをはじめてから三年目にはモンティロ・バストス間の乗合自動車業に着手し、町のモヴィメントを一手に牛耳り、丸で日の出の勢であつた。しかし第二次世界大戦に入ってから、伯人名儀の乗合自動車業もうまくいかず、不景氣風に見まわれて、次第に事業を縮少し、現在は市街地にボールのみを残し、その方は専ら夫人が衝り、氏は別に一九四九年、人の見捨てた湿地帯を求めて果樹園をひらき、バナナ、柿、リモン、ポンカン類を植え、数年後にはパ線有数の果樹園に仕立てようとしている。氏の親孝行は有名で、二千六百年祭の時には、両親と弟夫婦に日本を訪問させ、果樹園の経営も母の老後を慰める意味も含まれているときく。

寿子夫人との間に、誠、伴江、満里子、の一男二女があり、それぞれ高等教育をさすけ、祖母をまじえて、和やかな水入らずの家庭を営んでいる。氏は青年の日に狭い日本という鉢を破って、海外に雄飛し、常に他人のしない事業、他人の日の及ばない所を目指す、新規軸に続く新規軸を出して、遂に大地に根をはる大樹たり得たが、若い頃から嗜んだ酒もやめ、子弟の教育に全力をつくし、子等の将来に備えて、麻州クヤバーに一千五百ヘタールの土地とカンピーナス市にも地区を買い、益々枝葉を茂らせよう

としている。

しかしながら、氏は「金より人材」を人生のスローガンとして近年は、あまり事業を大きく伸ばすと子供の勉強に影響すると、縮少しているといわれる。既に、経済的に大樹となった氏から實るものこそ、氏の第二の希望をつないでくれるものなのだろう。

果実栽培に關しては特技ともいえる技術をもつ氏は、また研究熱心で、目下バストス柿の成育に熱情を傾けているが、氏の努力を以ってすれば、成功は疑いなし、と、一般の期待を集めている。寿子夫人の姿がこゝ二十年間ボールの店先に一日として見えない日がないと言われるが、事實、氏夫妻は典型的な努力の人である。

板垣 泰熊氏（山口県阿武郡徳佐村）

（板垣 泰熊―写真）

一八九九年、農家の長男として生まれた。高等小学校を出ると、家業を手つだっていたが、広島工兵第五大隊に補充兵として入隊した。三ヶ月間兵營にいる間に、家族の人たちはブラジルへ渡って、氏一人残された形となつてしまった。もともと海外雄飛の志をもちブラジル渡航を家族に説いたのは氏の方だったのであるが、入隊のために、こんなことになつてしまったのだつた。

皆におくれること一年、即ち一九二二年にサントスに着いた。ソロカバナ線ロドリゲス・アルヴェス駅サンタ・マリア耕地で、一家は顔を揃えた。ここでコロノ生活二年。やがて同線パラニョス駅に五域の珈琲園を購入した。ここで三年を過すうち、家族はよく、珈琲好況期ではあり、当時としては大金の六十コント余を残した。これを資本に、ノロエステ線カフエランジア駅平野植民地

に移った。

ここに在ること一年余、その間に結婚した。現カフエランジア産組理事山室氏は氏の義弟に当る。单身、先発として草創のバストス移住地に移り、施設整備の労働者として働くこととなった。一九二九年のことである。

隣接地キンテイロに二百域を購入していたので、バストスに落ちついてから開拓しようと計画してやって来たのであったが、不況のために、これは實現しなかった。もともとこの土地は、共同者と一千域を購入していたのであるが、珈琲価の暴落で協同者が手放したため、氏が一手に引き受けたもので、打ちつづく不況に抗し得ず最後には百域を残していたが、遂に全くの失敗に終わった。

初回のブラ拓農事指導員兼監督として採用され、ランシヤリア街道開設工事の監督を勤めた。二年間、珈琲を主として、一切の植付け仕事も見なければならなかったが、直来移住者のこととて大いにてこずった。あまつさえポ語もろくに出来ないので通譯も兼ねるといふ苦心は大きかった。ブラ拓を辞した氏は、約百名のカマラーダを使役して、山伐り、道路造りの工事を請負った。現在のバストスのほとんど総ての山伐りと道路遣りは、氏の手を経ている。

これを止めると、ガソリン・スタンド経営の傍ら、カミニヨン二台、自動車一台を縦横に馳駆させて農産物仲買をやった。かなりの財を成した。この金でモソテイロの開拓に手を染めて完全な失敗に終わった。仲買商西氏の一介の使用人として四年間働いた。やがて、残っていたモンテイロの土地と、百二十域の借地に棉作をやつて大いに利益を挙げた。一九五〇年には二万五千アローバをアローバ当り百四十五ミルレイスで一挙に仕切り巨額の利を収

めた。前には窮乏のあげく、土地をすっかり手放したが、今度はボンフィン区に百七十城、プログレッソ区些二十城、ウニオン区に二十城、イラプルーに二十城、合計二百七十城を購入した。五二〇五三農年に百城余の棉作を行って五百コントの大損失を蒙った。

現在の所有土地面積は百七十城で、百城の牧場に二百頭の牛を飼育している。イラプルーの三十城の土地には、目下、珈琲樹を植栽中である。

氏は入植三年目に夫人を亡くし、翌年現夫人朝子さん（ウニオン区在鈴木栄治氏長女）と再婚、二男三女をもうけて人も羨む平和な家庭を営んでいる。氏こそ七転八起の努力の人である。

太郎田 衛氏（石川県金澤市七賢町）

（太郎田 衛―写真）

加賀の金澤は生糸、絹織物の産地である。太郎田氏も、羽振りのよい絹織物商としても広く商っていたが、ふとした事から事業に失敗し、家運の傾くのをどうする事も出来なくなった。時あたかも昭和の初期、ブラジル移住熱はほうはいとして全国を風靡していた。太郎田家もこの波に乗って、海外へ活路を開こうと企てた。昭和二年十二月、神奈川丸に乗りサントスに上陸し、直ちにソロカバナ線ボレビ駅、パルメイラ耕地に配耕された。鐘の音に明暮れる苦しい耕地生活一年半の後、パウリスタ線ベラクルース駅、サンタイザベル耕地に四年契約の形で入耕したが、知人の

すゝめで、同地附近のフレンチウニカ植民地に土地を求め、独立独歩、はじめて、暗雲はれで天日を迎ぐ思い、開拓の斧を振った。五年の後、ポンペイア駅アジア植民地の開植に当りその第一線に闘い、不撓不屈の闘志を養い、ブラジル事情にも通じて来たので二年後にポンペイア町に出て、米、雑穀等農産物の仲買商を営んだ。その親切丁寧さと商人に似合わぬ率直さは内外人の信用を博し、太郎田商店といえは誰知らぬ者なきまでにいたったが五年後、同胞多数が在植し養蚕の全盛期を迎えたバストスに移り、農産物仲買商を雑貨商に切りかえて今日に至っている。

氏の商人としての成功は、勿論その手腕の秀れている事によるが又、温情豊かな人柄と社会公共の為には一身をかえりみない仁侠に厚い性格があづかっている。それは、氏がバストス野球中興期の名監督として名門バストスの栄誉を担って健闘したことや、現在、バストス體育連盟の会計として、連合日本人会の理事として、公職の重要ポストに在ることなどからも解るのである。そうした太郎田氏なればこそ、一時養蚕不況に陥ったバストスに在って、微動だに見せぬ店舗をかまえ今日のバストス養鶏牧畜の復興期をむかえて一層の飛躍をとげたのである。

氏は一九四二年、バストス、ボンフィン区西ケ迫信秀氏長女みどり嬢と結婚し、穰、節、貢、豊、純代、収、五男一女を儲け、一家だんらんの模範家庭を築き稼業に縦横の腕を振り、社会に出ては公共の為に力をつくし、趣味としてはスポーツ、又、去念と号して俳句をよくし、釣りを楽しみ、バストスの代表的人物との世評が高い。

氏は言う、今後のバストス発展の為には、大いに文化面の向上を期さねばならぬ、文明の利器をどしどし入れなければならぬと、

その意味から氏は、電話の架設、中学を州立にする為の昇格運動、帰化人として、伯国の地方政治に期する協力等々、社会的事業方面に力を注いでいる。好漢大いに健康に留意し、バストス発展の為に大いに貢献せられむことを所って止まない。

また氏は、一見平凡人の如くに見えるが、その内に秘める烈々たる人生闘争への気魄は、氏の行動をして正義感に終始せしめている。氏は言う「自分は社会的に何等かの意味で貢献したいという意欲に満ちている。そのためにはブラジル人としての権利義務をもち政治力を取り入れなければならない、そのために自分は帰化人となったのだ」と。

第二の故郷と決めた伯国の、バストスの地に対する氏の愛情は今激しく燃え立っているのである。

佐々木久輔氏

(岩手県岩手郡厨川村)

(佐々木久輔―写真)

厨川村といえ、その昔、新田義貞と安倍貞任が戦った古戦場として、歴史にその名をとどめているが、岩手郡の一寒村に過ぎない。この寒村に呱呱の声を挙げた氏は、持つて生まれた負けじ魂から、高等小学校卒業後、盛岡市に出、新聞売り、鉄道工夫、職工、馬車引き等々、ありとあらゆる職業を遍歴しながら、遂に盛岡中学夜間部を卒業した。そして逋信局に職を得て勤務していたが、たまく、原梅三郎の著したブラジル事情に關する書物を読み、ブラジル移住を思い立った。岩手県移住組合に加入して、昭和五

年、不況の嵐吹きまくる日本を後に、单身もんでびでお丸で渡伯した。九月一日バストスに入植、ウニオン区第一号地区に入ったが、二十日間で農業をやめ、バストス医局に月給二百五十クルゼイロスで入り、細江医師の助手となった。薬剤師を志して帰化人となり、(バストス最初の帰化人)一九三三年に検定試験を受け見事薬剤師の免状を獲得した。一九三六年末まで、医局の一切を切廻して勤務し、一九三七年四月、独立で薬局を開業した。開業といっても資本金は医局退職手当の二コントス、その内店の敷金五百クルゼイロス払うと一コントス五百クルゼイロだけという貧弱きであつた。然し将来に光明を描く努力の人、遠大な夢を胸中に在する力行の人たる氏は絶対に悲観しない。そのうちに、バストスには棉景気、養蚕景気の波が押し寄せ、札束が宙を舞う時代がやって来た。

この波に乗った氏の薬局は拡張に次ぐ拡張を以てして三年後には盤石の基礎を築き得たのであつた。戦時中は、三十五才と言う年齢で二十才の若者に伍してチロ・デ・ゲーラに入隊して訓練を受けさせられたり、戦後は、臣聯事件のそば杖を食って投獄されたり、敗戦派とにらまれて特攻隊につけねらわれたしたが、その難を切り抜けて来た。一時は財産を整理して帰国しようかとも考えたが、伯国育ちの子供たちの将来を考え、永住と心を決め、子供の故郷を作る為に、資産の多くを不動産に切りかえた。現在、モンテアレグレに牛四百頭、牧場百三十域を所有し、又、フアルツーラ牧場百八十域を完成しつつある。

斯くして事業的に立派な成功者であるが又一方に氏は、一九五一年、PSPから都議として立候補し、日系帰化人として最初の都議会議員に当選し、郡会副議長を務めること二年、現在は郡会予算

委員長に就任して居り、又、バストス中央区副区長として、公職に在り、郡政に重きをなして居る。

氏は一九三一年、月給二百五十ミル時代に西川元吉氏次女サト嬢と結婚し、君恵、有郷、稔、照代、組子、徹、綾子の三男四女を挙げ高潔な人格者として広く尊敬されると共によき父として、円満なる家庭を営み、氏は南天子、夫人は里女の雅号を以て、おしどり俳人の名をほしいままにしている。

右のように氏の事業慾は、単に薬局経営に止まらずバストス有数の牧畜家となっているが、氏が牧畜に着目した時代、バストスは棉花及び養蚕の全盛期で、氏の事業を嘲笑するものさえあつた。しかし、氏は「伯国の政治経済を動かす階級は牧畜の成功者が多い。棉や蚕では国は動かせぬ。」と、初志を貫徹、今日に到つた。絶えず将来をみつめる氏なればこそこの今日であろう。

中島 善次氏

(佐賀県佐賀市水ヶ江町)

(中島 善次―写真)

葉隠武士道の本場佐賀、一九一四年生まれ。商家の三男である。佐賀商業を出ると、森永製菓会社の小倉にある九州販売支店に勤務した。

サラリーマンにはなつてみたが、会社勤めというものは、實力よりは先ず学力がものを言う。このような世界に、實力と誠實と熱意一本槍で生き抜こうという若い氏に、居心地よろしかろうわけはない。思う存分、腕の揮えどころ ― 氏は、そのような世界を、切に、心に求めるようになった。偶々ブラジルから永住の

考えで帰国した人が、日本には住み難く感じて、再びブラジルへ渡航する、という新聞記事を読んだ。氏の、渡伯の決意は忽ち成った。

一九三六年の元旦に、独身で、平山政太氏の家族構成員として渡伯した。ノロエステ線チエテ移住地の平山氏の耕地に入ったが、平山氏が同線リンスに転じたため、チエテに在ること一ヶ月でリンス駅共和植民地珈琲園に入り、四ヶ月間、就働した。ついで、リンス市に出た。全くの天涯孤独の身で、異郷の空の下に迷身となつたわけである。

どうせ働くならば、大樹の蔭とばかり、同市の菅山商店に勤務することゝなつた。着伯日浅いので、ポルトガル語がわからないのには、さすがの氏も難渋したが、商品目録を、辞書をひきひき三ヶ月で覚えてしまった。入店半年目に、雑貨部に移つた。次いで宣伝部に転じ、大いに商才を発揮して、めきめきと売上げ成績を向上させた。帖簿の整理もやつた。聖市にメリヤス工場を設置した主人思い、店思い、實直な性格、俊敏な商才の氏を店主輝吉氏が深く信頼し、愛したことは当然のことであつた。偶々バススト産業組合勤務の高常太郎氏来遊して、バススト行を懲憑するところがあつた。機を見てバスストを視察し、全盛期にあるバススト産組を目のあたり見た。同郷の脇山組合長は、組合入りを氏にすゝめること切なるものがあり、すなわち、希望を容れて高氏の後任となる。購買部主任を勤めること六、七年、ついで総務の椅子を占むること半歳。

この頃からバススト産組の歩み漸く困難になりつつあつた。義弟にあたる人にバールを経営せしめているのが幸に盛業を見つゝあつたので、一時、バール経営に専心したこともある。

五二年はじめバストス産組の専務理事となった。産組の回生策としては、何よりも先ず、人事の刷新が第一である、というところから、抜擢されたわけであった。畑中忠雄組合長と共に好バテリーとして、大いにその手腕は期待されている。

氏は四一年、廿七歳の時、澄子夫人と結婚した。夫人は二重県松坂市河井町の出身、バストス移住地カスカッタ区在の人であった。

氏は囲碁に長じ、第四回全伯囲碁大会に優勝し、五四年の全伯大会にも優勝している。伯国棋院では氏の實力を日本に紹介し、五四年暮れ、日本棋院より囲碁初段の段位が氏に贈られた。五五年には更に国碁二段に昇進した。

古きバストス産組を立直し、新生の産組を背負って立つ氏が、寸暇を得て、パチリパチリと碁石を布置する、その胸底裡に、それも如何なる大策と理想の去来することがあろう。

時川一馬氏

（北海道常呂郡置戸村）

（時川一馬―写真）

幼い時から體が虚弱でよく医薬に親しんだが、美しいもの、造かなものに憧れの強い性質で、小学時代、南国の様子を描いた絵を見て、遠い海の波方へ心を馳せていた。ブラジル移住を一家が決意した時、日頃から、氏を愛していた伯父が、「お前は體が弱いから行くな、その代り大学まで出してやる」と引き止めたが、氏の決心はゆるがなかった。昭和四年八月、移住組員として、バ

ストスはプロGRESS区第十一号地区に入植し、兄弟四人で農業に従事した。山を伐り雑草とたゞかい営々として生活設計にはげむ傍、区青年団長におされ、青年の勉学と修養を指導していたが、たまたまサンパウロで、コチア組合が中堅青年講習会を催したので、これに参加し、しみじみと青年の在り方を考えせられ、バストスに於ける青年の地位について眼が開かれた。時あたかも、バストスの衰退期で、退植者続出の様相を露わしつゝあつた。

氏は帰植するとバストス更生策の一つとして、産青連運動に挺身し、産青連産業部長となり、バストス産業振興の為に力を盡した。一九四六年にバストス養鶏業の為に東奔走西し、一九四七年には鶏卵組合を創立し専務理事に就任し一九五一年まで鶏卵の販売、飼料の購入に全力を注いだ、一九五一年にコンチネンタル土地会社を設立し、その事業ようやく多忙となるに及んで、組合をジュケリー産組出張所に合併、一切をジュケリー産組にまかせた。

時川氏は、日本の郷里から直ちにバストスに入植しバストスの栄枯盛衰を、その眼に視、その身に味わって来た。バストスを第二の故郷として愛しみ、盛りたて、日本移民の歴史の中の、最も意義あり栄光ある頁たらしめようとし、バストス出身の日系子弟が、祖国の何処の果てに行くとも、バストス出身者として誇るに足る母なる意味の大地たらしめようと常に考えている。

時川氏是一九四一年、小林金次郎氏次女あき子嬢と結婚し、淑子英之、靖生、浄の三男一女の父として、人も羨む家庭を営んでいる。よき家庭の父として、常に家族中心に物事を考え、家庭と社会とのよき融和、接触の中に家族の個々が、自己を磨き人格の完成につとめることを念願している。

幸に氏のコンチネンタル植民土地会社は今日隆々たる勢を見せて発展している。これも氏が幼時より、美しく又遠大なるものに対する憧れを追う性質の発現せしめた結果であらう。事業を通して、社会の為に、大いに貢献して頂き度いと願うのは筆者のみではあるまい。

氏は一九五三年に事業上の関係から、愛着の地バストスを離れざるを得なくなり、隣接郡ツパンに移り、宏壮な邸宅を構え、新進實業家の名をほしいままにしている。しかし、第二の故郷バストスには、殆んど毎日の如く往来し、バストスの将来に対しても真摯な理想を抱いている。かつての産青連運動は時流の波間に消え去ったが、氏の胸中には今なお当時の熱情が燃えたぎっているのだろう。

氏はまた文学に興味を持ち、映画観賞にも鋭い批評眼を有つバストスの生んだ文化人の一人である。

藤原荒次郎氏

(岡山県倉敷苗粒浦)

(藤原荒次郎―写真)

子供の頃から、小さいと名のつくものは何でも嫌い、大きいものなら瘤でも好きだ、という性質であった。十八才の時父の死にあい家業を受けついだが、大きいと言っても程度の知れている日本の農業にあき足らず、一穫千金を夢みて、家財を整理し、昭和五年、三十六才の時、妻子を伴って渡伯した。バストス移住地グロリア第一区に十域の土地を買い珈琲を植えたが、値が安く、大して儲りそうもないので、あっさり止めて市街地に出た。なるべ

く、どかつと儲かる仕事というので、景気のよい仲買商をはじめた。最初、米で儲けたが、棉で大損をしてしまった。百コントス余の借金が出来たので、イタウーナで九八域の土地に米作をし、五千俵を収穫して借金払いを済ませた。今度は地道な商売をというので貸自動車業をしたが、矢張り面白味がないのでやめ、又仲買商に戻った。今度は慎重にやって大分儲けたが戦争がはじまり、うるさくなったので、ウニオン一区に三十域の土地を買い伯人力マラーダを連れて単身乗込み、棉作をやった。これも三年やって結局失敗だったので、又々町に帰って元の仲買業に舞い戻った。一九四九年から、米澤氏と共に、パラナ州パラナバイーの土地売りをし、次いで又米澤氏と麻州クヤバーの土地を売りはじめ、現在クヤバー拓植合資会社パウリスタ線代理人をつとめている。

三つ子の魂百までというが、コツコツ溜めるのは性に合わず、何によらず大きく張って行くので、常に浮沈が伴うのである。嫌になれば惜し気もなくポンと投げ出す。最初の入植土地など、十域を一コントという安値で売り、人を驚かしたり、折角育てた豚も、いやになればただで人にやってしまう。この豪放らくらくさ、人に物を頼まれゝば、いやと言わない俠気、大仕掛けに事業を運ぶ気持ち雄大きは、バストスに異色の存在となっている。

氏は寿夫人との間に、早苗（山根剛氏夫人）作久栄、幹子、万太郎、勝、勇、千恵子の四男三女あり、なかなかの子福者で、それぞれに高等教育をさづけ、今後は金のありたけを不動産に代えてやるといっているのは、子供等が将来伸びて行く土台を作ってやるつもりなのであろう。

氏の一か八かという意地好む性質として大掛りに事業をしながらも、それ程の巨富もなさず、他人に迷惑をかけるような事もせ

ず、正しい人生を送っているのは、正義の観念に強く、淡泊なところがあるためであろう。

氏は常に「俺は曲った事は大嫌いだ。時にはガミガミと言うが後はない。一日たつたら忘れるよ」と言っている。好漢ますます自重して、バストスの為に、氏の優秀な子供達の為に、立派な仕事を残して頃き度いと思う。

また、氏は森林開拓に豊富な経験と知識を有っている。商売が思わしくなく農業に転じたときなどは、自ら井戸を掘り、家まで建て、カマラーダの炊事までした。それかと思うとトラクターを乗り廻して移住地に機械化農業の先鞭をつけたりした。開拓に挑む激しい熱情は、やがて麻州の彼方に新な理想郷を實現させずにはおかないであろう。大いに期待したい。

織田 守男氏（長崎県長崎市）

（織田 守男―写真）

本名、守男より俳号糸音が広くより多く知られている。

「木蔭」同人、バストス週報社々長、仙人掌吟社主幹と肩書きを重ね、尚且、佐藤念腹氏と鳴鶴社なる結婚仲介の店も開いている。

数年来、糸音老と自虐的に名乗っているが万年青年（何時までもの）、白髪も目立たず、酒好の御蔭か血色も壮年並に艶々しい、俳句行脚に出ては、初対面の人を面喰わすのは、年齢に似合わぬ若々しさと、健な意気、徳川夢声そこのけの博学と能弁である。一八九五年生まれと言う。大阪朝日長崎支局に勤め、のち販売部勤務、玄海灘を渡つて支那を股にかけ、一九二八年渡伯、平野植民地を経てバストス入植、産業組合に入り精米所主任、購買部主任、

本部主事を歴任、産組連動の闘士として、組合の生辞引として活躍した。一九四二年、転じてブラ拓入社した。其後三転してバスに立戻り、ウニオン区に帰農、養蚕、養鶏に隠れていたが、大東亜戦の終戦を見ると共に、コロニアを狂乱怒濤の中に叩き込んだ、戦勝、認識の渦に敢然、身を挺して活動、為に刺客にねらわれた事も再三あった。一九五二年町に出、バストス週報を受けつぎ今日に至る。二女は既に嫁して、夫婦水入らずの生活を楽しんでいるかに見えるが、生来の世話好き、人好きで、月一、二回の句会宿ともなり、組合時代からの数多の知友の訪問引きも切らず、各地から来植する知名人も必ず週報社を訪ね、娠やかさは想像以上、本業の週報は発行部数六百、原稿集めから広告、発送に到る迄社長一人でやってのける。講演や会議、催物は缺かさず傍聴に行き速記を取る。一日に二つ三つ、此の種のモノが重なるのは珍しくない。そんな時には翌日出向いて関係筋から記録を漁る。視力の弱い目を極度の近眼鏡で無理押しに酷使しているが、可成りの重労働である。日本シネマも月一、二本は観ている様だが、これ又商売熱心の現われに外ならない。氏の映画観賞と批評の眼は相当高く買われる。俳句を始めてから生来のキカぬ気の角が取れたと言われる。或は年齢から来るものか、とも角も老成円熟した人柄は、その知性の裏付けに依って光彩を加えつゝある、俳句の面でも又、臭味から脱皮して枯淡味に移りつゝある。

酒の欄つく程沸けり日向水

酒仙と言われる程酒を愛する氏の面目躍如としている、淡々たる泳法は氏の独自の風格を出している。名文と名筆は夙に知られ、溝部、脇山の諸名士の墓碑文も氏の筆跡、追弔文や祝辞も大てい代筆を引受けさせられる外、招待状、広告文等も格下げして迄や

る。とも角も文化バストスの大御所たるに恥じない。節酒百才の前と祈る。

早川 栄松氏（北海道雨龍郡多度志村）

（早川 栄松―写真）

十八歳まで郷里の田舎で家業を手伝っていたが、農家の六男に生まれ、希望の無い人生を送るよりは、もつと広い世界に押し出して世の荒浪と戦い、自分の力の程もためしてみたいものと腕をさすっていた時、義兄賓田竹三郎氏がブラジル移住を企てたので、その家族構成の一員となって、共に渡伯し、昭和八年二月三日着伯した。海興植民地セツテバラスに入植、義兄を助けて、大いに働いていたが、昭和九年に實兄米次郎氏が着伯するに及んで、当時オーロブランコの景気と、高度な文化生活を謳われたバストスの事を聞き、さつそく、転住して、グロリア区に入植した。一年間農業に従事したが、土地が痩せていて将来性に乏しいとみたので、商業への転向を志し、製靴技術の習得の為め市街地に出た。一九三九年、實兄米次郎氏と共に、雑貨店及び靴店を共営したが、その誠實な人柄はすぐに内外間に信用を得、日に日に店は繁昌して事業の拡張に追いまくられるに至った。そこで、二つの店に分離し、氏は独立して、専心靴店の経営に当る事になった。製靴技術の優秀と、親切は今日の盛大を招き、押しも押されもしない一流靴店としている。

氏は一九四〇年にバストスはカスカッタ区の佃彌次郎氏三女はな子嬢と結婚し、弘、静江、彰、道子、雪江の二男三女に恵まれ、

家庭円満は金より尊く、子弟はより良きブラジル人と、して育てなければならぬと言ひ、最も子弟教育に熱心な人として知られて居る。

氏のバストスに対する気持は、この地を子供達のよき故郷として、人情美しい地とすること、かつて入植当時の如く、人の和を固め、植民地が打つて一丸となり、日の丸の民が作つた植民地と誇るに足るバストスを作り上げて行き度いという所にある。

氏は又趣味として芸術写真に長じ、写真同好会創立の時は、發起人の一人として、同好を糾合し、芸術味豊かな写真を、家業の余暇に発表している。又これは氏の陰れたる特技として園芸をよくし、草花栽培にも一流の腕を揮ひ、珍しい観賞用草花を裏の畑に咲かせ、家族一同で楽しんでいる。

事業には熱心であり、その趣味は高尚であつて、人格高まいな氏の如き人物こそ、バストスの発展を担う人である。筆者は今後の飛躍を注目して待つ者である。

氏が今日の基礎を築くに到つた蔭にはな子夫人のあつたことを忘れてならない。店頭氏がいなくとも、夫人が甲斐々々しく働いている姿を見ない日がないといわれるほど、夫人の内助の力は大きい。

開店当時、バストス市街地には五、六軒の靴店があつたが、今日では氏のみとなった。温厚誠實、勤勉な氏夫妻を見ると、今日の盛業は容易に領けるのである。職人数名を置き、製造と小売もする。その多忙の毎日の中に暇を見出して前記の写真も撮れば園芸にも親しむ。その芸術写真は秀作が多く、各地の写真展に出品し、毎度の如く入賞しているのである。業と趣味を併立して人生を歩む氏は、最早、苦難の峠を後にした人である。

信太兵治氏（北海道紋別都下湧別村）

（信太兵治―写真）

農学校を卒業して十七歳の時伯父に招かれて北海道札幌に渡り、日本キリスト教会札幌初代牧師と北海道タイムスの記者に就いて英語と漢学を勉強し、将来はジャーナリストとして立つ考えであった。二年の後、郷里秋田に帰り兵役の義務を終えて、再び北海道に渡った。兵隊生活は氏の思想に一大転換をもたらし、キリスト教も捨て、又ジャーナリスト志望も放棄した。伯父の農場一千五百町歩の管理を委任せられ、その経営に全力を盡したが、新開発水田八百五十町歩の水量観測をあやまり、米作に失敗して、農場は借金のかたに取られてしまった。伯父も自動車工場の経営に乗り出したが、これ又、欧州大戦後の不況に災されて破産し、寝食を忘れての挽回運動効を奏さず、遂に札幌に出て商業を営んだ。しかし商業は性質に合わないのので、北海道を思い切り、子供達の将来を造る為にも、南米移民を決意した。

昭和九年、ぶえのすあいれす丸に自由移民として乗船したところ、再渡航者よりバストスの話を聞き、上陸直ちにバストスに来たが既に満植で余地が無かったので、隣接ヴィトリア植民地に二十域を買いわらじを脱いだ。以来一九五二年まで同地にあつて、雑作、養蚕を営んで来たが、子弟の為バストス町に移りボンフィン区に土地四十域を求め、歩合作二家族を入れて農業を継続する傍らカミニヨン二台を購入し、運搬業をしている。

氏はバストス隣接地に居て、常にバストスと歩調を合わせ、バ

ストス連合日本会に加わり、又、バストス産組の評議員として組合強化運動に挺身して来た。その眞面目な人柄と義務遂行の念に厚い氏の人格は、常に衆望を集め、ヴィトリア植民地学務委員、区長、などの要職に任じ、村人の相談役をつめて来た。戦後の思想的混乱時代には、氏の説得によって、迷夢のさめた人が三十数人もあつたと聞いている。

家族は、房夫人と子息、茂、新平、實、栄、英二、八郎、知也、孝、典子、方文、美代、豊の十二人、稀に見る子福者で、既に茂氏は、加藤勇氏の娘房子さんと結婚し、それぞれに成人し家業を助け、学校に通い、美しい大家庭として、近隣にきこえている。

趣味は読書で、暇を得て古今の書をひもとき、人と世を案ずるを以て樂しみとしているが、その念願とするところは、養蚕は邦人の特技であるから、益々盛大させ、伯国蚕業を確立させてバストスの繁栄を計り、同時に日本移民として伯国産業に大いに貢献するところあらしめ度いと、バストスと運命を共にして来た氏にして、この言葉あるは、實に頼もしい限りではないか。

氏はこのように養蚕業に専心しているが、子息茂氏はバストス更生の産業は父の言う養蚕と養鶏以外には無いとし、後者に非常に期待している。また茂氏兄弟は伯人の大綜合会社と提携して廢鶏の仲買商として大いに活躍、青年實業家との名が高い。

氏は、子息の活躍に家を委せ、その発展を蔭から見守る休息の人生に入っているが、過去五十余年を省みて「渡伯以来の苦しみは、日本で財産を維持しようとしたときに比べると楽だ」と語り、伯国の地に挑んだ建設時代を述懐している。

西 静一氏（三重県南牟呂那神志山村）

（西 静一―写真）

祖父の代までは近隣にきこえた素封家であり、由緒正しい名望家であつたが、氏が十四歳の時に、事業の失敗から全財産を失い、あまつさえ、十九歳の時、柱と頼む父を失ひなつた。母は氏を頭に六人の子供を抱えて貧乏のドン底に陥入つた。しかし、女は弱くとも母は強く、氏を押し立てゝ、けなげにも一家の再興を企て、町に出て商業に就いた。

氏の一家が、らぶらた丸に未来の運命を托して着伯したのが、昭和四年六月であつた。直ちにバストスに入植し、グロリヤ一区第十三号地に入り、バストス開拓の草分けとして奮闘した。しかし、氏は幼少より病弱であつて、小学校卒業後和歌山県新宮町の自転車商に弟子入りし、主人夫婦より我が子のように可愛がられ次第に健康を取り戻した。渡伯当時は既に立派な體格であつたが、馴れぬ肉體労働の爲め、身に無理を感じたので、二年後にカミニヨンを買つて運搬業をはじめた。バストス運輸組合の創立に奔走したり、ランシヤリア新道の道路監督をつとめたりしたが、三年後には農産物仲買商に転じた。当時バストスは棉作全盛期で、農家はどんどん事業を拡張して居り、市街地は毎日がお祭景氣であつた。この時代が氏の全盛期で一時は全バストス産出棉花の半数量を買いつけた事もあつたが、第二次大戦の勃発により、棉花価格の大暴落に逢い、遂に仲買業より手を引くの止むなきにいたつた。

経済的にも精神的にも、多少傷みを受けた氏は、それまでの自己の在り方を反省し、今度は全く方面を変えて、これまで誰も手

をつけていなかった牧畜業に着目した。グロリヤ二区に牧場を経営し、地道な牛飼いとなって、牛乳の配給に着手したこともあった。

みえ夫人との間に徹、功、静、禮三、登、澄の五男一女があり、二千六百年祭の時には夫人と末の二児に日本を訪問させて祖先のまつりを営ませた。名家の出だけあって祖先に対する崇敬の念も厚いが、子弟教育にも又熱心で、子供等にはそれぞれ高等の教育をさずけつゝある。家庭にあつてはよりよき父であるが又社会に出ては、よく公共の爲めにつくし、グロリヤ区々長として信望を集めていた。又植民以来の畏友松本高信氏が晩年、病にたおれてより三年間、その逝く日まで缺ける日もなく病床に見舞った徳行は、友情美談として今なほ余香を放っている。

氏は言う、「私は一家が子供時代没落した爲め、高等の教育を受けることが出来なかった。この残念だけは子供達に味わせたくない」と。子弟の教育に全力を捧げ、つゝましく、安らかな後半生を意義深く生きようとしている氏の姿は尊いものである。現在サン・パウロ市に移り、子弟の学業を見守りつゝ、休息の時代に入つた自らを楽ししみ味わっている。

氏は、生来無宗教であつたが、十年前から、ふとした動機で「生長の家」の信者となり熱心に信仰の生活を送っている。これは氏の人生観、即ち、物質より精神的なものを求める、といった人間性の尊重を願う思想を以つてすれば、容易に領けることであろう。

また、氏は趣味をかつての家業とした自動車と将棋に求めへ聖市に在つても自家用車を馳駆させてその毎日を楽しんでいる。

佐野万太郎氏（静岡県富士那賀島村）

（佐野万太郎―写真）

氏は今老妻さだ氏とたずさえて、バストス市街地に悠々自適の生活を送っているが、その歩んで来た道は、實に波乱に富んだ人生であつた。幼にして父を亡い、祖母の手に育つた氏は、高等小学校を卒業すると同時に建築請負組合の荒い気風の中に働きつゝ、独学で勉強をつゞけ遂に中学検定に合格した。青雲の志を抱いて東京に出、倉前の高工に入学したが覇氣に富み血氣にはやる年頃とて、若氣にまかせて、日本労働党に入党し、政治運動に血道をあげ、高工を中退してしまつた。その後考えるところあつて、富士製紙会社に入社した後、高野製紙三島分工場に移り、眞面目な勤人となつていたが、社交に拙ない氏は人間社会の俗悪さ、味氣なさが身に沁み、人間は土にかえるべきであるという魂の聲に卒然と人生を覚り、平凡な農業者として生涯を鋤に托し、大正七年十月、さぬき丸で渡伯した。ソロ線ポツカツ駅サンジョン・ド・レチーロ耕地、ソロ線セルケーラ駅、マンドリー駅等の附近で転々と、棉の歩合作をしたり借地農をし、ベルナルジ・ド・カンポス駅附近に二十五域の土地を買い、ようやく落着きを得たかに見えたが、ブラジルの農業に馴れぬ為め度々失敗を重ねて、又々放浪の旅に出、一九三三年、バストスはブログレツソ区に落着いて、はじめ、渡伯以来の念願を成就する緒につくを得た。最初は雑作していたが、ふと有畜農に興味を覚え、豚、牛、鶏などを飼育しているうち、養豚有利の見通しもついたので、養豚業に主力を注ぎ、豚の交配を研究して、優良豚の売出しをはじめた。これはバストス有畜農の先驅をなすもので、今日の牧畜バストスは、氏か

ら始まったと言うことが出来る。

その後、果樹栽培も手がけ、柑橘類、バナナなどを産出した。何によらず研究心の旺盛な氏は柑橘の改良種を作り、バストス果樹の発展に大いに貢献した。

一九五二年度コチア産組二十五周年品評会には果實を出品し、ミシリカ二等、アバカテ一等に人選し、大いにバストスのために氣を吐いた。現在は農園経営を一切子息巖氏にまかせ、時々訪れる四人の愛孫に取りかこまれて、幸福そのものゝ老後を送り、植木、盆栽、読書にふけっているが、氏がバストスに落着くまでの道は汗と涙の苦行道であり失意のうめきに満ちていたが、農業こそ神に従う道である人間は土にかえらねばならぬとする、生命の声を捧じ、土に生き抜いた氏に神は晩年の幸福をさずけ給うたのであった。農業を一生の事業とし、又趣味として生きた氏の余生に榮あれ。氏は、今日を省みて、逢う人ごとに次のように述懐する。「農は土の文化だという精神に立脚して渡伯以来の半生を農業に打ち込んできた。それに自分は農業が趣味であった。趣味と事業が一つであったので幸福だと思っている」 また、氏を助け、励まして今日を築く蔭の人となったさだ夫人は、「在日時代は苦労の連続でした。ブラジルに来てからも苦労のつきまとわぬ日は一日たりとも無かったけれど、鋤を持って土の上に生活を築くようになってからは、明日への希望で、毎日が一杯でした」と語っている。けだし移民妻の心からの声であるまいか。

西川 誠一氏

（静岡県小笠郡掛川町）

（西川 誠一―写真）

小学二年生を途中で止め、父母兄弟と共に渡伯した誠一氏である。父や母がどんな悲愴な決意を固めて故郷を後にしたか、不安と希望の交錯した、その複雑な気持ちを知るよしもなく、賑やかで楽しい船の旅を夢のように過して、サントスに上陸したのが、昭和三年十二月の中旬であった。家族と共に一度は、プロミツソン駅ブリグイジンニヨ耕地に入り珈琲園に居た。二年後、バストスに入植し家族はブラ拓の直営地に就働した。氏は、バストス小学校に入学し、高等科を卒業したのであった。

農家の六男に生まれた誠一氏には、家業に就かねばならぬという必要もないので、佐々木薬局の開店と同時に勤務し、その間に勉強して、調剤師の検定試験を受け、立派に合格して免状を獲得した。

六年後に望まれて、イリネウ医院に調剤師として入り二年間を助手をつとめた。調剤の腕も磨いたし、医療一通りの知識も得たので、一九四五年、宮田氏と共同で薬局を開いた。一九四六年、宮田氏は都合で手を引くことになったので、氏が総べてを引受け、現在に至っている。

結婚は一九四八年、中央区石澤平吉氏二女澄子さんをめとり、現在元範、敬造、一児を得、円満な家庭を営んでいる。趣味は音楽、と釣と写真、多芸多趣味の人であるが、特に音楽には秀れた才能を持ち、バストス音楽団育ての親といわれ、又「ひばりバンド」の主宰者であって、植民地明朗化の第一線に立ち、後進の指導に当たっている。

氏は純粹の二世ではないが、バストスに育ち、バストスに学び、現在バストスで第一流の薬局を経営し、連合日本人会の衛生部長

として、バストスの若い世代の代表的人物といわれ、社会的な面に活躍していることから言って、本当のバストス人ということが出来よう。氏は言う「私の願いは、郷土バストスを如何にして盛り立てゝ行くかということです。私達の子孫がバストスこそ安住の地だと思ふような楽土を此処に築きたいものです」と、この言葉の中にいつわらぬ、氏の眞情が素朴に現わされているではないか。ブラジルの大地にしっかりと足を踏まえ、「我々はバストス育ちだ」と一片の卓屈な影をも宿きぬ朗らかな明かるい顔で医薬に關する村人のよき相談相手として、若者の相談相手として、音集の指導者として生きるに甲斐ある人生の歩を前進させつゝある氏を祝福する者である。

氏はまた、人の世話を好んでする義侠の人でもある。大方のブラジル育ちの準二世とは全く異つた、より一世的なものを氏の中に発見するのもそうした性格からであらう。現に、既に仲人を二三組なし、若い世代からよき先輩として親しまれている邊り、今後のバストスには、無くてならない存在である。氏は言う。「バストスは現在、一世から二世の手に移る過渡期である。日本移民が理想と抱負をもつて築いて来たバストスが二世に渡つたとき、どのように変形するか知らないが、その中間に、我々準二世が居る間は、開植の精神は健全を保つだろう」。氏の如き抱負を持つ準二世があつてこそ、明旧のバストスは健在するといつても過言であるまい。

得丸 澤蔵氏（大分県大分郡高田村）

（得丸 澤蔵―写真）

大正四年二十一歳の時に郷里を出て神戸の川崎造船所に勤めた。第一次欧州大戦が終結して景気は去り、各地に労働争議が巻き起こった。川崎造船でも、その頃、教会運動の尖端を切っていた賀川豊彦氏の指導で前後三回ストライキを起した。得丸氏も血気にはやる年頃であり、一方の旗頭となつて、その頃は未だ無名の西尾末広氏等とも交友を結んでストライキの先頭に立った。

大正十三年、永年に互る造船所務めと争議に疲れた頭に、少年の頃、アメリカに憧れ、海外雄飛をもくろんだ夢が、ふつとよみがえつて来た。新天地を開拓しよう、そして立派な植民地を建設するのだ。夢は際限もなく、拡がって行つた。更生々々、氏は造船所を退いて、先ず、ポ語を勉強した。そして今上陛下の御成婚記念として大毎移民が計画され、全国からブラジル渡航希望の篤農家を募集した。かなだ丸を移民船に改造して乗り込み、大正十三年七月、革命騒動さなかのブラジルに上陸した。そして、モジアナ線サンフランシスコ・マシリアーノ駅附近の耕地に同航の五家族と共に入った。

その頃、今のマリリアは、アルト・カフェザールと稱ばれ開発の緒についたばかりであつた。一年半の後、耕地を逃亡して、マリリアに行きカスカッタ耕地で七年契約をして、一生懸命に働きました。

一九二七年の霜害で折角育てた珈琲をやられ、入植六年目に汗の結晶とも言ふべき珈琲一千俵を収穫したが、カマラーダの不注意から倉庫に火を發して、丸焼けとなり、やつと米作に一息つくことが川来た。

文化施設の行届いたバストスの事を聞き、一九三二年に移り、グロリア一区に入移した。一九三九年、バストス産組の創立を見

るに及んで、評議員となり、自ら陣頭に立って往年川崎造船所で争議に心身を打込んだ時代の情熱を傾け、今度は産組強化運動を展開した。爾来一九四八年まで、産組の運営に専念して来たが、同年六月永年一心同體となつて労苦を共にして来た愛妻義子夫人の死にあい、翻然として大いに覚る所があり、産組を辞して出聖した。この時氏の脳裏を去来したのは、渡伯を決意した頃の夢であつた。そうだ新天地だ、理想の植民地建設だ、氏は新しい理想に燃えて再び立ち上つた。手はじめに、聖市近郊のシャカラ、別荘地帯の土地売りをし、一九五〇年にパラナ州に行き、マクコ植民地二千三百域の完成に着手した。ぞくぞくと入植者を迎え、全域を売りつくしたので今年度より隣接八百域の売り出しをはじめている。

家族は、パウロ、マリオ、賢児、良児、オルガの子女五人で、それぞれ立派に成人し、何一つ後顧の憂なく、氏は青年年の日の夢を實現すべく奮闘している。

氏の手になつたマクコ植民地には学校はじめその他の文化施設が完備し、近年稀に見る植民地として視察者の絶賛を博しているが、二千域余（約五千町歩）という広大な新興植民地を個人で開拓した記録はかつてなく、移植民史上に氏をもつて嚆矢とする。また、氏は、植民地開設に当り、地権の調査、交通問題の解決等々、その総てに万全を期し、施設に対しては約束を履行し、文字通り安住の地たらしめるべく全努力を傾注しており、単なる土地売りではなく、入植した人々から開拓の父として尊敬を集めている

西

徹氏（三重県南牟呂郡神志山村）

(西 徹一写真)

一九二三年、静一氏の長男として出生。六歳の時、両親に伴われて渡伯。バストス移住地グローリア第一区に入る。第一小学校の教師として故松本高信氏あり、氏の薫陶を受けた。高等科一年の末期頃から日本語教育に対する圧迫が始まった。三七年、同地のグルッポを第一回卒業生として出ると、バストス商工組合事務所に勤務することとなった。

氏は少年期から、日本人商業者が当国商法に暗いため、この虚を衝く監督関係のため、しきりに罰金を支払わされている事実を知りすぎる程に知り、深く心に決するところがあつた。須らく、当園の商法を学び、同胞商家を守らなければならぬ。氏がこの事務所に入ったのは、そうした動機からであつた。

中学校の開校と同時に、一年間、予備校に学び、中学に入学したが、卒業あと一ヶ月前に中学を閉鎖されてしまった。勉学の心は燃えていたが、日本国籍者たる自分は、父との協力のために殺して、他国生まれの伯国人たる弟を世に出したい、と痛切に考えた。けだし当時ナシヨナリズムの上潮期にあつたこの国の風当りは、外国人に対してあらゆる面に於いて強かつたのである。移民というもの宿命的な在り方が深刻に反省されたのであつたり同組合が、エンリツケ会計士の個人経営となると同時に、ソシオとなり、浦氏と三人の経営で現在に及んだ。使用人は十名に上る。バストス町の商店の九〇%までの、会計簿記、請願書、手続等、一切の商業関係の仕事を引き受けるに至り、こゝに、商人を商法の正しい線に沿って守る、という、かの少年期の正義感に満ちた熱情、かの理想は現實化されたわけである。

ここにスポーツマンとしての氏の系図を展開するに、十一歳、

全伯少年野球大会に、右翼補缺として出場したのを振出し、同大会第二回に出場して惜敗。第三回バストスに開催されて、この時、遊撃手として出場、優勝した。中学チーム時代に、オール・バストス青年軍と練習試合の折、活躍して自軍を勝利に導き、爾来、青年軍に加ってショートを守り、畑中忠雄選手の後を受けてセンターに出た。その後、公式試合に出場せざることなく、バストス・チーム全盛期を板垣、茂庭、高柳、北谷選手等と共に招来し、野球王国バストスを築いた。戦時中は、伯人をも入れたチームを組織して継続した。戦後三年、パウリスタ線大会で敗れたが、五三年、宿敵オズワルド・クルス・チームを破って聖州大会に駒を進めたが、惜しくも新星ラビンニア・チームに勝を譲った。

各線対抗のパウリスタ軍主将として、第三回に胃潰瘍を患って出なかった以外は連年出場し、第四回は監督として率いた。氏は万年一番打者、特有の感の鋭さ、むらのないプレー振りで、幾多、輝しい戦歴をブラジル野球史上に印している。

氏はまた、単にスポーツ方面に止らず、そのポリチカを用いぬ正々堂々の激しい闘争精神、鋭い良心、香り高い純情、しかも、繊細な神経による水も洩らさぬ統卒力で、青年層の中堅であり、指導者として十代から今日に及んでいる。現バストス連合青年団の団長。

バストス體育委員会委員長に任ずる。

山根 立 太氏

（香川県小豆郡大部村）

（山 根 立 太―写真）

昭和三年三月、もんでびでお丸で家族と共に渡伯し、最初に、ノロエステ線ブリグイ駅マリオ耕地に一農年を過し、コレゴ・ド・フエジョン耕地を経て、リンス駅ウニオン耕地の珈琲園で六ヶ月働き、ポンペイア駅ミランダ植民地に入植、綿、米、フエジョンその他雑作を主として十年間を過し、ブラジル農業は一通り體驗を積んだ。

斯うして丁度氏が二十四五才に達し、しみじみと自分を顧み、人生とは何かと言うような思想的な問題に就いて考えはじめた頃、全伯的に衰退しつゝある邦人社会を救え、という声が起つて来て、各地に産業組合が生れつゝあった。氏はこの産業組合の精神に共鳴し、民族の為に殉じる絶対な精神主義を捧ずる弓場イズムの普及展開運動に参加した。そして、コチア第二回産業組合青年幹部講習会に出席し、筋金入りの産青連幹部となり、ポンペイア青年連盟の指導者となった。後、産青達が鶏の孵化場を作るについて、氏はパウリスタ線バルパ植民地に行き、大いに鶏を研究して種鶏場の管理を引受けたが、すゝめられて、コチア出張所の主任となり、戦時中の不自由で困難な時代に産組の為に、大いに活躍した。

戦時は養蚕景気で浮き立っていたバストスも戦後の糸価の暴落と共に火の消えたさびしさとなったが、養鶏による植民地の更生事業がようやくその緒についた一九四七年、氏はバストスを視察して、養鶏の将来性に着眼した。しかし当時のバストス養鶏はすこぶる幼稚なものであり販売機構にも不備が多く、産組は乱立して、養親家は不利な立場に喘いでいた。これを見た山根氏は、バストス養鶏の革命を期し敢然として乗込んで来た。先ず、飼料を

安価に卵価を高価にする事を研究し、その機構を備える傍ら、育雛法の改良を計り最新式飼育法を普及した。そして氏自身は、米国製三万二千個入りの孵化器を購入し、グロリア区に種鶏場を経営しサンパロにデポジトを置き優秀な雛を安価に配給した。又、年二十万羽を算するバストスの廃鶏が二束三文に売られているのを見て、ミナス、サンパウロへの鶏肉配給会社の創立を計り、株主を募って歩き、遂にその創立と同時に常務取締役就任し、バストス養鶏家に年一千コントスの廃鶏処理による利益をもたらすことになった。

斯くして氏は、バストス経済復興の偉大な功労者、養鶏界の救い主と稱えられつゝ、研究を重ねている。

氏の結婚は一九四四年で、金子次郎氏三女美恵子嬢をめとり、和子、彌生、恒、明美の一男三女の父となり、趣味と實益とを兼ねる程鶏業にまい進し、熱と意志を備えた事業家として、バストス異色の存在と言ふべきである。氏は、バストスの養鶏に対し、次のような抱負をもっている。「今までの養鶏業は平面的であつた。現状からみて、各自が養鶏をより深く掘り下げて研究し、立體的な養鶏をすれば、養鶏業に行き詰るということはない。それどころか、バストス回生の唯一の方途でさえある。」かつて産青連運動に傾注した氏の貫徹せずんば止まねの熱情と気塊は、今、養鶏を通してバストスの将来に向けられようとしている。在植未だ十年足らずであるが、氏は、いまやバストスに無くてはならぬ人であり、多くの人々の期待と衆望を集めてその活躍が見守られているのである。

榎 常 孝氏（鹿児島県大島郡名瀬市）

（榎 常 孝―写真）

もしバストスの歴史を語ろうとする者があるならば、そこに名を現わす幾人かの人物をあげなくてはなるまい。その中でも、一際目立つ存在は榎常孝氏である。バストスを墳墓の地として居然たること泰山の如く、移住地興亡の歴史の中に座し、惨風悲雨をしのいで、今日の盛大に導くまでには、或る時は商工組合を創立して縦横に活躍し、又相撲協会を組織して、軒昂の気風を宣揚し、中央区々長となつては協同の實を挙げ、今日尚区長をつとめ、連合日本人会代議員長として乗合自動車発着所の建設、学校々合の増築等の采配を揮い、中学、師範、商業、家政、の各学校教育委員会相談役の重任にあつて、粉骨粹身、公共の為に、老を忘れて盡す尊い姿は、郷土愛の權化といわずして、何と言おうか。

榎氏は言う「私の人生訓、座右の銘は、虚心ということにある」と。世間にも物質にも依頼する心を起さず、天が興えた仕事を全力をつくして行ふ。敵も味方も作らない。例え人から誤解されて、千百の人から罵られても氣にかけない。人に恩を着せず又人の恩を着ない。誠心をつくして事に当る。こうした己に厳しく人に寛容な精神の持主であればこそ、移住地危急存亡の時も、衆望を担つて、要衝に立ちよく虎口を脱し得て来たのであろう。

斯うした円満無碍の人格は、いかにして作られたのであろうか。筆者は、しばらく、氏の人生修業の蹟を辿つてみることにする。熱風怒濤にさらされた九州の南端に生をうけた氏は、幼時より勇猛果敢な気性に富み、大人も及ばぬ豪膽さは早くより近在の舌を巻くところであつたが、海濱町村の餓鬼大将でおさまっている

筈はなく、満十四歳の時、志を立て友人五人を語らって家を飛び出し、懷中僅かに五円を頼みに上京の送に向つたが、途中より志を変え、長崎市に足を止め、商店の小僧となった。そして一年過ぎた或日、港に停泊した英国の帆船カーロン号で、日本人の少年給仕を求めているという話を聞き込んだ。胸に勃勃たる青雲を居して、さつそく、申し込んだところ、船長ピーター・ホルススルム氏は一目で、氏の人物を見抜き、よろこんで採用してくれた。奇しくも英国胎の船員となり、英国に渡ったが、船長ピーター氏に愛せられ、その邸宅に引取られた。台所の下働きをしているうちに料理に興味を覚え、英国一流のホテルに住み込んで本格的な西洋料理を習得した。三年の後腕の訝えた調理人となって、日本に帰って来たが、時あたかも、明治三十八年日露戦争のさなかで、なつかしの郷里に足を踏み入れる暇もなく、巡洋艦千歳の一等コックとして迎えられ、日本海海戦に参加し、砲弾飛雨の下に、英国仕込みの腕を揮い、大いに士氣の昂揚につとめた。戦い終わって、横濱に上陸すると、逋信省に招かれ、約二年半、コック長をつとめたが、外国の風が身に泌みた氏には固苦しい役所暮らしは息苦しく、大連に渡り大和ホテルを根城として、海底電信敷設船、外国航路の商船、その他外国汽船などのコックとなり、欧米の港々を訪ねて、海上生活十二年を過した。

明治四十五年、竹村第三回ブラジル移民を乗せた巖島丸の司厨長となり、はじめて、南米に来て、椰子の樹茂る大陸を見、風光明媚なりオ・デ・ジャネイロに上陸して、両国の豊かさ、和やかに触れ、荒々しい十二年間の海風にさつくれた心に、忘れたはずの故郷を思い出した。大志に胸を躍らせた少年の日がよみがえって来た。

南米よ、ブラジルよ、この国こそ、自分の求めていた土地だ。自分の志を遂げるべき国だと深く覚ったのであった。司厨長たる重い責任も放棄して、すぐにも脱船上陸を企てたい衝動をおぼえたが、職責を重んじて一たん素直に引返し、竹村第四回移民として運海丸に乗り、心も軽く憧れのブラジルに向かったのは大正二年であつた。

何等の拘束もない自由移民として、最初モジアナ線サンマルチーノ・プラード耕地に入り、料理人となつたが不粹な田舎者相手では、腕を揮う張合もないので半年の後サントスに移つた。ホテルやレストウランチのコックとなつて、三年間働き、ブラジル料理も手に入つたので、アマドル・ブエノ街に日本人としては最初のホテルを開業した。この時代に、海運丸で、長い航海を共に築しんだ十四歳の少女が、五年振りに突然氏の前に現われた。上陸と同時に別れ分れとなり、その消息さえ知らず、折にふれて、あどけない面影を夢になつかしんでいた少女はやのさんが見違える程の美人となつて、氏の懷を求めて訪ねて来たのであつた。二人は固く手を取り合つて互に将来を誓い、サン・パウロに出て結婚式を挙げ、勇氣百倍して、イピランガ大通りにホテルを經營した。その頃はサン・パウロではようやく日本人のうどん屋が出来はじめた時代で、氏のホテル經營は破格のものであつたが、ノロエステ鉄道總裁アルリンド・ルーシオ氏に腕を見込まれ、その信任に應えて、はるばる麻州に下りトレスラゴアで鉄道レストウランチを經營した。四年後にリンスに移り、バール・レストウランチ・ホテルを開業し、一年後にソロ線マンドリンで雜貨商を企てたがたまたま革命に逢い。田舎に引込んで棉作に四ヶ年を過した。

斯うして、氏は一九三一年まで、華やかで金錢に不足無き生活

を送つて来たが、腰を落着けるに足る地を見出さず、各地を転々として来たのであった。この時、文化施設完備せる日本人の大集団地バストスの名をきき、この地こそ我が永住の地と定め、一九三二年家財をまとめて来植し、三三年、隣接ヴィトリア植民地に三百域の土地を購入して入植した。その後、バストス市街地に出て一九五〇年までホテルを経営したが、現在ホテルは他の人に貸興し、子息にレストウランテをまかせ、氏自身は農場に帰り、三万の珈琲樹と牧場百五十域を守つて、悠々たる農場経営を樂しみ、バストス発展の為に心を傾注して居る。

氏は少年の日、海軍士官を夢見、郷関を出たが、英国船に乗るに及んで全世界を巡り、終にブラジルの農場主となつた。しかし、外国に学んで得た智識と海に鍛えた鉄の意志は、伯国の各地に転じつつ練つた性格に輝きを添え、日本民族海外発展の尖鋭として偉大なる功績を挙げ、永遠なる生命進展の基礎を磐石の安きに置いたことは、如何なる高位高官にのぼるよりも勝るものというべきではあるまいか。

氏は一九五五年三月、少年の日に離れた故郷を懷しんで先祖の基参り旁々訪日の旅に上つた。海外生活四十余年を経ての故国訪問であつた。しかし、今様浦島の目に映じたものは、敗戦を機に変貌したあまりにも惨めな日本の社会様相であつた。戦争が生んだ悲劇、浮浪児の群を見て、深く心を痛めた氏は、大阪府庁を訪ね、戦災孤児の引取り方を申し出、呼寄せ移民として自分の珈琲園に就働させることを約したのである。第一回呼寄せ孤児七人が既に到着、氏の農園に新しい人生を築きつゝある。このように、老てなお氏は自ら神の授け給うた事業を求めて、数々と闘つてゐるのである。

高田 重利氏（富山県東礪波郡平村）

昭和三年三月、もんでびでお丸で、十一歳の時父母と共に渡伯した。パウリスタ線コリーナ駅サン・フランシスコ耕地に入り、その後五ケ年間、転々と耕地生活を送り、十五歳の時一家はバストスのサウーデ区に土地を求めて入植した。バストス第一小学校を終えた氏は、市街地の森時計店に就職し、二年後に出聖、一・二・三の有名時計店に勤めて技術の習得に励み、一九三六年往時勤めた森時計店を譲り受ける為帰植し、以来、眼鏡その他貴金属項も合わせて営業をつづけている。

一九四七年、織田守男氏次女マリアさんと結婚し、家族は、母君と英男、エリオ、定児の三児を合わせ、一家六人、キリスト教を中心として健全なる家庭を築いている。

十七歳の時父をうしない十九歳で独立開業し市街地最少年の店主として、種々な困難に遭遇したが、よくそれを切り抜け、開店以来十八年、バストス最古の時計店として、内外人間に、技術の優秀と誠實を知られ、盛業一途を辿りつゝある今日の姿は、氏の撓まぬ努力のたまものと言う外はない。

事實、この間に同業者が十数軒現われたが、いずれも消え去って今日では氏のみとなっている。「開店当時は野望を持っていたが、今では堅實をモットーとしている」と、事業に対する自信のうちに着々と店舗を拡大している。

浦 恵 樹氏（和歌山県東都七川村）

（写真）

浦氏がバストスに住みつく事になったのは、二十歳の時からであった。聞く処によると、両親弟妹達と共に渡伯したのは一九三三年五月というから、未だ十八歳の少年上りだったわけである。

故人となった両親は、バストスに来るとすぐシャカラ区に定住して、果樹園を経営し、恵樹氏は其の頃興隆期に向いつゝあつたバストス産業組合に奉職し、ここで二年程働く内、計算記帳等の事務に鋭才を発揮し、故溝部専務に将来を属目されたが、心に深く決する所あり。三七年エンリツケ氏経営の商業事務所に転職し、葡語の勉強に専念した。その甲斐あつて、エンリツケ氏が自からガソリン・ポストを経営するや、商業事務所は浦氏及び同僚西徹氏に之を一任するに至り、両氏相提携して十七年、一步一步確かな基礎を踏みかためつゝ今日に及んでいる。

商業事務所は、単に市内商工業者の顧問たるのみならず、農家一般の諸書類作成はもとより、保険代理業、土地周旋、税金關係の指導相談等、凡そ痒い処に手の届く様に面倒を見るので、今日では無くてはならぬ重要な存在となり、バストス人の信頼に應えつゝある。

趣味は読書第一。俳人としても幾多の名句をものして母国ホトトギス誌に毎月その作品を見ざるなき達人として有名であり、俳号紀南子は出身地紀国を偲ぶよすがであるという。

本村久摩一氏（愛媛県越智郡波方村）

（写真）

氏は一九一一年生まれ。郷里の小学校を卒業後、単身大阪の令姉のもと入出、大阪天王子商業を中退した。勤務中の川崎第百銀行を辞め令姉夫妻と家族を構成して渡伯したのが一九三〇年三月で、配耕先はモジアナ線アルヴァレンガ・フィゲイラ駅の同名の耕地。石の多い珈琲園であつた。義務の二農年を了えると聖市郊外ピリツバで三ヶ月間を蔬菜作り。志を立て、聖市へ出ると、半年間ほど理髪店の見習をやつた。ついで商業への転向を考えて国井商店に勤め、地方行商などした。のちバストス移住地に入り、市街地へ転じたのは三二年のことであつた。一年ほどすると、三人共同で、パラナ・パネマ河のボルト・エピタシオで漁労を始めた。ここで獲れた魚をバストスへ送り込もうとする計画であつた。計画はよかったが、結局、事業は失敗に終つた。聖市半年間の理髪店見習の経験を實地に役立てバストス市街地に理髪店を開業した。

二年後に運転手をやとつてタクシー業を始め、これを五二年まで続けた。理髪店は五〇年に止め、現在のバザールを開業した。

趣味はスポーツだが、柔道は大阪武徳殿で十九歳の時初段。渡伯後、伯国柔剣道聯盟から小谷八段による講道館二段、五三年、高垣八段来伯の折、三段を受けた。伯国柔剣道聯盟バストス支部の幹部である。と同時に後進の指導に当たっている。

高橋 勇孝氏（宮城県宮城郡七北田村）

（写真）

一九二三年に生まれた。村の高等小学校を卒えた氏は、農家の長男ながら、鬱勃たる海外雄飛の情止み難かった。

船乗りとなって七つの海を思うがまゝにーーと思ったが、年齢が足りない。満洲のような寒さ厳しい所へは行くこと罷り成らぬが、常夏のブラジルならば宜しい、との父君の許可を得て、単身、自由渡航。着伯したのが一九三九年秋。サントスの四月の室は美しかった。一先ずバストス移住地ボンフィン区の伯父君のもとに落ちつき、別に、これという目的もなく、鋤をふるつた。一年ほどすると、帰心矢の如き始末。帰国手続を始めたとたん、眞珠湾攻撃に始まる太平洋戦争への母国の突入だった。仕方なく、町の製材所に、大工の見習に入った。在ること二年で遠縁に当る人と木工所を開業した。以来十年。無資本から始めてそれこそ腕一本、バストスで一、二を争うまでの盛大きにのし上げた。が、ある事情から共営者と分離し、五三年、現木工所を開き、これまた血のにじむ苦心の末、今日を成し得た。

バストス町在住中野米太郎氏次女栄子さんと結婚したのは四五年、現在三男一女のよき父親である。氏は所謂商人型、職人型とは凡そ異った人柄で、正義感の強い人物である。負じ魂の強い意志強固な人でもあり、その将来は囑望されている。

森 辰 市氏 （佐賀県杵島郡龍王村）

（写真）

農家の長男に生まれたが、少年時代より商に志し、家業の片手間に農具商をはじめたが不況の為め閉店のやむなきにいたり、海外に青山を求めて、昭和五年七月、りわでじゃねいろ丸で渡伯した。配耕地は、モジアナ線カーン駅パルミール耕地であったが、すぐドミンゴス・ビレーラ駅ファイゲール耕地に転じ、二年の後、昭和七年九月バストスはボンフィン区に土地を買い入植した。綿の減収と安価に将来の不安を感じ、五ヶ年の後、聖市郊外に移り野菜作りをしたが、三ヶ年の連続的不作に有金をはたき、再び舞戻ってバストス隣接地ヴィトリヤ植民地で養蚕契約を一ヶ年した。後バストスのシャーカラ区に移り玉糸製糸業をはじめたが養蚕不況時代に入り廃業、その後は新聞社、土地周旋業の外交員又は行商人となったが、その間にこつこつと資本を作り、一九五〇年、バザールを開店して今日に及んでいる。

家族は和意夫人、正伯、正樹、正二、初代、笑子、の五人であるが、長女初代さんはパカエンブー在住の中島氏に嫁いだ。

渡伯以来、事業の連続的失敗を喫した不運の人であったが、少年時より好む道の商によって幸運を招き、七転八起の人生を味わい、今後の飛躍が期待される人である。ボンフィン区時代には、区長はじめ産組の評議員また理事として公職に携わり活躍したこともある。

古賀 茂氏

(福岡県朝倉郡)

(写真)

父善三郎氏は日露戦役奉天大会戦生き帰りの勇士で、郷里に於

て雜貨商を営んでいたが不況に見舞われ、大正三年二月、帝国丸で渡伯した。氏は未だ六歳の幼年で、家族と共に、耕地を転々とし、フアゼンダの書記について、夜学により学問をする有様であった。

邦人の顔を見ぬ耕地生活九ヶ年、日本人が恋しくて、一九三一年憧れのバストスに入植した。土地を求めてフアルツーラ区に入って三年間農業に従事したが、氏は幼時より機械仕事を好み、ブリキ細工、鍛冶屋、時計屋、自動専修膳などを業とした。一九三四年遂にシネマ館の経営を企劃し、板壁のシネマ館を建設した。邦人としては初めての試みで、缺損続きであったが、自動事業をして、これを補いつゝ経営したが、戦争勃発の為、閉鎖を命じられたり、市長名儀に切り代えたり、伯人に譲って支配人となった。迂余曲折を経て尚も、シネマに喰い下り、遂に一九四九年シネ・バンディランテスを購入し独力経営に入り今日順調な発展を見せている。

家族は時子夫人と子女栄子、實、哲夫、節子、敏子、茂信、八重子の三男四女である。

シネマ館経営二十年、粒々辛苦、全財産を投じて初志を貫徹し、今日の盛大を来たした不撓不屈の父子二代に亘る奮闘の姿は、在伯邦人映画史に燦として輝くであろう。

森 重 清氏 （山口県玖珂郡御庄村）

（写真）

高等小学校を卒業して、醤油屋の外交員となっていたが、たま

たま従兄のブラジル渡航計画が実現したので、家族の一員として加わり、大正十五年七月若狭丸に乗り込んだ。少年時代より、新奇なものや風土に興味を持っていたので、これを機会にブラジルを振出し世界一周の夢を描いてサントスに上陸したが移民の生活事情はしかく甘いものではなく、モヂアナ線セラナ駅マルチノポリス耕地を振出しに、世界の国々ならぬ、サン・パウロ州とパラナ州内の各地を、コロノ、大工の手伝、養豚係り、伯人邸宅の園芸師、農具の委託販売外交員など、猫の目の如く変わる職業を追って一九三二年、ようやくバストスに落着いた。

此処でも亦、土地こそ移らぬが、運送業、棉作、郵便局主任、週報印刷係り、電話局の夜間部担当、互生会出張所主任、産組購買係勤務、小間物商、薯作り等多い時には二つの仕事を掛け持ちした事などあり、この間にブログレッソ区の尾崎松之助氏長女扶美さんと結婚し、一九五二年よりパウリスタ新聞社パウリスタ線支局長を勤めて現在に至っている。

趣味としては羊鈴と号して夫人と共に短歌をよくし、又熱心なホリネス教徒として、知られている。家族は、義明、広司、春夫、信正、逸男、和美、栄治、めぐみの七男一女を合わせて十人、いとも賑やかなそして平和な家庭に恵まれている。

石橋 三雄氏（三重県南牟呂郡阿田和町）

（写真）

兄の長兄氏とは性格的にも離れている。

趣味の間口広く、奥行も深い。俳句、川柳、短歌、囲碁、将棋、

麻雀と行く処可ならざる者なし。バストス演芸団の座長格として自作自演もやる。樂天家の如くで、一面、義理人情に生きるサムライの風格も備える。三重県は阿田和町の産、大正十三年渡伯、昭和八年バストス入植とあるからマカコ、ヴェリヨに数えられる組である。昭和十一年、兄の長兄氏と農具製造工場を興し、独立してマリリアに於いて蚕種製導製糸工場据付工事請負などに活躍、間もなく、当時の蚕糸恐慌に逢着して、事業の前途に見切りを付け出聖、暫く失意の時期を送ったが、再びバストスに戻り、長兄氏の農具工場経営に協力して今日に到っている。四十八歳とは見えぬ若い風貌、酒もたしなまず、莧も喫わないが、広い世間に身を張って渡って来た土性骨は据っている。氏一流の人生哲学と、強い正義感に綾なして、その豊富な體驗談や座談を一層迫力付ける。最も遅れて手を染めた俳句が数多い趣味の内一番今は気に入ったか、作句に努力し句会には缺かさず顔を出している。初期の作品の川柳臭は払拭されて、独自の句風を打ち樹てたかの感がある。

晴耕缺かさねど雨読まゝならず

など、代表句と言えよう。川柳はバストス柳壇の大御所、柳壇当時から既に知られた投句者であるというから全伯的にも古い柳人。

後藤 利一氏（愛知県海邊郡佐織村大字諸鉏）

（写真）

後藤利一氏は愛知県海邊郡佐織村の絹織物を業とする舊家の長

男に生れた。高等小学校卒業後、商人として身を立てるべく志し、四日市の算盤学校に通学したが、一介の商人番頭となって暖簾の蔭に生計を立てるに生涯を窮するのは阿呆らしい、外国にでも行つて思う存分働いてみたい、と、同市で呉服反物店を営む親戚と相談、商業見習生として北米行きを志した。しかし、厳父はこれを快とせず、既に前年渡伯していた實姉の呼寄せの恰好で、どうせ外国に行くなら肉親のもとへ、と渡伯を促した。大正八年五月十九日、實弟峰一氏と二人で家族を構成し長崎港を後にした。港を包む長崎の山々が水平線下へ次第に没するとき、『俺は一と儲けせずには二度と故国の土は踏まんぞ』と、握り締めた拳で涙をぬぐつたという。廿二歳の血潮たぎる青年だった。そのときより氏の海外雄飛の夢が厳しい現實となつて嫌應無しに降りかゝつて来た。姉夫婦が就働するアララフクワラ線マトン駅カンブイ耕地はもとより氏の定住できる條件を備えていなかった。角笛で暁の夢から叩き起され、角笛に追われて夕日の帰途を急ぐ生活に耐えられる筈はなく、同耕地を八ヶ月で脱耕、しかし、公然とした晝逃げだった。同線カタンゾーバ駅近くの耕地に移り、珈琲六年契約を二年目より受け継いだ。

同時に農産物仲買をはじめ多年の實業界への夢を一步進めた。脱耕の翌年、即ち一九二二年に現在の皐月夫人を迎えて一家を構え、翌二二年には二アルケールス余の土地を求め独立農としての地歩を築いた。そして二三年には前記六年契約の珈琲園の権利を譲渡したのと引返えに二万四千本の珈琲園を六十コントで購入。秀でた手腕は農商かけもちで事業を切り廻わして同地方に少壮實業家の名をほしまゝにしていた。廿七歳だった当時、三百コントス余の負債を背負つて、おりからの珈琲暴落による不況下に喘ぎ、

やりくり算段、辛酸を舌めたという。その果ては珈琲園を手放し、たまたま幼児脚氣がもとで長男に続いて三児を失い、人生の希望も挫折される暗憚たる悲運に暮れていたところから、今後産れる愛児の健康のみを憂慮し、日本人の體質を知る日本人医者にいるバストス移住地へ移ろう、と入植を決心。三〇年の初めウニオン第一区に十域を求めて入植したのである。渡伯既に十年を経ている氏は、当時、直来入植者によつて開拓されていた区のよき指導者とし、また、新移民の世話をよくしたが、入植と同時に得た愛児がまたも幼児脚氣に罹つたため、区民に惜しまれてバストス町に移転、専ら愛児の健康回復に力しつゝ傍らブラ拓事務所運輸部に自分のトラック持参で勤務した。生計費を得るためではなく、事業慾の塊りである氏は、こゝを足場に植民者間に顔売り、次期の事業に対する基礎を固める便法であつたのである。慎重に万全を斯す氏の事業に失敗はあろう筈がなく、運送兼農産物仲買業は盛業を極めた。当時移住地の運輸といえばランシャリア駅への搬出入であつた。氏は卒先して同業者を糾合、運輸組合を創立し、自ら初代組合長として敏腕を振るい、これの運搬機關の充實を計つた。一方、毎年増大する燃料ガソリンの消費に着眼し、ガソリン・スタンドを新設し、移住地内消費燃料を一手に販売した。おりから棉花好況の波が打ち寄せはじめていた。氏は綿花の仲買を大々的にはじめるとともに精米所、珈琲精撰工場を新設、傍ら一九三六年よりシボレー自動車代理店を經營した。これはブラジルで最初の日本人自動車代理店となつた。同時にゴルジアル・タイヤ代理人とし、タイヤ、ガソリン、はじめ自動車部品等、一連の必要資材を一手に供給した。また、農産物の仲買に於ては、当時、日の出の勢にあつたバストス産業組合の取扱量を上廻る物産

を右から左へと処理していた。当時ランシャリーア町のサンブラ工場は年間三十万アローバの棉花を買付けていたが、氏はそのうち二十万アローバを供給していた市・トラック八台、乗用車二台を所有し、農産物及び交通機關の必需資材の供給を掌中に納めつゝあつた氏の事業伸振りは、まさに飛ぶ鳥を落す勢にあつたのである。前記サンブラ工場の支配人の如きは氏の鼻息を窺つて商談を乞うたものだという。充實期にあつた産業組合でさえ氏に一步を譲つていた。聖州ボツカッー以降で最も売上げの多いガソリン・スタンドの経営者でもあつた。パウリスタ線地方屈指の實業家として内外人間にクローズ・アップしていた。しかし、第二次世界大戦の勃発は氏をして不遇のどん底に叩きのめした。即ち、在聖アメリカ総領事館は氏をリスタ・ネグロの列に加え、氏の事業活動を一切拘束したのである。手足をもがれた蠻のように氏はその鬱憤のはけ口を酒に求めて毎日を過したし　テーブルに向つてビールを飲む、それが仕事であつた。コップをとる肘には酒タコが出来た。戦後再び事業を起し、州農務局委托棉種子採取農場を二百域（約五百町歩）責任経営し、毎年一万二千俵前後の棉種子を納入する一方、英国系石油会社シェーリの代理店を指定されて経営を始めた、戦前のスタンダードに代つたわけである。つまり米国人に掘り返えされた氏のスタンドは英国人によつて埋められたことになる。しかし、氏は今日事業の第一線より雄退し、ガソリン・スタンドは渡伯以来氏と苦柴を共にした實弟峰一氏に委せ、自らはサウーデ区の百六十六域の牧場経営を楽しみ、悠々自適の生活である。なお、事業の鬼といわれた氏であつたが、反面、公共事業に盡す点多かつた。中央区々長を何期にもわたつて務め、その人格はバストス人の誰からも慕われている。

子息は利夫、豊子、春江、美佐子、利美、久子、マリ子諸氏の七人、その他、利夫氏夫人及び氏夫妻の十人家族で団欒の一家である。

氏は義侠心に富み、その気質は親分的でさえある。氏に一度世話になった人々は、終生恩を忘れないと言うが、これなど、氏の誰をも差別つけぬ眞摯な思いやりが、かくさせたものであろう。また恩義に厚く義理堅い点など、一見、磊落に見える氏の細い心遣りが窺えるものである。人から頼まれゝば、いやとは言わぬが、飽くまでも正は正、邪は邪として容赦せぬ点、正義の人後藤氏の性格の高潔さを物語るものである。

若し、戦争というものが起らず、事業を縦横に伸展していたら、或はパウリスタ線の代表的人物として聖州奥地實業界に君臨したであろうと容易に想像し得る人である。戦争が転機となつて隠退を余儀なくされた氏の胸中に去来するものは誰も知ることは出来まい。

石橋 長児氏 (三重県南牟呂郡阿田和 町)

(写真)

氏は青年時代志を立てて東都遊学中、主として電気学を専攻したが、後に小石川区役所勤務、櫻田本郷の内田商会支配人等を歴任し、帰郷後は、運送業並びに電気事業請負を家業としたが、およそ青年時代よりの宿願たる政治家への夢はとげる由もなかった。氏が描いた次の夢は、海外雄飛であつた。その頃、既に令弟三雄氏は渡伯して居たので、心大いに動き、實弟の呼寄せによつて漸く希望を達することが出来た。一九三五年三月廿六日、アリゾ

ナ丸でサントス上陸、直ちにバストスへ乗込んだ。氏がバストスに到着した頃は、バストスの興隆期で、移住地は満植に近く、市街地も発展の一路を辿っている矢先であった。慧眼なる氏は、農具製造に着目して、直ちに石橋農具研究所を開設した。

当時棉花全盛であったバストスの、最も要求していたものは、完全な棉種子プランタ機であった。既販されていたものは、缺点多く、信賴出来なかつたので、これが完成を決意して、営々苦心の末、漸く完全播種機の製作に成功し「日の丸印」と命名して登録した。当時ブラ拓農業指導員中村誠氏は、名實共に逸品と折紙をつけて大いに推薦したので、ブラ拓商事部は、各地の支店にて販売せしめ、遂に遍く全伯棉作地方に販路を拡張して、日の丸印石橋農具研究所の名は、一躍クローズ・アップされるに至った。渡伯漸く数年にして此の大成功を見たのは、氏に恵まれた好運にも因った事であろうが、日夜改良に腐心して、自ら合格の印を捺さざれば発送しなかつた氏の、商工業的良心のかち得た賜物、即ち努力の結晶といった方が当っているであろう。

次に手を染めたのは、バストス発電所経営であった。五三年一月ウジナ・ジョルジ電気会社の配電完成に至る迄、三年間、あらゆる困難と戦って継続した。経営困難の原因は、施設老朽、度々の経営者が匙を投げた時、石橋氏は敢然として之に当り、莫大な損害を覚悟して、市街地から電燈を失うまいと死守した事は、世の褒貶はともあれ、よく隠忍自重した氏の頑張りによつたものである。

氏が中央区長に推されたのは、一九四五年末であるが、折柄終戦後の産業組合の不振、蚕糸業界の恐慌並びに思想混乱による世相陰悪と、人心とみにその據点を失って、徒らに右往左往するを

座視するに忍びず、同志と謀って、自治会の復活を策し、各区長を招集して連絡を密にして、人心の対立を解消せんと日夜心胆を碎いて、之を纏め、四六年以来その会長を勤め、現在の聯合日本人会の前身として活躍した。五二年、聯日会成るに及んで、その顧問に推され後進に途を譲った。

これより先、氏は一九四九年十一月、混乱拾収の為、推されてバストス産業組合長となり、三期難局を処理した、戦後三重県海外協会の復活を知事に進言して、その設立を見るや、伯国支部を結成して、支部長に任命され、或はバストス佛教会々長として信仰求道の先達となり、本願寺法主巡錫の際は私邸を供して歓迎陣に遣漏なかりしなど、水際立った幾多の実績は枚挙にいとまなき程である。

山中陽之助氏（大阪府豊能郡池田市西ノ口町）

六人兄弟の末子として出生。北陽商業を卒業すると、海外発展を志して、当時、単独の自由渡航の、唯一の開かれたる門、力行会に入った。その旁ら、東京外国語学校専修科ポルトガル語科に籍を置いた。力行会はキリスト教を奉じるので、氏もキリスト教徒となった。

志を得てブラジルに着いたのは二九年の冬で、氏は当時二十歳。アリアンサ移住地在住の石川安太郎氏の呼寄せ、という手続であつたので、同氏宅で十ヶ月ほど鋤を握った。しかし、農事は非常に辛かつたので、牧場経営を志した。そこで南大河州の島貫牧師を頼って行った。同牧師の紹介状をたずさえて、サン・フラン

シスコ地方へ赴いたが、言葉が全く通じなくて、備つてくれる者が
ない。タクワラという町に、所持金の続く間ホテル住いをし、無
くなったで何とか身の振り方をつけようと考えているうちに、同
地の豪商アオドマール・シュミッツ氏と知り合い、この人の夫人
はかつて訪日したことがあり、日本人に親しみを持っていたとこ
ろから、カネイロ町の同氏宅に厄介になった。同氏経営の店の材
木部で重労働しながら、夜間同氏について葡語を学び、かくて一
年あまりもすると、材木部の主任となり、数名の伯人を使うこと
になった。ついで三年間、商店部に勤めたのち、聖市へ帰った。

聖市で遠藤兄弟商会の外交員となること約一年。アリアンサ時
代の友人酒井氏に誘われて、バストス田中商店の会計として一ヶ
年を送る。ついで吉備商会で仲買に携わった。棉の売買の知識を
實地に深めたのは、この時代に於いてであつた。

一年して、ソロカバナ線ランシヤリア駅に出、友人酒井氏とバー
ル青空を共営した。盛業一年の後、吉備商会からカミニョンを分
けて貰い、一年間、運搬業を営んだ。

三六年、味野謹子氏の媒酌で樋浦文蔵氏次女貞子さんと結婚し、
町に新居を構えた。この年、ソロカバナ鉄道がバストスに出張
所を設け、氏は日本人部主任となった。後、岡本一次商会で仲買
を行い、若冠にしてかなりの利益を挙げた。

約三百コントの貸出しを行つたが、モンテ・アレグレの棉花不
作で回収不能に陥つたためこの商売に見切りをつけて、コレイ
ア・フランコ蚕種部主任として手腕を揮つた。町に工場を建設、
着々発展の道を辿ろうとしていたが、同商会は不幸にして破産の
止むなきに到つた。

偶々村崎バストス産組専務と相識るに及んで、同産組綿花部に

入り、今日に到っている。長年月に亘る棉仲買の経験がものを言い、棉花通として、全バストスに氏の右に出ずる者なく、産組更生の鍵は氏の手中にあり、氏に寄せられる今後への期待は少からざるものがある。

五一年から、中学校並びに家政学校の学務員に任じ、多忙の裡を活動しつづけている。趣味としてスポーツ、就中、野球を好み、バストス球界に貢献するところ多く、恩人の一人である。

夫人との間に一男一女あり。日出男君は聖市の高等学校に在学中で、陽子さんは中学に通っている。養女樋浦信江さんは、アグロス師範学校を五四年に卒業した。

奥 田 民 蔵氏 (鳥取県八頭郡大御門村)

郷里の農学校を卒業して居り、覇氣に富んだ氏には、日本は狭すぎた。

村人たちから大正の山田長政と言われ、若狭丸に便乗して伯国に渡航したのは大正七年七月、直ちにモヂアナ線サランジー駅ダ・セーラ耕地に就働した。次にゴヤス線ビラドール町附近で煙草栽培に腕を揮い、ソロカバナ線アシスに移って珈琲園を經營した。一九三一年、心血を注いで育てた珈琲樹が一夜の降霜に枯れ果てたのを見て、氏は翻然と覺るところがあつた。

「成功を急いではならぬ、先ず子供を立派に育てることだ」と当時教育施設の整備していたバストスに移り住み、今日に及んでいる。

バストスに於ける氏の活躍は捲土重來の意氣物淒く、牧畜業の草分けとして出發し、一時は二百五十アルケールの牧場に六百数十頭の牛群を有し、市街地に肉屋を經營し、又馬や騾馬を手広

く売買し、余勢を駆って、棉作に乗り出す等、その八面六臂の活動振りには世人を驚倒させたものであった。長男耕氏を歯科医に仕立て、事業のよき後継者たる次男稔氏を不慮の災難に失ってから、事業を縮少し、現在は、牛二百五十頭、百アルケールスを守り、時に各地の畜産試験場を見物したりして専門の牧畜研究に余生を捧げている。

趣味はスポーツ、内助の誉高き波子夫人と共に、氏の牧場内にバストス開発々群の地あるを以てそこに記念碑の建立を提唱しているが、氏の今日までの人生は、活動的事業家として實に波乱にとんだものがあり、今ようやく休息の域に達して、好日を迎えるに到っているのである。

奥田 耕 (サン・パウロ・ゴヤス線ピタンゲーラ市)

父民蔵氏が壮志を抱いて渡伯し、ようやく苦しい耕地生活を脱し、煙草栽培に腐心していた苦境時代に氏は生まれた。物心のつく頃は、父と共に各地を転々とし、バストスに一家が落着いてから十一才でグループ及び日本語学校に入学した。頭脳明哲にして資性篤實な氏は、父に勧められて、サン・パウロに遊学し、オズワルド、クルース中学校、同高等学部理科を経て、一九四七年に聖市官立総合大学歯科部を卒業し、歯科最高の学理技術を身につけた。

バストスを出てから十一年、すっかり都会生活が身についた氏としては、花の都大サン・パウロの中心に華々しく開業する心算で居たが、卒業の報告を兼ねて、久々に父母の住むバストスに帰省した。

そこに、涙を慈眼にたゞえて喜ぶ父母、特に老いたる母の姿を見ては、孝道に厚い氏として、再びそばを離れるに忍びず、バストス市街地、アデマール・デ・バーロス街に歯科医院を開業して今日にいたっている。

氏は学生時代に中央学術会より状遣されてアルゼンチン、ウルガイ、パラグワイの国々の歯科医学を視察し又、国際歯科医学会議にも出席したこともある学研で、将来は大都会に出て伯国歯科医学の粹を究めることを念願としている。趣味はスポーツ、野球の名二塁手として名あり又バストス體育協会長に就任し、スポーツの向上発展に盡粹している。

一九五五年五月バストス市前田孝一氏四女清子さんと結婚、新しい人生をスタートした。

池田 正雄氏（愛知県名古屋市西区塩町）

西区七町小学校を卒業した池田氏は、家業の刺繍貿易商は手伝わず、当時華やかな仕事として、飛行士などよりも人気のあった西洋料理人にあこがれ、割烹の研究のため、名古屋市第一流の西洋料理店に弟子入りした。一人前の腕前に達すると数年間、日本全国を渡り歩いて、各地の料理を研究した後、名古屋市下前津町及び正木町の両繁華街に「風月軒」と稱する料理店を経営していたが、氏の實弟三人がブラジル渡航を企て、誰の諫止もきゝ入れないので、遂に母君は氏を監督として渡航を許した。氏は實弟達が落着くのを兄とゞけ二年後には帰国のつもりで、大正十五年九月マニラ丸ではるばると海を渡りブラジルに向かった。最初にドラデンセ線ノーバウロツパ驛カーロスマガリヨンス耕地に就働

した。農業者でない氏は耕主の諒解を得て出聖したが、料理人として立つにはポ語が出来ないので困って居る折、伊藤陽三氏が野村農場の支配人となって北パラナに行く時、農場の料理人となって、共にカンバラに移った。後、ホテル・カンバラをカンバラ市で経営し、順調を喜んだのも束の間、一九三〇年と一九三二年の革命に遭遇し、政府軍に食費を踏み倒され、遂に行き詰ってしまった。当時バストスは直来移民をむかえて景気溢れる開拓期にあった。氏はバストスこそ理想の地と聞いて移住し、食堂を経営した。三四年であつた。一年後にはホテルを開業した。そして一九四五年福田氏経営のマカロン製造所を買い取り、日本式干うどんとバストス銘産干ソバ（姫ゆりそうめん）を売出し、全伯に宣伝したので、麵製業を独占することが出来た。一方ホテル池田は、益々繁昌して、現在では、バストスを中心として、ソロカバナ、パウリスタ、パラナ方面にいたるまでバンケツチを一手に引受けて営業するにいたっている。

氏は料理人として全伯第一流であり、コロニアの名士と交友の広いことでも有名である。又、戦後、臣聯の特攻隊がバストスを徘徊した頃、日本人が皆尻ごみしている中に氏は躍り出て、警察に協力し、日系学生や伯人青年を六十人程集めて自警団を組織し、不祥事の発生を未然に防いだ。この功績は特筆に価するもので、膽斗の如く、勇敢なる池田氏にしてはじめて行うことの出来た事と言ふべきである。

氏は大正十五年、静岡県三島市出身の現夫人よしの氏と結婚し、瑞穂、伯子、優、の二男二女を挙げたが、瑞穂氏は市議PSP支部長、伯子氏も市議、優氏は医大生、それぞれ優秀な子女に恵まれている。

氏は、現在、ホテル、製麺所を経営する外に麻州に四千城の土地を購入し、次期発展の計画を練って居り、夫人は夜詞緒と号して短歌をよくし、バストス歌会の中心をなす、淑徳高き賢夫人として知られている。

単に料理人として優れた腕前を振うのみではなく、その豊富な體驗と智識に物を言わせた広い社交性は、移住地を訪れたものよき相談相手ともなり、今やバストスにはなくてはならぬ存在となっている。かくてこそ、開業当時十六軒の同業者があつたに拘らず、以来圧倒的な人気を勝ち得て、第二を継ぐもののない第一流ホテルとして、淋れ行くバストスにあつて、その玄関口を守っている。また、氏のこうした気塊は、バストス更生問題と眞剣に取組ませ、これの対策に情熱を傾けさせている。市街地の発展のために現在の水力電氣を導入した蔭の人として、氏の功績は大きい。趣味は料理に徹底し、百キロ余の巨軀を以って飛び歩く氏の活動力は驚嘆に値する。

柳 浦 宗 一氏 （島根県松江市灘町）

「千石船が田の間を通る」といわれた中海と、波おだやかに島根半島の山影をうつす宍道湖を、大橋川が結んでいる。英国の文豪ラフカヂオ・ハーン（小泉八雲）がこよなく愛した日本の古典的な城下町、水郷松江の商家の長男として、一八九二年、氏は呱呱の声をあげた。

島根県立商業学校を半ばにして退くと、父君を助けて漆器販売業に従事した。やがて大正元年兵で松江歩兵第六十三聯隊に入隊し、二年の兵役を無事終えて除隊後も、以前と同じ家業に精励した。一九一六年、現夫人サワさんと松江で結婚し、翌年、生活の

大きな転換を目ざして、上京した。

商業学校に在学中、ある年の弁論大会に出席した氏は、若き日の情熱をこめて「海外移住と我が民族」と題する長広舌を振って注目浴びたことがある。十六、七歳の頃から、海外移住の心しきりに湧いて、何とかしてアメリカに渡りたいと願念するようになった。伯父に商船の機関長をしている人があり、その人の海外から寄せる通信は、ますます氏の海外渡航熱をあふるものであった。二十五歳の時、夫人を松江に置いたまゝ、单身再び上京した。氏のような活動的な、行動的な性格の人に、夕となれば霧の湖面に街の灯のうるむ松江の、微温的な雰囲気は生理に合わなかったのかも知れない。大正の東京は、海のない巨きな港であった。その港を縦横に駆け廻るタキシーの運転手となった。かくしてハンドルを握ること十六年間、そして麻布に円タク業を独立して始めたのは震災の翌年のことである。震災では、湯島天神近くの家を焼かれ、池袋の友人の宅に逃げこんだ苦い思い出がある。円タク業独立四年目には四台の自動車持ちとなった。全く腕一本から叩き上げたものであった。

しかし、捨て去り得ないのは、海外への夢であった。ついに意を決して、一九三二年東京は櫻らんまんの春、ラプラタ丸で日本を後にした。三年したら十万円ためて帰るなどとは氏は言わなかった。

ブラジルは暮しよいところだ。そこえ行くからには、永住の考え、二度と日本へ帰らない。こうはつきり宣言されて驚いたのは親類、知己だった。

移住組合員となってバストス移住地グロリア二区に入植した。四五年に、夫妻だけで町に出、パールとソルベタリアを開業した。

それから三年後には、家族全部で、バールの経営に当ることになった。

一時カミニヨンで、運送業をやったこともある。五二年三月から、息子さんが、オニブス・ポイントで鮮魚店を開いて新鮮な魚をバストスの人たちに供給して喜ばれている。

眞面目な性格の事業のやり方は、徹底して合理的である。どこまでも堅實な歩みである。眞面目さが買われて学務員に推されたこともある。少年時代の弁論の雄も、いまは不言實行の士であり、もっぱら、趣味の読書の好日を送っている。

サワ夫人との間に、三男二女あり、長男龍太郎君、次男省三君、三男禮藏君はいずれも結婚し、長女寿栄子さんはリノポリス、次女文子さんは聖市にそれぞれ嫁して、円満な家庭の主婦となっている。

しかし、現在までのところ、孫が一人しかない。というのが、柳浦老夫妻の、唯一のもの足りなさかもしれない。

伊藤 栄 登氏 (山口県阿武郡徳佐村)

幼にして母をうしない青年となつて父をうしない、三人の弟妹を擁して、世の荒波とたゝかい、独立独歩、今日門前市をなす雑貨店の主となった氏の歩んだ道は、不撓不屈の努力と熱情を傾けての修業道であつた。

栄登氏は、小学校を卒業と同時に、父母に従い三人の弟妹と共に日本をまにら丸で船出し、大正十五年九月にサントスに上陸した。

伊藤一家は、たゞちにモジアナ線サンジョアキン駅フォルタレーザ耕地に配耕され三ヶ年を過した。その間に馴れぬ気候と風土の

為め母をうしなった。後ノロエステ線ブリグイ駅アレグレ植民地に移り、七ヶ年を働いたが、その間に父を逝かせてしまった。残った四人の兄妹は、何時までも悲んでいることは出来ないので、互に励まし合いながら、バストス移住地の隣接地モンテイロ植民地在住の同郷の人板垣伊八氏をたよって、氏の耕地で一ヶ年間の歩合棉作をした。そして次の年、バストスに入植アルト区木内篤氏耕地に又一ヶ年の歩合作をし、ようやく余裕も出来たので、同区に十域の土地を買い、こゝに独立農として十三年を送った。これまでの氏が歩んだ道は荊の道であつたが、こうして独立農として、ほっと一息ついた時、弟妹はそれぞれ年頃になつていて、良縁あれば嫁ぎ又分家して行くべき時期をむかえていた。何時までも弟妹を束縛するか、それとも彼等それぐの運命を開いてやるかの岐路に立って、氏は幾度か考えた。その結果、愛する弟妹を生かす為、農場経営を捨てて、氏は商業見習いの為め吉井商店の店員となつた。二ヶ年を経て、商売のこつも掴んだので、パン屋を開業した。何事によらず、やる以上は貫徹せずば止まぬという氏一流の努力によつて店は大いに繁昌し、四年後の一九五三年には更に一段の飛躍をとげ、パン屋は義弟にゆずり、實弟光男氏と共同で雜貨店を開業し、市内一流店として盛業をつづけるに到つた。

氏は一九四〇年二十七才の時、アルト区菊地正氏の次女妙子さんと結婚して現在十三才を頭に千枝野、貞子、登、久子、義雄、勇、の三男三女のよき父となり、幸福な家庭に納まつている。

バストスに入植してから約二十年、農業者時代には、養蚕、養鶏共に先駆者としてバストス興隆の基を開き、バンデイランテス産組出張所創立に一役買つて大いに奔走した。又二十才前後で一家の大黒柱として立ち、弟妹をそれぞれ立派に育て上げたことは、

今もバストスの美談として語られている。

斯うした奮闘努力の半生を送った氏には、釣以外には趣味らしいものは無いが、或は精神を集中して働くことが、そのまゝ趣味といえるかも知れない。そこに輝かしい氏の人生が誕生したのである。

しかし、氏は盛業を極める雑貨店を一九五四年七月に前プロダレツソ区在の三次武雄氏に譲つて、次期の発展を期すべく目下休養のひとゝきを過している。バストスに入植以来、既に一十年、約半生をバストスとゝもに過した氏が描く今後の人生展開構想は、期待できるものがある、と一般の注目の的となっている。

氏はかつて少年時代、満洲にあつた伯父を訪ね、警察官吏になることを奨められたが、勉強を嫌つて、父母と共に南米の曠野に投じたゞけに事務的な面を性格に有たぬが、それだけに不撓不屈、何事も貫徹せずんば止まね努力力行型の人である。明治四十五年生れとあるから今年満四十三歳、事業上の人生航路の転換期にあつて、まさに油ののつた氏の今後には日重あらんことを願うのは、筆者のみでないだろう。

三野 善一氏 (香川県綾歌郡松山村)

(写真)

藤次郎氏の一人息子として生まれ、家業の製塩業に従事していたが、父藤次郎氏は進歩的な人で、早くより海外移住を企てゝ居り、ブラジルの将来に目をつけて氏が十八才の時一家をあげて渡伯した。昭和五年、河内丸に乗りこみ、四月サントスに上陸して、ノロエステ線カフェランジャ駅カンバラ耕地に一先ず落着いた。

その当時、学校、病院その他文化施設の完備した日本人村バストスの名は全伯に響き渡っていたので、二農年を過すと、憧れのバストスに移転した。最初グロリア二区に入植し、一年契約を終えてボンフィン区に土地を買い、一九四一年まで、主として棉作に従事した。その後、父母も年老い労力も少く、農業も無理になったので、市街地に出、製菓業をはじめて、今日に至った。明朗活達な人柄が人に親しまれ、信頼されて、事業は順調な発展振りを見せている。

一九四一年にグロリア区古川誠三氏次女澄子さんと結婚し、和美、善臣、紀子、東美、鈴子、五人の子供を持ち、和氣靄万々たる家庭の父として、教育に心を打ち込んでいる。

氏の趣味は、スポーツと読書であるが、特にスポーツは氏にとつては趣味の域にあるものではなく、生活の基調を為し、氏の人生を規定するものと言ってよい位である。それもその筈、往年ソロ線長距離界の三羽鳥の一人三野といえ小田兄弟と共に全伯的に有名である。戦前初期の日伯対抗陸上大会、全伯邦人陸上大会には連続出場して、それぞれ入賞し、その健脚を謳われたものである。地元に於ては、バストス陸上競技の育ての親と言われ、陸上王国バストスを築き全伯に覇を唱えたのも、氏の指導のたまものである。

現在は陸上界を隠退しているが、バストス連合青年団陸上部相談役、又ビラチニンクラブ陸上部地方代表として重きをなし、後進の指導についてはよき助言者となり、陸上競技界の為めなら、何を措いても馳せつける熱意を持っている。その現われとして、戦後、邦人陸上競技の復活に奔走し、全伯大会の開催を促進し、又インテリオール大会を開催して、サンパウロ及び各線の陸上選手

団を招致して、復活の第一声を挙げるなど、今日の邦人陸上選技の隆昌を来した蔭には、涙ぐましい氏の努力があつた事を銘記すべきである。戦後かつて、ベテラーノ陸上大会が催された時、久々に出場し、千五百米に優勝し、親衆一同に三野未だ健在なりの感を深くさせたが、氏の最高記録は、一万米に三十六分十九秒、五千米に十六分三十八秒がある。スパイクと共に四半世紀を過ぎた氏が、かつて日本マラソン界の雄、坂出選手と同郷であることも、亦うべなるかなと言いたいではないか。

スポーツで鍛えたその強靱な性格と熱情を以て、今後大いにバストスのために貢献して頂き度いものである。

しかし氏は、いわゆる「丑年生れの性格」が示す通り、素直である反面、強情な人で、「何事でも貫徹するまでやる。人に迷惑をかけない。自分のことは自分で処理する。」といった意志の人でもある。しかして資性、温厚篤實、人望家でもある。バストス連合日本人会の理事として公職に携わり、単にスポーツ人の三野ではなく人間三野はバストスに知らぬものはない。

宮崎 将 義氏

（北海道札幌市）

氏が両親兄弟の六人家族で着伯したのは一九三二年、護憲革命の年である。この時氏は小学校を卒えない、十二歳の少年であつた。パラナ州フイゲイラ駅バルボーザ耕地に二年を送り、バストス移住地カスカッタ区の棉作契約に入植、三六年、同区に土地を購入して棉作と牧畜を始めた。牧畜は同区の先覚である。同地に在ること十年、市街地に出て令兄の経営する写真館に入り共同経営。四八年に独立した。翌年、良縁あつてカスカッタ区在渡部喜

助氏五女マリアさんと結婚した。

令兄のクリチーバに転ずるや、後を引受けて家業に励んだ。両親に仕えてよく孝養を盡くしたが、五三年、前後して両親の逝去を見送った。

氏が最も好むのは芸術写真の由であるが、商売となれば、趣味の域外に置いて、いわゆる商業写真で行く他はない。しかし、その作がバンデイレンテス写真展などに入賞するところから見れば、単なる「写真屋」さんの腕やセンスではない。宜なるかな熱心な俳句愛好家で、十七歳の折、『移り行く人を恋ひつゝ耕せる』の処女佳作を物している。俳号を北眠といふ、實兄扶双、怪城両氏の刺戟にもよるが、ホトトギスの常連である。夫人は未婚時代渡部マリアの俳名で同好者間に知られ、今は宮崎マリアで活躍。正にオシドリ俳人である。夫妻の間に清、春美の一男一女あり、趣味に生きる円満なる一家である。また、氏一家を中心にバストス俳句界が肇まつたことも特筆すべきである。即ち、戦前、ブラ拓が文化運動を起した際、念腹師匠が氏の門を叩き、やがて氏たちによつてカスカッタ俳句会が発足したのがバストス句会の起りである。

板垣 寿 勢 雄氏（聖州ソロカバナ線サンマノエル市出身）

父伊八氏は山口県阿武都徳佐村出身で大正十年の渡伯である。氏は、父一家がサンマノエルの耕地生活の時代に、その五男として生まれ、幼時、父母と共にバストスに入植し、グルツポと同時に日語高等科を卒業、十七歳の時、ノロ線カフェランジャ市の薬局に勤務し、爾来独学で薬物学を勉強し、調剤師の検定試験に合

格した。

六年の後、バストスに帰り、四ヶ年西川薬局に勤めてルツセリア市の薬局に入り、益々研鑽を重ねて、再びバストスに帰植、一九五一年一月独立して薬局を開業した。

結婚は一九五二年でフアルツーラ区の池田広近氏二女悦子さんをめとり、二女の父となり、平和そのものゝ家庭を築いている。七年前に父を亡くしたが、實兄はバストスの草分けとして健在であり、氏の経営するウニオン薬局は、二名の局員を擁し、なお、来客の應接に忙殺される程の繁昌振りを示している。これも温厚篤實な人柄と、親切丁寧な営業に世人の信頼が集ったものと思われる。

当年三十一歳、稀に見る人格者としてバストス人は氏の将来に大きな期待を寄せている。

若い活動家に似ず、別に趣味といったものはないが、氏の日常を見ていると、或は精神を集中して働くことが、そのまゝ趣味といえるかも知れない。

氏はいう「バストスの将来に何らかの貢献をしたい。」と。この言を信じるのは、筆者ばかりではないだろう。

橋 本 光 義氏 （山梨県南都留郡盛里村）

徳川三代將軍の御意見番、大久保彦左衛門は茶臼山の初陣以来、殿の馬前に戦場を往来すること三百余度、と講談本に書かれている。百戦練磨の古つわものであると共に正義と信じたことは相手を問わず、どこまでも主張する。非と見れば直ちに捨てて自己の損失も面目もかえりみない。豪氣を愛し、高潔を尊ぶ、直情にして即戦即決をよろこぶ、そこに又自ら軽妙な諧謔の加わるところ

に、人を畏怖せしめながら一面に限りない親しみを覚えさせた原因があるのであろう。本論の主人公橋本光義氏は、バストス人の御意見番、大久保彦左衛門に擬せられ、氏の警声を恐れながらも人々は、心底より氏に親愛し、尊重しているとの事である。しかし、昔大江戸表に名を轟かせた彦左は頑固一徹にして、時代の推移に暗く、世をすねた狷介陋入の観なきにもあらずであつたが、現代バストスの彦左こと橋本氏は、頭脳明敏にして世情に明かく、進歩的な知識人たるの点に於て、大いに異なるを強調しなければならぬ。

氏の生家は、蚕産業を古くより営んで居り幼時は蚕と起居を共にし、蚕の中に生まれて蚕と共に育つたといつても過言ではなく、事蚕に關しての知識と経験は、氏と肩を並べる者の稀なるも、いわれあることと言うべきである。十五歳の時より、長野県、松本市の蚕種製造所に勤め、傍ら、商業学校夜間部の検定試験に合格し、続いて蚕業学校検定試験に合格して、蚕業技手の免状を獲得した。十五年間を一心に、實地と学理の研究をつづけて郷里に帰り、大月町に独力蚕種製造所を經營して、橋本優良蚕種の名を挙げたし 昭和十三年九月一家をあげて渡伯し、直ちにバストスに入植した。グローリア二区に土地を買い、棉作と同時に、桑園を仕立て、養蚕をはじめた。その頃のブラジル養蚕業は、まだ幼稚なものであつて、桑の品質も悪く栽培法も粗笨を極め、従つて蚕糸も、高級なものとは言えなかつた。

氏が渡伯の動機は、人口のみ多くて、蝸牛角上の争いに終始している、日本の社会事情に嫌悪を感じ、子孫の将来を築く為め、南米の大陸に大農場建設を思い立ち、前途に洋々たる希望を抱いたのであつた。しかし伯国の農業事情は、未だ原始の域を多く出ず、

棉、雑作に懸命の努力を注いだが、労のみ多くして功の少いことに、少なからず前途の不安を覚えた。氏がもし、あり来りの農業者であつたならば、転耕を策するところであらうが、氏の家族は養蚕業に秀れた技能を持っていたので、桑樹を改良し、高度の養蚕技術をもつて、棉作と同時に養蚕に力を分け、着々と生活を設計し内容を充實して行くことが出来た。

氏の養蚕技術の普及により、バストス地方の養蚕は年を追うて盛大して来た。それまではブラ拓が蚕種の配給に當っていたが、それだけでは需要を満たすを得なくなつたので、上田氏が蚕種の製造を計画し、橋本氏の、協力を頼んだ。

一九四二年、橋本氏は、日本に於て約二十年間にわたり、練磨した蚕種製造の技術を以て上田氏の事業に協力した。しかし同年、バストス養蚕組合が創立を見、その蚕種製造部主任として招聘された。約一ケ年の後、同所を辞して、コレイア・フランコ商会経営の蚕種製造部に移り、二年間に亘つて、伝統に輝く日本の技術を遺憾なく發揮して絶讃を博したが、商会破産の爲め、退職のやむなきにいたつた。

しかし、氏の優秀なる技能を惜しむ者多く、しきりに再起をすめられ、一九四六年、氏は、生涯を、蚕種製造に捧げ、日本人の特殊技能たる養蚕業の普及を計り、伯国の産業に新生面を開こうと決意した。そこで、同年、上田氏の廃工場を借り受け、独立独歩、製造に當つた。しかし、この工場は規模も小さく不完全であつて、氏は腕を撫して又脾肉の嘆を洩していた。二年後に、全設備の完備したバストス養蚕組合の蚕種製造所が手に入つたので、氏は喜び勇んで同所に移つた。斯くして、今日まで、全バストスはもとより各地に橋本蚕種を売りひろめ、その優秀さを全伯に誇つ

て来ている。

橋本蚕種は、今日年産四百キロ、工場就働者は年平均四十名、全伯的に配給網をめぐらして、尚、発展の一途を辿っているが、何が斯くも顕著なる成功をもたらしたのであろうか。

他国の養蚕業は、第二次大戦と共に好況に入った。糸価は年々高騰して行き、養蚕家は驚異的な数字を示して増加して行つた。バストスもこの好景気の波にのり一時は養蚕の黄金時代を謳歌したのであつた。その時代に在つて、尚蚕種場の録々たる給料に甘んじている氏を見て、百人が百人「惜しいな、独立し拾え、今こそ、立上る時だ」と勧めたが、氏は頑としてきかず、黙々と働きつづけていった。これ彦左の本領である。しかし、氏は単なる彦左ではない。氏の胸中には、既に方寸の計画があつたのである。

この養蚕景気は異様である。戦争が一端終局を告げる時は、株価の暴落は必至である。その大暴落、大恐慌の時こそ、自分の立ち上る時だ、その時こそ平和産業養蚕の旗幟を押し立て、着實に伸展を企てるべき時だ、と氏は睨んで、ひそかに時の至るを待つたのであつた。そして終戦と同時に、株価暴落のドン底より他人の放棄した工場を買い、他人の止めたその日から養蚕をはじめたのであつた。

一端底をついた養蚕業は、終戦の日を遠ざかるに従つて漸次、再興して来た。そのとき氏は聖州蚕稼業協会の創立を叫び、創立連動に東奔西走し、遂にこの難事業を成功せしめた。これ彦左と言われるゆえんの一つである。しかし氏は単なる彦左ではない。聖州の廢農園百五十万域を桑園と化せば、全世界の絹糸需要を満たすことが出来る。伯国の氣候風土は養蚕に最適のものである。この地に、日本の高級技術を有つ養蚕移民を導入する時は日本の人

口調節に資し、合わせて伯国産業に貢献すること又甚大なるものがある。その為には、先ず基礎工事として、各蚕業関係事業の組織化こそ緊要事である、との見解に立つて蚕練業協会を創立したのであった。

氏の家族は芳枝夫人と、子女、輝敏、幸子、一三、洋子、弘道、仁徳の六人で、長男輝敏氏は、聖州蚕業協会の理事、バストス連合青年団の最高幹部の要職にあり、家業の外交に敏腕を揮って居り、長女幸子さんは、女工員監督となつて家業を助け、一家協力して、事業の進展に努め、愛と光に満ちた家庭を営みつゝある。バストス経済の救い主と仰がれ、その彦左的存在をいよいよ親しまれつゝある氏の健在を祈る。

氏は、また、蚕種改良に専心するところから戦後の日本の蚕種事業の視察を思い立ち、同時に先祖の墓参を兼ね一九五四年、訪日の途に上った。そして日本全国の蚕種業の行き方をつぶさに視察、優良蚕種の輸入の道を開いて四ヶ月後に帰伯、爾来。ブラジル養蚕界にあつて革命的な存在として橋本蚕種の真価を発揮している。

氏の趣味は、書道、園芸等多岐にわたるが、とくに書道にかけては全伯に肩を並べるものゝない達筆を揮う。また、漢詩も詠めば芸術し写真も撮る。その非凡さは、何事に於ても高く評価されているのである。これは氏の事業に対すると同様、初志貫徹、飽くなき闘魂の或る表現の一つであると見られている。

古 田 義 松氏

(山口県吉敷都阿知須町)

一八九八年、商家の長男として生れた。土地の高等小学校を卒

えると、家業の小間物店を手伝って、平穏な日々を送った。十九歳、それは、人を駆って一気に希望の地平線へ向かわせる年齢と見える。氏は單身、フィリッピンへ渡った。ミンダナオ島、ダバオでマニラ麻栽培に従事し、麻糸加工工場を経営して、使用人数十名を擁するまでの盛業を見たこともある。

一九二二年、日本へ帰って、故郷の町で、松月堂という菓子店を開業し、一年後よしの夫人と結婚した。一度海外生活を味った者には内地の生活はどんなに無事安穩でも、それに安居、満足して居れなくなり勝ちである。何かしら、居心地の悪さ、落ちつかないさを感じるものである。フィリッピンの、かの南方の灼熱の太陽の下を恋うて、再び渡航するつもりであつたが、両親の同意は得難かつた。

たまたま練習艦隊に加わって、廻航中であつた令弟が、独立百年祭を祝賀中のブラジルに寄港し、サントトス、サン・パウロ方面を散見して非常に好感をもち、感激をこめた通信を家郷に寄せた。氏の関心は、フィリッピンからやがて南米ブラジルに移って行った。

一九二九年にブラジルに着くと、早速モジアナ線リベイロン・プレート駅奥の珈琲耕地に配耕された。有名なモジアナの石山に二年間、鋤をふるつた。フィリッピンで覚えたスペイン語が役立つて、通譯を兼ね、無事コロノ生活を終った。

そうしている間に、子女の教育というものが、大きな課題となつて来た。是非とも、日本語教育の出来る土地に住みたい、との考えから、バストス移住地へ転ずることに決した。そうした設備が比較的充實していると聞いたからである。同移住地のファルツーラ区第十一、十二、十三号地を求めて入植した。三二年のこ

とであつた。

それから四年間、農事に精励し、農産品評会に出品毎に入賞する、といった篤農ぶりを示した。

この間に、毎期区長を務めつゞけ、会計、産組評議員等、大いに区政に盡くすところがあつた。

よしの夫人の健康が許したならば、或はそのまま鋤をとり続けたかも知れないが、夫人の希望もあつて、一家は、バストス町へ出て商業に転ずることとなつた。四三年七月、ボール兼ソルベツテ店を開業した。二年ほど、中央区の副区長に任じた。

活動的、探究的な氏は、寸時も倦むことなく、新しい生活に入るや、日本での製菓の技術に一層の工夫を凝らして、美味求真の努力を傾けつゝある。その得意の羊糞は、コチア産業組合二十五年度に二等賞を獲得し、「つるの卵」と茶羊糞は、バストス名物として、ひろく世人の嗜好に投じている。

氏はバイオリンと釣に趣味を有し、日本ではバイオリンを教授したこともあるという。釣の方は、持舟まであつた、というから一通りの太公望ではなかつたのであろう。なかなかの世話好きで、すでに三十組の仲人をつとめている。

四七年には、子息正夫氏の結始式と共に、両親、氏夫妻の金、銀婚式を一緒に挙げて、お目出度の三重奏を華やかに奏し納めた。正夫氏は四年前から写真館を開業しているが、五一年度の聖市の国際写真展に出品した二点が共に人選したほどの腕達者であり、バストス二十五周年記念写真帖を完成した。すでに二人の愛児のパパである。正夫氏の令妹紀代子さんは、バストス在住の西徹氏に嫁して、これまた二児のよきママである。

古川 誠 三氏（和歌山県東牟婁郡下里町）

（写真）



古川 誠 三氏
（和歌山縣東牟婁郡下里町）

氏はレモンの古川として、バストスばかりでなく、全ソロカバナ、全パウリスタを通じて、第一人者である。三百二十株を所有し、サンパウロ市に年間三百箱を送り、近郷近在の需要に應じている。

氏は新宮中学を卒業して、第一高等学校に入学したが事情あつて途中で退学した。一端郷里に帰っていたが、大阪市に出、進盈簿記学校に入り、卒業と同時に北海道の小樽市の匿名組合「新宮商行」に勤め天塩郡遠別村の同商会製材所の会計として赴任した。二年後に辞職して香川県高松市の鉄道省神戸管理局高松出張所内高松駅の駅員となった。これを振出しとして、琴平駅、善通寺駅、観音寺駅、高松駅等に勤務した。その後、神戸織道管理局教習所に学び後東京市中央教習所の英語科を卒業した。そして大阪府新舞鶴駅の貨物係りを勤め、神戸駅に移った。鉄道関係の仕事にも

飽きたので辞職し、請われるまゝに、元の新宮商行に再び入社した。この頃材木界に好況がおとずれ、会社が富山県にパルプ工場を設けた時会計主任として赴任したり、又關東大震災の時は社を代表して東京に出張して大いに敏腕を揮ったが、遂に病に罷り辞職して郷里に帰って静養した。病氣回復後、和歌山市扇ノ芝で手工品商を始めたが、不馴れの為事業不振を招き、遂に店をたゝんで渡伯を決意した。

昭和四年、移住組合に加入して、第一回先発隊として、バストスに入植、珈琲、棉などを経て、ユーカリ植林、柑橘栽培などを行い現在は養鶏とりモン園とを経営している。

家族は二男四女、長男亘君は家業を継ぎ次男誠君はミランテ・デ・パラナ。パネマ市で薬局を経営し、二人の女子は結婚し、十七人の孫のよき祖父として慕われ、戦前バストス産組時代の理事及び幹事として活躍し、又区長を二回もつとめて、公事に奔走したが現在は閑地に在って、農を樂しんでいる。バストス草分けの一人として、ユーカリ植林、柑橘栽培、緑肥栽培の先駆を為し、愛土の精神に徹した生活を打ち樹てた人として尊敬されている。

氏は趣味を読書に持ち、文字通り晴耕雨読の好日を過しているが、その読書の対照となるものは近代文学及び時事問題、記録に關した書物で、絶えずフレッシュな感覚を養うことを怠らない。また、氏の事業に対する活動力の旺盛なことは壯者を凌ぐものがあり、この面でも絶えず新規軸を生むに余念がない。「老兵は死なず」とはインテリ移民古川氏の今日の健闘振りに代えてそのまゝ当てはまる言葉である。

坂口 房吉氏（和歌山県日高郡野口村）



現在、バストスに於いて、果樹栽培の権威とも言われる氏は、果樹の先駆者として、栗は独占、柿は草分けの一人である。一九三四年、栗二百二十本を植え、果樹園を計画してより、柿及び栗の耗培の開祖として現在に到っている。氏は趣味を上手に生活に適用した研究家肌の人として、その生き方を身を以て示している。

氏は一八八三年生まれ、高等小学卒業後大工職として建築請負にその器用な腕を振った。長じて日露戦争に出征し満州の広野に転戦、奉天大会戦に加わり、勲八等白色鋼葉章を授與さるゝ。これより海外発展に希望を持ち、北米行を計画したが實現成らず、子孫に土地を残し度い意味から伯国の大陸に志を移し、移住組合創立を待つて勇躍渡伯したのであった。時に四十九歳。坂東喜八郎氏一家とバストスはグローリア第一区に入植、以来二十五年一歩も外に出なかつた。当時より珈琲栽培を始め、以来今日まで継続している氏は、又バストス指の珈琲栽培家として知られている。

その間、棉作、米作、その他雑作をするも副業的に經營されたもので氏の生活の裏付は何と言っても珈琲と果樹であろう。現在養鶏を営むがこれも副業的なもので、主として鶏糞の利用による地力回復にあるという。所有土地二十域、鶏一千羽、珈琲六千本でその他先述の果樹園を經營し、精農家として知られる。

篠崎長五郎氏（群馬県多野郡入野村）



農家の長男として生まれ、系統立った学歴もない氏が辛苦勉勵の結果、二十五歳の時には既に土木建築の請負師として大きな事業に成功していた。村では青年団長、道路建設の責任者として、県庁に出入し、多くの高官と胸を開いて語ったことを見ても如何に氏が、敏腕であつたかがうかがえる。たまたま県庁に於いて、日伯の為替計算による伯国生糸の相場表を見、その有利性に胸をおどらせるとともに伯国に於ける景氣を思い描いて建築業を起すべく希望に燃えて渡伯したのであつた、先ず移住組合に加入し、バストス移住地、プログレツソ区に入植、直ちに養蚕業に着手したが、株価暴落により棉作に転向、隣接地モンテイロ区に二十域を求めて、多数の人を使って棉作に成功し、四一年に帰国を思い立つまでにいたつたが太平洋の風雲急を告げ船便の都合で中止を余儀なくされた。そこでその資金を以つてバンデイルンテス耕地に百二十域を拓き、伯人コロノ十八家族を使用して棉作を事業化した。これが失敗に終つた。こうして二年後、畑中耕地で養蚕に従い、もとの所有地に戻つて六域の桑園を開いたが、不況のために放棄、四六年グローリア第一区に入植、蔬菜及び果樹を栽培、徐々に養蚕の準備をするに到つた。今後は養蚕を行ないたい希望で、こゝに青年期の希望が遂げられたわけである。

現在、桑園入城（二十町歩）土地十域を所有。

若 野 耕一氏

(和歌山県日高都和田村)



同県和田村で、四期十二年の長きに亘って村長を勤め、徳望高かった父君徳三郎氏の長男として農家に生まれた。

父君は県庁に出入りしていた関係から、県の移住組合が出来る、その主事と懇意の間柄となり、従って、邦人の海外進出といった話題も自ら多かった。折柄、日本は深刻な不況時であり、いつしか父母自ら、志を海外に伸べたい意欲に駆られたのであろう、土地を祖母君に残して渡伯を決意した。但し、十年計画ということであった。

当時、中学に通っていた長男耕一氏は、別にこれといった希望があったわけではなく、両親に伴われて、弟妹と共に渡伯した。

直ちに現地区に、第一回の入植者として来り、開拓の斧を揮ったのであった。まず一千五百本の珈琲樹を植えたが、一年後にはこれを千本に増した。一域の雑作をも行った。

しかし、そこへ襲って来たのは、大霜である。打撃は大きかった。止むなく、契約者に渡して、ブログレソソ区に在ったブラ拓製糖工場を、歩合で管理経営することとなった。日本で製糖業に関係のあった父君は、一家を挙げて同区に移り、四年間、全力を傾けて之が経営に当たったが、結果は、失敗だった。土地が高燥であつたため乾燥が甚しく、それに税金問題もあつて、とうてい、事

業は経営不可能であつた。

もとのグローリア第一区に、一家は帰つた。珈琲園は契約者に任かせてあつたはずであるが、その契約者は無謀にも立去り、せつかく苦心して造りあげてあつた珈琲園は、すでに荒廢の極に達していた。回復の見込みも立ち難かつた。二年間、棉作を試みた後、養蚕を始めた。全バストスで養蚕のトップを切つたのは同区であり、同区では若野氏をもつて嚆矢とする。従つて全バストス最初の養蚕家であるわけである。

二年後には産業組合の蚕種生産を始めて、二年間これに従事した。しかし、養蚕不況来と共に産組のこの面の活動中止となり、自然蚕種生産は放棄の止むなきに至つた。

戦後になつて、養鶏を開始した。これも、養蚕と共に、同区のトップを切つた人である。養鶏は現在に及び、成鶏一千六百羽を飼育している。

三十域の所有土地中、森林は一域半、馬鈴薯や玉蜀黍等七域の栽培を主として、雑作を行っている。

日支事變の勃発当時、出征した氏の令弟と再会したいとの母堂の願いから、日本へ帰国せしめた。父君また帰国予定のところ、太平洋戦の戦火は容易に老夫妻を再会せしめず、五一年に到つてようやく帰国した。かくて両親は今や故山にあつて令弟と共に健在である。

モンテイロ区在住永野十三氏次女静香さんと結婚したのは四〇年で、今二男四女に恵まれている。

父君と共に製糖工場経営に苦闘し、青春時代をつぶさなる辛酸のうちに送つた氏に、両親の在る故郷を訪ねたい希望は勿論あるが、バストスに対する愛著は常ならず深いものがある。バストス

の更生は、養鶏に依らなければならぬと鶏糞を利用した、小面積で集約的、多角的農業経営をもつと普及したい――これが、その尊い體驗に基いた氏の意見である。

山根 敬二氏

(香川県小豆郡大部村)

(写真)

仲買商であつた父君の事業が、不幸にして嗟跌したため、高等小学校にも上れなかつた氏は、丸亀歩兵第十二聯隊に入営するまで、これと言つた定職もなく、つぶさに人生の辛酸を味わねばならなかつた。尤も、その間には、父君の事業の盛り返した時期もあつたが。

上等兵で除隊した氏は、小寺豊三郎という庭師の許で、その支配人格で十年の間勤め、庭師の技術を習得してから、ようやく独立した。天然の石を掘り出したり、仲買から買い求めたりして、これを造園用に売り込むという商売を、十人ほどの者を使って手広く営んだ。得意先は岡山、兵庫、紀州路にまで拡張されていた。一方、村の青年団長や、在郷軍人分会長などを務めて、よく盡くした。やがて第一次歐洲大戰後の不況に打撃を蒙り、之と敢闘したが、遂に抗し得ず、一九二九年、渡伯した。

ノロエステ線ブリグイ駅マリオ耕地に一年いて、同駅コレゴ・フエイジョン耕地に更に一年を送つた。この間に、長女を同郷出身の人に嫁がしめた。

同線リンス駅ウニオン耕地に、歩合で珈琲を親培すること六年に及んだが、珈琲不況に遭遇した。当時コツコ一袋八ミルレース。

ポンペイア駅ミランダ耕地に一年のコロノ生活を送り、後ミランダ植民地に十八域の土地を購入して、ここに十八年に亘って生活した。

米、棉の他に雑作を試みたのであった。

バストス移住地に入植したのは、一九五二年のことであらた。この地には、四男立大氏が、バストス廃鶏会社の専務として活躍していたからである。ちょうど家族の手も廻りかね、農業の方にも積極的な動きがとれない矢先であったので、シャカフ区に二十域を求めて、棉作一年の後、これを売却し、現在のグローリア区に転じた。

現在五千羽の成鶏を擁して養鶏に専念して居り、次年度には一万羽に増したい計画である。地力の消耗甚しい古地に、鶏糞を入れて肥沃にし、これに珈琲樹を植付けて行く、という方針のとのである。とあれ、グロリア区の一角に、グランジャ山根の偉容は、見逃し得ぬ大きな存在である。

夫人は、遺憾ながら健康に恵まれず、この数年間病床にあり、氏の心からの看護の下に本復の日を待っている。

夫妻の間には現在五男一女があるが、不幸にも三人の愛児を失っている。三男三郎氏が両親に孝養を盡くすと共に、家業に精励し、四男立太氏は前記の如くバストス廃鶏会社専務として、その社運益金隆盛に赴きつゝあるようである。五男康秀氏は聖市西谷商会に勤務中であるが、近く独立して鶏卵販売に携るとのこと。六男重徳君は、バストス廃鶏会社の聖市デポジトの主任の席にある。末子の精六君は、ブラジル航空隊をめたく除隊の後、飛行機のメカニコとして優秀の腕を揮っていた。たゞ一人の女子であるふみさんは、前に聖市サン・パウロ女学院の裁縫教師をやつて

いたが、松本良平氏と結婚した。同氏は聖市でデポジットを経営している。

長唄、端唄ののどのよき、料理の腕の冴えなどでも既に知られている氏は、今や十五人の愛孫の、よきお祖父様として好日を送っている。

岩田喜代次氏（宮崎県都城市蔵原町）

（写真）

父君は県の土木技手であつた。明治が大正に改元されたた一九一二年、当時十七歳であつた氏は、單身、夢を抱いて台湾に渡つた。総督府の殖産課に勤務したが、やがて、台滞製糖会社彭（一語―解読不可）農場に転じた。二三年、郷里都城市に戻るや、養鶏を始めた。当時、郷里で養鶏をやっている者は僅かに七家族、養鶏と言つても八十羽内外の副業的な小規模のものに過ぎなかった。三十米の鶏舎二棟を建てると八百羽の名古屋コーチンを入れて、養鶏家「喜笑園」と命名した。一流の養鶏家として県下に知られ、二年のうちに一千二百羽に増加した。孵化場を設けて初生雛の配給まで行つたが、広い海外で大陸的農業経営をこころみてみたい―との野心に燃え、二五年渡伯した。

ノロエステ線リンス駅ウニオン植民地で珈琲栽培を九年続け、三四年、土地をパ線エリクランジア駅日東植民地に求め、他の七家族と共に、草分けとして入植した。七年間、マンジオカ製粉工場を経営、また棉作に従事した。四二年、バルパに移り、四七年までコチア産青連、ポンペイア産組の傍系組織として「カーザ・バルパ」の名稱で、鶏卵取扱い、養鶏拡張を行つた。六年間の日

東植民地在住時代は、同植民地創設者として万年会長を勤め、ペンペイア産組の幹事、理事として活躍し、産青連連動のリーダーとして青年層の誘掖指導に任じた。氏の指導振りは、単なる机上の理想論ではなく、理論と實際とを躬を以て明示した。

産組、産青連の自然消滅は、時代の流れとして之を見送り、子弟の教育上の見地から、また退植時代に逆流して入植する亦面白しと、バストス移住地に入り養鶏を始めた。四七年のことであった。

二千羽を飼育、健闘していたところ、偶々産組中央会はバストスに孵化場建設案を樹て、特に氏を聘して種鶏場の建設、経営を一任した。関係こそ中央会にもっているが、鶏に関するかぎり、境界はない、というのが氏の気持である。だから、養鶏に關する如何なる相談にもどこの誰であろうと喜んで應じ、自分からの仕事も家族に任せつきりで、アリアンサ、マリリア、オウリニヨス等々、広範圍に亘って活躍している。殆んど席の温まる暇もない、と言つてよい。

また養鶏にとどまらず、農村更生運動に情熱を傾け、農村問題に真剣に取り組んでいる。バストスの更生は、農業学校の建設を措いて他になし、焦眉の急だ、と氏は力説する。

現在、成鶏二千五百羽を飼育中であるが、四千羽までに伸ばしたい考えであり、また、ニュー・ハンプシア種の優秀鶏を米国から輸入している。中央会としては、適材適処の人物を得、氏に期待するところは大きい。

氏は同区に入植して僅か二年を出でぬが、選ばれて、区長を勤めている。趣味は読書、スポーツであるが本業である養鶏も氏にとって、何にも代え難い趣味といえるかも知れない。これさえ

やって居れば楽しい、と氏は言う。

長男喜一郎君は四百米短距離のパウリスタ線代表で、七年間連続して全伯陸競大会に出場して居り、五一年の同大会では、二位を獲得した。

桑原久治郎氏

(和歌山県有田郡糸我村)

(写真)

氏は一九〇一年の生まれ。農業学校を卒えると、自作農たる家業にいそしんだ。父君は氏が十六才の折に他界し、長兄である竹次郎氏が村長を務めていた近衛歩兵第四聯隊に二年間軍務に服した二十九才の時、バストス移住地グローリア第一区に第一の入植者として渡伯した。入植するや、直ちに珈琲一万七千本を植栽した。襲来した不況と霜害に見切りをつけて半数を伐り払ったが、その後、隣接地から入った火のために荒廃し、それでも数年前までは六千五百本あまり残っていた。しかし、之も霜で枯れ果てたので遂に全部伐り払った。

珈琲の不振時代に棉作に転じ、戦時中もこれ続け、戦後、不況期に入るころから養蚕を始めた。これは三年程で止めて、蚕室を利用して養鶏を開始した。傍ら、蔬菜栽培を行い、五二年からは西瓜の栽培を試み始めた。四家族で西瓜出荷組合を結成し、サン・パウロ市への販路を開拓した。

現在所有土地面積は二十域。四百羽の鶏を飼い、バストスとしては珍らしく自家消費量だけの飯米の自給を行っている。三城半に玉蜀黍を栽培している。捨て難い夢があるものと見え、五二年

からは珈琲二千八百本を植えて、その成育を樂しみとしている三城の果樹園もある。

水 本 彰氏 (岡山県上房那豊野村)

近代の青年層の中堅思想として、「奮闘的生活」と言う青年の在り方を示めず倫理を、直接実践し範を示めした人である。日本随一の精農家である山崎延吉氏の著書に啓発され、三千時間労働説に感激、超人的な働き振りで人を驚かした人である。

例えば馬耕など普通四日を費す面積を二日半で済ませ、三千五百羽の鶏を一人で飼ったことがある。これは養鶏界の記録となった。

町に出るのも労働時間を惜しんで夜間、店を叩き起して話題になった人である。

高等小学二年で退き、ノロエステ線ウニオン植民地に父を扶け、いきなり百姓として働き初めたのが十五歳の時。三二年に教育第一主義の父は、一家を挙げてバストスに入植、現グロリア第一区に十域を求めて珈琲一万本植付けをなしたが、暴落時に遭い、七年樹を惜し気なく代採し、棉作に転換。一時は十域を栽培し好況に乗る。戦時は養蚕で当り、大幅な事業を継続した。

四三年に結婚独立し養蚕を専業すること二年、不況と共に養鶏に転向し今日に至る。

令兄や父君が聖市に出た後を継いで、土地を増し、現在は四十五域、牧場九域、牛十頭、鶏四千八百羽、水道点燈完備し、夕刻はさながら小さな町の観を呈する。村の文化農園で産卵率の高い

ことも、バンデイランテス産組でも最優秀出荷者である。これを見ても、氏がいかに努力家であるかが窺われよう。

長 橋 智氏 (愛媛県越智郡乃万村)

(写真)

第一回全伯中堅青年養成講習会に参加し、帰植後は、産青連運動を展開し、オール・バストス青年の代表者として、脚光を浴びた時代があった。智氏と語る前に、氏の厳父長四郎氏について、筆者は少しく述べなければならぬ。

長橋家は乃万村の舊家であり、長四郎氏は日露戦役に出征し、奥大将麾下に赫々たる動功をたて、金鵄章を拝授した。村役場に勤めて累進し、村長となり、十年間を村政にたずさわったが、その間都会議員となり、農会、産組等に關係し、その秀れた政治的手腕は近隣に聞えた公人であった。

たまたま、合名酒醬油醸造会社をおこしその経営に当ったが、事業は失敗に帰し、破産一步手前でようやく踏み止まり、四十九才で一家をまとめ、渡伯したのであった。「公職には一切たずさわらぬ」と友人知己に誓ってバストスに入植したのであったが、氏の人格と秀れた政治的手腕を知られて衆に推され、区長、産組幹事、理事、自治会副会長等に歴任し、戦時中、時局に應じて産組を整備し、増々隆盛に導きつゝあった時、産組幹事として現職のまま、享年六十一才にして逝去した。移住地を挙げて、その急逝を惜んだのであった。

智氏は四男一女五人兄妹の長男に生まれ、中学校中退にして父

母と共に渡伯、ブログレッツソ区の草分けとして入植し今日に至っている。珈琲を植え、雑作に励んだが、通常な新産業としての養忠に着服し、カンピーナスより蚕種を入れ、バストス最初の養蚕家となった。戦時の好況時代に好成績を収めたが、父長四郎氏の関係から産組に総べて出荷していたので産組の崩壊による傷手は大きく、無一文の状態に陥った。

然し氏はどん底よりふるいたち養鶏業を導入して区の先駆を為し、牧畜に力を注いで家運を挽回した。

現在土地三十域、内二十八域を牧場として牛百頭を飼っている。産青連運動華やかな時代には全バストスの代表的青年と目され、バストス興隆の為大いに闘ったものであった。

産組の没落後は同業を糾合して鶏卵組合を創立し、産組再建の促進運動として、活発な動きを見せた。五ヶ年間これを継続した後、ジュケリー産組の傘下に合體し、一九五一年時川氏の後を受けて出張所々長に就任してバストス産業発展の一翼を担い、奮闘している。

父子二代に亘る、公人として知られて居り、不言實行型の良識人として、バストスの代表的な存在をなしている。

家庭には夫人と共に二男五女あり、實弟は州立工科大学在学中である。

趣味として、芸術写真があり、休日など写真機をぶら下げて、よき構図もがなと、歩き廻るを好む。二十数年の研鑽によって得た技倆は素人ばなれしたもので、各地の写真展に出品して、しばしば入賞している。

将来のバストスに無くてはならぬ人であり多くが期待されている。

人生は七転八起というが、これは処世の心得不であつて、八度目には必ず起きるということを予言したものでなければ、一度転んだら七度は転ぶものだというわけでもない。人生は一度も転ばぬことこそ願わしく、転んでも悲観するにはあたらない。土田氏は生涯に二度も、スツテンスツテンの丸裸になったが、勇を鼓してふるい立ち、今日、土地二十域を所有し、牧畜に手を染め又鶏三千五百羽を飼う文化農園主となっている。これは、如何に氏が根気よく又、研究心の強い人であるかを物語るものである。氏は自作農上田家三男四女七人兄妹の長男に生まれ、高等小学校卒業後、家業に従事していたが、海外に大きなあこがれを抱いていた。父太一氏も三人の息子を持ち、その将来を考えて、新天地の開拓に賛成していたので氏の兵役満期を待ち、昭和八年に一家人で渡伯した。モジアナ線セラナ駅、サンジョン耕地のコロノとなったが、丁度珈琲不況時に当り、丸で只働き同様のうき目を見た。その上、一家の柱たる父太一氏の死去により、泣きの涙で一農年を終え、借金まで背負うありさまであつた。次に、ソロ線ランシヤリア駅コンチネンタル耕地に棉作契約者として入耕し、二年間死物狂いで棉作に従事した。頃は棉作の好況期で、十数セントスの純益をあげたが不良耕主は、一文も支払つて呉れず、おまけに耕地が棉会社の抵当にはいつていた為、追立てを喰らい、二年間奮闘の代償として、丸裸にされて耕地を去らねばならなかった。

伯人社会でさんざんな日にあつたので、人情を等しくする邦人植民地に入り度く、それに独立農となり得る條件に恵まれている

バストスを指して移転して来た。昭和十二年、アルト区に十域を求めて入植し四ヶ年を、堅實に働き通した。綿作全盛期に当り好調をつづけ、昭和十六年、プログレッソ区の現在居住の地二十域を購入して移り住んだ。棉作から養蚕に転じ、五十数コントスの繭の代金が一文も支払って貰えず、又々スツテンテンの丸裸になってしまった。普通の者であれば、この邊で腰が折れてしまう所であるが、元来ねぼり強く、意志盛んな氏は齒をくいしばって、三度奮起して、養鶏に転じ、雑作をも行ない、年々鶏の羽数を殖やして、現在養鶏を専業としている。点燈、水道の施設完備した鶏舎を持ち、バンディランテ産組の採種卵場に指定され、区内切つての事業家、精農努力家として知られている。

苦しい耕地生活を経て今日に至る間に、バストス産組のドン底時代に幹事をつとめて苦勞し、区長も二期をつとめ、現在は、バンディランテス産組バストス出張所の相談役として主きを為している。

戦時には村の平和を維持する為、敬老会などを催し、区民の慰安に努めたのも氏の主導による。若くして家長となり父代りとなつて妹二人を嫁がせ、老齡の母に仕え、せい夫人との間に三人の男子をもうけ、實弟芳人氏を合わせてよき家庭を営んでいる。尚芳人氏は区青年団のリーダーとして活躍している模範青年である。

長男功君は中学在学中で、他の子息も勉強に励んでいる。これは読書三昧を趣味とする氏の教育に対する熱情を受け纏いだ姿といえよう。資性温厚篤實、明るいインテリ型の人である。事業は勿論、すべてに物事は慎重を期する人で、一たん着手したら如何なる難題も努力で押し開くねぼり強い性格の持主でもある。努力實行の人上田氏の今後に期待したい。

緒方 嘉作氏（山口県大津郡菱海相）

（写真）

高等小学二年の時父を亡くし、家業を手伝っていたが、友人に招かれて、日韓合併の年朝鮮の馬山に渡り、材木問屋に勤めた。一年後母に呼び戻され帰郷したが、金儲けのよい朝鮮に渡りたいと思っても兄が許さず、農業を手伝っていた。或る日義弟が、伯国移民の成功者板垣伊八氏の手記を読み、渡伯をすゝめたので、もとく海外に志を抱く氏は、すぐに決心し、夫婦と子供三人、そこへ義弟を加えて家族を構成し、大正十三年阿波丸で渡航した。

ソロカバナ線アルフレードグエー駅、同名耕地にコロノ二年をつとめた。耕主が非道な行をしたので、氏が先頭に立って罷業を行い問題を有利に解決した。後同線ビラジュー駅フアルツーラ地方バルベールリス耕地に四年を過したが子供の教育不便を感じ、邦人植民地平野に移り二年のコロノ生活を終えて同地に十域の地を求め独立農となった。しかし、一家みなマレイタに罷り事業を進めることが出来ないので、バストスの親戚を頼り、昭和九年健康地バストスに入植した。最初は腰かけ程度の気持で、移住し現在のブログレツソ区に二十域を求めて棉作をはじめた。棉全盛期に事業を展げ、蚕も副業として飼い戦後はいち早く、雑作主體にかえり、養鶏に着手して今日に至っている。

首藤 静馬氏（大分県大分郡判田村）

農家の長男に生まれ、十七才で父を失ってより家業を継いだが

兵役を終えてから、立身出世を念願し、台湾新竹町の警察署に勤めた、署長の覚えめでたく、署長と共に花蓮港署に転勤、潘匪討伐に参加して殊勳を樹て勳八等瑞寶章を賜わった。同地に五年を勤め恩給下賜と共に辞して郷里に帰り、大野製糸会社の庶務課に入り、庶務課長に昇り、副支配人格となったが、事情あつて退き、東京に出てオリエンタル写真工業会社に勤務し、三年後には同社大阪支店長になったが、辞して帰郷した。狭い日本にも住み飽きたので、昭和四年一家五人で、ハワイ丸に乗って渡伯した。

ソロ線ボルト・ジョンアルフレード駅パウダーリヨ耕地を経てカシヨエーラ耕地に移り、半独立農として経済的にも恵まれていたが、長女をバストスに縁づけていた為、昭和十年現プログレツソ区に十五域を求めて入植した。

棉作を大きくやり又不況期にはいち早く落花生栽培にかわり、養蚕をはじめ、今日に至っている。今日では事業は一人息子新一君の手にゆだね、氏は閑地にあつて信仰の生活をつづけている。

現在土地十五域、桑園三域、繭年産二千キロ、牧場二域、他は借地に出している。

藤林 延蔵氏（兵庫県明石邦林崎村）

（写真）

父元七氏は、農家の次男に生まれ、高等小学校を終えて明石市に出、和洋紙商店に十年間つとめた。その後単身上京して、酒屋を開業していた従兄の許に身を寄せて、商売を見習い、四年後に独立して、目黒の不動前に酒屋を開業した。機敏で人当りのよいところから、事業は次第に盛大し、市場内にも支店を設け旭日昇

天の有様であつたが、関東大震災の為に大被害を蒙つた。しかし、そんな事でへこたれる程弱気な氏ではなく、同地に酒屋を再開し、大森区東調布に移転しもとの如く支店も出して、事業を進めていったが、不況の嵐はなかなか収まらず、行き詰りを感じていた時、たまたまブラジルから帰国した知人に逢い、ブラジルの事情を聞くに及んで、大いに心動き、人生の再出発を發願した。その頃、知人の中に渡伯を希望しているが、渡航條件にそう家族構成が出来ず困っていた者があつたので、これに妹の名義を興え、家族の中に入れ、一家八人家族で、新天地の開拓を目指して渡伯した。

現在の家長延蔵氏は、七人兄弟の長男で、渡伯の時は、府立商業の二年生であつたが、中途退学して、父に従つた。

モジアナ線ガウラ駅サンタテレーザ耕地でコロノ生活二ヶ年を過し、同様フランク駅附近で十域の借地をして米作をした。不作の土に市場価格が暴落した為、日本から持つて来た金まで失つてしまい、大失敗を喫した。昭和十年、バストスに移り、ブログレツソ区中村氏の土地に珈琲の三年契約者として入植し、後、現在の地区十域を購入して、独立農となつた。

最初は棉作に従事したが、戦時には養蚕を専業とした。養蚕が行きつまつてからは、雑作に転じ、一九四九年より養鶏をやり、副業として雑作をも続けて来た。綿の好況期に隣接地十域を買いたし、現在土地二十一域、鶏三千羽、雑作五域、伯人契約者一家族を入れている。

尚、現在事業の拡張中で、鶏舎はどしどし増築して居り、養鶏設備も改良を加え躍進をつづけている。

米作に失敗した外は、順調に事業を進めた一家で、家族皆健康

に恵まれ、精農家であつて、バストス農産品評会に用品する鶏卵は毎年入賞し、コチア産組バストス組張所管内での鶏卵出荷率では、二ヶ年続けて優勝、抜群の成績を収め、賞賛を博している。一九五〇年リノポリス在住及川氏長女民子さんと結婚し、現在一男一女あり、弟妹三人も、それぞれ成人して、氏のよりよき協力者であり、両親は尚健在で、自家労力の揃った発刺たる一家である。

氏は現在副区長、農友会長をつとめ、区の中堅、将来性豊かな人材として、多くが期待されている。

趣味は読書、晴耕雨読して、愛するバストスの将来に思念を凝らし、雄大な事業計画を樹てゝいる。

(寓真は父君元七氏夫妻)

三次 武 雄氏

(熊本県玉名郡小田村)

何不自由の無い農家の次男として生まれたが、十四才の時父の死に会い又次の年母を亡くし、悲運のドン底につき落された。十六才の時、義兄夫婦の渡伯に際し、家族構成の為に一緒に雲海丸に乗り、大正二年に渡伯した。在伯四十一年、初期移民として言語に絶する労苦を嘗めた。最初モジアナ線ジョアキンフィルミーノ駅サンタリツタ耕地に入つたが、熱病の為二年目に姉が斃れた。義兄は再婚して他に移つたが、氏一人踏み止まり、同地の薬局に勤めた。一年後、同線ドミンゴスヴィエーラ駅フィゲイラ耕地の監督兼珈琲レセブールとなり、七年間つとめ次いで隣接ガタパラ耕地に移つたが、この年義兄の居た東京植民地で結婚し、同植

民地に移って借地農となった。八年間を汲々として励んだが、マレイタなどに雇り経済的に恵まれることもなく過ぎた。

しかし子供は既に五人を数え、教育期をむかえたので、昭和七年バストスに移り、現在のプログレッツソ区に十域を求めて入植した。棉作をし、養蚕に転じ、多少のゆとりを得たが、産組の倒壊により、経済的に大きな傷手を受けた。戦後は雑作、次いで養鶏に移り、一九五四年地区を整理してバストス町に出、雑貨食糧品店を開業、盛業を極めつゝ今日に及んでいる。

氏は舊移民として葡語に堪能な為、よく区民の対外的な面倒を見て敬慕され又、副区長或は区長を数回つとめ、戦時には産組評議員として大いに活躍した。そして農業者時代には品評会で鶏卵最優秀賞に入選フォーリヤ・ダ・マニヤン紙社盃を獲得した。長男武信君はバストス産組事務所の中心的存在であり、次男静雄君は聖市フオントーラ製薬会社の会計士となり、三男益雄君が氏の手許で商業にある。

吉 岡 菟氏

(三重県鈴鹿郡井田川村)

(写真)

農家の次男に生まれ、二十五才で結婚と同時に分家し、自作農の傍ら村役場に勤めていた。当時はブラジル移民の宣伝の盛んな時で、村長や村会議員の一人が渡伯を決意したので、氏も渡伯を思い立ち他の一家族と共に四家族、移民組合に加入しバストス開拓先発隊として、昭和三年ラプラタ丸で渡航した。同県の知人北村政吉氏が支配人をしていたポツカツ駅モンテセルバーゼン耕

地で、ブラジル生活に入り開拓のくんれんを受け、翌年バストス第一回入植者として現プログレッソ区に入植し、草分けとして奮闘したり 珈琲を植えたが霜害で大部分を伐り、棉作に移ったが、家族が小さく悪戦苦闘しなければならなかった。戦時中は養蚕で、産組に預金出来る処まで漕ぎつけ、帰国の夢を縋しんでいたが、その産組が倒壊し、一文無しの丸裸にさせられてしまった。

その後、養鶏に転じ、伐り残した珈琲千五百本を守りつづけて今日に至っている。

現在所有地十域、珈琲樹は一千五百本で区唯一の所有者、鶏五百羽を管理し抜群の成績をあげ模範的農家として知られている。生来、純正真面目の人で、精農家であると共に、副区長を数回つとめて区の基礎をきずき、公職勤続者として表彰され又、産組評議員などをつとめ、公共の為に盡くした。

遠藤 常治氏 (福島県安達郡荒井村)

(写真)

在伯邦人の中には十年一稼ぎ、一かく千金、錦衣帰郷を夢見て、渡伯した者も多い。

この夢を實現させた者も無くはないが、夢破れて、遺憾ながら永住を決心した人もあり、又自由でおおらかなブラジルの大地に魅せられて、自ら夢を放棄し、進んで永住を決意した人も多数ある。遠藤氏は、後者にぞくし、現在土地八十域を所有し、伯人契約者五家族を入れ、コパイーバ河畔に馬鈴薯を作り、落花生を作って居る。牧場二十域に牛五十頭を飼育し養蚕契約者一家族を入れて

養蚕をしている。その他自家労力を以て八百羽の鶏を飼い、まさに、四角八面あらゆる方面に手をのばし、いずれも好成績をあげて、村の篤農家として、うやまわれている。

既に帰国の思いは念頭を去っているが、十年一頑張り、ちよいと十万円を握って帰るつもりであった。

氏は、安積郡山ノ井村の舊家椎根家の次男に生まれ、村の模範青年と言われていたが、十九才の時望まれて、伯母の家の婿養子となり遠藤家を継いだ。

遠藤家も三町歩の自作農であったが、養蚕の成績が思わしくなく、少しくさつていた頃、海興がブエノスアイレス丸の処女航海に当って、東北地方に移民勧誘に来た。氏は県庁で、勧誘員の明穂氏より伯国事情を開き、大いに心動き、一稼ぎするつもりで、子供三人を養父母に預けて渡伯した。

モジアナ線サンタエレザ駅、サンタデルフィーナ耕地に配耕されたが、東北人八家族が一緒であり、耕主も温良であって、大いに優遇された。二年の後、耕地の支配人であった三井氏に誘われ、昭和六年、バストスに移り、現在のカスカッタ区に十域の土地を購入して入植した。折も折棉作の好況時代で、日本の養家に送金を続け、錦衣帰郷を唯一の楽しみに事業を拡げ、五年目には更に隣接地二十域を買いたし、契約者三家族を入れ、区内切つての大農となった。斯うして土地を買い事業も好調、ブラジルの事情も解って来ると、何時しか、土地に愛着も出来て、今更一切を売って帰国するのも心残りとなり、遂に帰国を断念し、残して来た次男を呼び寄せ、はつきりと永住を決意し、子孫将来の為にゆるぎの無い地盤を作る事が考えられて来た。

そこで、更に事業計画を建て直し、今度はいよく本腰で取り

掛った。戦争となり、養蚕景気に乗り、我世の春というとき、不幸昭和十八年に夫人が脳溢血で他界した。一家の悲嘆は深く、精神的な打撃は大きかった。この傷手に逢って事業をやゝ縮少し、養蚕を専業としたが、間もなく戦後の不況時に入り、邦人社会は思想的混乱に陥った。しかし、氏は、時代の移りを早く悟り、農業者の天職とする、愛土勤労を唱え、自ら黙々として實行し、養蚕より、馬鈴薯に主作を移し、更に近隣退植者から土地を買い、農業の機械化を計り、牧畜を取り入れ、今日の大を為したのであった。

氏は現在樂隱居の身分であるが、長男伊左エ門氏、次男安正氏それぞれ結婚して、相共に事業の経営に当り、円満な家庭を築いている。又在日本の二人の娘も、夫々結婚し、孫の数も在伯在日合わせて現在は十二人、区長として、区政につくしつゝ安らかな好日を過している。

田中 権吉氏

(北海道常呂郡訓子府村)

(写真)

一八八一年、高知県長岡郡の産。小学校を出るや十七歳で、両親と姉とをたずさえて「北門の警備」の名で当時の若者の血を沸かせていた北海道の屯田兵として、北見屯田に入隊した。農事、兵事二つながら兼ねて、北海道を護り、開拓に当るのである。

いやはての地、北見の荒涼たる原野の開発は、それ自體すでに一つの戦闘と稱し得べき苦辛であつたとも言えよう。旭川歩兵第二十九聯隊を満期除隊するや、直ちに、召集を受け、一九〇四年

十二月、旅順陥落の翌日上陸し、遼東半島、奉天会戦に参加し、動八等の上等兵として凱旋した。

一九〇六年、訓子府村原野の開発に先発隊としてつぶさに辛酸を嘗め、その間、村政にあずかり、村会議員を二期つとめ、神社、教養所（学校）の建造を行い、教育方面に多大の功績をあげた。鉄道線の村内誘致に努力した。いわば同村の「育ての親」であったのである。やがて雑貨店を経営したが、生来の政治好きに小売店向かず、失敗に終った。

開拓の野望というよりは、不毛の土地の肥沃なる大地化の喜びというべきものであるかも知れぬ―その望みは氏を驅つて北海道からブラジルへと大洋を越えしめた。サントスに着いたのは一九二四年のことである。長女を日本に残して一家五人。

配耕されたのはアララクワラ線トリバ駅カンブイ耕地だった。在ること二年にしてドウラデンセ線ノーヴァ・ヨウロソバ駅イタケーラ耕地に転じ、ここにまた二年を送った。他のコロノが棉作好況の声を聞いて、契約も何も放つて棉作地帯へ夜逃げなどするのを見ながら、一獲千金の夢に前後を忘れて妄動してはならぬ、と頑張った。北見屯田兵の国士的人生觀が許さなかったのである。次の活動への予備的小休止というわけで、ノロエステ線カフェラシニア町で、悠々半年を送った。

やがて、時到着て一九二九年、時の支配人畑中氏に懇望されてバストス移住地に入った。折しも在伯者の入植許否の論争盛んな頃で、直来移民受入れ施設整備に当った。同年八月になって在伯者の入植が許され、第一回の申込みを行い、現カスカッタ区に十域を求めて、その開拓に当った。まず一万三千本の珈琲を栽培し、棉も初年度から試みた。珈琲は、区では最後まで頑張ってみたが、

不況時の経済困難に抗し得ず、ついに荒廃せしめた。珈琲を維持するだけの地力のなかったのも一因と言える。棉作の外、柑橘類を一ころ二域・も植えたことがある。

屯田兵の少年時代から開発の理想に燃え、北海道とブラジルの広野にその夢を成した氏も今や七十五歳、一九三八年に糟糠の夫人に先立たれてからは家業を三男三郎氏に譲って子息の家や親戚めぐりなどをして、變隠居の平穏な日々を送っている。処かまわず、相手かまわず、信ずるところを吐くいわゆる「一言居士」であるが、清廉潔白、一抹の私心もない氏は、副区長、組長を歴任して、依然、村の世話役としてなくてはならぬ存在である。バストス開発期に於けるこの山中氏一家の活躍は、バストス开拓史上、忘じ難い足跡を印しているのである。

上山 明彦氏（和歌山県有田那鳥屋城村）

（写真）

どんなに瞞されていようと、この地を選んだのが運命というものである。仮令農作不適の地と唱えられても、日本の瘦地よりはよい。ホウレン草の芽立ちにもそれは知ることが出来る。運命に従えよ。とサントス丸で同期入植した十四家族が不適當論を唱えて一度に退植した時も、踏み止って、闘って来た氏である。その時共に踏み止った七家族中現在も残留しているのは氏一家族だけで、カスカッタ区草分けの功労者と讃えられている。

氏の家は郷里では舊家として知られて居り父は二十五年間も村長を務め人望を一身に集めた人であった。氏も又青年団長などを

務め、一家皆村の世話役であり、公共の為に費す時間と金銭が多く、一家の経済も父の代には余程苦しくなってきた。氏が兵隊として和歌山歩兵第十一聯隊に入営していた時、たまたま、野田良治著「アマゾンに行く」を読み大いに感動し、隊友ともしばしばブラジル行きを語り合った。除隊後、家人に計ったところ、兄は賛成してくれたが、両親の反対にあい、しばらく躊躇していたが、海外への志念やみがたく、父母を説き伏せ、結婚すると同時に、知人一人を加えて家族を構成し南米航路に新婚の夢を托して渡伯した。直ちにカスカッタ区に地区を購入して、珈琲六千本を植えたが瘦地であった為、實のりも少く価格も安く、夫婦二人の糊口もしのぎかねるありさまであった。そこで、入植三年目から養蚕をはじめた。これはカスカッタ最初の養蚕であった。

戦時には繭価が高騰して、好況時代をむかえたが、終戦と共に不景気が襲来し、新組合が崩壊し窮乏のドン底に追い落された。加えて、北米在住の實兄よりの通信によって、時局に対する認識も早かった為、強硬派との感情的な行き違いもあって、永住の地と定めたバストスを離れる決心を固めた。リオ、聖市近郊視察の旅をつづけたが、人情紙よりも薄い世間の様相に接し、バストスの良さを身にしみて感じた。旅から帰って、バストスへの認識を一層深くし、一九四七年、区民にさきがけて養鶏をはじめ、地力の回復、経済の立て直しの為に捲土重来の勢を以て励んだ。農業経営の合理化、鶏糞による土地の肥沃化、牧畜に新生面開拓等々、現在農地四十域、牧場二十域、鶏二千羽、等を経営して、余裕しゃくしゃくと百姓道を押し進めている。

家族は四男一女、長男、次男は家業に、三男はジュケリー産組に勤務、家族皆、思慮深く物事には慎重な態度で対処する純粹の

農業者として近隣の信用厚く、氏は、現在副区長をつとめ、公益の為に盡力している。

村を離れようとして村を見なおした氏こそ、村の柱石というべき存在であろう。

氏はまた働くこと以外には趣味がないといわれるが、土を愛し、農に親しみ、すべて精神を集中して自然と闘う姿を見ると、氏の言う趣味という言葉がわかる。それほど土に人生を打ち込んだ精農人である。そこに輝かしい氏の生活が毎日繰り展げられているのである。農業移民としてその真価を十二分に発揮した上山氏こそ移民史上に隠れた功労者ではあるまいか。

渡部 喜助氏 (愛媛県周桑郡丹原町)

(写真)

渡部家は、バストスの成功者であると共に趣味の一家である。喜助氏は、郷里でも美声を以って知られ、浄瑠璃、端唄、長唄、トキワズなど、玄人はだしの人。老来いよ老来いよ渋味を加えて、その修業の程をうかがうことが出来る。そしてきわ子夫人は、賢夫人として知られているが俳句にすぐれ、又長男の夫人チエさんも短歌俳句を作り、二女の夫も北眠と号して俳人である。今日盛大を極めているバストス俳句は此の渡部一家から発足した。念腹宗匠がはじめてバストスに来遊した時も、最初に渡部家を訪れたのであったり一族一門事業的には日の出の盛を示し、しかも皆趣味に遊ぶ心のゆとりを持っている。これこそ本当の樂しき哉人生、というべきである。

喜助氏は、農家の次男に生まれたが青年時代に農を嫌い、呉市や門司市で働き又京都大阪に遊んだが、表面華やかな都会生活も入り込んでみると、味気ない節もあったので、再び郷里に帰り、結婚して独立農となった。しかし、狭い日本の農家の将来を考えると、安閑としても居られないので、土地の広大と気候の良いブラジルに注目し、長男の十三才になるのを待って、三十八才の時、夫婦と子供五人で渡伯した。

モジアナ線バスソーラ駅フランシスコ・シミツテ耕地に配耕された。此所で、子供二人をうしない一人を儲けて、同線モーロアグードス駅タピラツバ耕地に移った。この頃は子供も年少で労働力が少い為非常な苦労を嘗めた。しかし、やつとコロノの足を洗い、バストスに移ることが出来た。氏はゴヤス州の開発を希望したが、夫人は学齢期に在る子供達のことを考え日語教育機關の完備したバストス移住を熱望した。ゴヤス行きには、海興の坂本氏も不賛成であったので、昭和八年、現カスカッタ区に二十域を求めて入植した。

入植三年目には契約者二家族を入れ、棉作を大々的にやったが、土地が肥沃であつたので一域平均二百五十アローバを収穫して近隣を瞠目せしめたものであった。しかし氏には持病の神経痛があり、棉作も無理と覚つたので、昭和十年、その頃ようやく聖市近郊で盛んになりかけた養鶏に着眼し、副業として着手した。これが現在鶏の村となっているバストス養鶏のそもそもで、渡部氏が開祖である。又その頃、バルパより乳牛九頭を買い、牧畜への道を開いたが、これ又バストス牧畜の先駆である。棉作不況以後は、養鶏と牧畜を副業とし、養蚕を大々的にはじめ、多角的に事業を経営して行つたが、養蚕不況以後、養鶏と牧畜を主として来た。多

くの農家は養蚕不況後、鶏に目を転じたので全バストスより渡部家に養鶏視察者が、飼育法を学びに来たり 現在土地五十域、牧場三十域、牛六十六頭、鶏一千五百羽を、契約者一家族を入れて経営しているが、こゝまで事業を押し進め得たのも喜助氏夫妻を助けた長男パウロ氏の見と指標が大きくあずかっているむ長男パウロ氏は現在コンチネンタル会社々長として麻州開発に情熱を傾けて居り、次男和夫氏は聖市商大を卒業して独立し、長女、次女、三女それぞれ結婚してよい家庭の主婦となっている。 喜助氏老夫妻は共に趣味と養鶏に親しみ、好日を送っている。

垣本左武郎氏

(奈良県吉野郡小川村)

(写真)

粒々辛苦して手に入れた土地を、みすみす他人に奪われる、こんな腹立たしい事はない。在伯同胞の中には幾人か、そうした経験に血の涙を呑んだ人のある事をきくが、氏も亦、そうした事の體驗者で、断腸の思いに三年間を過したのであった。これも、今日の氏を築く為の神の試煉であつて、そこに人間完成の要諦が秘められていたのである。

最初ソロ線マッシャード駅高田大耕地に配耕され、次いで、レゼンテフェジヨ駅附近に移つて綿作をやり、モンテアルボン植民地に土地を求めて入植、三年後、ベナツチ植民地に転じたが、戦時は薄荷景氣に乗って、とんとん拍子に儲け、我が世の春を謳歌した。そこで第二段の飛躍を企て、サントアナスタシオ駅三十軒の地点に二十五域の土地を購入しこれまでの経験を生かして模範

農園の経営を企てた。このまゝで行けば、何の話もなかったわけであるが、そこには、悪魔がわなをしかけて氏を待っていた。氏の購入した土地の隣接地所有者は、近郷切つての悪人で、ひそかに氏の土地を半分ほど横領しようとしたくらんだ。そこで裁判所に起訴し、三ケ年間係争をつゞけて、弁護士その他に莫大な費用をつぎ入んだが、なかなか解決にいたらず、捨値で手ばなさざるを得なくなった。この期間、プ・プルチンテの泉植民地に借地しバタタ作りをしていたが、一九五一年バストスのカスカッタ区に三十域の地を購入して入植した。

最初バタタ栽培したと思わしくなく入植三年目より、日本で身につけた特技を生かし、養鶏をはじめ、果樹、牧畜と次第に事業を拡張して子孫永住の楽天地とすべく、徐々に農園の整備を計って行った。

現在は、戦後の日本より渡航した養蚕移民をも一家族入れ、いよいよ多角式農業の完成にいそしんでいる。土地三十域、牧場五域牛五頭、鶏一千二百羽、桑園五域、果樹はブドウ、ミカン、カキ等々を植え、悠々と我が世の春を謳っているが、これまでに氏が嘗めされた苦渋に満ちた、濁酒こそ、今日の氏をあらせたものである。

子女は四男五女、長女美代子さんは同区在住の東幸雄氏と、次女一子さんは同氏令弟と結婚して居り、三、四男は中学在学中、この世の荒波を乗り切つて、現在は平和そのものゝ家庭を営んでいる。氏の趣味は浪曲という。温厚篤實なる苦勞人で、宴席などの客あしらいよく、時に、虎蔵張りの一節を捻つて興を添え、破顔大笑して、拍手の中に降壇する様は、玄人はだしとの評判である。

こゝで氏の生い立ちを振り返って見ると、農家の四人兄弟の次男として生れた氏は、高等小学校卒業後、家業の製材業に父君を助けていたが、都会に出て材木業を手広く経営したい、という希望に燃えるまゝ十八歳のとき単身大阪に出た。木津大国町の材木問屋に奉公すること二年。氏の熱情は早くも材木師としての技柄を修得していた。これを見込んだ實兄が大阪に材木屋を開業、氏の應援を求めたが、折りからの不況と商売の未熟さから事業は失敗し、三年後に帰郷、農業に転ずることになった。加えて健康をそこねた氏は養鶏業を試みた。村で最初の養鶏家となり、何事にも熱心な氏は五十羽よりはじめ数年を経ず二千羽に拡張、一大事業化しかなりの成績を挙げたが、材木業で失敗を重ねた父君の借金を整理すべく折角の事業を手放して渡伯を決意したものである。

東

豊氏（愛媛県喜多郡久米村）

（写真）

東氏は、カスカッタ区第一の豪農、バストス屈指の成功者といわれている。土地百四十二域半、牧場百域、牛二百四十頭、鶏二千羽、馬鈴薯年産二千俵、落花生年産一千俵、トウモロコシ年産五百俵、こうした事業内容を示し、トラクター貨物自動車、乗用車等を持って、近代的な農家の偉容を誇っている。この成果は、一體何によつてもたらされたか。

勿論、東氏の不撓不屈の敢闘精神と農業に対する研究心のたまものであるが、その底に、愛土、愛郷の精神のあることを忘れてはならない。生来度量が寛容で清濁合わせ呑むの風があり、義

狭心に富む氏は、かの退植期に、バストスを護れ、日本人の手でバストスを完成せよと叫び、率先して、退植者の土地を買って出た。この愛郷心による所有地の拡張こそ、今日の成功に導いた一大要因である。

東氏は自作農家の三人兄弟中末子として生まれ高等小学校卒業後家業に従事していたが、耕地の狭少な日本農家の次、三男の将来を考え、近くの大州町に出、穀物商店の店員となった。穀物商として立つ為、事業の経営を学びつゝ資金の蓄積につとめ、二十一歳で結婚すると同時に独立し米穀商を開業した。一方に以前の主家経営の工場の管理に当りつゝ、大いに活躍して三年目には家屋敷を購入し、立派な地盤を築き上げた。

しかし、商人になつて、虚々實々火花を散らして馳け引きし、だましつだまされつ、弱肉強食そのまゝの商人社会を見て、氏は、自分の気性の適しないことを覺つた。決断力に富んでいる氏は、これを覺るとすぐに盛業中の事業を整理し、家をたゞんで、広い南米への渡航を決意した。義兄一家と共に家族を構成し、自費移民として渡伯し、モジアナ線ボアソルテ駅サツプカイ耕地に配耕され、筆舌に盡くせぬ辛酸をなめたが、支配人野見山氏に引立てられ、無事に一農年を過し、ノロ線プロミツノン駅青木耕地に四年間のコロノ生活を送った。子供は未だ幼く、夫人と共に懸命に働いた。

昭和六年バストスの現カスカッタ区に十域の土地を購入して入植した。自家労力で切り廻せる程度に次第に事業を進め、少しずつ土地を買いたし、棉作好況時代には契約者二家族を入れ大いにピッチをあげた。

土地の開けるに従い耕馬の需要が多くなったので、片手間に馬

売買の仲介業をはじめ、年間三百頭、四百頭の売買をした。

農の方は、棉より蚕に移り、同時に牧畜に手を伸ばし、漸進的に退植者の土地を買って牧場を拡張、蚕より鶏にかわり、同時に馬鈴薯その他の雑作も行い、今日の大事業にまで発展させたのであった。

家族は夫人と共に四男二女、夫人が一時眼病に苦しんだ外は皆健康で、長男、次男共に同区の垣本氏の長女、次女と結婚し、相協力して家業に励んで居り、長女、次女共にツパンの裁縫女学校を卒業して居り、孫も既に四人となり、悠々と事業を趣味ともし、楽しみつゝおし進めている。

山村吉右衛門氏 （東京府荏原郡大井町）

（写真）

出身地は東京であるが、氏は、静岡県加茂郡稱取町の半農半漁を業とする山村家の三男として生まれた。高等小学校を卒業して、十四歳の時、東京の伯父を頼って上京し、伯父の家業木工業（自動車の木部分を製作する）に従事した。成人して結婚したが、その優秀な技術を見込まれて、目黒の運輸会社の木工長に就任した。このまゝで行けば、立派な木工業者として立っていたであろうが、氏には少年の頃から一つの夢があった。それは、緑したたる南国の地に百花妍を競う花園を作り、そこに文化住宅を建て、詩歌を詠じて生活を樂しみたい、という夢であった。そこでひそかに伯国事情に関する書物を漁り、社用で北海道出張の時など休日を利用して農業の實地習得につとめたりして、渡伯の準備を進めて

いった。

いよいよ機の熟するを見すまし、義弟を加えて一家六人、雄躍して、渡伯船に乗り込んだのは、氏が三十五歳の時であった。

モジアナ線モーロアグードス駅タピラツバ耕地に配耕され一年半の義務農年を過したが、見ると開くとは大違い、氏が描いたパラダイス建設の夢は、着伯と同時にしろくも破れ、汗と涙に濡れた苦難の道をたどらなければならなかった。

しかし、一度志を立て、国を出たからは、今更帰国もならず、覚悟を新にして、計画を樹て直し、百姓第一歩から踏み出す気持で、バストスに移住した。

昭和八年、現在居住するガスカタ区に二十域を購入し、カスカッタ草分けの一人として入植した。棉作好況時代には三千五百アローバを収増して我が世の春を謳歌したが、続く養蚕不況に見舞われ、全財産を托した産組が倒壊して大損害を蒙った。しかし、一旦、斯うと決心したら、あくまでその道を進む氏は、産組の立て直しに懸命の努力を払い、不況にも屈せず養蚕を続けた。多くの人々が、養蚕に見切りをつけ、退植して行ったが、氏は養蚕の将来性あるを信じ、退植者から土地を購入して、耕地を拡げ、経営に工夫を凝らし、堅實に事業を運営して行った。今日押しも押されぬせぬ篤農家として、カスカッタ区に重きを為しているのも故あることである。

現在土地百域の内、牧場二十域、牛百頭、桑園十二域、雑作地十二域を殆ど自家労力で経営し、繭年産三千五百キロ、棉二千アローバ、ミリーヨ五百俵をあげているが、氏は特に米作に特別の手腕を持ち「米の山村さん」といわれている。これも、氏が農業に如何に熱心であるかを物語るものであつて、青年の頃花卉園を

巡らす文化住宅を夢見た氏の理想が實際的方面へ変貌して表現されたものであろう。

氏は家庭的には苦難の道を辿って来た人でモジアナの耕地時代に三男を失い又、昭和十七年には夫人を逝かせ、以来孤独を守って、子供の成長を楽しみに精魂を事業に打込んで来た。長男、次男それぞれ結婚し、一家よく和樂して、良い家庭を築いている。趣味は読書と園芸、老来いよく壮健で、将来は一家眷族を率い、氣候の良い南大河州あたりで果樹栽培や米作をしてみたいという夢を抱いている。

山下 正一氏（山口県大津郡三隅村）

（写真）

日露戦役直後の事であった。山下氏が或る著名人の講演を聴いていたところ、その人の言葉の中に「現在の日本は国民一人宛五円の借金を背負っている」という言葉があつて、氏の心に深く沁みた。

この貧しさから逃れる為には、日本は海外に発展しなければならぬ、青年は猫額大の土地に躊躇すべきではないと考えて、最初北米渡航を志した。

それは北米桑港に伯父がいたので、北米行きを志したが、排日が喧ましくて成らず、メキシコ、ペルー、チリーへの単独移民にも申し込んだが両親の反対に逢って實現にいたらなかった。氏の斯うした熾烈な海外熱に北米帰りの伯父が共鳴し、伯父一家の一員となって、竹村移民会社の手を経て渡伯した。

パウリスタ線マシミア駅、サントイザベル分耕地のコロノとなったが、珈琲不作で賃銀の支払が悪く経済的に困窮した。そこで同耕地の邦人コロノ二十四家族が結束して、竹村移民会社に訴えたが、要求を取り上げて貰えないので、二十四家族全部が暗夜にまざれて、無断退耕した。

そして、ガタパラ耕地に移ったが、熱病の為伯父は一人子を亡い、続いて伯母も愛児の後を追ひ、氏と伯父との二人になってしまった。

耕地の製糖工場でしばらく働き三角ミナスに移った。当時カニンデ駅ジョゼジュンケーラ耕地に富岡男爵や瀧澤仁三郎氏が米作していたので、そこを頼って行つた。此处で、日本から今一人の伯父や、氏の實弟をも呼寄せて、借地米作を大々的にはじめた。頃は丁度伯国米作の勃興期で、聖州に米食が普及して行き、大いに純益をあげた。

三年の後、伯父の友人にすゝめられ、平野植民地に五十域の土地を貰ひ移ったが、その土地は平野氏が借金の抵当として入れていた為、地権が取れず、いざこざ中に平野氏は死んでしまった。更に四十コントスを支払えば続権者も地権を譲渡するとは言つたが、その金も出来ず、無駄に八ヶ年を過して、伯父は帰国し、この伯父に現夫人と結婚の橋渡しを頼み、大正十三年に呼寄せた。それより、カフエランジャ駅ウルー植民地に二年、セルボン耕地に四年のコロノ生活をしたが、その間に三人の子供を亡った。この不幸に心ひしがれ、邦人集団地にあこがれ、現カスカッタ区に入植し、同区の草分けとなった。

バストスに入植してから子供は丈夫に育つたが、實弟が肺結核に罹り二年半の病床生活を送つた後死亡した。この療養費がかさ

み、以来十年間、氏は借金に苦しんだ。小家族で子供は幼く大事業をする事は出来ないのです、只根気強く行くことを信条として、養蚕を今日まで終始一貫励んで来た。

現在土地二十域、桑園四域、繭年産一千五百キロ、副業として養鶏七百羽、雑作五域、ユーカリ一域を所有している。子供は七男四女、十一人の子賓に恵まれよき父として温い家庭を営み、温和な苦労人として近隣の信用はあつい。ブラジル生活四十年を通して作られた重厚な人格者で、舊移民の臭味の無いところに魅力がある。

万谷 虎一氏

(山口県玖珂那神代村)

(写真)

農家の次男に生まれ、二十四才まで生家に在ったが、縁あって、津村家に婿養子に迎えられた。運悪く、結婚三年目に妻の死に逢い、實家に帰った。一時茫然としていたが、岩国に帝国人絹会社の工場が建設されることをきき、岩国に出て、工場建設の為に土木に就働、竣工と同時に職工となった。昭和四年に亡妻の従妹と結婚し工場務めをしていたが、同僚中には健康を害して朴れる者が多く、何かもつと良い職業に代り度いと考えていた。この人絹工場の所在地方は海外移住が盛んな土地で、ブラジルの話を度度地方人より聞き、海外雄飛を思い立った。しかし一家は夫婦と五ヶ月の長女だけで、渡伯の條件が揃わず困っていたが、幸、同地方からの渡伯者、河中亀人氏に多くの子女があったので、同氏の

次女君江さんを戸籍面上の養女として家族を構成した。

ところが同船の筈であつた河中一家は都合により遅れることになり、大いに困つたが河中氏の好意により、君江さんはそのまま借して貰うことが出来、難なく渡伯することが出来た。三年後に河中一家も渡伯し平野植民地に入耕したので、君江さんを親元に戻すことが出来た。

万谷氏一家は、モジアナ線サンタローザ駅サントアントニオ耕地に配耕され、ブラジル生活第一歩を踏み出したが、余りにも労働賃銀が低い為生活が立たず、リベロンプレットの海興支店に、耕主との賃金値上げの交渉を願い出た。海興では直ちに耕主と折衝したが、なかなか埒があかないので、海興としても、自由行動を許した。斯うした事情に苦しんでいた時、たまたま、ノロ線カフェランジャ在住の尾崎某氏がコロノ募集にリベロンに来て居たので、渡りに舟と、應募し、尾崎氏に従つて、インデペンデンシヤ耕地に移つたが、募集の時の言葉と實際との相違が甚しく、邦人四十家族は同盟して協業を決行した。しかし氏はその罷業にも加わらず一心に働いた。その後、夫人が病氣になり、尾崎氏に援助を乞うたが、余りにも冷淡な態度に出て来たので、氏も心を決め、脱耕して、バストスに入植した。

バストスに仕事した時は、自動車賃を払つた後懷中無一文の状態であつたが、日本情緒の溢れているバストスを見て祖国に帰つたような安らぎを得、勇氣百倍してカスカッタ区に入植、同区草分けとしての辛酸を嘗め、努力に努力を重ねて、入植時にブラ拓より貸りた生産資金と土地代を三年目には完納し、尚、四年目には、モンテイロ区に更に十域を購入して契約者を入れたが、余りに遠距離であり、氏も耕地時代の無理がたたつて、いろいろな病

気に罹り、遂には眼病の為、失明が憂慮されたので、モンテイロの土地は売り、事業を縮少して、眼病治療の為カンピーナスに養生した。養蚕不況の時代に土地を買いたし、現在三十域を所有し、養蚕業と雑作により着實に事業を進めて来た。

氏は、人生に広さよりも、むしろ深さを求める人で、事業よりも子弟の教育に重点を置き、一日一日を、真剣に生活し、充賛した人生であることを念としている。二男五女の子女も、それぞれに成人し、順調な発展をみせている。バストスを永住の地として益々繁栄が約束されている一家である。

上和大八郎氏

(熊本県鹿本郡山本村)

(写真)

父九五郎氏は、五人の男の子たちの将来を考え、当時、全国を風靡した伯国移住の気運に乗り、大八郎氏が高等小学卒業間際、一家八人、家財をまとめて伯国に移住した。

配耕先はパウリスタ本線コレゴリツコ駅の海興アニューマス耕地であつた。此处で日本で結婚して来た長兄が分離した。三年後、ガルサ駅ビジランサ耕地に転じた。更に一年の後、ベラクルース駅フロリダ植民地で借地農を二ヶ年した。こうして、伯国の農業に自信も出来まとまった金も掴んだので同地附近のチビリッサ植民地に二十域を求め独立農として、新しい一步を踏出した。当時は次兄三兄も同居していて労力が揃っていたので手広く棉作をやったが、あたかも棉の好況期に出会し、大いに懐が豊かになつ

たので、次期の飛躍にそなえて、八十域の土地を買い十五年間を比の地に過した。

しかし後の三、四年間は、降雨の為表土が流失し、郊作が不可能になったので牧畜に転じた。

土地が痩せ、棉作不可能になるに及び、同地の邦人は次々と退植し伯人が代りに入り込んで来たので、他に転ずる事にし、同地を売ると共に家族を分離し、それぞれの希望に従い方向を決定する事になった。氏も既に同植民地西田氏の次女をむかえて結婚していたので、夫婦で独立し、バストスの現カスカッタ区に二十五域を求めて入植した。

入植に先だって、氏は各地を視察したが、バストスは地味は悪いが、牧畜には差支なく交通も便利であり、地価も安かったので、三十六頭の牛を連れて入植した。

常時バストスは養蚕不況による退植者続出の時代で、牧畜に着眼した者はなかった。村人は氏の引き連れて来た牛の群に目を見張ったが、氏を先駆とする牧畜業はバストスの復興を大いに促進した。

入植二年目に三十域、更に二年の後十五域の土地を買い、牧場を拡張すると共に養鶏にも着手した。牛百二十頭、鶏二千羽、これが若い夫婦の手によって切りまわされている。氏が精農家と言われる、将来を嘱望されている所以である。

最近はや、柿百五十本、ブドウ百五十株を植え、果樹園の完成にいそしんで居り、今後の目標として、牛乳の加工をも企てて居る。

又趣味として十五年来、金魚を飼って来て居るが、副業としてこれを事業化すことも計劃している。

現在氏は、バストスの少壮事業家として第二線にあるが、事業家として、先の見通しの明かるい、頭脳の鋭い人であると共に、心の温い、純粋な気持の人でもある。それは、八十余才の両親が末子であるところの氏の家に在り、余世を安らかに過して居るのを見ても知ることが出来る。過る年金婚式を挙げた両親の倖せに輝く顔をながめ、満面をほころばせていた氏の孝心は近隣の人々をいたく感動　せしめた。

氏は言う。

バストスは成程瘦地には相違ない、しかし、頭脳を働かせて、多角的にやれば決して将来性の無い土地ではない。この地を鑠土として、子孫に承継がせるのが吾々の使命であると。二男三女を育む氏の将来こそ注目に価するであろう。

高橋　久雄氏　（宮城県名取郡館腰村）

（写真）

高橋氏は子供十一人と言う、稀に見る子福者であるが、長男は聖市の工芸学校建築科在学中、次男は農科大学予備科在学中、三男は聖市に在って自動車機械技術の習得中、女子もそれぞれ中等以上の学校を終えているが、これは、子女が皆優秀であり、氏が教育に熱心なことを物語るものである。それもその筈、氏自身も、県立農学校を卒業して居り、渡伯まで、県穀物検査所検査員、關上町農会技手をつとめていた、所謂インテリ百姓である。氏は言う。「大勢の子供を抱えて居り、これ等の子供の将来を考え、何とか高等教育を受けさせてやり度いと思うと、田舎住いは無理で

あつて、出来れば大都会近郊に移り度いと思う」と、教育熱心な氏の心境として、むりからぬ事と思う。

氏は、農家の四男に生まれ、県立農学校を優秀な成績で卒業し、朝鮮歩兵第七十四聯隊に入営、恵山鎮守傭兵として国境警備の任に就き、鴨緑江沿岸に在り、伍長勤務上等兵となつて除隊した。そして昭和二十五年まで県穀物検査員を勤めて、渡伯したのであつた。

渡伯の動機は、母校々長がブラジルの視察旅行から帰り、その帰朝談に刺戟を受け、永田稠氏発行の「力行世界」を購読するに及んで、いよいよ海外に魅力を感じ、力行会員となり、海外移住を熱望、最初はアルゼンチンを目指しスペイン語の勉強などして準備したが成らず、義弟、義母を加え一家五人で渡伯した。

ノロ線カフエランジャ駅シャンテンブレー耕地に配耕せられ一年間のコロノ生活を終え昭和六年、バストスに移った。氏はかねて「力行世界」誌上でバストスの事を知つて居たので、一農年を終えると、すぐバストスを視察し、同耕地の邦人四家族をもさそつて、大挙移住したのであつた。

現在のカスカッタ区に二十域の土地を求め、棉作をしたが二年目に、唐澤氏の斡旋により高柳氏と共にカンピーナスより桑苗を取り寄せ、養蚕を取り入れたが、これがバストス養蚕の嚆矢である。次第に養蚕に主力を移し、身につけて来た技術を發揮して、やがてやって来た養蚕好況期には全力をつくして、大いに利益をあげた。不況時代に入ると共に養鶏に転じ、専業として今日に至つてゐる。

養鶏家といつても、氏は農業技術者だけあつて、只見棲見真似の模倣養鶏家ではなく、育雛に、成鶏飼育に、研究をつんで、独

特な方法を用い成績を挙げているが、中でも、飼料の改良につとめ、麴菌、乳酸菌及びイースト菌を加えた醗酵飼料を完成し、飼料の単価を下げて、しかも普通飼料以上の産卵成績をあげている。趣味は園芸と読書で、真面目なクリスチャンの読書家として知られて居り、最近は養鶏法の研究者として、多数の養鶏家が、氏の指導を受けている。

現在土地二十域、全域牧草地で、鶏一千八百羽を飼い、あせらず、たゆまず、業をはげみ、恵まれた家庭をきずいている。

青木 大八氏 (山形県米澤市)

(写真)

軒端の涓滴が庭石を穿ち、桑の弓矢さえ岩をも通す、と言われているが、一念こうして一つの事に専心する時、いつかは成就するものである。一にも二にも根気で押し、努力を重ねて、今日を築いた人に青木氏がある。

氏は高等小学を途中で退き、屋根屋職の弟子となった。甲種合格で、旭川歩兵第二十七聯隊に入営し、樺太守備隊に一ヶ年、明治天皇崩御の年除隊した。除隊後は、独立の屋根屋職人として北海道に渡り、釧路に開業した。仕事は多く、腕の良さが評判となり、多数の職人を弟子にして、屋根ふき請負いで大いに儲けていた。五年を経て、米澤に大火があり少年時代よりの師匠に呼び戻され、故郷に帰ったが、内地は不景気で、生活は北海道時代の華やかさに比べて、苦しくなるばかりであった。

氏は現役兵として樺太を見、青年時代に北海道で暮したので、

植民地生活の面白さ自由さを知って居り、当時はブラジル移民の宣伝も盛んであったので、早くより海外雄飛をひそかに企てていた。東京の社会局にブラジル事情をきゝ合わせたり、バストス移住組合の事も調べていたが、一千円の移住資金の調達が出来なかったので、普通移民として渡伯した。

娘二人にそれぞれ婿をむかえ、一家十二人という大家族でやって来た。モジアナ線サンジョアキン駅、サンタセシリア耕地に入り、二年後に同線モーロアグードス駅、モーロアグード新地に棉作の歩合作を二年続けた。當時は棉景氣の出た頃で、パウリスタ線ピラチニング駅附近に移り、借地農となって、棉作で大いに儲けた。

渡伯以来、これまでに、男女二人の子供をうしなつたが、後六人の子供は丈夫であり、学齡期に在る子供もあつたので、邦語学校や病院のあるバストスに移った。カスカッタ区山田氏の地区に借地して入植したが、二年後同地を山田氏より譲り受け、独立農として、今日に至っている。

戦時、養蚕をはじめ、好調であつたが、終戦と共に不況が襲来した。多くの養蚕家は事業を廃して雑作にかわり、又は他に移転して行つたが、氏は不況にも負けず、専心養蚕に打込んで行つた。或る時代は全く利益が無く生活苦を嘗めさせられたが、うまずたゆまず継続して行き今日養蚕好況時代を迎えて、大いに恵まれているが、これも、不況時代を耐え忍んで来たたまものである。

現在土地十域、桑園三域、繭年産二千五百キロ、雑作を副業として、よく落着いた模範的な農家となっている。長男博氏はグロリア区在住上島氏三女と、次男富男氏はバストス市街在住小川氏の妹と、それぞれ結婚して氏は既に十九人の孫があり、慈

眼温和な祖父として、慕われている。趣味は俳句、和歌、夢酔と号し、折にふれて発表するが、多くは一人で製作を楽しんでいる。人生を努力と真面目さで進んで来た氏が今日の安楽な心境を得たことも、亦うべなりと、いわねばなるまい。

氏はまた進歩的な考えに基づいて絶えず前進を続ける人である。永住の地と決めたバストスであるが、時代の変遷をよく見透し、それに即應して人生を開拓して行くよう子息の将来を慮って語っている人である。

味 野 謹 子氏

(岡山県倉敷市)

高等小学校を卒業すると、家業の農事に精勤した。岡山歩兵第五十聯隊に入営し、二年後に除隊すると、郷里に帰り、村の土木担当員となり、水門工事など村の土木事業に少なからざる功績を挙げた。もともと土地の舊家で、若くして村会議員に選ばれ、傍ら県の特産たる花筵の製造を、五十台の親元として動かしたりしていた。そのうち、県の副業奨励で、組合加入が容易となって、個人経営の斯業は困難となり、あまつさえ、一九二〇年春の株の大暴落で、一挙にして資産を失ってしまった。

これが動機となって、親戚五家族を引具してブラジルへ渡った。配耕されたところはモジアナ線セラナ駅トランスバル耕地で、支配人に齋藤幸氏あり、この指導を受けた。不馴れな労働は辛かったが、故郷の村の政争や、紛糾を想うと、この耕地でのコロノ生活三年は、考えようによつては、楽天地の暮しであった。

二九年、バストス移住地に入植した。渡伯前から県に移住組合

創設の声があり、創設され次第、組合員として加入したい旨の希望が申入れてあった。氏の令弟がその手続をしてくれたので、在伯第一号、草分けとして入植したのであった。日本から引連れて来た五家族の、各家族それぞれ十域を求めて、カスカッタ区に、共同で六万本の珈琲を植えた。出来は見事であったが、安値で、どうにも致し方なく、涙をのんで、悉く伐払った。バストスは珈琲栽培の適地だとは思ったが、時代が事しなかったのである。加うるに、附近に入植した日本直来の者が、珈琲園を荒らすし、雑草には悩まされるし、火事の心配もあったのが珈琲を伐払う動機の一つでもあった。

草分け組の経済的進展は、先ず、かくて挫折されたわけである。棉作と養蚕に転じた。八人の兄弟及び肉身を亡くしたのは、こうした入植当時の困難な時期に於いてであった。

一九四〇年、当時全盛期にあったバストス産業組合の幹事を一年勤め、翌年、理事に当選した。が新しい法令で伯人理事に席をゆずり、裏面に在って實務に携った。蚕種製造場建設委員長として活躍した。

終戦後の、邦人コロニアの対立混乱期に一時産組を離れ、五年に至って理事たることを諾い、今日に及んでいる。常務理事として棉花を担当し、舊価完済の強い信念をもって渾身の努力を傾注しつつある。

バストス産組の一元化は、バストス産組が再興することに他ならぬ。何よりも先決問題はバストスが発展することだ。このためには砂質壤土に適する落花生を栽培して製油揚を建設し、経済的な再建を計らねばならない。この見地から、当時、棉のなかったバストスに工場を建て、年十五万アローバ余の棉を外部から購入

している。この関係からバストス移住地外に組合員を有している。五四年度に於いて二千コントの利益を挙げて居り、黒字財政に移行する日は、さして遠くない。

氏は十四年間、区長を勤め、万年区長の稱がある。戦時中は、当局と区との折衝を始め区民を護るべき責任感から七年間つゞけて難局に処した。戦後、一時、区長の席を他に譲ったが、收拾し能わざる混乱期に入って、区の秩序回復のため区長となり、五四年に到つ

て退いた。現在所有土地五十域。うち牧場三十域、牛二十頭を飼う。成鶏五千五百羽を有してバストス屈指の養鶏家である。他に落花生、西瓜を栽培している。トラットール、カミニオンを駆使して大いに能率をあげている。

青山 数 男氏 (岡山県勝田郡勝加茂村)

田地一町歩の自作農といえ、関西の山地では豊かな農家である。そうした余裕ある農家の次男に生まれた氏であるが、未来に洋々たる野望を抱く数男氏には、日本の土地は余りにも狭ますぎた。二十八歳の時同志数人と北海道移住を企て、約半歳にわたって視察の旅をつづけたが、優良地は既に開墾しつくされ、未開地はすべての条件悪く、遂に移住を思い止まった。しかし、一旦離郷を決した心は落着くわけもなく、十年を経て三十八歳の時渡伯を決心した。

最初は移住組合に加入して、直接バストスに来る心算であったが、本当にブラジル事情を研究してからがよいと聞き、普通の移

民となって、永住と覚悟をきめ、義兄一家と家族構成し、一家十二人、運命の開拓を志して渡伯した。

最初モジアナ線セルトンジンニヨ駅サンセバスチヨン耕地に配耕されたが、珈琲価格の暴落の為、耕主が賃銀を支払わないのでパウリスタ線マリリア駅内藤耕地に転耕し六年契約を結んだが、たまたま珈琲の植付制限が布告されて、コロノとなった一ヶ年後、耕主が七人組の強盗に殺され、賃銀の支払が停止された。老いた母あり、子供は学齢をむかえ、日本人の集団地にあこがれて、初志の地バストスに移った。

カスカッタ区四組に土地を求めて、棉、米、マモチ等を作ったが地質が悪く、養蚕に転じたがこれも同じく成績不良、万策つきて、入組に新しく土地を購入し、棉作に努力したところ、遂に不撓不屈の農魂は報いられて、はじめて経済的に恵まれた。二年目には土地を買いたし、一九四一年より養鶏をはじめた。生来緻密な頭脳と疲れを知らぬ根気強さは養鶏に偉力をあらわし、年々好成績を収め、一九四六年より養鶏を専業とし、一九五三年、バストス市街近郊の現在の土地に移り七千羽の鶏を飼育して、バストス一の大養鶏家といわれるようになった。その養鶏施設の完備していることは視察者の目を見張らすばかりで、近代養鶏の粋をあつめているといっても過言ではない。

家族は、母既に亡く、夫人と子息二人にそれぞれ配偶者をむかえ、一家こぞつて養鶏に専念している。又一九五四年、日本の郷里より義弟夫婦四人を呼寄せ、よりよき事業の協力者としている。

電気、冷蔵庫、ガス等あらゆる文明の利器を家庭に取り入れ、余裕しやくしやくたる文化生活を樂しみながら、一万羽養鶏を目ざして事業を堅實に経営し、バストス養鶏王の名を近在に謳われて

いる。

伯国移住当初こそ、不運の連続であつたが今日の大成功を収めた氏の如きは稀であつてその事業経営の才能と、自力以て初志を貫徹した迫力とは、賞著に価するものがある。

氏の養鶏は同区の渡部喜助氏とともにバストス養鶏の先駆をなした。即ち、蚕繭好況を謳う一九四一年に、蚕呆氣に惑うことなく、常時、低価格をかこつ鶏卵と取組み、これの事業化に熱情を傾けたのであつた。それには飼料問題を解決し、生産単価を引き下げて産卵率を高めねばならぬ。養鶏技術のみ秀でてでも経営の才能が伴わねば養鶏業は事業化できない。こゝに到達した氏は自家用トラックを求め、地理的に便利な中心地にその農園を移し、単なる農業ではない域にまで事業を伸展し、今日の養鶏王国を自ら築き上げたのであつた。

一万羽養鶏を目指す氏の養鶏場はさながら一劃の町を思わせる偉観を呈しているが、今日を来たした氏の努力、何人も真似のできるものではない。

大名門政吉氏

(愛媛県越智都亀岡村)

(写真)

農家の次男に生まれ、農業が嫌いで、十三歳の時、北海道で雑貨商を営む伯父の許に行った。馴れぬ生活に飛び込んだので、少年の身には、むしろように故郷が恋しく、小使いを溜めて帰郷旅費を作ったが、大阪までの旅費が出来た頃は、やつと風土氣候にも

馴れ、兵隊検査まで居て、故郷に帰り、友人と共営で織物工場を経営したが、株価の暴落で中止し大阪に出てメリヤス工場に務めた。七年後、小規模のメリヤス工場を経営したが、多く大工場の下請けなので、思うにまかせず、進路を開こうとしていた時、ブラジルの話をきゝ伯国でメリヤス工場を営み度いとの志を立て昭和八年、夫婦に子供二人、實弟を加えて一家五人、新天地を目指して渡伯した。

モジアナ線モーロアグードス駅タビラツバ耕地でコロノ生活一年半、渡部氏の世話でバストスに移り、越智氏、山田氏の地区などで、コロノ或は借地農をして後、現在のカスカッタ区に十域を求めて独立農となった。丁度棉の全盛期で、土地を全部拓いて棉作をしたが、カマラーダ賃に多くを取られ利益も少いので、以来自家労力の範圍に事業を止め、堅實な経営法を採って来た。雑作を主とし、養蚕など副業程度を出なかつたので、養蚕不況期にもそれ程傷手を蒙らず、近年は養鶏を取り入れ多角的な農法で進めている。

田中 里二氏

(鹿児島県肝付郡高山町)

(写真)

少年時代より海洋に憧れ、商船学校を志望したが成らず、しかも海外への關心はいよいよ強まっていた。高等小学校卒業当時、同郷でブラジル帰りの成功者があり、伯国事情を聞き父母も渡伯を決意した。氏は当時十七歳であつたが我が意を得たりと大いに

喜んだ。長兄は工業学校を終え朝鮮で建築業をしていたので、次男の氏以下六人の弟妹と両親、従弟一人の総勢九人家族で、昭和七年に渡伯した。

モジアナ線モーロアグードス駅タビラツバ耕地で一年三ヶ月を過したが、その間にアメーバの為、三人の幼い弟妹を死なせ、両親は断腸の思いをした。一年半後、バストスの現カスカッタ区に十域の土地を求めて入植した。同区草分けとして苦学と闘いながら棉作をはじめ、二年目、高柳氏に次ぎ本格的に養蚕をした。在日時代に経験もあり、農閑期の副業として好適であった。三年目に長兄夫婦を呼寄せて共に事業を進めていたが、両親と長兄夫婦は相次いで帰国し、氏と妹と二人だけは帰国する気なく残留することになった。

妹は他に嫁し、氏はモンティロ区豊島氏次女翠さんと結婚して、新しい人生を踏み出した。

綿、米を作り、養蚕に転じ、大仕掛けに事業を進めたが、戦後、養鶏にかわり現在に至っている。

興水・利国氏（静岡県田方郡三島市）

（写真）

原籍は静岡であるが、父が小学校教員であった為、各地に転々とし、氏は山梨県の父の任地で生まれた。高等小学校卒業後、伊豆下田港の伯父が米穀酒類の問屋をしていたので二年程手伝い、静岡市に出て、醤油醸造所に店員として、渡伯までの十ヶ年を勤めた。

店員暮し十ヶ年で、よくよく商人生活の味気なさが身に沁み、生来の農業好きから、自由な天地を憧れて渡伯を決意した。結婚すると同時に末弟を入れて家族を構成し、新婚の夢を南海航路に結んで新天地に渡った。

十年一稼ぎ錦衣帰郷を描いて、アララクワラ線マツトン駅カンプー耕地に配耕され、二年後附近のアサヒ植民地に移り、珈琲契約の傍ら早くも養蚕に着手し伯国養蚕の先駆として順調に伸びていったが、長女を此所で失い昭和六年バストス現カスカッタ区に十域を求めて入植した。

事業は自家労力の範囲に止め、農業を契しむという方針を定めた。

棉作と養蚕をはじめ次いで果樹を植えた。戦時の養蚕好況期にも棉作を止めず、又戦後の養蚕不況期にも蚕をやめず、更に養鶏を加えて、多角農を営み、一步步と地歩を築いて今日に至っている。

現在土地十域、桑園三域、繭年産二千キロ、鶏一千羽、一家こぞって農を楽しみつゝ合理的経営を進めている。

味野 光夫氏

(岡山県倉敷市)

(写真)

高等小学校卒業後、農家の長男として家業に従っていたが、少年時代より海外に関心を持って居り、一奮発無からざるべからずと考えていた。青年期に入り、姉一家が先に渡伯して、度々伯国事情を報せて来た。先ず両親がブラジル渡航を志したので、氏に

否はあるわけはなく、昭和二年勇みに勇んで故郷を後にした。

モジアナ線セラナ駅トランスバール耕地隣接セーラグラランデ耕地に一年ずつコロノをして、昭和四年、最初の入植者としてバストスの現カスカッタ区に入植した。草分け第一号としてつぶさに開拓の苦労を嘗めつゝ珈琲を植えた。珈琲は苦労の甲斐もなく、霜害を受けて伐採し、棉作を専業とし、戦時には養蚕に移り、戦後、養鶏にかわつて今日に及んでいる。

現在土地四十七域所有、鶏の外に棉、米、落花生、西瓜等、多角的に事業を進め、将来は牧畜に主力を注ぐべく牧場を拡大しつつある。

一九三五年に父は長逝し、続いて一人の妹をうしなつたが、一九三六年にグローリア区在富山氏の妹と結婚、現在五男五女の父としてよい家庭を営んでいる。

氏は陸上中距離選手として青年時代四ケ年間バストスの記録を保持し、汎ソロ大会に三年連続優勝した。コロニア陸上競技の勃興期に勇名をとどろかした。

富 山 太氏（岡山県御津郡宇甘東村）

（写真）

祖父君が村長をしたこともある村の舊家の長男として生まる。金川中学卒業後、九州八幡製鉄所築港謀に勤務すること三年にして岡山市に戻り、銭湯を経営し、十余軒の借家を建てた。十年間に相当の産を増したが、投機に手を出し、三年間で無一文となつてしまった。ここに於いて家運挽回のため渡伯を決し、母君、令

妹、従弟など五人家族で出発した。三十二歳の時であつた。

着伯すると、中央線モジ・ダス・クルーゼス市に伯母君を訪ね、一ケ年間蔬菜栽培をした。霜時のトマト栽培の有利なことを聞いて試みたが失敗し、持参の金は皆無となった。

バストス移住地に知人川崎氏あるを頼つて三四年移転。グローリア第一区小橋地区に十アルケースを求めて入植した。好況期の三農年を棉作に努めた。バストス町に出てトラックによる運搬業を営む。

後カスカッタ区に十アルケースを求めて入植、養鶏を行なつた。同地養鶏の先駆である。一時パウリスタ線アダマンチーナ市街地に移り住んだこともある。三年後、再び現カスカッタ区に帰る。

養鶏、養蚕を営んで今日に及んでいる。現在成鶏三千羽、繭年産二千キログラム、また西瓜栽培は同区の第一人者で、年に二百コントスの売り上げを見せている。

浅野 武雄氏 (北海道十勝国河東郡士幌村)

(写真)

日本で最も大農的機械農の発達している十勝平野に、氏は人となった。外国式農法を最初から輸入した北海道の原野で、のびのびとした事業、旺盛な開拓精神、そうした環境の下に成人した氏は、更に希望を大陸の野に放らせ、勇躍渡伯したのであつた。時に二十三歳。生地は宮城県黒川郡宮床村であるが、五歳にして父母と共に北海道開拓に赴き、拓士の運命を生れながらに担った人

である。

バストスは、ファルツーラ区に十域を求めて入植すると共に、夫婦と二人の子供の新入生を踏み出した。土地が悪く、初年度は無収穫に等しかった。やがて隣接地に移り、更に転じて現カスカッタ区に十域を求めて入植、こゝは土地肥沃で、氏の専業とした棉作は、年産一千二百アローバを産した。やがて養蚕に転じ、終始一貫これを業とする。氏の事業法を訊くと流行を追わず、努力、辛棒の二語を最後迄徹底して現在の基礎を築いたのであるという。言うは易く、行うは難しいが、これを見事に成功せしめたことは、又一面、氏の篤實な、性格によるものでもある。

現在所有土地二十域、桑園三域、繭年産三千キログラムを超える。自家用車あり、北パラナ州ロアンダ市に果樹園予定地六域を有する。

小野 義種氏

(宮崎県都城市)

(写真)

少年期に於ける美しい希望が、たまたまその人の生涯を支配する。氏も、少年期からの希望を持ちつづけ、現在の成功を見た一人である。小学校で、北米の広野を拓く機械化農の話聞き、日本の小農を嫌って、海外に於ける大農の志を立てた。反対する両親を促し、伯父君一家と共に渡伯した。時に歳十六。

ソロカバナ線アグードス駅でコロノ、棉作契約、借地農を四年、折からの棉景氣に乗り同駅サンタ・フローラ耕地に百域を借地し、

一躍棉作の大事業を試みた。時に若冠二十五歳。恰かも大空を駛ける大鷲の如く、両翼を存分に延ばしたのである。後同駅サンタ・テレジンニヤ耕地に移ったが、こゝは地形悪く、表土の流失に悩み、最初の七十域を縮小し、五十域として、マモナ及びミーリオの雑作をなすこと六年間。従来の大農は一切、雇用人夫及び牛馬をもつての耕作であつた。そうした不合理な経営に終止符を打つ意味から、五〇年に現カスカッタ区に二十五域を購入して入植した。

養蚕に初まり、繭も年産二千キログラムを超えた。五三年より蚕業を止め、綿作及び雑作をなす。

現在所有土地二十五域、うち牧場八域、牛三十二頭を飼育する。雑作十一域、綿花年産一千アローバに及ぶ。カミニヨン一台、自家用車及び自家用製材、玉蜀黍脱穀機等を備えている。

渋 江 秀 一 氏

(岡山県倉敷市)

(写真)

瀬戸内海沿岸の温和な自然の中に氏は生まれた。氏の伯父君と学友であつた元駐伯大使館武官竹内寛少佐の講演に促され、伯父君の誘うまゝに、いわばゆつたりとした気持で渡伯したのであつた。

先ずモジアナ線セラナ駅にコロノ二年、温和な、純朴な郷里の自然に培われた氏の人格が、荒んだコロノ生活の中に、大きな範を示し、以来岡山県人は優秀と認められ、同県人移民の誘人に大きな役割を示した程であつた。在ること四年にして、マリリア

方面へ進出する予定を変更し、予ねて在日時に移住組合創立直後に申込が完了していたため、伯父味野氏一家をはじめ六家族と共に、バストスの草分として入植第一号のトップを切った。

十域の土地に一万本の珈琲を植えたが、不況から伐採を余儀なくされた。バストス町に出て雑貨商及び農産物仲買商として活躍したこともあった。これがバストスの棉花販売販路の緒となり、大資本会社の棉花工場の設立を促進する結果を招いた。しかし、これも四年にして止め、以後、養蚕、落花生、蔬菜と転じ、五〇年から養鶏を始め、現在の盛業を見るに到った。所有土地三十域のうち、牧場三域、牛四頭を飼育し、鶏一千八百羽を擁する。長男次男共に中学に在学し、長女は家政学校に在る。現在に到る迄には、氏も中耳炎を患い、また父代りの伯父君二人を喪い、大きな辛酸を経ていることを忘れてはならない。共にバストスを墳墓の地と決めた氏は、入植以来二十六年の楽しい生活である。

眞野 四郎氏

(岡山県都窪郡妹尾町)

村役場吏員の末っ子に生まれ、高等小学校卒業後、单身神戸に出て鉄道学校に学んでいたが、ふとした事から演劇団に加わり、次第に熱中して、学業を捨てた。兵隊検査で一時帰郷し役場につとめたが演劇への情熱やみ難く親や縁者の反対を押切って再び神戸に出て新劇団員となる。

實兄一家が渡伯に際し、家族構成上の都合で兄一家の一員となり、不本意ながら乗船した。三年帰国の予定で、ノロ線カフェラシヤ駅ツツキ耕地に入耕したが、現實はしかく生やさしいもの

でなく、結婚分家してセルボン耕地に四年契約して就働、遂に帰国をあきらめ、農業者として新しい覚悟のもとに人生のスタートを切った。

昭和七年バストスに移り、最初アルト区に入植、米作六年後、隣接地リノポリス植民地に十域を求めて入植し、伯人契約者三家族を入れて、棉、薯などを栽培し次第に土地も殖やしたが表土流失に悩まされ、又子弟教育の都合から一九五三年現在のカスカッタ区に二十域を購入して、移った。

現在土地二十域、牧場二域、牛十一頭、鶏二千羽、雑作など、堅實な経営振りを示している。

家族は四男五女、長男次男は事業にたずさわり、三男はマリリア工業学校に在学中、長女は同区味野家に嫁している。

氏は、青年時代の俳優の夢を生かし、現在移住地演劇の指導者として無くてはならぬ人であり、入植祭その他の催し事は氏の独壇上である。

佐 竹 萬 四 郎氏 (北海道紋別郡西興部村)

一八九七年、農家の良男として生まる。五歳にして母君を失い、淋しい父子暮らしのうちに、少年期と青年期を送った。二十六歳で結婚し、父君と共に北海道に渡る。それまでは山形県西村山郡西百々川村に在った。

甥に当る人が、ブラジル行を力祝したけれども、之に反対していたが、同村出身の知人にすすめられて渡伯を決意した。北海道に在ること六年で、移住組合に入り、バストス移住地に入植した

のは、三三年のことである。

同移住地プログレツソ区在の角藤氏夫人が同じ山形県の人で、北海道に移住していたところから、共鳴するところ多く、同氏の処で借地農として棉作に従事した。

一年後、同区に十域の土地を求めて入植し棉作を行い、四九年、グロリア第二区に十域を購入して之に転じ、養鶏を始めて今日に及んでいる。現在、成鶏三千羽。養鶏は同区の先駆者であるが、戦前、養蚕を行ったのも区ではトップを切ったのであった。

渡伯二年目のことであるが、夫妻で井戸掘りをしている時、四十米の処から井戸底へ落ち、劇しく腰部を打って、元の體には復すまい、とまで言われた。二ヶ月間床に就いたままで、夫人一人が苦闘した、夫妻の間に一男五女あり。長女千代さんは四二年今野銀次郎氏に嫁してグロリア第一区に在り、次女二子さんは四八年、オズワルド・クルースの堀友正氏と結婚し、三女キヨさんは五一年、アルト区在住の安齋茂夫氏に嫁いだ。四女、五女は家政学校に在学中で令息は中学に通っている。

石田 光助氏

(山口県山口市)

(写真)

一度海外生活を味った者は、なかなか日本には落着けないというが、氏も亦、青年時代を北米で暮し、一度帰国はしたが、やがて南米に転じて今日に至った人である。氏は豊かな家庭に育ったが、父親が競馬に凝り、家産を傾けてしまったので、十六歳の時、中学校を中途退学して、北米に渡った。シャートル市で、昼は見習

コックをして小学校を出、牧師の家庭に奉公して中学を卒業した。そして、東洋貿易シヤートル支店に勤務したが、同社が東北鉄道の敷設工事を請負っていたので、四年間氏は工事の現場監督をした。次にバラマトン軍港に行き戦艦ニューヨーク号のボーイとなり機関長従卒として四年間を軍艦に乗り組み、明治三十八年に日本に帰国した。この年結婚し、再び渡米した。今度は加州スタックトン市近郊の邦人馬鈴薯作りの機械係りとなり、三年後ロスアンゼルス市に出て野菜市場の委託販売人となった。この間にも三回日本に往復したが、大正五年北米生活を打切つて故郷に帰り、父の失った田畑山林を買戻し石田家を再興した。しかし長い外国生活の身に沁みている氏には狭い故郷は住みにくく、昭和四年、移住組合に加入して、バストスに移住しグロリア第二区に入植した。多くの直来移住者は開拓の労苦に耐えかねて不平不満を、ブラ拓当局に投げつけたが、北米で外国生活を卒業している氏は、斯うした不平組を諭しなだめて、移住地の平和を守つていった。

少年の頃から、世の荒波にもまれ、さまざまな人生を體驗して来た氏は、人格的にも精練されていて、自ずから衆望を担う器として、副区長を十三期に亘つて勤め又産組の評議員となり、公共の為に盡瘁して来た。又縁結びの名人で、現在までに四十組の仲人をして来て居り、誠實温和な人柄を讃えられている。フサ夫人との間に、一女幸子さんがあり、夫人の従弟に当る良一氏を迎えて婿養子としている。

石 田 良 一 氏

高等小学校卒業後、洋服屋に見習として一年半勤めていたが、

石田氏から海外の話聞き、外国に憧れていた。たまたま石田氏が南米移住を決意した際、家族にすすめられ自ら望んで、石田氏の家族の一員として加りバストスに直来した。土地が高味であつたので珈琲を植え、棉作と合わせて経営して来たが、養蚕をはじめたので、珈琲栽培を放棄し以後養蚕と雑作を続けて今日に至っている。結婚は一九三四年、石田氏の娘幸子さんの婿養子となり、養父を扶けて事業を進め、一九五一年以来、養父の後を承けて、副区長をつとめ、現在区長として活躍し、又連合日本人会代議員をもつとめて、バストスの繁栄につとめている。夫人との間に三男五女（良昭、初枝、マリ子、君枝、光枝、清人、昭仁、喜代子）の子賓に恵まれ、平和な家庭を築き、整った模範的農家として、バストスの将来に重きを為す人である。

資性温厚、篤實、その勤勉實直さは世間から親しまれている。

都 築 實氏

（愛媛県西宇和郡日土村）

（写真）

都築氏の庭に一本のユーカリ樹がある。圍周四米余、土中深く根を張り、亭々として枝葉をひろげ、両にも風にも巖然として聳え立っている。都築氏は来訪する人ごとに「この木は私の二十五年來の友人です、私が此処に入植した時に日本から持って来て種を蒔いたものです。私が此処で、どうして生きて来たか、何時泣いたか、何時笑ったか、この樹は皆知っています」と、さもいとしげに、この樹の肌をなでながら話すのである。

この樹の成長と共に氏は事業を広げ、この樹が根を張ると同じく、氏は土台を固めて来た。バストス永住の覚悟を据えている氏の姿をこの樹が象徴しているかのように見える。いやバストス最初のユーカリ樹たるこの木はバストスそのものを象徴する樹かも知れない。

都築氏は、農家の次男に生まれ、高等小学校を卒業すると同時に、清水医院の書生となり徴兵検査まで勤めていた。家に帰ってからは、蜜柑の出荷組合「日の出組合」を創立して、その経営にはげんだが、事業不振に陥って解散した。又各期を酒屋に勤めて、酒造に携る事十ヶ年、酒造の業を身につけた。

大正十一年に結婚して長女、長男を儲けたが、不幸長男の死に逢い、味けない日々を過して居た。ふとした事から、伯国の事情を聞き珈琲園のコロノでも楽に金を蓄める事が出来るのではないか、伯国で酒造業をすれば、大金を掴むことが出来るに違いないと思いい、ブラジル移住を決心した。

移住組合に加入してバストス、グローリア第二区に直接入植し、珈琲を植え、牛を飼った。牛の飼育は同区では最初のもので、次第に殖えて十頭となり土地の拡張に迫られて来た。

将来牧畜で立つ為にプルデンテ方面に広い土地を見つけ、移転しようとした時、戦争がはじまり、移転の手続きが困難になったので、やむなく移転を諦め、ようやく好況が伝えられはじめた養蚕に着手した。終戦と共に養蚕不況がやって来たが、養蚕を継続し、三年間位は、納める繭の代償として、ブラ拓より食糧の配給だけを受け、不自由を忍んで来た。しかし、氏のガンバリズムが効を奏し、近年養蚕も好調糸価も高騰して、次第に経済的に恵まれ、知らず知らずの内に、ゆるぎの無い基盤が固められていた。

現在十域の桑園と五域の果樹園を持ち年産千五百キロの繭を收穫し、余裕しやくしやくと農を楽しみ励んでいる。

氏が少年の日に勤めた清水医院から貰ったユーカリの種子を、庭に蒔いた時、この種の芽げえて伸びゆく木と共に、と決意して、家屋も井戸も一切人手を借りず、妻と二人で建設した、その家に今尚一家は住んでいる。生来器用な氏が、永住の決意を籠めて作った家は今尚ガツシリとして微塵のゆるぎもない。二十五年の昔建てた家でそのまゝ残っているのは、恐らく、バストス唯一の家であろう。

氏は物事に入念な、そして器用な人であるが、又ホーリネス信徒として誠意溢れる人柄で、衆に推されて組長の職に在る事も度々でよく公共の為に労する吝かでない事も知られている。

家族は夫人と共に一男三女、女子はそれぞれ結婚して幸福な家庭に入り、今は長男と三人の小家族であるが、土中深く根を張る氏一家の将来は期して待つべきものがあるであろう。

上 国 儀七氏 (三重県阿山郡山田村)

(写真)

儀七氏は郷里の山田村でも裕福な自作農で兵役を終えてからは、村の中堅として重視され、家業は殆ど使用人にまかせて、村会や農会の役員として活躍していた。

学校を終えて鉄道省に奉職していた子息敏夫氏が、或る日「僕はブラジルに行き度い」と言い出した。突嗟の事に驚いて、そのわけをきくと、敏夫氏は、従兄の友人でブラジルで成功して帰っ

た男があり、その友人の話では、ブラジルは夢のような天国で、金などいくらでも儲かるとの事、例え話半分としても、広大な土地、温暖な気候の国土に住むことは人生至上の幸福ではないか、と言
い、しきりに渡伯を望み、もし、父が不賛成であれば、単身渡航
の決意を示した。元々進歩的な思想の持ち主であり、日本の世情
にも明かるい父儀七氏は、子供の将来を考え、敏夫氏の祝に賛成
して、家財を整理し、氏が四十二歳の時、一家をあげて勇んで一
路伯国にむかつて国を出た。サントス上陸後直ちにバストス、グ
ローリア二区に入植した。

資金に不足はないので、どしどし土地を拓き珈琲を植え事業を
拡張して行つたが、作物の値が下落して利益はなかった。そこで
吉田興三吉氏と共営で珈琲精撰工場を建て、家運の挽回を計つた
が、霜害の為珈琲の産出が止つたので、四年間を苦心経営して来
たマキナ運転を止める外はなくなった。斯うして日本から持って
来た数万円も使い果し、生活苦がおとずれようとしたが、上田氏
父子が入植以来鍛えた開拓魂は、たよるべき物質を失つてはじめ
て、輝きを現わしはじめた。

珈琲工場を閉じると、敏夫氏は産組の事務員となつたが、ブラ
拓の松本氏から人物を見込まれて招かれ、会計部員として鋭敏な
腕を揮い、家族の人々は、それまで、殆どカマラーダまかせにし
ていた農園に立って、泥まみれとなつて働きはじめた。氏等一家
は資本を失つて働くよろこびを知り、大地の恵みに目覚めた。

第二次大戦の勃発以来、敏夫氏もブラ拓を退き一家心を合わせ
て棉作と養蚕にはげんで現在にいたつた。人生というものは實に
不思議なもので莫大な資金を擁していた時は、金のやりくり我心
を勞し、しかも年々悲境に陥つたが、全べても失つて、懸命に働

きはじめると、次第に余裕が出来、年々と好境にむかい、希望の光が暖かく射して来たのであった。

儀七氏は入植当時、区長、学務員、産組評議員などに歴任して、村政に貢献した。又子息敏夫氏は、少年時代よりスポーツに秀で、青年の頃は万能選手の名をうたわれ、入植以来連合青年団の運動部長、会計などをつとめ、又戦前には野球監督としてバストス軍を率いて全伯大会に駒を進め、聖市軍と決勝を争ったこともあった。そして戦後も野球監督となり後進の指導につとめ、バストス野球界に缺くことの出来ない存在といわれている。

敏夫氏は一九三五年に、鈴木清三氏三女マサさんと結婚二人の子女あり、一家和合して美しい家庭をいとなんでいる。移住地の中堅として、大いに将来を嘱望されている氏の前途に幸あらんことを祈る。

前田 甚吉氏 (三重県志摩郡磯部村)

(写真)

前田氏がバストスに百十アルケールの土地と二百頭の牛を持ち、なお、マットグロッソ州に約三千アルケールの土地を購入し、オズワルドクルース市の目抜の通りに家屋を所有して、今日伯国にゆるぎのない地盤を築き、未来を望んで、大飛躍を遂げようとする体制をとり得たのは、氏が他人より常に一步先んじて事に当る強烈な先駆者魂と、物事の見通しに明かるい頭脳の明敏さによるものである。

氏は郷里に在る少年時代は、農業補習学校や、未来の船長を夢

みて入学した商船学校中途退学のやむなきに至った程、身體の虚弱に苦しんだが、医師であつた従兄の家に寄偶して、病魔を降し、兵隊検査の時には甲種合格、くじ逃れという立派な體を取戻していた。

世界の国々に華やかな夢を結ぶ船長の夢も破れたので、北米雄飛を決意したのは二十一歳の時であつた。その頃、伯国イグアツペ植民地の入植者募集が喧伝され、最初の北米渡航を南米に変えたが、独身者は採らないといわれた。二十六歳の時、結婚して、實弟をつれ、渡航の仕度を整えたが、両親の反対にあつて断念し、十数年を経て、長女の十三歳を迎え、従兄をも家族の一員に加えて一家六人、勇みに勇んで郷里を出発し、バストス、グローリア二区に入植したのは昭和五年であつた。

少年時より身體には氣をつける習慣がついていたので、移住地生活一ヶ月、既に食生活の不備に気づき、牛を飼育して牛乳を攝取する事を考えた。好いと思えば、直ちに實行するのが氏の持ち前である。貴重な開拓資金を割いて午三頭を買込で家族の栄養に万全を期したが、これが、今日のバストス牧畜の開祖といわれる由縁であり、氏が二十五年間を経て二百頭の牛を飼うはじまりを為した。

牛を殖やし、棉を植え、模範的な農場を經營して三年目の事である。景氣のよい新開地を日ざしてなだれ込んで来る伯人力マラーダを慰撫する為、遊廓が設けられる計画がある事を耳にした氏は無智なカマラーダから日本人良家の子女を護る為に、又伯人力マラーダを他地方に流離させない為に、許可を得て市街地に、カマラーダ専門の遊廓を造った。この事業は綿景氣養蚕景氣の波に乗って最初は大いに儲つたが、養蚕不況と共に、家賃も入らず、

伯人支配人の給料も出なくなつたので、スツパリと取り止め牧畜の方に専心するようになった。氏は入植八年目に糟糠の妻を失つたが、後四年を経て現在の夫人を迎え、四人の子供をあげた。三女、次男、その他いずれも聖市の上級学校に在学し、小学校に在る子供等を合わせて、子供九人が在学し、十八人家族という稀に見る大家族である。

常に先の先までを見通し、雄大な事業を大まかに、こせこせしないのが特徴であつて、何時の場合も人の上に立つて事業の採胤を振って行く、事業道楽を以て趣味とする氏の人生こそ、楽しくも又朗らかな生涯と言ふべきである。

氏は言う「自分はかつて苦勞というものを経験したことがない、どんな苦痛を體驗したとて、自分にはそれが苦勞とは感じられないのである。と。こゝに不撓不屈、前進のみある人生を歩む前田氏に、絶えず明るい前途が開かれてゆくのであらう。

吉浦秀次郎氏 （福岡県糸島郡可也村）

（写真）

吉浦氏は家庭的に不運な星の下に生まれた人で、八歳の時實父に死別し、養父熊吉氏の手に養育され、渡伯直後最愛の妻を、そして続いて養父をも失つて、老齡の母と子供三人を抱え土地開拓の労苦を嘗めた。そして入植三年後に日本より迎えた妻とも亦一九四六年に死別して、骨肉相別れた悲涙にむせびつゝ、ひたすら農を守り通した人である。今日氏は五男三女の優秀なる子女に取り囲まれ、幸福そのものゝ人生街道を歩んでいるが、それは、如

何なる悲運にもくずれ折れなかった氏の毅然たる性格と、温良玉の如き人格の然らしめた所である。

氏は都立農学校卒業後、養蚕を主とする農業に従ったが、村の中堅として、青年団顧問、消防部長、進農会幹事などをつとめ、県の養蚕指導員となつて、養蚕の箱育技術の腕を揮い養蚕界に貢献した。

青年時代より海外に關心を持っていたのでバストス移住組合に加入し、ブラジルで理想的な養蚕業を営むことを望んで渡伯した。グローリヤ第二区に入植、珈琲を植え、耕作につとめた。当時、ブラ拓で製糸工場を経営していたが年々の赤字に喘いでいた。氏は製糸業の将来性に着眼し、工賃制で製糸を請負い、製糸技術を改良し、冗員を淘汰し、優秀蚕糸を製造したので、遂に黒字を出す所まで漕ぎつけたが、蚕糸業組合の創立を見、同組合が製糸工場を経営することになったので、いさざよく一切を移管して、再び自分の農園に帰った。棉作、養蚕を戦後までつづけ、新養蚕組合の顧問として、蚕業界に盡力した。又戦時の昭和十七年グローリア区々長時代に、地力の減退を憂い、自給肥料を目的として区民に養鶏を奨励した。

終戦直後、養鶏組合を創立し、組合長となつて、バンデイランテス産組と連絡していたが、健康をそこない、一ヶ年後に辞職した、組合員はそのまゝハンデイランチス産組に加入した。

一九四九年に家庭の都合上養鶏をやめ、以来西瓜栽培に専心して現在にいたっている。

氏は養蚕業指導者として、養鶏業の先駆者として、又西瓜栽培の先覚者として、常にバストスの歴史と共に興亡した特殊諸産業の尖端を歩んで来た。最近は年間三百トンの西瓜を市場に送り、

一ヶ年三連作の記録保持者として、農業研究に熱心なことは比肩する人を見ないといわれている。

区長、産組常務理事、幹事、評議員などを歴任し、村政に參與して大いに寄與するところあり、熱心な「生長の家」信者として、尊敬されている。氏は言う「人間というものは、如何に賢くても、如何に勇気があつても、又如何に情に厚くても、宗教心なき者は、本当の人生の醍醐味を知らず、眞實の人生を完うすることは出来ないものである」と、氏の如き円満無碍の人にして、はじめて言うことの出来る言葉である。人生の幾山河を踏み分けて高嶺の月を仰がんとする氏の健康を所るや切なるものがある。

前述した如く、氏は人生最大の不幸を骨身に體驗した人であるが、如何なる悲運にも屈することなく、敢然と興えられた運命と戦つて来た。そこに人間として世に生れた意義を悟り、宗教を把握した。氏の如き高邁な信者を迎えてバストスの「生長の家」が發展することは、当然であろう。

新津 牛丸氏

（北海道網走郡女満別村）

長野県南佐久郡に生まれ、小学校を出るとそのまま、家で農事にいそしんだ。十九歳の時、北海道に渡った。次男のこととて自由の身ではあり、同地には親戚に道會議員があつたので、これを頼つたのであつた。当時、十勝地方には、水田というものは皆無であつたが、氏は、水田を作った。十勝の水田化に功績あり、政府から無償で五町歩の土地を得た。一時は、村で屈指の納税者となるまでに漕ぎつけたが、不況に加うるに凶作で、失敗した。

四十四歳の時、樺太に渡った。樺太の政府払下げ地五十万坪を、借地で手に入れたので、これを牧場にするつもりであつたが、結局、立木を売り、その木樵人相手に野菜作りを始めた。面白いわけではない。之も途中で放擲して、今までの、北へ、北へを逆転し、一思いに、南の国ブラジルへ鉾先を向けることにした。

この一大方向転換には、当時アメリカにいた令弟から、日本が面白くないならば、ブラジルへ渡られては如何、と奨められた故もある。あれこれ、海外に関する本など読み漁っているうちに、渡伯の気持は動かし難いものとなつた。一九三〇年、之を實行に移す。

ノロエステ線カフエランジア駅セルボン耕地内のアウローラ珈琲耕地にコロノとして一年半を過した後、同駅パーカ植民地にこれまたコロノ生活の一年を送った。これらコロノ生活は、二耕地ともパトセン運にめぐまれず、すっかり懲りた夫人から、手を合わさんばかりに、土地を求めて独立してほしい、と説かれ、バストス移住地グロリア第二区に、十域の土地を求めて、ここに始めて、地主生活に入ることになった。土地は低みに在り、棉作には適しなかつたが、それでも最初の一、二年はこれを試みた。が、土地の不適は致し方なく、蔬菜栽培に転じた。當時は同業者の数も至つてすくなかつたものである。爾来、今日まで二十三年間、営々として蔬菜栽培たゞ一筋。いい加減に転向しては如何、と奨める人もあるが、今後も之を継続して行く意だ、と氏は言う。「野菜なら、新津さんの所へ行けば何でもある」との評判があるほど、ほとんど、大方の野菜はそろっている。

十一歳の時から、俳句を、十七歳から短歌を始めた、という氏は、北海道在住時代には日本歌道奨励会というのに入り、毎年、勅

題には必ず詠進している。四二年七月一日からは志を立て、一日一首ずつの短歌を作り始めた。最初は三年間作るつもりだったのが、延長して五四年六月三十日までまる十二年間、一日も休まず作りつづけて来た。宴会などでも、即興的に、三十一文字を詠みあげる。

氏の趣味を見ても、氏の足跡を見ても、どこかロマン的、楽天的なところがあるが、りわ夫人は気丈な働き手で、正に理想的好配偶というべきであろう。

次男聖子君は、陸軍航空学校卒業後、北大河州のナタールに勤務し、三男の普君はマツトグロツソ第二師団の兵役を済ました後、家業を助けている。

老いず、死なずの心を生活の明るい信條とする新津氏の一家は、家名そのまゝ、生新発刺たる雰囲氣に包まれている。

管井国三郎氏（山形県西村山都宮宿町）

（写真）

農家の次男として出生。小学校を卒える頃から、何とかして自由な新天地へ渡って、思い切り生甲斐ある活動をしてみたい、との念願を抱くようになった。雪深い故郷から東京へ出たのは十八歳の時のことであつた。ブラジルへ行きたい、との希望實現の第一歩であつた。しかし、これはうまく行かず、一応、山形へ帰つた。しかし、どうにも断念出来ず再び上京した。一文の用意もない。まず横浜税關構内の労働をやり、ついで鶴見造船に入った。将来、船員としてブラジルへ渡りたいというところからである。し

かし、船員にはならずとも、自費渡航の用意が出来たので、結婚し、レジストロ目指して日本を出た。当時、レジストロ以外に、土地を求めて入植出来るところはなかったのである。

一九二〇年冬、レジストロに入り、四年間米作に従事した。ついて海興の姉妹耕地セツテ、バラスに指導植民として入植した。ピニング製造を始めたが、カンナの二番刈りが出来ないもので、これは失敗に帰してしまった。視察のた聖ノロエステ線アラサツバ方面を廻って、同駅ペロバール耕地に四年契約で入植することになった。折しも、珈琲不況は底をつき、仕事に不馴れな故もあって、これまた失敗の憂目を見た。契約の四年を、了解を得て二年で解約して退耕した。が聖公会の信者である氏は、土地の同じ信者のもとで二年間、養豚を行つた。神の試練はどこまでも続き、氏は計らずも腎臓病を得て一年有半を呻吟しなければならなかった。氏は、日夜、聖書を読んだ。暗い生活の谷間にあつて、それは一種の燈火となつて、氏を力づけた。当時、長男集君は僅かに十三歳でしかなかった。

一九三三年独立記念日に、バストス移住地ボン・フィン区に土地を求めて入植した。時あたかも棉作勃興期に当つていたけれど、土地を大切にして之を次代の者に残そうと、マンヂオカを半域栽培し、澱粉製造を開始してこれを持続すること三年にして、ようやく棉作に転じた。綿作を三年間行う一方、養蚕を手がけた。

子弟の教育というものを、自分の生涯の事業と見る氏は、現在のグローリア第二区、町の近くに転じた。それまで四人の子女はボン・フィン区からこの町に通学していたのである。

同区在住の吉田氏の指導によつて、七百羽をもつて養鶏を開始した。当時、繭代が釘付けとなつて、経済的にはかなり苦心した。

現在所有土地面積は七十域のうち牧場は五十域である。四千五百羽の成鶏を擁しているが、年明ければ一万羽にまで増やすという計画の由。ボン・ペイア市に、三人共営の孵化場を経営して居り、孵卵器は二万五千個の種卵を収容することが出来る。

氏はまた、区のために盡くすところ少からず、ボン・フィン区在住時代には、四年間学務委員を務め、また父兄会長、衛生部長に任じた。皇紀二千六百年祭には、公職功労者として表彰をされた。

萩原 宅治氏

(岡山県倉敷市)

(写真)

書いた上に亦書き又書き果ては、眞黒な紙帖となるのが手習草紙である。「自分の過去は手習草紙である」と言い、立派に清書する日を未来にのぞんで、今日を最善に生きているのが萩原氏である。氏は、岡山県産物の花形、花筵製造を業とする農家の三男に生まれた。十九歳の時父が亡くなり、實兄友四郎氏と協力して家業に励んで来た。農村不況の折から、一攫千金の夢を抱き、十年一稼ぎ錦衣帰郷を胸に描いて實兄一家の一員として昭和五年に渡伯した。直接バストスに入り、グローリア二区に入植、珈琲、棉、米、牧畜等を試みた。一九三四年、アルト区在住上田氏次女はるえさんと結婚して独立し、現在の地区十域を求めて兄一家と分離した。棉作で終始する筈であったが、周囲の桑園化によって殺蟻作業にさしつかえ、遂に養蚕に変わったが、體に適せず、健康を害

し、行き詰りを感じていた。そこえ養鶏がじはまったので、すぐに鶏に移り以来養鶏一本槍で今日に及んでいる。

現在二千羽を飼育し、堅實に経営して、子女の教育に努めているひ 性来、着實温厚で、夫人と共に読書を好み思索をよろこび、多少苦労性の人であつたが一九五〇年に四男パウロ君の死に逢い、人生を達観して、物事へのこだわりを捨て、未来に希望を抱いて充實した日々を過すことをモットーとしている。

風間 啓蔵氏

(山梨県八代郡錦村)

(写真)

一九〇五年、農家の九人兄弟の長男として出生。高等小学校卒業後、中学を二年で退き奈良本部の天理教校に入つて之を卒業した。帰村すると、自作農たる家業に従事した。

同村出身の網野氏の呼寄せで、第一アリアンサ移住地の同氏の許に入植すべく渡伯したのは、二十五歳(一九二九年)の時、新婚後、間もない頃であつた。

入植すると、珈琲の四年契約で、四千五百本を受け持った。精励一番、五年間に、当時としては大金の三十コントスを挙げた。柑橘栽培の目的でリオ市近郊カシヨエイラに二域の土地を求めた。山伐り最中に、家族中マラリアに冒され、殊に夫人は死の一步手前という重態に陥り、リオの病院に入院した。同じくリオ市近郊の避暑地テレゾポリスに蔬菜栽培に赴き、二年後、棉景気の謳われていたバストスを目指して転じて行つた。三八年のことである。

当時、蔬菜栽培の全盛期で、同業が二十四家族もあったが、独特の技術でこの堅壘に喰い込んだ。殊に、バストスのトマトは氏によって市場に進出し得るだけの品質にまで高められた。現在西瓜の年産は七十トンに上り、大規模の蔬菜業者としてはバストス一、二を争う程である。氏は同区の区長を務めること二年、副区長四年、また八年間、産組評議員を続け、幹事たること一年。第三組の共同購買販売組合の組長一年を務めるなど、人望極めて厚い。

村 上 章氏

(岡山県倉敷市)

(写真)

僅か七歳で生母を喪い、温い母の愛に幸薄かった氏は、どんな物質的な豊かさよりも、人間の愛情を切に求めていた。淋しい少年の心を一九三〇年モンテ・ヴィデオ丸に托して、渡伯、新天地に運命を拓くことになった。父寿太氏に連れられ、大きな希望もなく、バストスに直来、草分け入植者として農に従事したが、やがて菓子店の見習いとしてバストス町に出、再び父の元に戻った。不況の為折角入植当時植えた珈琲も伐り、棉作農として土への再出発をなした。

二十六歳の時結婚、以来独立分家し、棉作と養鶏方面に新しい人生の開拓を試みた。独立第一歩は比較的好況であったが、やがて繭の不況と共に養鶏に切換えた。養鶏も先覚者組に数えられる人である。

現在、所有土地六域、鶏二千羽、水道、点燈の諸施設完備し、全

く新らしい近代的な農園と呼ぶにふさわしい経営振りである。子供は六人、二男、四女で四人がグルツポに通学しており、これらが奮発といえる人である。

氏は又熱心な読書家であり、「生長の家」の篤い信者でもある。「異郷の空で母方の親戚がなかったことが淋しかった」と述懐する氏も、今は良き夫人を迎え、温い情にうるほった家庭を築いて子弟教育に専念している。

三宅利喜松氏

(岡山県倉敷市)

(写真)

少年の頃は病弱であつたため親は教員にする希望であつたが、それもならず中学を中退、それから氏の多岐な人生航路が始まつた。後大阪市に奉公に出た。鈴木商店、吉田商店と勤務したが、恩郷の念切なく、折角一人前の職人になりながら帰郷。以後百姓をし、一町二反を耕作、收穫機、脱穀機、精米機、水揚ポンプ等を使用する、村では機械化農の先駆をなした。

たまたま、伯国帰りの人が黄金風を吹かせるので十年計画として同部落の四家族で渡伯、二九年十二月グロ丁リア第二区に入植した。その後構成家族であつた従弟星島唯夫氏と別れ、珈琲二万本を植付けた。が珈琲は不況に続く霜害に遭い、全く、予想と異つた辛苦を喫したものであつた。

棉作に転向してから好運に向かい、喜んだのも束の間、養蚕の不況と同時に数十コントスを商人にひっかつたりして、七転八起の苦しみを味った人である。その頃から養鶏を始め、これを専

業として現在に至る。又五四年から再び養蚕も初め現在では、繭は年産一千キロを超える。鶏は二千五百羽、鶏卵の年産六百箱。

土地は十アルケールで、鶏舎は、点燈、水揚ポンプの設備があり、文化農園を築いている。氏は元来、機械に対して趣味を有ち、その器用な腕を振ってことごとく家庭内に到るまで機械化できる部分を機械力をかりている合理農の家である。

萩原友四郎氏

(岡山県倉敷市)

(写真)

一九〇二年、花筵製造家の次男として出生。小学校五年生の頃母君を喪った。早くから家業に努め、十七歳ごろからは父君に代わって、織機三十台、職工七人の事業を切り廻わした。氏は、これに動力を入れて、機械化しようと計画中、既にブラジルに在る親類の人からの通信や、ブラジル宣伝に、かねて胸中に去来して止まなかった花筵製造業の将来性に対する不安から、遂に、渡伯を決するに到った。三〇年、バストス移住地グローリア第二区に入植、今日まで二五年間、バストスの土と取り組んでいる。

入植するや珈琲一萬本を植えたが降霜に襲われ、三七年頃、全部代採して棉作を行なう。地味減退著しく、四二年、養蚕に転じた。ブラ拓の原蚕飼育をやり、好成績をあげた。蚕糸不況と共に、早くも養鶏を開始して、養鶏ブームの機運をつくった。以来今日に及び、委托種鶏飼育を行なっている。原蚕飼育と言い、種鶏飼育と言い、研究心旺盛な、技術卓抜の氏ならではの、感が深い。現在、成鶏三千羽を飼育、次期育雛は二千羽の計都との由。家族の

手は揃って来たし、之からという張切り方である。

二十歳の若さで結婚した氏は、長男から三男までの愛児を喪い、精神的な傷手は深かった。今、二男二女が夫々、中学、家政学校に通学している。

草野 岩吉氏 （鹿児島県河鍋郡西南方村）

（写真）

南国、鹿児島島の明かるい農村に、明かるい希望いっぱいの人となった。少年期から、習い覚えた竹細工を独立して初めたのが二十四歳の時。生まれつき器用な氏の、作品の美しきが評判を呼び、二年後には見習いを七人も置く竹細工では村一番、郡内でも有数な斯業の成功者となった。が表面華美に見える業のため、課税が多く、他県にまで売り出すにおよんで村内でも中以上の納税者となった。しかし、事業が大に過ぎたとしてもいうのだろうか、経営は損失を招くことになった。

たまたま移住組合に應募し親族一同十八人の大家族を構成してバストスに直来、ファルソーラ区に土地を求めて入植、その後同行の二家族と別れ、グローリア第二区に移転、不況のため折角の珈琲を伐り、棉作に代えて相当の成績をあげた。が長男及び次男が勉学のため出聖し、手不足となったため、養蚕、養鶏もやめ、昔とつた杵つかともいうべき竹細工を始める。遂にこれを専業とし、故国での失敗を盛返す意気込みで、遂に一転換を行なった。現在では、花籠、台所用具、棉摘用その他竹細工の一切を製作し、パウリスタ全線に販路を持ち、バストス名産の名を咨にしている。

溝 部 優氏 (山口県大津郡宇津賀村)

(写真)

氏はバストス産組専務であつた故幾太氏の實弟である。日置農林学校を卒業すると、岩国にあつた県所管の経済蚕飼育伝習所で、養蚕を専攻すること一年、出でて家業を助く。

父君竹次郎氏はじめ十二人という大家族でブラジルへ渡つた。氏としては別にとり立てて言うほどの希望があつたわけではなく、家族の動くままに、この国へやって来た、といった恰好である。

モジアナ線セラナ駅マルチノポリス耕地に一年のコロノ修業を卒えると、ノロエステ線カフェランジア駅平野植民地に転じて、珈琲栽培の二農年を送つた。

たまたま實兄義雄氏が畑中仙次郎氏と共にブラジル拓植組合に入社し、バストス移住地事務所に在つたゆかりから、三〇年、第二の在伯入植者として同移住地グローリア第二区に転じた。

珈琲六千本を植えた。何しろエンシャード八挺を一家に擁してゐるのだから、めざましい限りの働きぶりであつたにちがいない。

三四年、同移住地ファルソーラ区在住の古田千太郎氏(山口県人)長女静子さんと結婚し、同区に地区を求めて分家独立、新しい人生のスタートを切つた。珈琲四千五百本の他一域の雑作、半域の米作を新婚の二人だけで始めた。

惜しいことに、三七年の大降霜で、珈琲樹を全部伐り払い、難作を止めて、養蚕を始めた。日本の学校で習得した技術を生かすときが来たのである。折よく繭景氣が出て、夫妻で、七、八十グラムの卵をかえした。景氣の波に乗つたが、やがて来た暴落に、結

局、産を成す、というところまでは行かなかった。

終戦前の、養蚕景気時代、すでに養鶏に着手していた氏は、バストスでのトップを切っていたわけである。繭価の暴落を境として、完全に養鶏に切りかえた。

氏は、バンディランテス産業組合の出張所の前身である鶏卵出荷組合の創始者であった。氏の養鶏経営は、バストス移住地養鶏勃興の導火線となった。

しかしながら、その養鶏も、五〇年ごろから採算合わず、となして止め、西瓜栽培を始めた。今日、同移住地の名物化したこの西瓜栽培も、氏をもつて嚆矢となす。現在は、年産四十トンを超え、聖市にも出荷している。ポンプを購入して、動力で大規模栽培をなし殊に、季節はずれの作を狙って、成功を収めつつある。

五三年からは一域の果樹園形成を計劃し、柿、柑橘、葡萄などの苗仕立を行いつつある。

以上の如く、養蚕と言い、養鶏と言い、また西瓜、果樹と言い、何れも他に率先して新分野を開拓し、殊に前述の如く西瓜をもつてバストス名産の一たらしめるに到ったなど、その功けだし没すべからざるものがある。またその経営も、いわゆる先づ走りのな杜撰なものではなく、飽くまでの確なる見通しの土に立つ、堅實極まるものである。

氏の兄弟諸氏は何れも農を去ったが、氏のみは、数々大地を相手として生き抜いて行く純粹な農人型である。人と争うを好まぬ、円満穏和人柄。かつて短距離、走高跳に、バストス軍の一員として遠征出場したこともあるが、今は一線を退いてよく後進の指導にあたっている。

夫妻ともに読書を好み、夫人は殊に園芸に深い趣味をもってい

る。長女貞子さんは家政学校を卒え、次女政子さんは同校に在学中。

吉四興三吉氏（石川県石川郡吉野谷村）

（写真）

吉田氏は、金澤第九師団に入営し、同時にシベリアに出兵した。狭い日本の片田舎に育った青年吉田氏は、広漠たる大平原シベリヤの野に立って、大陸の雄大さに圧倒され、海の外には、こんなに広い土地があるのか、と海外移住の希望を抱いた。シベリヤに一ヶ年、帰国して一ヶ年を兵隊として過し、除隊すると熱心に海外渡航の手づるを求めた。その頃のブラジル移民は、家族者だけではなく許可しなかったので、最初はフィリッピン渡航を企てたが、よい手づるもなく困っている時、第一回ブラジル単独移民が許可されたので、大毎移民と同船して渡伯した。はじめは、ソロカバナ線アバレー駅、イングレース耕地に入り四ヶ年自炊しながら棉作に従い後、今野米吉氏次女きみ江さんと結婚して、一九二九年十月にバストスに入植した。最初はブラ拓の製材所の仕事をした。次の年にはグロリア第二区に土地を求めカンナを植えてピングの製造業に着手し、十五年間、年産六万リットルのピングを製造しつゞけ、全バストス及び、各地に供給した。しかし、年々地力が減退して、カンナの育ちが悪くなったので遂に工場を閉じた。又入植三年目からは煉瓦かわら工場を設け、年産三十万個を製造しつゞ、これも十五年間経営したが、原料となる土が缺乏したので停止のやむなきにいたった。又入植五年目から珈琲精撰工

場を上田儀七氏と共営したが七年後、降霜の為珈琲の産出が止つたので廃止した。一九三五年、養蚕景氣の波に乗って、絹織物工場を村井利三郎氏と共営したが、養蚕不況と共に原料不足の為に立ち行かなくなった。一九四〇年、マンジョカ工場を起し四ヶ年経営したが、これ又原料不足の為行き詰つてしまった。氏は工業方面に興味を持ち、企業の才能に恵まれているので、種々な農産加工業を起したが、原料不足などで多く取りやめのやむなきに至つた。一九四〇年より養鶏をはじめ、煉瓦工場、マンジョカ製造を中止するに及んで、その方に主力を注ぎ、一九五二年より、三人共同で孵化場をも経営し又、牧畜にも力を割いて、現在、牛百八十頭、鶏五千羽を飼っている。

最初工業家を以て立とうと志した氏が、遂に農場主として今日成功を収めたことは、なかなか興味ある事であるが、これも、氏の運命であつたと思われる、しかし、氏の企業に対する天賦の才は、何時か新しい事業に發揮される日が来るであらう。

家族は長男功君は工科大学在学中、次男勲君豊岡商在学中、二人の子女は、それぞれ結婚して幸福な家庭に入つて居り、氏は後顧の憂なく、牛乳加工、鶏肉加工等について、想を練りつゝ、次の飛躍にそなえている。

氏は前述の如く、バストスに移つて来た當時は、文字通り裸一貫であつた。製材所の材木運搬係りとして牛車夫として就働した。以来、腕一本で半生を叩き上げ、今日の經濟基礎を築き上げたのである。氏に企業的才能があつたとはいへ、これまでに事業を進展してくるには容易ならぬ努力があつたこと勿論である。誠實に働く――を人生のモットーとし、他人に迷惑をかけない、他人を頼らない。飽くまで自己を伸ばす、という不撓不屈の闘志こそ、輝

かしい人生を誕生せしめた要因であつて、何人の真似のできるものではない。趣味は読書、もっぱら晴耕雨読を楽しんでいる。

伊 勢 島 省一氏 （山口県大津郡宇津賀村）

今年、喜寿を過ぎること既に三年、なお壯者を凌ぐ元気で、区に於ける家屋建築や設計の指導に当っている氏は、なくてはならぬ人として多くの尊敬を集めている。嘗つては、第二グローリア区の舊会館や新会館を一人で建築した人である。

氏は一八八二年生まれで、先祖からの家業である石工職として、早くからその器用さを認められていた。大正末年から昭和初年に於ける日本の不況時代、氏は子女の将来を慮つて、折角の家業を後にして、一九二五年七月、一家を挙げて渡伯したのである。最初モジアナ線セラナ駅マルチノポリス耕地に珈琲コロノとして一万二千株を受け持った。いわゆるモジアナの石山に三年頑張った。

バストスの視察者として来植、畑中氏の誘いによつて、直當地珈琲園のフォルマを始めた。これはバストスに於ける珈琲栽培者の嚆矢となつた。翌年グローリア区に土地を求めて入植、以来、農業に専心すること二十五年。珈琲の不況から棉作に転じ、やがて養蚕に換え今日に到る。その間、一家健康で、「これだけが儲けもの」と氏は述懐するが、今日まで順調な生活をなし得たのも、健康のためと言つて過言でない。

現在所有土地二十アルケール、うち牧場二アルケール、桑園三アルケール。三男四女あり、皆分家してそれぞれ相当の成功をしている。長男義忠氏は精農家として名があり、父君のよき

扶けとして二十年前かち戸主をつとめている。「子供のためバストを墳墓の地としたい」と語る氏は正直一途な人として多くの人の信用が篤い。

岡 森 嘉 平氏 (三重県阿山郡山田村)

中位以上の自作農の家に生れた氏は、長ずるに及んで、牧畜を加えた立體農業経営を理想とし、その實現が一貫した念願となった。そうした希望を充分に實現化せしめること即ち、三二年の渡伯であつた。一家五名でバストス移住地グローリア第二区に入植。珈琲八千本及び雜作を初めたが霜害のため伐採、次いで四〇年から養鶏を始めた。当時カスカッタ区の渡部氏から雛を入れて、共同飼育をはじめることを提唱し、鶏卵の共同出荷即ち聖市出荷を計劃、飼料問題解決と鶏卵販路を開くためバンディランテス産業組合員としてバストスに於て活躍したのは氏を以つて嚆矢とする。当時既に将来性を見抜き、以来養鶏專業として今日の成功を見たのも、氏の卓見によるものと言えよう。氏はその後、秀でた技術が買われ、コチア産組の種鶏種卵担当者となった。バストス養鶏界草分の第一人者といえる。

他面、氏は、バストス地帯の地力消耗は必然的に牧畜か家禽飼育による農法に帰着せねばならぬと説き、自ら一千羽の鶏と六十アルケーレスの牧場を有し、郷里を出る時の理想を着々と實現化しつつある。以つて氏の集約農としての合理的経営が推察出来るというものである。而して氏は、バストスが理想的文化移住地となることを念じている。

氏はまた、子弟教育に目栄めた人で、次男洋一君は大学予科、三男岩君は中学（聖市）。四男浩二君が中学（バストス）。次女三女は聖市で裁縫を習得中。「善良な伯国市民とする」のが氏の子弟教育のモットーであり、その教育熱心振りは、半年毎に上聖して子息の、学徒としての生活を監督するといった熱心さでもわかる。

大野清一郎氏

（岐阜県武儀郡富野村）

（写真）

自作農家の長男として生まる。小学校及び補習科を終えると家業に従っていたが、三十四年兵として敦賀歩兵第十九聯隊に入営、三年兵の時、日露戦争の勃発するあり、乃木將軍麾下に旅順攻略に参加、敢戦して左肩に貫通銃創と、左膝に負傷する。更に盤龍山を死守し、功労を認められて乃木司令官より感状を授興された。金鵄勳章功六級勳七等白色桐葉章を賜わる。負傷のため後退せしめられ、一旦、内地の病院に帰り、回復後、新兵教育に当り、再び奉天戦に参加すべく急行中、鉄嶺を越えて間もなく終戦となる。再役志願をして二年後、歩兵曹長として除隊した。

帰村するや、七年間養蚕をやり、潰滅に瀕した村の産業組合を引き受けて、専務理事、組合長たること多年、遂に之を再興した。村の在郷軍人分会長、消防組長、字の区長等、公共のため大いに盡くした。

令息英雄氏にブラジル渡航の志あり、大野氏は北海道移住に傾いていたが、令息の熱意にひかれて、遂にブラジル永住の決意を

以て渡航した。

モジアナ線マンジウー駅ジャガロン耕地に珈琲コロノたること三年半の後、三一年、バストス移住地ウニオン区の現地区に入植したい之に先立ち、ソロカバナ線ランシヤリア駅奥に二十域を購入したのであったが、教育施設の不備なため、バストスを選んだわけである。

先ず珈琲栽培を始め、一時は三万本に達したが、不況と霜害のため、伐払った。ついで棉作に転じ、三六年からは牧畜を始めた。最初に飼育したのは五頭のみであったが、現在は百七十頭の牛群で、牧場面積は五十域に及ぶ。戦時中は養蚕を行ない、日本でも経験のあったところから、上田蚕種の原蚕飼育を行なった。好成績であったが不況のため、四年にして止めた。

三六、七年頃、六尾の鯉をウニオン第二区の江利氏から四十ミルレイスで購入しこれを繁殖させて、そのまま小さい池で五、六年飼った。当時、養鯉は流行的であったが、産業化の見通しはなく、氏も趣味程度に飼育した。池田ホテルなどが買ってくれたのと、海に遠いため海産の鮮魚を味い得ぬ日本人の味覚の要求とから、営利的に必ず成り立つ、と、四一年頃から六十歳の氏の隠居仕事として徐徐に拡張し、一域半にした。四四年頃からはバストスの市場に出荷し始め、年産四、五千キログラムに達した。四八、九年頃からは年産一万キログラムに及び、遠くパウリスタ線奥地へまで販路は拡大された。今やバストスの養鯉といえば大野氏といわれるほどで、他の人々のは、遂に産業化されるに至らなかった。これは、氏の根気強さにも依ることであるがブラ拓製鍊のサナギを飼料として入手し得たことも一因である。大野池は鯉とタニシ、それに眺望の絶佳をもつてバストス名所となった。現在、牧

畜、養鯉、製粉を主菜とし、水草動力によるマンチオカ製粉は年産一千俵余に上るといふ。

氏は区長、産組幹事を務めたことあり、長男英雄氏も青年団長、産組理事の任を経、その財力と信望はバストス随一との評がある。

松浦 勝芳氏

(愛媛県上浮穴郡弘形村)

(写真)

農家の長男として一八八七年に出生。高等小学校を出ると、村の郵便局に通信事務員として勤務した。善通寺騎兵第十一聯隊に入隊し、一九〇九年、満洲守備隊員として公主嶺に駐屯した。二年後、軍曹の階級で除隊した。

在満時代、広大な自由の天地での発展ということに関心をもち、除隊後はこの満洲で ー という気持ちもあつたが、帰村して、竹村移民第三回募集の広告を見るや、渡伯を決意し、令弟と家族を構成し、一二年、広島丸で渡伯した。独身であつた。

モジアナ線グワタパラ駅サンタ・オリンピア耕地に配耕された。通譯に香山六郎氏がいた。一年半後、サントスに出、四家族で漁業を始めた。日本人で漁業に進出したのは、氏をもって嚆矢となす。このために、ブラジル国籍を取得し、帰化ブラジル人となった。

氏は山国生まれで漁業の経験がないので、斯業に明かるい島谷という人を中心にした。当時、スペイン人の漁夫が一人しか居ず、大漁なのを見て、心大いに動いたわけである。獲れた魚を運ぶの

に、始めは八頭立の馬車を使ったが、後にカミニオンを購入し、自ら運搬した。何しろ、当時の販路は狭少で、獲れすぎた魚を、掘った穴に埋めたこともあったという。二六年、現夫人静代さんとサントスで結婚した。この頃は二隻の漁船を所有し、地曳網もやり、多数の人手を使用するようになっていた。が、同業者も増加して来たし、家族の将来、殊に教育のことを考えると、地方の日本人集団地生活の方が好もしく思われた。そこで、ノロエステ線リンス駅奥サン・パウロ耕地に入って三年間、コロノ生活を送った。ここに日本人はいたが、日語学校はないので、その完備したバストス移住地へ移ったのは、三十一年のことである。現地区四十一号に入植した。

これからは、振出しへ戻って百姓道を学ぼうというので、まず珈琲を植えた。また、世間一般の流れに沿って棉作に転じ、戦時中は養蚕を行ない、不況となるや養鶏を始めた。バルパから初生雛を求めて、四組合員が共同で、バストス養鶏のトップを切ったのであった。これを本格化したのは四七年からで、今日に及んでいる。

現在所有土地面積は二十五域で、成鶏三千羽を飼育し、鶏舎は完全に電化されている。氏はまた器用な性で、開拓期には木工工作を覚え、ウニオン区会館の建築を成し遂げている。

長男茂氏は、家にあつて家業に精励している。戦時中は、ウニオン区のインスペクトルを勤め、区内の治安維持に盡悴した。次男要氏は、サン・パウロ市で歯科医を開業し、歯大助教授でもある。また、野球選手として知名の人。五〇年には最優秀選手として州體育局から賞を授けられた。子供の教育のために、海洋を相手の事業への野心を断ち、バストスに入った松浦氏の希望は實を

結んだわけである。

松浦氏もいまは十七人の愛孫のよきお祖父様であるが、尚、矍鑠として働き、一家病氣知らずの、健康一家の中心となっている。夫妻ともに花卉園芸を好む。

隠岐 重彌氏 （鳥取県西伯郡境町）

一八九五年、長男として生まる。氏の父君は帆前船に船員として乗組み、一八八七年ごろアメリカに渡り、後、一九〇〇年に大西洋岸のニュー・ヨークに廻航した人で、同国の陸軍省に勤めるなどして、十余年間帰国せず母君の手一つで育てられた。

高等小学校を終えるや、六年制の舞鶴海軍工廠内技術員養成所に入所し、卒業後は同廠に勤務八年に及んだ。この間に結婚した。ついで鶴見市の浅野造船所に転じて、これまた八年間勤続した。

代々、海の勇者を生んだ家柄でもあり、境の町が外国船も出入する国際色のある処でもある故か、海外渡航の心は、若いころから氏の胸の中に、しきりに動いていた。たまたま関東大震災に逢着し、家は倒壊して夫人と次男重義君は、桂の下敷となって負傷した。いわゆる震災移民なるものの募集があつたので之に加わって渡伯しようとしたが、長男の年齢が足りなくて家族の構成が出来なく、思い止まらざるを得なかった。翌年、御成婚記念事業として計劃された「大毎移民」に應募した。之には父君は反対であったが、氏の熱意にほだされて、結局、同意した。ブラジルの土を踏んでみると、そこは革命の野であつた。ノロエステ線トレード・ピーザ耕地に配耕される筈であつたのが、革命のために変更され、アララクワラ線マットン駅カンブイー耕地に配された。こ

こで二年のコロノ生活を體驗した。この二年間に二十四家族もいたコロノは全部夜逃げをし、残ったのは氏の家族のみとなった。耕主は、六年契約というところを二年だけで満期としてくれた。この耕地の退耕事件は、海興を手こずらせ、田付大便までが自ら出馬するほどの難事件であつた。バストス移住地ウニオン区に土地を求めて入植した。この地の、教育、衛生施設にあこがれたためである。現金で移任地の土地を購入したのは、当時としては氏一人のみである。最初、自力でいきなり八千本の珈琲を植え、米作をなし、二年目からは綿を作つた。三八年に、不況と霜害のため、当時九千本もあつた珈琲樹を残らず伐払つた。同年、一域に西瓜を植えた。

バストスとしては最初の試みである。入植と同時に乳牛を飼い、今日まで二十頭くらいは常時飼育している。もともと自家消費が目的であつたが、バストスでは氏を以て嚆矢とする。

また、ソバ、小麦も栽培するという風に、食料は殆んど自給した。日本人農家としては極めて例外的に、合理的な多角経営であつた。三年連続して切花用の百合を植え、多い時は三万株に及んだ。これはソロカバナ、パウリスタ両線に亘つて売り捌いた。蔬菜も栽培した。多角農経営の一環として養鶏も行なっており、ユーカーリプトは苗から仕立て、一万四千本を植えたが、手不足のため、先鞭はつけたが惜しくも成功を見なかつた。一貫した主作として綿作を行ない、緑肥をもつて優秀な成績を挙げている。六十域の所有地中、牧場は十域で牛馬二十数頭を飼い、果樹園もある。

磯谷喜右衛門氏

(山口県豊浦郡川棚村)

(写真)

父君富士太郎氏が、大規模の開墾事業から過労で、遂に不帰の客となった時、三男の吉右衛門氏は、未だ九歳の幼年であつた。母君は、残された五人の子を、女手一つで育てたが、もとより容易の業ではない。財産も次々と人手に渡り、氏も、高等小学を学業半ばで退いて、早くも生活戦線の小さな戦士とならなければならなかつた。

小倉歩兵第十四聯隊(安東守備隊勤務として在鮮一年)を満期除隊して村へ帰えると、再び農事に励んだ。三十歳で現夫人と結婚したが、病氣その他の不慮の災厄は、波状的に若い夫妻を襲つて、生きることの辛苦を、つぶさに嘗めさせずにはおかなかつた。重い石に押しひしがれ、枯れ果てる草もあれば、石をもはね返しかねぬほどの激しい意欲で生き抜き繁る草もある。夫妻が、この一組の若草だつた。強く生きるのだ、広い世界で！　そう決心すると、当時十五歳の甥範雄君と家族を構成して、渡伯した。

モジアナ線セラナ駅トランスバール耕地　―　ここに氏夫妻のブラジルでの新しい生活の第一頁が始まる。一年半の義務農年を無事に了えると、ノロエステ線プロミッソン駅コレゴ・アズール植民地の珈琲園コロノとなり、四年後、バストス、ウニオン第一区に入植した。一九三一年のことである。

雨露を凌ぐに足る程度の小舎を建てるや、先ず珈琲八千本を植付けた。米作、棉作、養蚕は何れも副業の域を出ず、主力は珈琲栽培に注がれた。ウニオン区ではユーカリ植林のトップを切つて

四八年に實行し、現在は二域に一旦っている。

珈琲樹は私どもの愛児だ、と子賓にめぐまれぬ氏夫妻はそう言う。バストスを墳墓の地と散ずる氏は四域、成樹八千本の珈琲園を夫妻力を協せて管理に余念ない。四回の霜害、二回の雹害を受けた珈琲園ながら、夫妻の慈愛の手は隅なく行き届いている。豊年には九百俵の収穫を見たこともある、というが、現在は百五十俵程度との由である。雑作からの収入も少からず、ウニオン第一区切つての丸持ちだとの噂。

地区の山伐りなどの荒仕事も氏独力でやり普通ならばカマラーダ五、六人を有する面積を夫妻で処理しながら、同家の庭園は常に清らかに整頓せられて居り、氏夫妻の質實、勤勉な性格がうかがわれて奥床しい。十域の所有土地は、正さに枝も鳴らさぬ氏夫妻の美しい領土であり、楽土であらう。

家族構成の一員として共に来伯した甥の範雄君は、四六年、同家から独立してグローリア等二区に在った頃、不幸にも落雷のために三人の子を残して逝った。この子たちは引取られて、氏夫妻の家を楽しく彩っている。

その表面的な華美を好まぬ、堅實一路の人生信條は、あらゆる面に於いて縁の下の力持ち的な、地味な努力となって現れるが、バストス産業組合創設の隠れたる、大いなる原動力的存在であることを特筆しなければならない。

その半生の暗澹たる苦闘、つづいてブラジルの大地に繰り展べられた純農愛土の奮闘、両々相凝ってここに精農の土磯谷氏を生む。

三鼓 梅大氏

(岡山県都窪郡清音村)

(写真)

農家ではあつたが父君は大工職の方が本業で腕達者で知られていた。三鼓氏の現在の理想的鶏舎が、素人たる氏一人の手に成ったものと言っても信じ難いほど立派なのは、父君の仕事を手伝った往年の経験がものを言っているわけである。

義兄秋山氏が、しきりにブラジル禮讃論を父君にぶつた。まあ二、三年、見物旅行の意で行つて来い、との父君の言に、好機到来とばかり、少年三鼓氏は、義兄の家族構成の一員となつて渡伯した。時に高等小学在学中で十四歳。

モジアナ線ジロンダ駅トッキンニヤ耕地一年、ついで隣接のナン耕地に二年、少年の身心を、モジアナの烈日下に酷使した。そして一九三三年、バストス移住地ウニオン第二区に入植した。

棉作に、バストスでの生活の幕は切つて落された。激働はモジアナの耕地時代からの連続だった。二域から七域へと棉作は拡張された。三七年、カミニオンを購入し運搬業を始めたが、激しい労働の寸暇を惜んで、義兄を助けて綿作にいそしむのであつた。四〇年、廿五歳のときウニオン第一区在住の高平留五郎氏三女万寿子さんと結婚した。

結婚後更に一年、義兄の家族と共に在つたが、裸一貫、バストス市街地に出て、二年間農産物仲買商岡本氏のカミニオン運転手を務め、更に産業組合に転じた。その年は降雨多く、作業は難渋を極めた。辞して夫人の實家の棉作を手伝い、ボンフィン区へ棉作の歩合に移った。在ること一年。隣接地モンテ・アレグレ植民

地に綿作契約で一年を過したが、椰子固いの小屋は、雨降れば食卓の下に潜り込まねばず濡れになるみじめきだった。天候は不順で、暴風雨が多かった。不作だった、人にまさる善意と、努力の氏ではあったが、運命は余りにも氏に苛酷であった。結果から見れば、天はこの人を試み、もって後日の栄光を典えん、としたと言えるかもしれない。

ボンフィン区在住時代、一月余りも病床に呻吟の止むなきに到った氏は、余りの不遇に自暴自棄となり、ピングをあおって、不運を呪い、世の非情を憤った。この嵐の中に、能く耐え、能く忍んで、数々、碎身の日々を働き務め遂げたのは夫人万寿子さんだった。弱い女性が、そのぎりぎり生活の場に於て示す貴い、強い底力であった。高貴な精神の発露だった。

四六年、夫人の實家に戻って養鶏を始めた氏夫妻は、四九年、借金で現地区十三域を購入し、ここに新しい人生の再出発を試みた。七百羽を以って専業に養鶏家として起ったのである。その精励、合理的経営は、僅々四年間に躍進的成果を挙げた。バンデイランテス産業組合八百家族中、その好成绩は随一の稱があり、全バストスでも一、二位を争うと言われている。現在成鶏四千羽。鶏舎に点燈を始めたのも、井戸にポンプを仕掛けたのも区では氏をもって嚆矢とする。

過ぐる日、食卓の下に、家中の者が雨もりを避けた椰子固いの小屋と、これはまた極めて対照的なベランダつきの颯爽たる新住宅は、区でも屈指のものである。大型カミニョネットが一台、庭前にまだ新しい。

谷中 唯文氏

（北海道小樽市奥澤町）

雪の新潟は高石市、氏が産声をあげたのはここだったが、日本石油株式会社に勤続廿五年の閲歴をもつ父君の転転たる任地の移動に従って、八歳の時に秋田県由利郡の油田に移った。更に十四歳の折には津軽海峡を渡って小樽市へ。高等小学卒業と同時に両親と兄弟の七人家族で、北海道移住組合員としてウニオン第一区へ入植した。時に十五歳。一時は九千本の珈琲園経営を主とし米作をも行ったが、棉作、雑作に転じた。同区のトップを切って養蚕を試み、折柄の好況に乗じて少からざる収益を挙げた。やがて襲来した不況の波を無事に乗り越え得たのは、その事業経営の堅實なためであつた。同区養鶏の率先者でもあり、現在成鶏三千羽、鶏舎は極めて合理的に電化してある。土地二十域、牧場もあり、馬二頭、トラットール一台。あらゆる種類を網羅した一千本の果樹や、養鶏飼料を始め、その合理的な自給自足の多角式農業経営は容易に他の追随を許きぬものがある。一九四三年、グロリア第二区在高柳浦次郎氏三女雪さんと結婚、現在三男二女の子賓に恵まれている。五〇年、母君をバストスの土に葬った氏は、ここを永住の地と決するに到った。めまぐるしかった父君の人生航路も今や欒隠居の憩いの港に入ったわけである。勤勉、實直、努力――谷中氏も亦バストス農人の一典型であろう。

樋口 敏郎氏

（広島県佐伯郡五日市町字揚）

（写真）

高等小学を中退し、そのまま二十六歳で結婚、二十九歳まで農にいそしんだ氏は、海外雄飛の關心が高かった地方の中で、少年期から北米行を希望していた。その夢は排日法で達せられなかったが、氏の父君は、ハワイ移民で二回も渡米したことがあり、理解ある人であつた。遂に一九二八年氏は二十年計劃で實弟清一氏と共に一家五人で、渡伯、ノロエステ線グアランタン駅竹原耕地を振出しに転々、霜害、病苦と闘い、三二年バストスに移る。始め十域を購入、棉作事業に成功と同時に、所有地を拡大し、四七年には五十域となる。多角農を主張し、その典型人である氏は、バナナ、馬鈴薯、蔬菜その他を、全く合理的に栽培し且つ成功した人である。

現在バストス永住の方針で、五三年から五千本の珈琲を植栽、牧場十域、牛九頭、果樹園も蜜柑が既に五百本、柿百本及び養鶏五百羽等、多角農法の模範を示している。バストス更生が呼ばれている中で、瘠地を利用する氏の事業完成こそ、バストスの更生だと自負して奮闘する一家である。即ち、現在はトラットール一台を始め、果樹その他を機械化している。学務員、組長など公職に於いても治績があつた。六男二女で手の揃った一家であるが、日本から苦勞を共にした母君を四五年に喪う。七十九歳であつたが氏の心痛は大きかった。

佐 藤 環氏 （広島県豊田那船木村）

高等小学校を卒業すると、家業である野良の仕事を手伝った。米、煙草の小農であつた。父君は、氏が五歳の時に亡くなり、母

君の手で育てられた。氏に姉妹はあったが、男子は氏一人だけであった。

百姓ではウダツが上らぬ、とかねて考えてはいたが、ある日、畑の道で、村人が立話しているのを聞くと、ブラジルはええところじやげな、という文句がある。その足で県庁を訪ねブラジル行を決意した。さんざん研究、熟慮のあげくブラジル行を決意し、それから県庁行となるのが常道であるが、氏は元来、暢気だったのかも知れぬ。尤も、すでに一九二六年に母君を亡くし、故山に残す心もなかったに依るのであろう。新しい広大な天地に、樂しく、のびのびと長生きしたい、と思った。家族は夫妻と四人の子女。渡伯は一九三〇年で、氏の齡四十三。

配耕先はモジアナ線ベント・キリーノ駅タマンゾーア耕地で、ここに一年を送り、同線モンテイロス駅グワタパラ耕地で一年。裸一貫でバストス移住地に移ったのは一九三二年のことである。教育施設が整っているし、子女の勉学に好適と思われたからであつた。入るといきなり棉作を始めた。珈琲をやらなかったのは区では氏一人くらいのものである。棉好況の波に乗って、事業は順調に運んだ。人まで入れて事業を拡張したが、やがて之を縮小し、戦前から養蚕を始め、之を専業とした。七メートルに六十五メートルの蚕室一棟を造った時には、人々は目をみはった。繭の値が出はじめてから、慌てゝ養蚕に走った人は多いが、戦前、既にこれを専業としていた人は少い。一頃は六十五メートルの大蚕室を二棟も造り、十域の桑園を設け、繭の年産は二千キログラムに上っていた。数家族の契約農も入れた。戦後の不況来と共に、養蚕に終止符をうつた。

戦後二年目に帰国を断念して牛を飼育し始めた。五一年からは

一層これを拡張した。戦前の九十域に、戦後買い増して百二十域としこの中牧場は五十域で、二百五十頭の牛群を放っている。一時は三千羽の成鶏も現在は二千羽で、その好成績ぶりは世間周知のことである。カミニヨン一台とトラットール一台で、能率を挙げつゝある。

裸一貫で入植この方、棉、蚕、鶏、牛と、次々に順調に成果をあげているが、これは必ずしも運命の星が氏の一家の上に輝いているからばかりとは言えない。

「自分の価値というものを私はよく知っている。働くこと以外に私の生きる道はないのだ」という信念に似た明悟から、努力一邊倒で生き抜いて来た氏の苦闘の賜物であり、栄冠であると言い得るであろう。

彼の日、村の畦道で村人が語っていた「ブラジルはええとこげな」は、真に努力する者には必ず酬ゆるところある国土である、という意味に於いて正しかった。氏は今なお矍鑠、一千七百羽の育雛を担当するだけの元気さであるが、事業の切り盛りはすべて長男一男氏に委せてある。同君は若手ながら手腕家として知られ、父ゆずりの明朗闊達な性格とその社交性とは内外人に親しまれて居りウニオン区の担い手としての衆望は高い。次男哲男君はソロカバナ線ソロカバ市に在って商業を営み、三男正信君はコンシャ市に食堂を経営している。長女育代さんは岩崎章氏に嫁して、サン・カエターノ市に在る。

霜 出 静 二氏

(鹿児島県川邊郡知覚村)

農家の長男。生まれながらに熱血の正義漢であつたのか、高等小学校二年生の時、教師の不正を弾劾して退校処分を受けた。村

の郵便局に勤める二年間、あとは二十四歳の時まで家業に従事した。やがて尼ヶ崎の旭硝子工場（三井系）に職工として働き、二年後、福岡県八幡工場に転勤し、一年して鶴見工場に転じ、居ること八ヶ月で八幡工場に戻り、爾来十三年間この工場で勤務した。旭硝子工場の勤続は通算十八年で、前記のように屢々転勤したのは、工場と共に指導員として派遣されたからである。時あたかも日本は全国的な労働運動の上潮期で、氏も闘士として目ざましい活躍をし、豚箱入りも前後十六回に及んだ。八幡の市会議員候補として無産党中央執行委員会から指名されたため失職し、郷里に帰り、移住組合に加入し、第一回入植者としてバストス移住地カスカッタ区に來った。

無産党闘士の燃える正義感、バストスへ來ても一向衰えなかった。いな、無力な移民が受ける無法や非道に対する反撥は却って強くなった。いわゆる梅谷事件の中心人物となって県移住組合の契約履行を、代行者たる畑中支配人を相手どつて要求し憚らなかった。

また清水伴三郎氏が、自治会を作り、道路と学校建設を手始めとして自治経営をしようというのに、それは当然、ブラ拓のなすべきところであるとなし、一千枚のビラを刷つて自分で撒き、中央講堂で三時間の反対演説をぶち、自治会を解散させてしまった。その後脇山氏を擁して、千田氏と共に全区を説き、学校や道路を抜きにして自治会をまとめ上げた。

氏はまた、珈琲植付制限となり、棉作時代に移行したので、土地代の査定、改正を叫んだ。氏を首謀者と見倣し、運動の拡大を未然に防ごうとしたブラ拓は、氏に立退命令を發した。一九三四年のことである。即ち、同線ランシヤリア駅コンチネンタル耕

地に転じて三年間、棉作を行った。

氏の退植後、ブラ拓は、土地代完納者に三割引を行った。三七年、氏は現在のウニオン第一区四号地区に憚らず入植した。この地区は後に分譲を受けた。この時ブラ拓は、氏が区長、組長等の公職に就くを禁じた。

復帰と同時に、棉作の専ら牧畜を開始し、戦時中も之らと併行して雑作を行った。四八年からはユーカリプトの植林を始めた。之より先、四四年、バストスが市に昇格するや、市の嘱託として道路監督となる。ビラ・ドルモンに通じる十九キロの道路は、氏の監督下に成ったものである。家事を放擲し、率先身を挺して公益に盡くした有形無形の氏の偉業は少くないが、全バストスの橋梁、道路はその有形の表徴として雄弁に物語っている。

公職に就くべからず、はブラ拓の禁止令であつたが、自分がなりたいくてなるのではなく人に選ばれてなるのだ、という氏は、ウニオン区の区長を二期勤めた。第二期は戦後の混乱期で、区の平和秩序回復を願い、進んで区長となり難局收拾に当つた。その回復を見て隠岐氏にバトンを渡した。ウニオン第二区も混乱期に分裂したが、氏の個別説得によつて無事調停を見た。その功は大きい。バストス自治会の副会長としては石橋会長を輔け、戦後は産業組合の理事、監事を勤める。バストスを沙漠にするな、廢耕地を生かせ、とバストスの緑化運動を叫び、ユーカリ植林を奨励し、今や全バストスのユーカリ植林百域に上つた。

武 山 貞 美氏 (宮城県塩釜市佐浦町五二)

一九一三年、農家の五男として生れた。高等小学校を卒業すると、家業に従つた。海外興業株式会社の宣伝によつて、ブラジルに深

い関心を抱いていたが、海外に雄飛したいという希望は、狭隘な日本の国土で、殊に恵まれることの少い農業者の誰もがもつにちがない。遂に三二年、渡伯を決行した。父君がすでに五十二歳で、家長たる資格に缺けていたので、十九歳の氏が家長となつて、七人家族で、ラプラタ丸に乗り込んだ。

配耕先はモーロ・アグード線モーロ・アグード駅タビラチーバ耕地で、珈琲コロノとして在ること四ヶ年に及んだ。偶々バストス移住地カスカッタ区在住の渡部氏は、右タピラチーバ耕地にいた人で、同氏の招きによつて、三五年、その耕地に契約で入植し、棉作に従事した。二年後、ブラ拓直営のユーカリプト植林の契約一年を終えて、現地区に十五域を求めて入植した。

入植すると、先ず、棉作を始めた。地力の減退著しいので、太平洋戦後には養蚕を行なつたが、産組からは繭代が受けとれず、僅か三回で止めた。

蔬菜栽培を専門化したのは、四六年からでトマトを主として、あらゆる蔬菜を手がけた。トマトは奥地及び遠くパラナにまで出荷し、五二年までは、サン・パウロ市にも出荷していた。五四年に入つては、バストス町のトマトは、同氏が一手に占めるに至つた。

蔬菜は二域に亘つて栽培されており、稀に見る大規模なものである。五〇年からは半域の植林を行い、牧場三域を有している。

蔬菜栽培の工夫、改良に絶えず苦心を払い、今日、バストス蔬菜の名を高からしめたのは殆んど氏の努力に依ると言うも過言ではないとの評がある。コチア産組の農産品評会はじめ、各地の品評会に出品し、その都度、入賞しないことはない。

しかも、この広大な面積の栽培は、全く自家の労力のみ依る

もので、栽培技術に長けた母君の陰の力も大きいが、全家族が協力一致、その眞摯で不撓の努力の結晶が、いわゆる「武山野菜」の優秀さとなって光茫を放つのであろう。

トマトの年産三千箱。特に、季節外れの蔬菜作りは有名で、他の追従し難い特殊技術の賜である。

また、単に栽培のみならず、販売、購入に八十六キロの巨軀をこまめに動かす、四十路に入っただかりの働き盛りの氏の、八面六臂の活躍も、今日の事業隆盛を招来した大いなる原動力であるのであろう。バストス町が消費する蔬菜の三分の一は、「武山野菜」で供給し、パナナを主として各地方に出荷している。その多くは、氏自らカミニヨネットを操縦して配給する。磊落、何の飾り気もないその人柄は多くの人に親愛感を抱かせ、区の中堅家長の模範と言われるほどである。

十六人の愛児あり、グルツポ校に通学する者だけでも七人という、正にバストス一の大家族を擁する。五二年は、氏にとっては最悪の年で、父君を七十二歳で失い、また令弟とその子息、ひきつづき三人の葬儀を行なわねばならなかった。

母君は二十人の愛孫に慕われ、高齢ながらもお嬰鑠として好日を送っている。

蔬菜王国バストスの出現には、武山氏一家の不撓の努力に、大きな期待がもたれている。

戸川 守氏

(岡山県赤磐郡仁掘村)

(写真)

農家の次男として生まれた氏は村の小学校を卒えると家業を手伝って農業にいそしむと共に、大工であつた父君を見習って器用に鉋や鋸を使った。四十三年兵として岡山歩兵第五十一聯隊に入隊、二年後除隊帰村しても、前と同じく農事と大工仕事を兼ね黙々として働いた。しかしながら、戸川氏の胸に払って止まざるもの、それは海外雄飛の熱望であつた。不惑四十歳を迎えて、断乎意を決し、夫婦に子供三人、之に女婿の大森氏一家を加え、勇躍渡伯した。

モジアナ線セラナ駅トランスバール耕地に二年半、ノロエステ線プロミツノン駅ソドレー耕地に一年半の珈琲コロノ生活を終えてバストスに移り、現地区に入植したのは、一九三一年のことである。一万本の珈琲樹を植付けたが悉く伐り払い棉作に転じたが、戦時中には養蚕に努め、また養鶏はバストスでは先駆者の一人で、その高い産卵率は断然他を抜いた。養鶏を専業としたのは四七年からで、鶏舎は動力化され、現在総羽数は一千五百。所有土地面積は十二域で、十域の牧場には二十頭の牛と二頭の馬を放っている。今や家業は一切長男卓一君夫妻（フアルツーラ区福原庄吉氏長女龍子さんと一九四一年結婚）に任せて悠々自適の日を送っている。

三宅 初治氏

（香川県小豆郡福田村）

（写真）

一九一九年、ノロエステ線リンス駅ウニオン植民地で、呱呱の声を挙げた。父鉄松氏は所謂革命移民として、一四歳にして伯父君

の構成家族の一員で渡伯した。一九一四年のことである。モジアナ線を経て、ノロエステ線と転々とした初期移民の苦しみを味いつつ、サントスで商業を計劃して成らず、土地を売り、ノロエステ線グワイサーラ駅に移り更にペンナポリス、アバイー、バストスと転々する間に初治氏は少年時代を過したのであった。もとより、当時の耕地に教育機関がある筈がなく、バストス入植して初めて通学し始めると言つた恵まれない環境にあつた。十三歳から四年、年少にしてよく父鉄松氏を扶け、且つ学んだ初治氏の過去は決して恵まれたものではなかったが、独学の意志を持ち、今日の氏の高い教養を得るようになったことは特筆すべきことである。

青年期は青年団の団長、副団長として約十年間後輩の指導に當つたことなども、周知のことである。

作物は雑作中心主義としているが、主として棉作である。氏の農業の熱心はまた有名で、技術の進んだ篤農家である。五三年度のコチア産組農産品評会に出品、棉花で二位、落花生で優勝する。現在所有土地十四アルケール、うち桑園一アルケール半、繭年産一千キログラム、雑作二アルケールでトラック一台を使用している。

池田佐次郎氏

(佐賀県西松浦郡大坪村)

(写真)

惣五郎氏の一粒種。高等小学校卒業後、農業補習科二年を了えると、家を手伝つて農事に励んだ。村の字の青年団支部長を務め、

中堅青年として範を示した。身長五尺七寸五分という大男で、一九二三年、台湾澎湖島の馬公重砲大隊に入隊した。八ヶ月後、撰抜され練習生として、黒船来て名高い浦賀重砲兵学校に派遣されたこともある。上等兵として除隊し、帰郷後は再び家業に精励すると共に村の在郷軍人副分会長、青年団支部長などを長く務めた。狭い土地での小作農の将来に全く希望の持てなくなった氏は、たまたま同村出身の脇山甚作大佐が帰郷し、ブラジル行志望者を募ったのに應じ、やりかけの家の新築を中止して、渡伯した。過ぐる日、島の重砲大隊兵士のころ、砲台のほとりに渺茫たる大海原を眺め、狭い故郷の地以外に、人間の大らかに生き得る樂天地の在ることを信じ、若い胸を躍らせた氏の夢は、今や現實となった。両親と若い夫人との四人家族で、渡伯。ノロエステ線グワランタン奥サンタ・ラウラ珈琲耕地のコロノとして義務農年を終えた時には、多少の蓄えさえあった。一九三一年春、現地区に入植した。同郷、同航海の八家族中、七家族挙って脇山大佐の呼びかけに應じて入植しここにさながら一の「佐賀村」が誕生した觀があった。

三千本の珈琲を栽培し、雑作をも試みた。が三六、七年の霜害で珈琲樹を伐り、主として棉作を始めた。夫人の副業としては三年頃から養蚕に手を染めていた。

ブラ拓製糸工場の設立と同時に、夫妻で六十グラムを飼い、全く無経験のため甚だ苦勞した。四三年にバストス産業組合の蚕種場が出来てからは原蚕飼育を始め、これを専らとした。氏夫妻はバストスに於ける養蚕の先駆者であり、功勞者である。不況襲来と同時に産組からの支払を受けることが出来ず、辛うじて落花生の青田借で食いつなぐという生まれて始めてのドン底生活の苦勞

を嘗めた。

地力は減退の一路を辿るばかりである。新しい土地を求めて転出しないかぎり、この土地に生き抜く途を確立する他はない。養鶏をやりたい、と思ったが資力に缺く。キロ八ミルレイスの養蚕を、どん底の生活に喘ぎつゝ続けること一年、苦労は酬いられて再び繭の値が出始めた。現在年産繭二千七百キログラムに達する。所有土地面積は十域うち桑園はその半分の五域を占めている。

バストスに専業、副業の養蚕家は多いが、二十年の長きに亘って一年も缺かきず蚕を飼いつづけたのは氏一家だけである。前記の通り、夫人の副業から始まったものではあるが副業時代から専業に入るその長年月間、山積する家事、畑仕事を兼ねて、夫人の努力は真に涙ぐましくも尊いものがある。無経験から始めながら、かつて一度の失敗もなく、同家出荷にかゝる優秀繭はすでに定評がある。

誠實、廉直の人格を買われて入植以来、殆んど連年、組長、会計を続け、現在は区長、産組理事、バストス佐賀県入会長の職にある。

坪井 楸氏

（北海道札幌市北三條）

（写真）

戦国時代史を飾る濃尾平野の岐阜県揖斐郡温知村に一八九四年、呱呱の声をあげた。

父君は、氏三歳の折に亡く、母君の手によって育てられた。小学

校を卒えると、向学心に燃える楳少年は母君の許しを得て上京した。当時、實兄にあたる人の、早大に学ぶあつて、これを頼ったわけである。順天堂病院に勤めながら、独学、試験によつて中学四年生に編入されたが、どうしても級友について行けない。涙をのんで退学し、明治薬学校に入学した。夜は配電工としてアルバイトするなど、三年の苦学の實結んで、無事之を卒業した。大正三年兵として入隊したのは、台湾の、台中歩兵第一聯隊。二年の勤務を終つて除隊すると直ちに東京に帰り、日本橋の資生堂に勤めること三年、その間に薬剤師の實地試験を受け、一九一六年、合格した。市内の病院、薬局等に勤めた。一九一八年、新しい生活を展開しようと、潮かおる津軽海峡を渡つて北海道に赴いた。独立した薬局を始めようにも資本がなくては仕方がない。まず大きな薬種問屋に入つて信用を得てから、商品の融通を受けることにしよう、と考へ旭川市の大薬局に入つた。居ること一年で小樽市に薬局を開業。問屋との間もうまく行つて次第に盛業に赴こうとする矢先、勃發したのがシベリア出兵。一枚の召集令状は氏をシベリアの雪原に銃をとらせた。無事凱旋すると札幌に移り、再び薬局を開業して之を經營すること三年に及んだ。氏が若し札幌の一薬局主として安んじていたならば氏の運命は札幌の町の、アカシアの並木路のように平穩であつたかも知れない。が有望と見込んで設立した製薬会社が、こと志と齟齬して失敗に歸し去つた。日本のせち辛い経済生活機構では、一度事業につまずいた者の挽回は決して容易ではない。それに、子供たちの将来を思うと、自分の、血のにじむような苦勞のことも案ぜられて、どうしても経済的な安定を得なければならぬと考へた。一九三四年、氏は一家を挙げて渡伯の送についたのである。

モジアナ線カニンデー駅サンタ・コルネリア耕地が、氏の配耕先であつた。ここにコロノとして義務農年の二年を過した。バストス移住地カスカッタ区に、棉作と養蚕の契約農として入つたのは一九三六年も暮の十二月であつた。同区を転々とする五年、後にウニオン第二区に十域の土地を求めての入植した。一九四一年のことである。現在の地に入るや、折柄の養蚕景氣の波に來り、専業としてこれに當り、かなりの利金を挙げた。戦時中のこととて、資産の凍結を案じ、これを牧畜事業へ投資した。不況となるや牧畜と養鶏に転じ、今日に到っている。

現在、所有土地六十域で、三十域の牧場には百五十頭の牛を放ち、成鶏は三千羽を飼育している。事業の経営ぶりは極めて合理的ですでに定評がある。

板垣 達志氏（山口県阿武郡徳佐村）

両親に伴われて一九二〇年河内丸で着伯したとき、氏はようやく七歳にすぎなかつた。ノロエステ線カフェランジア駅ノゲイラ植民地時代に日語教育を受けた。バストス移住地の直営珈琲園にコロノとして移住したのは十六歳の時である。

令兄はすでに移住地指導員となつて分家していたので、病弱の父君を助けて農事に當る主力は、少年達志氏の双肩にかかつていた。

隣接地モンテイロに二百域の土地を購入してはあつたが、地権問題で紛争中であつたので一先ずバストスに入植し、足場をつくつて徐ろに自分の土地を開拓しようといふところから、四年の珈琲園コロノ生活に入つたわけであつた。一九三二年、ウニオン

第二区に十域を購入して入植、爾来、この地を出ない。

三四年からモンテイロの自己所有地に契約者六家族を入れて棉作を始めることになった。地権問題の紛争の結果、二百域が四十域に減らされてしまった。全部、最初から伐採し、次々に棉を植えた。折柄の棉景気の波に乗りはち切れるような希望を抱いて活躍しつづけた。三六年から区では最初に養蚕を始め、棉作と兼業した。三八年に、隣接地イタウーナ在住の森王棟直氏長女とし子さんを迎えた。棉作は休まずつづけ、また四五年からは、これまた区では率先して牧畜を開始した。いかなる新しい事業にも、これは確かだとの見込みが立てば、先鞭をつける氏であったが、ここにも氏の進歩的、合理的性格のあらわれがある。四九年七月に逝去された父君伊八氏は、山口県人としてブラジルへ移住した最初の人である。ソロカバナ線サン・マノエル耕地に三年のコロノ生活で利をあぐるや、附近のパライゾ植民地に八千本の珈琲園を求めここでもかなりの産を成した。四年後、平野植民地の女婿のもとに、子弟の教育を考えて移り、その際、モンテイロの土地二百域を求めたのであった。県海外協会は大いに氏をもつて県民の渡伯熱を煽ったということである。

現在ウニオン区第一の土地持ちで、所有土地面積六十域に上る。麻州リオ・フエロに二百域を購入した。十五域の牧場には牛五十頭を入れている。契約者三家族就働中。繭の年産一千五百キログラム。

先に述べた如く、令兄泰熊氏は、達志氏十五歳の時から分家しているので、病弱な父君を助けて今日を成したのは全く達志氏の努力に負うものである。この間にあつて令弟ジョゼー君に薬局を開かせ、梯市君に土地を興えて分家せしめるなど、父君に代って

種々面倒を見た。

モンテイロ開拓の頃から、バストスと両方で、四、五家族の契約者を使い、手いっぱいの仕事をする人であった。

青年幹部を努めること六年、区の青年指導に当った。脇山一郎団長の補佐役として熱心に団務に勉めた。五二年から区の会計を托されて今日に至っている。趣味はスポーツで野球では、ウニオン軍の主将を長くつづけ、陸上は万能選手だったが、特に棒高と走高跳選手として開拓期のバストスのホープであった。家族は母君と、氏夫妻に三男五女という賑やかな大人数である、二人は中学、三人はグルッポに通学中である。子供の教育の見通しのつくまではバストスに住むつもりだ、と民は言っている。

京野万治郎氏

(山口県大津郡向津具村)

(写真)

父君辰五郎氏は西南の役のあった一八七七年生まれ。小学校を卒えると家業の農産物仲買の手伝いをしていたが、十七歳の時志願して小倉歩兵聯隊に入営。後、日露戦争に召集され、長駆鴨緑江まで進撃した。この戦旅に於いて、朝鮮の将来を有望と見た氏は、凱旋後、单身、朝鮮に渡った。忠清北道の鳥至院町の鹿島銀行(本店大阪)が経営する農場の監督となった。三年後、家族を内地から呼び寄せた。一九一二年、軍港鎮海で精米所を開き、海軍御用達となったが、米穀相場に手を出したのがもとで、失敗してしまった。

青年期から海外に關心があり、日露戦争前、北米行を企てたけれども、風雲急な際とし、県庁から許可されず、断念していたのであった。今、事業に失敗してみると、再起を計るには新しい世界に限る、とばかり、ブラジル渡航を決意した。しかし、朝鮮からは不可能なので、一たん山口県の郷里に帰り、手続きを済ませてから渡伯の途についた。時に五十歳。

三男万治郎氏は、忠清北道鳥至院の出生。小学校を卒業後、福岡県門司に移り、同地の商業学校二年修了で、父君に従って渡伯した。

一家五人で、若狭丸で着伯したのは一九二六年のこと。モジナア線セラーナ駅マルチノポリス耕地にコロノとして配耕された。この地の二農年間に、令兄は逝去した。ついでノロエステ線リンス駅スイサ耕地に転じて二年を送り、三一年、バストス移住地の現地区に十域の土地を求めて入植した。この地が日本人集団地であり、学校、病院等の文化施設が備っていることに惹かれたのであった。三五年、令弟を養う。

入植すると、まず、棉作を始め、旁ら雑作を行なった。四〇年、令兄が鉄工所を経営して失敗したため保証債務七〇コントスを負ったが、苦心の揚句之を完済した。産組の原蚕飼育を行ったが、同組合が支払不能に陥ったので、四八コントス、一文も入手出来なかった。四七年のことである。

現在、所有土地面積は二十域で、うち四域の牧場には乳牛十頭を飼育し、雑作三域、山林二域、他は休閒地である。成鶏二千五百羽を収容する鶏舎は、点燈の設備あり。

氏は、すべて投機的な事業を好まず、地味に、牛歩式に、堅實な道を進むやり方で、保証負債や産組の支払停止など物質的な痛

手を負いながらも之に屈せず、努力して立直った。経済的な逼迫の中にも、ポリテクニカの工業化学科在学中の令弟四郎氏に学資を送り続けた。バストス移住地に入植の翌年、氏がマラリアを患い、爾後数年間、これが再発に悩んだ外は、一家中、病氣知らず、という健康ぶり。四九年、飼い牛に膝を突かれて投げ上げられ、膝の骨折で三ヶ月間床に就くという九死に一生の災難に逢った。

父君辰五郎氏は五一年から緑内障で失明し現在、病床にある。父君は、かつて区長に任じ、万治郎は現副区長の職にある。

十六家族で、養鶏消費同志会を結成し、万治郎氏がその中心となって、農務局畜産課勤務の令弟四郎氏と計り、農務局その他と連絡して、飼料その他の實費配給を行なっている。

西川 元吉氏（静岡県小笠郡上内田村）

一八八三年、自作農家の長男に生まる。高等小学校を卒業すると、家業に従事した。

以前には茶を耗培していたが、二十三歳ごろからは蜜柑栽培を小規模ながら試み始め、爾来、廿余年間、続けた。村の世話役も務め、絶えず公職に就いて、村政に盡くした。

父君を二十一歳の時喪つてからは、想いを海外発展に致すようになった。北米行を夢みた時代もある。殊に二十三歳の頃、中泉農業学校々長が遊説の、ブラジル事情宣伝講話を聴いてからは、ブラジルというものが、氏の胸底に鮮烈な映像となって、是が非でも渡伯したい気持ちに駆られたのであった。しかし、父君亡き後の長男の立場としては、令弟たちも幼年ではあり、どうすることも出来ず、荏苒日を送って、早くも二十余年の経過を見たので

あった。

しかしながら、日本の狹隘な国土と、増加一方の人口は、あらゆる面に行き詰りの様相を露呈し、深刻する。海外進出は、祖国に残された唯一の排気孔ではないか―氏の渡伯熱は益々抑揚するばかりであった。氏が家を次男と三男に托し、あこがれのブラジルへ船立ったのは、二八年のことであった。氏時に四十五歳。母君の逝去によって孝養を盡すべき対象も失われたからである。

構成された家族は、令妹の家族と合して総勢十六人という、船中第一の大世帯であった。

ノロエステ線プロミツソン駅ビリグイジンニヨ植民地で、二農年、珈琲コロノとして就働した。之を終えると、子弟の教育のことも考えて、知人の手引きによって、バストス移住地に移った。三年、現地区に十域を求めて入植した。

先ず棉作を主とし、雑作を行った。土地瘠薄で、出来もよくないところから、再び手がけぬつもりで日本を出た蜜柑親培を、測らずもブラジルの地でやり始めることとなった。三六年に、経験を生かして、二百本の蜜柑を植えたのが、バストス移住地における果樹栽培の嚆矢である。自ら苗を仕立てた。蜜柑と同時に、八十本の柿も栽培し始め、本格的に果樹栽培に転向することとなった。バイアニーニヤ、ピラシカーバ種で、西川の蜜柑として、バストス周邊は言うまでもなく、聖市市場にも名のある優良種である。

また養鯉も小規模に行ない、日本人の郷愁を慰める食品たる蓮根の栽培をはじめて試み五〇年頃には北パラナにまで大量の出荷を行なうに至った。

現在所有土地面積は十五域で、蜜柑の年産は一千二百箱に及び、

その品質の優良さは、各地品評会に出品毎の入賞振りを見てもらう
なずかれる。

若くして家長となつて一家を背負つた氏は趣味らしいものを持つ
暇がなかった。しかし蜜柑開花の香りは戀しい、と語る、この
温厚篤實、純農精神一途に生き抜いた人の言として意義深いもの
がある。長男統平氏は近衛歩兵第四聯隊を帰休除隊後間もなく渡
伯した。

薮内 伊一氏

(奈良県奈良市都跡町)

(写真)

一八九四年、農家の長男として生まる。令弟一人。正気商業学校
の前身たる正気書院を卒業一年前に退き、貿易商たらんと志して
神戸に出た。公益社という燐寸会社に勤めていたが、奈良歩兵第
五十三聯隊に入隊することとなった。二年で除隊すると、帰郷し
て家業に従った。

しかしながら、大いに為すところあらんとする氏は、村に安穩
と暮している気にはなれなかった。一九一八年、単身シベリアへ
渡った。当時、公益社の燐寸の軸の工場がシベリアにあり、そこ
の知人を頼って行つたのである。沿海州を歩いて燐寸軸用材の仲
買を営むこと二年に及んだ。そうするうち、シベリア出兵の事起
り、北樺太を日本軍が占領したので、同地へ渡った。目的は白熊
やカワウソの皮の仲買いにあつたが、軍司令部測量班のロシア語
通譯となつて、二年を送った。内地へ戻つたのは二二年のことで

あった。

京阪電鉄に入社して大阪に居を構えた。入社と同時に結婚した。家を新築して間もなく三四年の風水害に見舞われて、家屋は倒壊し去り、次女（三蔵）を失い、夫人の寮母は家の下敷となって死に、夫人もまた重態に陥るといふ悲惨事があった。全く不測の天災である。これより、奈良市外西大寺東町の伯父君の隣りに移り、家を新築した。

偶々、紀元二千六百年祝典に参加のため民間代表で帰日した脇山甚作氏が、伯父君の家に立ち寄った時、隣家の藪内氏を招いて「ブラジルへ行こう。寒い所へも行ったのだから暑い所へ行ってみるのもいいだろう」とすすめられ、十年計画で渡伯することになった。

移住組合に加わり、バストス移住地の脇山地区に配耕され、ここに二ヶ月就働した。ついでユニオン第二区の六十一号地区十二域（佐藤氏の所有であった）を購入し、ここに独立農としての第一歩を踏み出した。町に製粉工場があったのでマンデオカの栽培を二年やったが、安値で収支償わず、結局、掘らずじまわに終った。二年間棉作に従事し、蚕景気が出たので、これに伴って養蚕を専業した。四八年から牛を飼育し始めた。同年養鶏を開始。最初に六百羽、翌年一千羽、次年また一千羽といった具合に進み、五〇年からは鶏舎に点燈し、水道の施設をなした。

四九年には脇山氏の去ったあとの家に移った。同氏とは遠縁の間柄であり、藪内氏が奈良聯隊に入隊当時の中隊長であり、また渡伯をすすめてくれた人でもあって、因縁浅からざるものがある。

入植の年に三十二域を求め、四八年十域、五三年には十域を買い増して、現在所有土地面積は五十二域に及び、うち牧場は三十

域で、九十頭の牛を飼育している。三城は雑作にあて、他は牧場予定地としている。二千羽の成鶏を擁し、カミニヨネツテ、トラクター各一台をもつて機械化農を行う。

板垣 梯市氏（山口県阿武郡徳佐村）

（写真）

一九一八年、農家の四男に生まれた。兄弟は八人。一九二〇年、一家をあげて河内丸船上の人となった。ノロエステ線カフエランジア駅平野植民地に入り、ついでバストス移住地ウニオン第二区に転じたのであった。

少年野球の草創時代からボールを握った。三四年バストス少年野球チーム結成以来、五〇年までオール・バストスの現役選手として活躍した。第一回全伯少年野球大会（リンスで挙行）に五日間、一人で完投したことは未だに話題に上っている。青年期には、その得意の、胸をつくハイ・ボールの豪打をもって知られた。試合に出場した回数は三百に近いという。今なお、区の野球人の養成に当たっている。

戦前三年間、ウニオン区青年団長をつとめ、戦後、区の混迷期に際し、青年の手で区を動かし、その顧問たること五年、大いに区の明朗化、後進の指導誘掖に盡くした。区政の再び施行さるゝに及んで任を辞した。

四五年、バストス市在住の河内本蔵氏四女光枝さんと結婚し、二男四女あり。夫人の内助の功少からず、結婚後間もなく隣地区十域を以て独立分家し、更に土地を買い増して現在三十三域、麻

州ポインタ・ポランに五十域を有する。十二域の牧場に二十五頭の牛を飼育し、養蚕を行い繭年産二千キログラムに上る。

木場 茂盛氏（鹿児島県川内市勝目）

（写真）

一九二五年、仙次郎氏次男として川内市に生まれた。氏の六歳の時、一家はバストス移住地ウニオン第二区に直来した。最初の入植家族の一人である。

入植初期の大方がそうであるように、氏もまた幼少ながら、家業に追われて学業どころではなく、日語学校、グループポへの通学も断続的で、果ては十四歳の時、退いてしまった。

バストス支部対抗の長距離選手として出場したのが十六歳の時。氏のスポーツマンとしての初陣だった。間もなく、戦争による邦人スポーツ界の空白時代が来る。廿二歳（四七年）から槍投げに転じた。全伯陸競大会には四八年から連年出場、入賞し、今や槍の木場として、大いに斯界に気を吐いている。

櫻島の噴煙遠く碧空を彩る故郷で、現夫人ソキ子さんと華燭の典をあげた。新婚旅行を日本各地に延長して、翌年帰伯。五三年から独立して一家を成した。一児を儲く。

養蚕では繭の年産千五百キログラム、将来は養蚕と共に、大規模の農業経営をやりたいと、このスポーツ精農青年の希望は、その胸中に大きく膨んでいる。また、時間と事情の許すかぎり、スポーツ面に於いて後進の指導に当りたい、バストスを永住の地とするつもりではあるが、もう一度、故国の山河に接したい、と實

直そのものの明るい眼を輝して氏は語る。

鈴木 信 夫氏

（北海道札幌市）

（写真）

札幌市の道庁に勤める官吏であつた父君の長男として生まれた氏は、苦勞知らずに札幌庁北第二中学を卒業。卒業をひかえて父君を喪う。時に十八歳。卒業後、一時札幌の海外協会に勤めた。吉田主事につき伯国の事情を研究、希望に燃えて、かねて父君が関心を持っていた他国への進出の意志を継いで渡伯した。

普通移民で、伯母君夫妻畑田氏と便宜上構成家族となつてバストスに直来。バストスに於いては、姉君の所に一時寄寓し、フアルツーラ区に土地を求めて入植、伯母君と別れ、同地を売り、現地区に移る。三九年フアルツーラ区在住の岩田甚市氏長女昌子さんと結婚、円満な家庭を営む。

氏は、養蚕、養鶏はやらす、雑作を主とし、棉と落花生等をもつて押す人で、珍らしく流行の波に乗らない唯一の人である。土地は十二アルケール半、その中三、四アルケールの雑作を一人で運営している。十三歳を頭に六人の子賓あり、母君も健在で、一家楽しく暮している。子供の成長養育が氏の事業であり、子弟の教育が唯一の理想である。

氏はインテリ百姓である。凡そ百姓タイプではないが、努力家である。ねぼり強く堅實な道を行く型で、意地を見せず、條の通つた話をする理解ある人であり、且つお坊ちゃん気質があり、金儲

も下手、苦楽、身に應えぬといった型で明かるく、人に好かれる人。

山口 輝治氏

(鹿児島県出水郡高尾野町)

(写真)

氏は高等小学を渡伯のため一年で中退、血気盛んな薩摩人の常。海外雄飛を夢見る父母に伴われて昭和八年憧れの珈琲の實る国に渡った。配耕地モジアナ線クラブニンヨ駅ジャンジーラ耕地に義務農年を送るうち一家の支柱たる父君が病死。長男で齡十七の氏は異国の空に絶望の影の差す苦難の茨道を踏み出すことになった。母を助け幼い弟妹とともにランシャリーア駅太田耕地に珈琲コロノとして一年。退耕の年に母再婚し義父とともに同駅コンチネンタル耕地に棉作契約として転じたが、奮起一番天涯に我が運命を托さんとモソテイロ植民地に單身飛込んだ。二年後再び母の家族に合流、おりからの棉花好況の波に乗るまゝ一年後にはバストス移住地ウニオン第二区に移り、間もなく十域を求めて独立農となった。事業は順風に帆を上げはためき、その一九四三年には登美子夫人を迎え長女をもうけるという恵れ過ぎる幸福の中にあつたが、好事魔多しとか、四五年正月に急性盲腸炎を患い、大手術の結果九死に一生を得た。病後の静養をかねて出聖、時計職を見習い、バストス町に時計店を開業したが、間もなく養蚕没落による経済的どん底時代に逢着、これより農業に転じパ線フロリダに棉作一年後、再びバストスの現地区に養蚕を専業として家運挽回

の第一歩を踏み出し今日にいたっている。

木場仙次郎氏 (鹿児島県川内市勝目町)

(写真)

農家の三男として生まれた氏は、十四歳の時に母君を、十九歳のとき父君を喪った。

小学校卒業後、兄君と共に農にいそしみ、二十二歳の折に結婚し、分家して農業に励んだ。幼少の長女及び次女を、日本で失なつた。前に渡伯していた友人の手紙に刺戟され、勇躍海外移住組合に加し、一千七百円の開拓資金を積みバストスに直来。ウニオン第二区では唯一の直来者である。生来の奮闘努力家である氏は、新移民ながら、自から伐採をし、元氣旺盛、酒を好み、薩州男児の面目躍如たるものがあつた。二年目には、馬車による運搬業を始め相当の成績を挙げたが、やがて戦時に養蚕に専業する。折から養蚕の不況と産組の破綻で多額の金は受領不能のまゝとなり、その間、落花生の栽培などで引続き努力し、しかも蚕業は現在の好景氣に逢着する迄中止しなかつた唯一の人である。

現在は、所有土地二十アルケレス。その内五アルケレスが牧場、牛馬二十頭、四アルケレスの桑園に四アルケレス半のユーカリ樹を植えた。

繭は年産二千キログラムを超過し、森林三アルケレス、雑作地一アルケール。その他は休閑地となっている。

畑 中 留 太 郎 氏

(青森県下北郡東通村)

水田二町五反を有つ村の舊家の六男に生れた氏は、不幸十九歳で父君を亡くした。小学卒後、農業補習科を卒え生涯を郷土の土に生きるべく農業にいそしみ、傍ら村の青年団長、幹部を努め後進の指導に当たっていたが、父君逝くや青春の血ほとばしりて天涯に志を抱き、津軽海峡を渡って北海道に移る。北見の国、札幌等を転々、牧場での乳牛飼育の明暮れに時を過す。大陸的條件が備わる北海道の環境が氏をして安眠させておく筈がなく、やがては新天地開拓を目指して渡伯を志望した。時に二十七歳渡道僅か半歳後であつた。たまたま知人で渡伯を希望しながらも家族構成上躊躇していた鈴木家と縁を結び、南海航路は新婚の夢にようまゝ昭和七年に渡伯。バストス移住地在の遠縁、高柳武七郎氏の幹旋で第二グロリア区に一とまず落着き翌年ファルソーラ区に土地十畝を求めて入植、独立農として開拓の斧を振う。が不幸一年目に病のため愛妻を失った。悲嘆と苦難のどん底時代がこれより六、七年続いた。生来磊落な氏も心の痛手を癒す術がなく、その情熱のすべてを開拓事業に打込み、第二ウニオン区に移って専ら棉作に従事した。三七年、現夫人を迎え恵れるまゝ一児をもうける。続いて養蚕好況の波に乗り、不況となるや二時棉作に転じ、近年再び蚕業にいそしむ。牧畜の将来にはつとに目をつけ同区最初の飼育家である。有畜農業を率先し堅實を旨とする事業経営法はバストス更生に心する人々の学ぶべきところだろう。一粒胤の俊二君は聖市に進学中、夫妻二人暮らしの羨望の家庭である。

三 鼓 一氏

(岡山県都窪郡清音村)

商業二年に在学中、令兄の訃に会った氏は売薬行商に急カーヴの転向を行った。いわゆる備中の薬売りを続行するうち二十歳に到り父君の逝去を見た。(母君は氏十七歳の時すでに亡し)家財整理を機に渡伯した。時に一九三三年。

バストス移住地ウニオン第二区九十一号地区星島家は、令妹の婚家である。同家にあつて四年間精励した。廿六歳の時、リノポリス在北川泉氏長女を夫人に迎え、ここに星島家から独立して一家を成した。

戦時中、養蚕を事業とした夫妻の力行も、不況には打ち克てず、土地を売却し、リノポリスに新に土地を求めて入植し、五ケ年、雑作に従事した。

既に学齢に達した子女のため、五二年バストスに戻り、現地区で養鶏を専業に始めた。戦前、戦時中を通じ、日語指導に当り、ウニオン第二区青年団長に任ずること三年、のち顧問として青年指導に努めた。連合青年団産業部長となつては農産品評会を開催するなど、教育、産業面の指導啓発の功労は大きい。家族は夫と二男一女の五人。氏は趣味の人としては一路の柳号を有し、リノポリス在時代青空吟社を牛耳り、現にバストスの山椒吟社の有力メンバーであり、また烏城と号して俳句をも試みる。生長の家庭者、少年時代、相次いで両親を失った氏が、精神的に充實した生活の大道を明るく力強く歩むのも、その佳吟「生きる道知って日の出の位置を知り」なる人の敬虔な姿そのものであらう。

森 王 棟 義氏

(山口県吉敷郡秋穂町)

東浅寺の別家が先祖で代々鍛冶屋の三男として生まれた氏は、高等小学卒業後、家業を手伝い、誤まつて怪我をしてから伯父君と共に釜山に渡り、元山香港間の漁業に従事する。七年間支那海を足場にした漁業も、父君の胃癌のため一度帰郷、二十一歳で結婚、再び独立漁業に従事すること十年、この間七回も難破しながらも撓まず海洋の怒濤に挑んだ海国男子の面目躍如たる経験の持主である。たまたま義兄及び義弟の難破死亡から、転じて東見止炭坑に就働すること三年、その間努力鉄腕六千円を残す。折から海外協会の宣伝により、予てあつた渡満の意を捨て、渡伯の途に上った。

ソロカバナ線イパウス駅イパウス耕地にコロノとして一年後、バストに転住、三四年七月、グローリア第一区の越智地区に一年、後、パウリスタ線イアクリ駅イタウーナ耕地に移り三年後、バストス隣接地アルモニア畑中耕地に十五域を購入、八年間綿作に専業し、土地肥沃のためよく賭けた。以後一粒胤の旨義君が写真館を始め、アダマンチーナに三年、やがて戦争となり原料の入手困難から閉める。後、五一年に女婿のいるボンフィン区に移り棉作する。現ウニオン二区に二十域を求めて入植養蚕専業として今日に到る。長女トシ子さんは板垣達志氏と、次女クニ子さんは小田切敏夫氏と結婚共にバストスに在つて孫も十三人。同氏は、四六年から「生長の家」の信者となり、誌友「相愛会」の会計を勤め、日々感謝の生活を送る同氏の心境は明るく豊かである。

白 岩 義氏

(岩手県江刺那梁川村)

(写真)

一八九七年、農家の六人兄弟の三男として生まる。六歳の時から同県稗貫郡太田村に育って、寄留地もこの村となっている。養蚕学校を出てから二年後、蚕種製造所の管理人として下閉伊郡に移り住んだ。二十一歳の時から渡伯するまでの十四年間を、太田村の小学校で代用教員を勤めた。もともと教員など、自分の性格に合う仕事ではなかったが、父君の代に、家の土地も手放さなければならぬことになり、訓導として勤めていた父君も、村の政治でその席を失ったりしたので、事情止むを得なかった。師範学校に入ることを父君から勧められても、敢えて高等小学校から養蚕学校へ入ったのも、好きな農業へ進みたかったからであるが、訓導の席を追われた父のあとを継いで十数年間頑張ったのも、若い日の意地のさせる業であった。もともと、教員生活を嫌って、青森県下北郡の郡養蚕指導員となって一年を送ったこともある。が、呼び戻された。二十一歳で母君、二十六歳で父君を失った。父君の没前数ヶ月に、現夫人と結婚した。

月給取りは嫌だし、教員生活などどうしても性に合わぬ。百姓しようにも土地はない。息づまるような日本の狭さを、今更のうちに痛感した氏の胸裡に、海外発展の希望の渦が巻いたことは当然であつたろう。南洋へ！ 当時委任統治下だったダバオへの渡航手続をしたが、手違いから成就しなかった。フィリッピンの麻栽培移民を企てているうちに、県に海外移住組合の結成を見た。組合員として、甥一人を入れて家族を構成し、渡伯したのが一九

三〇年のことである。インド洋航海中、長男進君（二歳）の幼い骸を葬った悲痛な思い出は消えることがない。

バストス移住地ウニオン第一区に岩手県組九家族と共に入植し、同区を開拓した。雑作をしながら七千五百本の珈琲樹を植栽した。三二年に棉作用として現地区に十域を買い増した。三五年に現地区に移転し、前地区は翌年売却した。

綿で挙げた金はウニオン区の珈琲に注ぎこんだので儲けにはならなかった。同年から棉作を専らとし、最盛時には十域を栽培した。棉の好況に乗じて、更に隣地区十域を求めた。減退する地力を見て、戦前、すでに養蚕に転じたが、同区では氏を以て嚆矢とする。

養蚕学校時代の夢は、實に、ブラジルの大地に於いて成就したわけである。加うるに、養蚕景気の上潮期来って、大いに成績を挙げた。産組の原蚕飼育を行ったが、不況に逢着し、産組からの支払いはなく、普通蚕は下落となったので、二年間棉と落花生栽培に従事した。やがて養鶏に転じて今日に到った。

現在所有土地三十五域、五域の牧場に二十頭の牛を飼育している。成鶏三千羽を擁している。区の世話に骨身を惜しまないが表面に立つことは嫌いで、それでも推されて区長を勤めること三回、副会長一回、また学務員、組長等数回に及んでいる。戦後岩手県人会の復活に努力した。

かつて酒豪をもつて聞えた氏も近年は晚酌程度、「いや家内にも長年苦勞させましたよ、これからは少し樂をさせたい」と氏は、温顔に感慨をこめてこう述懐する。

北谷 幸雄氏

(岡山県吉備郡日近村)

(写真)

家は代々半農半商であつた。商というのは花筵製造機械を各家庭に賃興して、副業的に花筵を織らせるのである。盛大な頃は子業者百三十戸に上り、その元締としてかなりの利益を納めたものであつた。一八九三年生まれの氏は長男であつた。高等小学校を卒えると、家業に従事した。二十六歳で現夫人と結婚した。歐洲大戦後の不況の波は氏の家業にも容赦なくうち寄せて、事業は次第に縮小の止むなきに到つた。

日本での暗い将来を思うとき、明るく胸に展けて来るのは、義弟(海野武男氏)が渡つて行つたブラジルのことである。しかも、その義弟から、妻を喪つて困惑しているとの報に接し、ここに氏の渡伯の意は決した。十年計劃で一儲け―移住者の誰しも抱くような夢を抱いて、一九三〇年、ブラジルの土を踏んだのであつた。ソロカバナ線アシス駅ジヨゼ・ジェツーリオ耕地にコロノとして入つた。義弟海野氏も一緒だつた。ここで二農年を終え、一九三二年バストに移住地の現地区に土地十域を求めて海野氏と共に入植した。けだし、バストスが日本人の集団地であり、教育その他の文化施設の備っているのが、希望にかなつたのである。

最初の頃の二域の棉作から、全盛期には十域に拡張した。せつかくの棉景気にもかかわらず、家族の手が少いために乗り損じた形となつた。二年ほど養蚕を試験的にやってみたこともある。棉の不況と同時に養蚕を専業とし、やがて太平洋戦の勃発による養蚕好況に事業を大きく伸長した。家族の手が不十分な上、地力の

減退で雑作に進めず、止むなき養蚕であつた。これに依つて得た金で土地を買い増した。現在の所有土地は五十域。うち六域の桑園を擁している。繭年産實に七千五百キログラムに上り、バストス移住地養蚕家のトップを切っている。四十域の牧場に放たれた百六十頭の牛群が、馳駆するトラクトールには目もくれず、悠々として草を喰んでいる。市街地にガソリン・ポストを佐古博氏と共同で経営している。

渡伯後日なお浅くしてアシスに一児を失いバストスで二児、日本で一児と、すでに四人の男子を土に帰せしめたが、長女昌枝さんは、同区在住の塩飽康夫氏に嫁してすでに十人の子女を儲け、長男寛君は十八歳の時にオール・バストス軍の投手として第二回全伯大会に出場し、対チエテ十三回戦を一人で投げ通して勝利に導いたという戦歴がある。戦後の、各線対抗にはパウリスタ線の主戦投手として常に活躍したものであるが、一人息子ではあり、家業繁忙のために、存分な活動が許されぬのは、パ線野球界のためにも残念である。

北谷氏は現在同区の副区長を務め、早くから組長、会計等の公職に在つて区のために盡瘁して来た。夫人も、移民妻としての辛酸をつぶさに味つて来た人であるが、夫妻共に到つて明朗健康である。

戸来金太郎氏（岩手県稗貫郡花巻町）

（写真）

みちのくの町花巻に、一八九七年、農家の次男として生まれた。九人兄弟だったのが、幼少にして次々に逝き、氏一人が残った。小

学校を卒えると、菓子製造店に奉公に出、十八歳の時、独立、開店した。この時、結婚したが、二年足らずで店は破産し、結婚も解消してしまった。二十歳にして、一切を無に帰せしめたわけである。一転して水湧村の一神社の神主代理となった。伯父に当る人が急逝したからである。三年間、何とか神主さんを務め上げると、再び郷里の村で菓子製造を始めた。職人数名を使い、かなりの盛業を見た。もつとも七転八起、破産に瀕したこともないではなかったが、どうにか、ブラジルへ来るまでは継続した。

第一次大戦後の、濱口内閣の緊縮政策期に入って、当時手を出していた米の思惑、薪炭の投機、株に一夜で九千円のがた落ちに逢い財産をすってしまった。それでも田畑は手に残っていたので、これを資本に回天の努力を試みたが、一度傾きかゝつたものを支えるのは容易の業ではなかった。他に転業しようにも術はない。たまたま岩手県移住組合が組織されたので、直ちに應じて之に加い、第一回の組合員として一九三〇年、リオ丸で渡伯した。

直ちにバストス移住地ウニオン第一区に入植した。求めた土地は十域、これに珈琲四千本を植えた。五年すれば一万円に売れる筈である。捲土重来、日本へ帰つて一奮発しようとの心算は、三年目に襲つて来た霜のために一朝の夢と化してしまった。折しも開植期にあったサウーデ区に二十域の土地を得て、ウニオン区と両面作戦と行き、一息棉作に精励した。渡伯五年目に、棉作十八域という区では最大の耗培面積であったが、これは明かに焦燥から来る無理であった。果然、不作で、その損失は少からざるものであった。カマラーダを使う費用もない。ウニオン区の土地を売り、サウーデ区に自家労力だけで五域の綿作を行った。しかし、植付の時期遅きに失し害蟲の発生のため僅かハアローバの収穫しか

見られなかった。棉作を断念し、三九年から養蚕に転じた。これ
を大規模に行つて、偶々戦時下の好況に遭遇した。最盛期には繭
年産五千キログラム、二百数十コントの収益を見た。四八年、不
況来と共に直ちに養鶏に転じた。以来、現在に到るまで、これを
専らとしている。

現在所有土地三十域、うち四域の牧場には二十五頭の牛がのど
かに青草を喰んでいる。点燈、水道施設の完備した鶏舎には二千
五百羽の成鶏を擁し、バンデイランテス産組の種鶏を飼養してい
る。もつて如何に氏の経営が優秀であり、合理的であるかどうかが
わかる。

前に区長、副区長を勤め、村に盡くすところ多く、岩手県人会
顧問の任にある。

牧畜は氏の趣味に属するものであるが、現在の牧場を更に拡張
したいとの希望を有している。

その苦難に満ちた半生をよく乗り切つて今日在り得たのは、一
概に運命の氏に幸いたしたものとはばかりは言えぬ。むしろ闊達、明
朗、しかも温厚な氏の、胸底に蔵せられる東北人特有の不撓の努
力の賜物というべきものであろう。

加藤興太郎氏

（香川県香川郡由佐村）

（写真）

村で屈指の地主の家に、兄弟十一人の五男として生まれた。一
八九四年のことである。

小学校を卒えてからは、家業を手つだいながら、好きな柔道を高松の武徳殿に通つて習つた。前後通じて十五年になるという。初段である。

二十一歳の時、現夫人と結婚すると共に、分家独立した。農事にたずさわること一年で酒問屋に転向した。近隣五ヶ村の酒店に卸し盛業を呈して六年に及んだが、事志と違い、片倉製糸の繭購入者となつた。三十一歳の時大阪に進出すると洋服店を開業した。倒産した友人の店まで引受けて、職人七人、縫子三十人を擁する、という盛況さであつた。たまたま、一九二七年の丹波地方の大地震に少なからぬ損失を蒙つた氏は、天災の多い日本から、天災の少い、広い世界への雄飛を痛切に考えさせられた。

はからずも同年、大阪白木屋に開催されたブラジル展に足を運んだ氏は、そこに展示された南米大陸の雄邦ブラジルの、輝しい未来を約する若い姿を見出したのであつた。それは、氏の雄心を燃え立たさずには措かなかつた。すなわち、妻子、弟妹、姪、甥から成る十四人の大家族を擁して同じ年、南十字星紅い、約束の地へと渡つた。

ノロエステ線カフェランジア駅サンタ・マリア耕地が配耕先であつた。が家族の手は多くても都会育ちの者ばかりで、能率はさつぱり挙らない。それでも義務農年だけはキチンと果して、リンズ市外有明植民地の開拓に珈琲四年契約を結んで入植した。入植者の数が少くて、日本語学校を開くことが出来ないのので、翌年は東奔西走、二十二家族の入植者集めに努力し、ようやく学校をつくつた。子弟の日本語教育は先ずこれで一安心と、珈琲園の育成に心魂を傾けたが、四年目の珈琲樹は一朝にして大霜害に襲われてしまった。偶然にもその同じ日、六十俵の珈琲が、出火のため

家ぐるみ灰と化した。文字通りの丸裸となった。不率はいつも一人では来ない、という諺がある。マレッタ地帯であったため、夫人はじめ四人が病床に呻吟した。

たまたま、氏の甥に当る人のバストス移住地に在るあつて、氏は一九三二年、サウーデ区に最初の入植者となつて転じて来た。が開拓当時の人気の荒さに僻易してしまつてプログレッソ区に十域を求めて入植。それから、棉作による少からぬ収益が挙げた。稲作の片手間に、ブラ拓の製糖工場の甘蔗畑十七域をフォルマしたこともある。四年後に、現サウーデ区の土地を買戻して入植した。四十二年、いきなり四十米の蚕室三棟、三十米のを一棟建て養蚕契約四家族を入れて養蚕に転じた。年に八千キログラムの収繭を得た。

産組に製糸業を奨めて容れられなかった氏は、養蚕新組合を同志と結成し、これが理事となつて大いに活躍したが、折柄の不況に遭遇して新組合は崩壊した。氏は再び無一文となつて振出しに戻らねばならなかった。しかしながら、変転極りない氏の人生航路は、たぎり立って静止することを知らぬ活火山的热情と激しい闘志と行動力は、放膽なる宗教的樂天主義に一貫されている。再度の丸裸から、現在の十域の土地に養鶏を専業とし、四千羽の成鶏、点燈、水道施設完備の文化的経営を誇っている。

木口 正兄氏

(福島県西白河郡西郷村)

(写真)

サウーデ区の木口氏宅を訪れた者は、庭前の、さながら花園の

ような美しきに、しばし目をみはる。いかにも、美しく住みなした、という床しい感じがする。夫人シノブさんの好みからであるという。

正兄氏の父君は舊名を小西正澄と言った。一八八二年、岐阜県吉城郡の一寒村に生まれた。十七歳の時、福島県の木口家に養子となって入籍した。日露戦争の終った年に、福島師範学校を卒業すると「都をば霞と共に出しかど 秋風ぞ吹く白河の關」とかの能因法師が歌った白河町小学校の訓導となって赴任した。以来、教壇生活をつづけて来たが、一九一一年、古關第一尋常小学校々長を以て依願退職した。養父の逝去に遭ったがためである。跡をついで白河石材問屋の主人に納まり、養父を襲名して寅太郎となった。教鞭を算盤に代え、大いに商才を発揮、各地に出張所を設け、合資会社木口商会として盛業を極めた。一九一五年に西白河都会議員選挙に出馬して当選し、更に再選され、都政に盡くすところ大であつた。第一次歐洲大戦直後、日本石材工業株式会社創立者の一人として活躍したが、戦後の深刻な不況のため、事業は難航をつづけた。加うるに東京へ大量に出荷していた石材は、關東大震災のために代金回収不能に陥ってしまった。社運益々衰退という始末である。一九二八年、新しい運命を南米大陸に開くべく渡伯した。

正兄氏は寅太郎氏の長男で一九〇八年の生まれ。石川中学を卒えるや進んで立正大学予科二年在学中であつたが、父君の希望に應えて渡伯を決意した。

配耕先はモジアナ線オルランジア駅アグード耕地であつた。コロノ生活僅か半年でノロエステ線グアイサーラ駅アウローラ植民地のコロノとなつた。一年の後、珈琲四年契約を行った。ついで

一九三三年バストスに入植した。独立農を目指して、前年すでにサウーデ区に二十域の土地を求めていたからである。

バストスの生活は棉作に始った。除々に耕作面積を拡げ、二十域にまで拡大した二二年後、更に十域を買い増し、合計三十域の棉作を行った。四一年、棉作を養蚕に切り換え、事業として大いに活躍したが、折からの好況にも拘らず、恵まれるところは比較的僅少であつた。橋本蚕種製造所の原蚕飼育を行ったこともある。四十七年からは養鶏を開始し、今日に及んでいる。成鶏二千羽と言えば特に多いとは言えぬが、羽数ばかり誇つていても駄鶏が淘汰されて居らぬのでは意味ない。氏の二千羽はすべてこれ一粒撰りの精鋭である。

点燈、水道その他の施設の完備して、真に文化農園と呼ぶに足る。

やはりよき意味に於けるインテリの仕事の優秀さが窺える。

父君寅太郎氏は産組幹事、理事及び区長を勤めるなど大いに移住地のために盡瘁し、その鋭敏なる頭脳よく移住地発展のため幾多の卓見を披歴したが、之を迎え容るゝに当時の一般は未だ余りに保守退嬰的であつた。比較的不遇のうちに、四九年、脳溢血で逝去、波瀾多い生渡の幕を閉じた。

正兄氏は青年団長として移住地の模範青年団を育成した人。副区長、会計を歴任し、現在バンデイランテス産組出張所評議員である。

家庭は二男四女。バストスを永住の地と定めた、希望に溢れた一家。

海野 武男氏

(岡山県御津郡宇甘西村)

(写真)

農家の長男として一九〇二年に生まれたが九歳の時、父君に死別し、母君の手で育てられた。農学校を卒業し、家業を継いで農業にいそしんだが、二十一歳の折、母君を失った。翌年結婚。思いを海外発展に寄せて若い胸を躍らせていた。たまく欧州戦後の不況は勤務していた一地方銀行をも恐慌の犠牲とし、職場を失った義兄の心に、クローズ・アツプされたのは、日本の対称点にある大邦ブラジルの一望瀝なき大沃野である。男一匹、大いに働き甲斐ある新天地である。義兄から、この国への移住をすすめられて、二人は本気になってブラジル事情を研究し始めた。甚だ有望である。ついに意を決した。海野氏が家長となって六人の家族を構成して渡航した。

モジアナ線ジャタイ駅リモエル耕地に配耕された。ここで義兄の家族と分れた。義務農年を終ると、ノロエステ線アラサツバ駅アグア・リンパ耕地に一年を過した。後に、コレゴ・アズール駅附近の珈琲園に六年の契約農として入ったが極めて不健康地で、ここで夫人は、夫と一人の愛児を残して、短い移民妻の生涯を閉じた。

経済的に困窮するのは、新来者の常であるが、これに加うるに精神的な懊悩は、さらに深刻であった。

サン・パウロ州内をここかしこ、安住の地を求めて歩いた。ソロカバナ線アシス駅に知人がいて、その人を頼って同駅のアルデイラ耕地に入った、ここで現夫人を迎えた。しかし、こことて、真

に氏の求める土地とは言い難かった。そして、遂に理想の地としてバストス移住地を選び、現地区に「域の土地を求めて入ったのは一九三二年冬八月のことであった。たまたま寄せ来った棉の好況に遭遇して、渡伯以来、はじめて、経済的な安堵を得た。三九年から三年間、棉作のかたわら、カミニヨンによる運送にたずさわった。後に養蚕を五年間行った。好況の順風をはらんで、事業の舟は帆をあげた勢いであつた。やがて襲つて来た不況に、いちやく養蚕を養鶏に切り換えた。養蚕に使用した諸施設をそのまま鶏舎その他の養鶏施設に転用した。四八年からは養鶏專業に邁進し、五四年からは再び養蚕をとりあげて、現在は両者を併行的に経営している。

現在土地十域を所有し、そのうち大域は桑園にあて、繭の年産は二千キログラムに上っている。養鶏の方は、点燈設備のある鶏舎に四千羽の成鶏を飼育し、製粉、水道、飼料の配合などいずれもディーゼル・モーターでもつて行かうという合理的なもので、トラクトールをも使用しての農園の経営はバストス屈指の完備したものである。

さすがは建築設計を趣味とするだけに、数学的に緻密な頭腦の持ち主である氏なればこそ、とうなずかしめるものがある。寡言にして誠實、不屈不撓の活動家たる氏は、学務員、会計等、区の公職にも盡くすところ大きく、永住の地と定めたバストスへの郷土愛ははげしく強い。しばしば他地方を視察するのも、他の長を採り入れてバストスの血とし、肉たらしめようとの熱意と愛情からに外ならぬ。

いまや家庭は六男四女にめぐまれて温い団欒をなしている。次男清君は中学に在学中である。

湯原有米吉氏

(岡山県赤磐郡山方村)

(写真)

亡父静睦氏は、官吏、会社員、美術商等の閱歴あり、和歌をよくし、佐々木信綱門下生たりし人である。娘三人に、息子一人、その一人が、有米吉氏である。

氏は、県立瀬戸農芸学校を、渡伯のため中退した。氏は父君の感化を受けて、文学への愛好心強く、支学を通じて、強く土に生きようとの一念に燃え、その志を南米の沃野に展べるべく、両親を促して来ったのであった。一家八人。大正が昭和と改元された一九二五年のことである。氏、時に若冠十七歳。

ドウランデンセ線ノーバ・ヨウロツパ駅イタケレー耕地に配耕され、ここにあつて二年のコロノ生活を送り、同地に留ることと尚二年間棉作に従事した。次いでバストス移住地に入植することとなり、同移住地へ移転途中、一九三二年の護憲革命の勃発を見た。

サウーデ区最初の入植で、草創者としてつぶさに辛苦を味った。この年、結婚した。バストス移住地への入植は、友人の勧誘に依つたものであり、時を同じうして、日本の氏の家の土地を管理中の伯父君が、県組合に加入せしむべく手続を完了して、同移住地への入植を慫慂し来ったのであった。即ち、組合員として、サウーデ区に二十域を購入して入植したのであった。自家労力の範囲で棉作を始めた。幸に良好な地質に恵まれ、五、六域で二千アローバという多収穫を見た。

戦時中は、専ら養蚕に従い、不況に逢着することは一般と同様であつたが、要領よく危機を切り抜けた。一時、棉作をこころみだが区では率先して直ちに養鶏に転向した。以来これを専業とし

たが、五二年からは養蚕と併行的に営み、最も堅實な農業経営ぶりをとっている。

現在所有土地面積は二十畝。うち十二畝は桑園で、繭の年産一千二百キログラムに上る。成鶏三千羽。バンデイランテス産組の委托種卵を担当するだけあって、その優れた技術は刮目に値する。父君は四九年、老衰で逝去。前記の如く佐々木信綱の門下生として「多鶴園」に投歌しまた俳句をよくした。バストス移住地へ転じてからは家業の一切を有米吉氏に譲って、和歌、俳句をはじめ、囲碁、生花等の趣味の好日を送って暮していた。母君は今尚健在である。

有米吉氏は区政に盡瘁し、区長、学務委員等選ばれてよく責を果たし、また青年団長をつとめて青年層の指導に消し難い足跡を残している。

氏は文学に興味を有すると共に、音楽を好み「ひばり楽団」の世話人である。釣を最も好む。

子賓に恵まれて六男六女という賑やかさである。長男は高等商業学校に在学し、三男と四男は中学に在学している。

将来のことは子供たちの意志に任ずとして自分としてはバストスを永住の地と定めている、と氏は言う。

氏はまた大きな意味での世話好きで、邦人でありながら郡の政界に非常な関心を有ち、その方面に多数の知己を有つと同時によく世話をしている。近年は、土への喜びよりも事業的な野心に燃え、いわば熱血的気骨を示している。氏の今後の行き方には、多くの期待が寄せられている。

岡野 庄平氏

(長野県上伊那郡西春近村)

(写真)

半農半商の家の次男に生まれた。兄弟は十二人。高等小学校を卒えると、郷里の親戚にあたる酒屋に奉公に出て、二十歳まで孜々として働いた。向学の心とどめ難かったのであろう。二十二歳の時、单身、東京へ上った。昼間は石版印刷工として勤め、夜間、神田の電機学校に通学した。三年間というものの苦学しつづけた。惜しくも卒業をひかえて肋膜炎を患い、静養のため半年を、故山に過すこととなった。信濃の山々に抱かれて、苦闘に傷ついた身體を回復した。健康を取戻し再び上京したが折しも極度の不況期であつたので、職を求めるに術なく、従つて学業も半ばに挫折し、一年間を無為に過すこととなった。

一九〇六年以来北米に居住していた叔父君のことは、庄平氏を少年時代から、海外に対して漠然たるあこがれを抱かしめていた。三一年、氏が失意の身を故郷に休めていたころ叔父君は内地に帰っていた。この人の出資によつて、アルゼンチンに、商工業視察という名目で渡航すべく旅券下附の願書を提出しているうちに、叔父君自身がブラジルに渡るということになった。早速、アルゼンチン行をブラジルに転じ、構成家族員となつて行を共にする筈であつたが、差支えあつてそれが出来なくなつた。乃ち、従兄弟二人を家族構成員として、叔父君らを先行渡伯せしめた。ここに到つて、氏は東京で結婚し、實弟を家族構成の一員として三名で渡伯した。時に一九三二年のことである。

配耕先はノロエステ線リンス駅多羅間耕地であつた。一年間コ

ロノ生活を體驗し、後にパウリスタ線イリ克蘭ジア駅ジュオン・ド・バール耕地にコロノとして一年を送った。同線キンターナ駅ラファエル耕地に同志五人借地農として三十三域を借受けて入植、米、棉作を行った。傍ら、四人の同志と五十域の牧場のフォルマを請負った。これらはしかし、結局、大失敗に陥った。この失敗によつて、事業というものは自力自當で行うべきものである、との貴重な教訓を得た。

バストス移住地に隣接するモンテ・アレグレの長尾耕地に棉作歩合で入ったのは、ラファエル耕地での失敗から四年後のことであつた。ここで四年間を奮闘した。そして、いよいよ四四年に、現サウーデ区に二十域を求めて入植し、ここに始めて一個の独立した農人として新しい出発線上に立つたのであつた。

三年ほど炭焼きをした。その傍ら蚕を飼った。時しも、不況來の兆が見え初めていたので、あくまで副業的に、自家労力の枠を出でなかつた。やがて、専業として養鶏を始め、今日に到っている。

現在所有面積二十域。うち原始林は十八域である。成鶏一千二百羽を擁する。夫人と實弟との三人の自家労力だけに依つて堅實な進み方を示している。

氏は稀にみる常識豊かな、そして世話好きの人である。副区長に選ばれたこともある。釣と読書を趣味とし、茶を嗜む。夫人との間の一粒種の愛嬢佐和子さんを五三年、グロリア第一区在住の篠崎才八郎氏に嫁がせてからは、夫妻と令弟との三人暮しで、静かながら新しい希望實現のために一步步、力強い歩みを進めている。

木内 雅雄氏

(長野県南佐久那大澤村)

(写真)

一八九七年、七人兄弟の三男として生まる。高等小学校を卒えりと、進んで都立農学校に入り、之を卒業したり十九歳の時、神戸へ出、日本郵船株式会社に入社すると、新潟丸という九千トンの貨物船の事務員となって乗組んだ。どこを見ても山また山の信濃の国に生まれ育った氏に、日本はあまりに狭く息苦しい気さえた。大いなる未知の世界、海の彼方の新しい地平へ向かつて青年木内氏の胸は燃えてならなかった。

台湾航路、ウラジオ航路、北米バンクーバー航路と、紺青の大洋に夢の航跡を刻んでいるうちに、不幸、脚氣を患ってしまった。一年三ヶ月の海上生活を、涙をのんで閉じるより他なかった。

村へ帰ると、小学校の代用教員を勤めた。高原の自然は美しくとも、氏の、海外へのあこがれをひきとどめるには足りなかった。一九一七年ごろから、県下の移住者のブラジル、イグアペに向かう者の多いのを見た。木内氏は、夫人と實弟との三人家族で一九一八年渡伯した。

モジアナ線ジョアキン・フイリミーノ駅サンタ・リタ耕地にコロノ生活は始められた。当時、同耕地には悪性感冒とチブスが猖獗を極め、ほとんど毎日のように死者を出していた。九ヶ月目にストライキを起し、その煽動者として氏は退耕処分を受けた。氏と共に海を渡って来た夫人を亡くしたのは、實にこの耕地九ヶ月の生活の中であつた。

ソロカバナ線レンソエス駅ドス・パトス耕地の吉永宗義民方に、

實弟と二人で就働し、二年後、独立して同線第一モンソン植民地に借地で棉作を始めた。借地農として同地にあること十二年の長きに亘った。勿論、起伏はあったが、大體に順調で、かなりの財を作った。郷里から、南の花嫁第一号たる現夫人を呼び寄せて、人生の再出発をなした。

バストス移住地の現地区に二十域の土地を求めて入植したのは一九三二年のことであつた。一家は氏夫妻と二児に實弟の五人。棉作に従事し、三年目にはヴィトリア区に二十域を求め、かけもちで二十八域の棉作を行った。かえりみると、モンソン時代から二十四年間というもの、棉作一本槍で、棉の中毒とまで冷やかされたのも無理はない。

四一年の、太平洋戦直後、氏は養蚕に転じた。あくまでも自家労力でこれに専業し、不況になるまで健闘した。努力は酬いられて、渡伯以来、はじめての大金を握り得た。不況時代の二年間は雑作を行ったが、流石の棉作のヴェテランも綿には厭気がさして、再びこれは手がけなかった。養鶏に転じたのは五〇年からのことである。

現在、所有土地三十域で、七域の牧場に牛十五頭を放つ。成鶏二千六百羽の養鶏は、点燈、水道等の完備した施設下に極めて良好な成績をあげつゝある。トラクトールを使用して十四域の雑作を行う。氏はまた同区一の果樹王で、バイアーナ種のランジヤは品質のよさで定評がある。ミールヨ、果實は聖市へ出荷している。家族は一児を亡くして、現在氏夫妻の外に二男一女がある。義侠心に富む氏は同区の初代区長であり、其後副区長、会計等、区のために盡瘁するところ多い。

塩飽 康夫氏

(岡山県児島郡藤田村)

(写真)

自作農家の七人兄弟の三男として一九一二年出生。高等小学校を卒えると、十五歳で単身、岡山市に出て、新しい運命を伐り開こうとした。氏の實社会との対決は、一年半の噴霧器販売店の店員生活から始まり、鉄工場の見習工、酒屋と転々したが、十九歳の時、郷里に帰ると八百屋を開業した。がこれは半歳で閉店した。漁師の生活に興味を覚え、渡伯までは自分で舟を持ち、独立して漁労に携ったこともあるという。

不況の農村に、大家族を擁して、将来の計を思うとき、海外の一大新天地への移住より他なし、と勇猛心を揮った氏の父君の先見の明は敬服すべきである。ブラジル事情の概要は、すでに宣伝で知っていた。移住組合員となつて一九三一年、ブエノス・アイレス丸で渡伯した。家族は両親に、氏等七人兄弟、これに、兄嫁二人加つて総勢十一人という賑々しさ。いわゆる資本移民として、カスカッタ区に三十域の土地を購入、入植した。入植の年、カミニオンを求め、氏と長兄が運搬業を始めた。珈琲を植えたが二年目に襲つて来た霜にやられて、出鼻を挫かれた心地であつた。土地が良くないと見て、サウーデ区に三十域を求めて入植した。

棉作に主力を注ぎ、十八域を之にあてた。また二十四域の雑作をやった。家族の手も多かつたが、労働者を使い、入植三年日ごろにはサウーデ区第一の大規模な事業経営ぶりを示した。しかし、棉は結局、あまりに手をひろげ過ぎて失敗に帰した。

三四年、北谷幸雄氏の長女昌枝さんと結婚した。時あたかも事

業拡張期で、結婚と同時に分家して依然運搬業をつづけた。太平洋戦争勃発と同時に、現地区に土地十域を求めて入植した。運搬業から養蚕に転じたが、いわゆる養蚕景気に逢うと、大いに利益を収めた。やがて来た不況時にも、専ら養蚕に従事した。養蚕の好況期は、氏夫妻にとつて出発期であつたので事業も勢い小規模たらざるを得なかつたが、戦後、土地を買い増し、また五〇年頃からは事業を拡張して、雑作契約五、六家族を入れた。資力のあるかぎり、事業圏を拡大することは、青少年時代からの氏の旺盛なる事業慾の然らしめるところであつた。

現在所有土地は二十域、うち、十域は桑園である。繭の年産八千キログラムに上り、バストス移住地で一、二を競う大養蚕家である。雑作は四域、牧場十域。トラトラールを活用している。養蚕二、雑作一の契約家族を入れている。

結婚して分家した時は全くの裸一貫であつた。一域半の棉作を夫妻で始めたのが振り出しで、やがて養蚕で産を成した。努力に依つて人生街道をまっしぐらに突き進む生来の事業家。家庭は夫妻の間に三男五女の子寶を恵まれている。

加 藤 勇氏

(香川県香川郡由佐村)

(写真)

農家の十一人目に当たる末子で、高等小学校を卒えると、令兄を頼つて大阪に出た。二十一歳の時独立して、カネヒサの屋号で天満青物市場に商店を起し、二十四歳まで大いに商売に励んだ。

令兄興太郎氏が渡伯希望だったので、その家族構成員の一人となって、至極軽い気持ちで渡伯の途についていた。

配耕先はノロエステ線カフエランジア駅サンタ・マリアナ耕地で、着耕と同時に令兄と別れ、独身だった令姉と二人でコロノ生括第一歩を踏み出した。居ること九ヶ月で退耕し平野植民地に移った。ブラジルの百姓は独身では駄目と感じ、現夫人と結婚した。令姉も同年、嫁いだ。一年後、リンス駅有明植民地に四年契約で入ったが、二年目には大霜に遭い、おまけにマラリアを患った。偶々バストス移住地に知人があったので、無一文で入植した。三二年のことである。佐藤氏経営の製材所に就働、ついでグローリヤ第一区中野米太氏地区に契約農として入り、夫妻の手で米百俵を得た。ついでサウーデ区に入植し、今日に及んでいる。

女手の多いところから棉作を養蚕に切換え、棉、落花生を副業とした。現在所有土地十域、うち桑園は七域で繭年産四千五百キログラムに上る。夫妻の間に二男五女あり。長女房子さんは信太茂氏に嫁してバストス町に在り、一児の母となっている。

田地 亀治氏

(茨城県久慈郡世矢村)

(写真)

故亀治氏は農家の出であるが、青島攻略戦に海軍軍人として参加した勇士である。

バストス移住地サウデ区の区長在任中の四八年、胃潰瘍で逝去したが、その清廉潔白、円満の人格は、今尚敬慕されている。

その次男として生れた昭氏は二歳の折（一九二八年）両親に伴われて渡伯、ノロエステ線グアイサーラ駅ウニオン耕地に入り、三二年、現バストス移住地に転じた。

サウーデ区で日語学校四年、グルッポ三年を修めた。少年期から青年期へ移るころ、太平洋戦争始り、日譜教育は不可能となつて向学心に燃える氏にとっては、實に恵まれぬ時代であつた。家の働き手が少ないので、激しい労働に終日を送り、疲れ切つた體で熱心に葡語の夜学に通つた。棉作から、戦争中は養蚕に転じてこれを專業とし、不況期には、雑作、四九年からは専ら養鶏に従事して來た。

四八年、亀治氏の歿後、長兄進氏は分家して聖市に移り、鶏卵販売業を営み、二人の娘もすでに嫁し、未亡人となつた志知夫人は子息昭氏との四人暮しであつたが、五一年、良縁あつて末娘はパラナに嫁ぎ、子息好君は五四年、マツト・グロッソ州の兵營に入隊した。

現在所有土地面積は十域で、うち牧場二域、桑園二域半。成鶏一千羽を飼育、繭の年産二千キログラムに上る。

野田 清松氏

（愛知県東加茂郡盛岡村）

（写真）

齡十八にして、既に満州移民を志し、海外の新天地に心ゆくばかり腕を振うことを夢見た熱血の青年だつた。单身渡伯すべく決意していた折、兄君も遂に氏のすゝめを容れ、兄君の家族と共に

渡伯したのであった。

モジアナ線フランカ駅サンタ・テレーザ耕地に一年、後日本人集団地であるバストスに十アルケールスを求めて入植した。独立自尊の意気を以って、先ず生活を自力で開拓する。そこに自由な天地で充實したものを築こう。これが渡的前からの希望だった。兄君と別れ、单身バストスに到り、独身者に興えられなかった土地の分譲も氏の意気で遂に入手、三八年に現夫人と結婚して、新しい人生街道を踏み出した。

先ず棉作に初まり、養蚕に及んだが、地力の減退から成績は予想通りには挙げがらず、後に養鶏に転向して現在の盛業を見るに到った。この間夫妻で十アルケールスの棉作をし遂げたという奮闘家である。現在所有土地十アルケールス。鶏千六百羽。「幼時の教育が生涯を決するものである」から、子弟の教育を生活の第一義として、よき環境を作り生活にうるおいを興えることが必要である、と氏は言う。四男一女のよき父であり、長男豊君、次男耕三君は中学に在学しており、これからの人生と取組む努力家である。

丸山 嘉一氏

(新潟県南魚沼郡藪神村)

(写真)

投機の失敗から先祖代々栄えていた家が傾きかけた、そうした家運を挽回すべく意気盛んな父君と共に渡伯した。氏は新らしい天地を夢見た。海外への飛躍に新生命を托していたのである。兄

第七人と祖母君と両親、一家十人。

先ずパウリスタ線モンテ・アルト駅イザベル耕地を振出しに、上塚第二植民地、バストスと努力の生活がつづけられた。渡伯早々にして母君を喪った。文化施設のあるバストスが当時の氏の憧れであった。以後、米作及び棉作で、三八年には好況に乗り家産を増した。やがて不況到来とともに、産業組合との関係を見、一時挫折の止むなきに到ったが、五三年から再び養蚕の好況を見現在の盛運を見るに到った。現在所有土地二十アルケレス。内桑園三アルケレス。繭の年産三千キログラムに及ぶ。

氏の生活は奮闘の二字に盡きる。渡伯直後母君を喪い、父君は中風で長らく病床にある、ナミヨ夫人の骨身情しめぬ助けを得て、薄倖な母君の霊をとむらい、父君の心を慰め、一家よく相助けて来たことは涙のにじむものがある。その間、祖母君は父君を助け、孫を世話しつゝ九十二歳の長寿を全うして五二年に亡き人となった。氏は青少年指導者として業績見るべきものがあり、バストス産組の幹事等公職に多忙を極めている。

伊藤 亮一氏（静岡県周智郡水窪町）

（写真）

幼にして母君を喪い、又若年にして父君を喪った氏は、家長代理であり、早くも一家の中心として祖父君と共に家業である農と、鍛冶屋業を盛んにした。が一家をあげて朝鮮統営郡統営市の郊外に移り、孵化業を初めた。時に齡三十五。しかし、朝鮮は氏の性格に合わず、南米大陸への志望止み難く遂に十年後内地に引揚げ、

大阪で、大阪城を毎日眺めつ渡航手続を済ました。

その間氏の胸中には朝鮮で、赤痢及び子供の皮膚病などで所持金を使い果し、渡伯を決意するまでの生活が、走馬燈のように去来した。

パウリスタ線プリーニョ・プラード駅で義務農年を済まし、聖市郊外マウアでトマテ栽培、後ノロエテ線カフェゾポリス植民地に一年、四〇年バストスに移った。

製糸工場に就働一年にして現サウデ区に十アルケレスを求めて入植したのだった。養蚕で家運を起したが、原蚕飼育に従事中、不況のため挫折し、五二年から養鶏専業となつて今日の盛業を見るに到った。所有土地三十アルケレス、鶏三千羽、自家用雛の自家孵化を初めこと養鶏に関しては朝鮮時代からの二十年間の経験にものを言わせている。

氏は多忙の中に公職にあつて、副区長、養蚕組合時代に幹事、評議員等を歴任し活躍した。

新谷十太郎氏（山口県阿武都生雲村字銅）

（写真）

十年経てば、故郷に錦を飾つて帰ろう。海外に出て一奮発しようと思つたのも、幼にして母を喪い、継母と別れ、結婚後は、長男でありながら分家して農にいそしんでいた氏の当時の心境であつた。同村に於いて渡伯希望者もあつたが、他より先に、幸多き夢を抱いて渡伯したのであつた。時に歳三十。

モジアナ線イタイクラ駅モーロ・アズール耕地に義務農年を

終え、次にノロエステ線、アラサツバ市サンタクララ耕地からバストスト、順調に働き、かなりの資産を蓄えた。

堅實な経営法を以って、棉作、戦時中の養蚕と一家揃って自立自営の精神で生活の車を押し進めた、こうしたことが成功の鍵となった。つまり女子の多い家族で、合理的に養蚕を主とし、不況時にもこれを以って乗切ったことである。

現在所有土地十アルケール、内桑園六アルケールで前年産三千キログラムを超え、鶏が一千羽。一見朴訥な氏が着々と築いた楽園である。長女カツミさんは木内則夫君と結婚して隣家に在る。氏は四男四女の子寶に恵まれ、一家挙って、日蓮宗の信仰篤い人である。

しかし氏には戦時中の日本人圧迫が最も淋しい時代であったという。が、物心両面の苦難を超え、やがて子女の成長に希望をかけた現在の氏の心境は悠々たるものがある。

吉原久一郎氏

(広島県神石都田頭村)

(写真)

父君浅市氏は既に青年期から北海道で燕麦栽培に従事していた。氏は小学一年で渡伯のため退学し、一度広島に寄留し、後渡伯した。

パウリスタ線メンドンサ駅に一年、後グワタパラ耕地、パウリスタ線バレットス附近、サン・パウローゴヤス線のルイス・バレットス駅に甘蔗栽培、ノロエステ線プロミツソン駅に棉作の歩合作

と、転々、氏の運命であるかのように、幼時から転住の生活がつづいたが、これも両親が子弟の教育を慮う一念からであった。プロミッソン駅ブリグイジン二区同植民地で二年通学した氏は小学校程度の教育を受けた。時に齡十五。

此の、植民地に於いて十域を購入し一万五千本の珈琲を植付けたが、不況のため四年目になる珈琲を手放してバストスに移った。三三年に現サウーデ区に十アルケーレスを求めて入植、それも子弟の教育が主な動機であつた。こうしてバストスに於ける氏は、舊移民である経験を生かして堅實に事業を営んだ。棉花、養蚕、雑作を経て、四九年から養鶏を始め、今日に到る。所有土地二十アルケーレス、鶏二千五百羽。

三六年にカスカッタ区在住の柴田龍之助氏義妹キクヨさんと結婚し、一男八女の子賓に恵まれた人である。両親共いまなお健在で、壯者を凌ぐ元気で毎日働いている。

古賀 広市氏

(佐賀県佐賀市道祖元町)

(写真)

物どころのつかない六歳の時、氏は母を喪い、高等小学校卒業後は雑貨商見習を振出しに家業の畳職の手伝いなどをした。佐賀歩兵第五十五聯隊に入隊、上等兵となって除隊した。

日本の人口過剰問題、それが氏の渡伯への動機をつくった。人間の大成は広い海外に於いてのみ實現出来る。そうした確信が氏を動かしたのである。

パラナ州カンバラ駅の耕地に通譯もない不自由な生活を振出しとして、珈琲コロノ三年、ソロカバナ線。パルミツタ駅で珈琲の六年契約をなし、パラガスーで棉作、借地農四年と転々、その間霜害疾病などに耐え、戦時中薄荷の好況に乗り、一朝にして百数十コントスを儲けた。機を見るに敏な氏はこゝで切り上げ、四四年、現サウーデ区に十アルケーレスを購入して入植したのだった。果して薄荷は下落、氏の転換の巧さが今日の盛業の因となったことは又、養蚕の不況到来前に、養鶏に切り換えたことなどもそのよい實例であろう。現在所有土地十アルケーレス。鶏二千羽。点燈、水道等完備し、合理的経営法で築かれた氏の農園は又文化農園とも稱されている。

氏の實直さは又有名で、借金を嫌い、常に自力で運命を拓いた人である。公職にあつては副区長、区長を経て区の問題をよく平和的に解決し、村の明朗化に大きな貢献をなした。

吉 田 朝 二氏

(香川県小豆郡福田村)

半漁半農の平和な村に育った氏は、長年病床にあつた父君を幼にして喪い、長兄と共に、渡伯したのであつた。既にミナス州アラグアリー市カンポアレグレ耕地に在った氏の姉君たちの呼寄となり、同珈琲園に四年契約を以て伯国生活がはじまったが、寂寥極まる同地の生活に耐え得ずついに八ヶ月でモジアナ線ブルドスキー駅の伯父君の許へ走り後に古關氏耕地と転々する間に、ようやく光明を見出した苦心の結晶とも言ふべき珈琲に降霜あり、一切は水泡に帰したのだつた。やがて、聖市近郊イタベセリーカに

移り、蔬菜借地農をはじめた。折から薪炭の払底時代に逢い、氏は聖市コンセリエイロ・フルタード街で薪炭販売業を始めた。相当の成功は見たが家族の健康上、ボール・ソルベツテリヤをカンブシー区に開業、後、兄と別れ青物店を開いた。

ここでも盛業で成功であつたが、子澤山のため都会生活も樂でないので義兄の住むバストスに移つたのであつた。義兄の隣接地即ち、現サウーデ区の緒方久幸氏地区で養蚕を専業し今日に至つてゐる。

現在、繭の年産些二千キログラムを超え、マツト・グロッソ州に二十アルケーレスの土地を持っている。理想を追つて転々とした氏も、今では大地に足をつけて、子弟の教育を理想とし、読書、武道をもつて自からを培い、温和な人格を磨き、努力の生活を つづけている。

又四男一女のよき父であり、夫人の明かるい気質と相俟つて「これからが人生だ」と述懐する氏の生活は豊かである。

中 島 正 人氏

(熊本県飽託郡沖新村)

不知火燃ゆる有明海に臨む、半漁半農の静かな村が、氏の郷里であつたが、一九二七年、大津波によつて全村壊滅の憂日に遭い、それから、漁師、坑夫と、氏の苦闘の生活がはじまつた。父君はハワイ移民の成功者があり、姉君がペルーに在つた關係から、氏も少年の頃から常夏の異郷に夢を馳せるようになった。氏の渡伯も宿命的なものであつたかのである。

ソロカバナ線エパウス駅マンボーカ耕地に僅か四ヶ月、後バス

トスに移り、ウニオン第一区の宮野林之助氏地区に一年、佐藤環氏地区、及び大野誠一郎氏地区とにそれぞれ契約農として励み、四六年に現サウーデ区に十アルケールスを購入して独立農となる。四八年から養鶏をはじめ現在に至る。

現在、所有土地十アルケールス、鶏二千三百輿鶏舎は、点燈、水道の施設完備してゐる。特に氏の旺盛な研究心と養鶏技術が買われてバンデイランチス産組の種卵採取を委託されている。

二男六女の子福者で、長男正昭君は青年団副団長、空クラブ運動リーダーとして新しい農村建設に力を注いでいる。

独立農になるまでには、氏も幾多の苦難を超えた。倦まず撓ゆまずの努力勤勉の賜が今日を成したことは氏を知る人なら誰も認めるところである。「今が、渡伯以来、物心両面に最も落付けて恵れた時である」と氏は述懐する。好きな小鳥飼育に生活を慰藉し、バストスに永住の気持で働く氏の前途は、一家の健康明朗と相俟って、青空のように明かるい。

弘 田 明 身氏

(高知県吾川郡三瀬村)

明治末年から大正初年時代に於ける伯国への移民は、所謂パイオニア精神の旺盛な先駆者達であつた。氏も高等小学卒業一年後、少年期から海外進出を希望していた所から、ついに義兄と共に敢然と自費渡航で渡伯した先駆移民の一人であつた。時に一九一三年、齡十五。

モジアナ線リベイロン・プレット市附近にあること半歳にして、未だ邦人の足跡なきパラナ州シャバンチス駅モンテ・クラール耕地で邦人開拓者としての先鞭をつけた。四年後にノロエステ線ビリグイ駅ビリグイ植民地に土地二十域を求めて独立農となるが、

義兄と別れ、単身独立して三万本の珈琲を植付け、万丈の氣を吐いた。一九二一年、現夫人を日本から呼寄せた。南の花嫁第一号である。ここにあること十五年、三二年に現サウーデ区に二十アルケールスを求めて入植したのである。棉作六アルケールスから始め、次いで三七年に養蚕をはじめて区の先駆をなした。すべて新しい道を拓く苦難は、常人のよくする所ではないが、氏はこれを克服し、何事にも先駆をなした。以来、不況時にも引続き養蚕を家業として、今日の盛業を見るに到ったのである。

現在所有土地六十アルケールス、うち桑園十アルケールス。牛三十頭、繭年産五千キログラム、酪農の合理的な経営を軌道に乗せた人。

更に氏は、区長、副区長、会計をつとめ村政に盡す。長男茂穂君は、戦時中区の警察嘱託として治安維持に努め、治績大きく、その他兄弟相陸じく仕事に励んでいる。渡伯四十年、苦難を超えて今日を成し、バストスに永住し、好きな読書に、又生長の家の信者として、その勤勉、堅實な生活態度は、以って農家の範とされている。

茅野 甚 吾氏 (鹿児島県川邊郡坊之津村)

狭い日本に住み飽いて、昭和八年、二十三歳で、独身青年五人、夫婦者三家族を引連れ十八人

家族の家長として渡伯した時は、地方新聞は「豪農の息子ブラジルへ」と言う大見出しで書き立てたものであった。氏は富裕な半農半漁の家の次男として生まれ、十歳の時實母に死別し、十五歳の時大阪の姉の許に身を寄せ、大金を持って關西方面に五、六年

遊び、兵隊検査で甲種合格くじのがれになると郷里でお坊ちゃん暮しをしていたが、飽きくして来たので大家族を構成し、直接バストスに入植した。現フアルツーラ区に二十域の土地を求め、お大盡百姓をはじめたが、すぐに持参の金もつかい果し、帰国を決心した。しかし一緒に来た青年たちに止められ、遂に踏み止まった。早くに十一域の棉作をして又後にはパラナパネマ河沿岸コロアードで四十域の棉作などして、相当な黄金も握ったが、生まれつき金銭にてんたんで、人の面倒をよく見る性質で、引連れて来た青年達の独立や結婚の世話に奔走して、金は皆散じてしまった。現在土地三十域所有、伯人契約者四家族を入れて雑作をし、氏一家は養蚕、桑園五域で、前年産二千キロをあげている。

豪快な薩摩隼人の血を受けて、絶えず未来に遠大な理想を抱き、大掛りな事業を進めて来た快男子で、性来侠気に富む親分肌で、人情に厚く、金に執着しないので、多く儲けて大きく散じて来た。家庭は二男一女、子弟教育の為バストスに現在は居るが、遠か麻州の大密林を望んで、雄大な夢を描いている。

西村 英一氏

(岡山県後月都高屋町)

(写真)

村の庄屋であつた西村家の長男として生まれた。税務史であつた父君の任地を、極々として移った。四歳の時、和歌山県田邊市に、三年後京都府木津、ついで伏見町。この町の小学校三年生の折、富山県の、蜃気楼で名高い魚津の町に転じた。小学校をここ

で卒えた。

父君はこの町在勤中に官を辞し、常時、日本の委任統治下にあったサイパンに、官吏として赴任した。氏は、京都の同志社中学の寄宿舎に預けられた。クリスチャンの家庭に人となり、一家は挙げて同志社関係だった。現学長田畑忍氏とは同級で、共に同人雑誌を発行したこともあるという。絵画が好きで、教室を会場として、同志と画展を開き、その後期印象派調の作品は、独創味がある、と言って有島武郎氏に力づけられたことも嬉しい思い出である。卒業後、遊学のため上京し、偶々力行会の学校前を通りかかると、美しい讃美歌の唄声が流れて来た。即時にこの会に入した。少年時代から海外への夢を抱いていた氏は、当時伯国の大使館にいた野田良治氏の世話で、単独渡航者として二四年、渡伯した。多感な二十歳の青年で、氏はあつた。

サン・パウロ市の上地旅館に投宿すると、翌日からミカド・クラブのテニス・コートでラケットを振り、毎日の日課のようになってしまった。放浪記の第一頁である。ブラジル時報の活字ケイス書きから活字工、ついで日伯新聞（当時、翁長、野村氏らあり）に移り一転してサン・カユターノのガラス工場に畫工として入った。輪湖、渡邊（孝）両氏の斡旋でサン・セバスチオン島にカカオ栽培に行ったこともある。ロレンソ・グラナット氏の耕地に半年ほど居て、この地から、当時セツテ・バラスに居た輪湖氏にカカオ種子を送った。現在リベイラ河流域に生えているカカオは、この種子によるものである。同島から出て輪湖氏宅に寄宿し、海興の道路開設を請負った野村秀吉氏の下にあって、半年余り、苦勞した。

やがて、遠くノロエステ線ブリグイ駅奥ビラツキで日本語教師

となった。一年程してカマラーダとなった。

良縁あつて現夫人と結婚すると、義兄に当る人のビラツキの土地で六年の珈琲契約をした。ついでバストス移住地に移り、カスカッタ区に十域を求めて入植した。三一年のことである。

バストスに入つた縁となつたのは、偶々バストス野球チームがアリアンサ遠征の途次、ビラツキに立ち寄つた時、チーム中に斎藤太郎選手あり、同志社中学の学友だつたところから、誘われたによる。カスカッタ区では珈琲が植付禁止となつていたので、棉作を六年つづけた。バストス町へ出て運輸組合に四年半、事務員として働き、戦争によつて組合解散となるや、アルト区上田平吉氏農場で三年間、養蚕を歩合で試みた。後に現ファルツラ区五号地（十域）を購入、入植し、雑作を行つた。所有土地面積四十域。四十馬力のトラクトールを使用している。

宗教と芸術とスポーツと農業との人生―多才多能の氏は、コロニア球界のピークの一つである。美しい球風をもつバストス・チームの性格は同チーム育ての親たる氏の性格そのものである。万年区長を勤め、連日評議員。

白須千之助氏（広島県豊田都鷺浦村）

（写真）

農家の長男として生まる。小学校の課程を終了すると、家業を助けた。十六歳の時、ハワイ渡航を志して、単身、實行するつもりであつたが、米比戦争により、独身者の入国が禁ぜられたので、止むなく、諦めた。メキシコやフィリピンなどへ行くこともなか

く實行は困難であつたが、海外への雄飛熱は止むることが出来ず、幾度となく家出し、渡航を企てたが、いずれも失敗に歸した。

二十一歳の時、北米へ渡る目的で、大阪商船会社に入り、台南丸という台湾航路の船に乗組み、以後、船員生活を三年続けているうちに、脚氣にかかつてしまい、涙をのんで陸に引きあげた。

一九一四年、第三回目に手に入れた旅券をもつて、夫妻親子と令甥を加えた四人家族でブラジルへ渡った。永い間あこがれた自由な海外生活の幕は海の旅路に開いたのである。

モジアナ線オルランジア駅ペローバ耕地にコロノとして配耕され、とどまること三年半に及んだ。同耕地通譯であつた畑中仙次郎氏と共に、平野植民地に転じた。氏はこのとき十五域を購入し、独立農としての出発をしたのであつた。同植民地には第二回の入植者であり、開拓者として、つぶさに辛酸を嘗めたのであつた。

入植二年目の一八年に、夫人はマラリアと肝臓病とで、不歸の客となつた。もともと、平野植民地開拓当初の、悲痛なる移民哀史は

後世の人をして涙禁じ能しめざるものがある。マラリアの猖獗、来襲する蝗の大群、珈琲価の暴落等、全く目を覆う慘澹たる事實の連続だつた。

一九年、現夫人を迎えた。珈琲樹二万三千本を植えた。地味に適し、植民地では最優秀の品質だつた。血のにじむような苦闘だつた。しかし、翌年の不況に、棉作を始めた。同植民地で棉を植えたのは、同氏と畑中氏だけであつた。モンスン植民地に次いで、邦人棉作界の最古参である。

二四年の珈琲価の大暴落は、サントス着でコツコ一袋七ミルreisという惨めなものであつた。これの打撃は大きかった。遂に

氏は悪戦苦闘に満ちた十七年間の平野植民地生活を切りあげて、三二年、バストス移住地へと転じた。平野植民地での戦友畑中氏の慫慂による。現フアルツラ区に二十域を求めて入植した。

バストス移住地では先ず棉作。年によつては十四域も栽培した。これをつづけて四四年に至り、養蚕に転じたが、間もなく不況となり、養鶏に移った。区ではトップを切った。爾来、今日に及んでいる。

現在所有土地面積は四十域。うち十五域は桑園である。雑作には五域をあて、トラットールで機械化している。繭の年産二千キログラム。成鶏一千五百羽を飼育中である。

氏は開拓期の区長をつとめて盡瘁し、また六期に亘つて会計に任じた。三年間、産組評議員を指定任命された。平野植民地時代の苦悩は、あらゆる面に亘つて痛烈を極めたが、バストス移住地に来てからは悉く順調である。在伯四十年を超えて、この徳望高い老拓人はなお串豊鑠、永住の地バストスの大地と親しんでいる。

小谷 虎市氏 （兵庫県加西郡九会村）

（写真）

朝夕の挨拶にさえ「もうかりまつか」と言うのが慣いのお阪商人、明けても暮れても、金銭に血道をあげた半生の商人暮しを投出して、ブラジルの百姓に転じ、明かるい子孫の将来を眺めつつ、樂隠居の悠々さを楽しんでいる人に小谷虎市氏がある。

物質を追い廻して損得に一昇一憂して来た半生を結局は空しいものと感じた所に氏の渡伯の動機があつた。

兵庫県の一農家の次男に生まれた氏は、高等小学校を卒業すると同時に、大阪に出、洋反物店に入り十年間を商人としての修業をつんだ。明治四十四年結婚と同時に独立して、華しく腕に覚えの洋反物店を開業し、一時は門前市を為す盛況に商人冥利を感じ、我が世の春を謳ったが、欧州戦争直後の世界的不況の嵐に吹きまくられ、遂にお手上げとなった。再興を期して、あせればあせる程いよいよ苦しくなり、金の苦労がつくずくと嫌になつて来た。斯うした時に氏の頭に浮かんだのは、青年の頃、北米帰りの得意先から北米の事情を開き渡米を志した昔の夢であつた。

時あたかも大正の末期、海興のブラジル宣伝たけなわの頃で氏は、北米渡航の夢を南米に實現すべく、ブラジル移住を志した。

モジアナ線セラ―駅マルチノポリス耕地に旅装をとぎ、コロノ生活三ヶ年、続いてノロエステ線リンス駅スイサ耕地に三ヶ年、その間家族は健康に恵まれ、経済的にも不自由なく、順調に進んで来た。それと言うのも、「人生は金なり」から発して、金に見切りをつけた氏は、一切生活に無理をしないで、つゝましやかに暮し、人生を樂しみ、子弟をのびのびと育てる事に専念した結果であつた。

昭和七年、バストス移住地に移り、現ファルツ―ラ区に十域の地を求め、同区開発の先駆として入植した。耕地時代からも、人は氏の教育熱心を見て、「君は子供を勉強させる為にブラジルに来たのか」と言われる程であつたから、バストスに来て、子弟は皆学校に通わせ、氏は嘗々と事業を守って行つた。

自家労力の範囲内ではじめた棉作も好調で三年目には他に二十域の土地を買い、資本を投じて棉作を大々的にはじめたが、不運にも長男俊一氏が破傷風に罹り、一命はとりとめたものの約半年

間を病臥した為、事業は失敗に終った。これにより、氏は、いよいよ一かく千金の企業はやめ、地道な道を進むことにきめ、養蚕も小規模にはじめて、不況時代の損害も小さく喰いとめ、現在は、養鶏と牧畜と郊作の三本立てで、急がずあせらず、生活を享受しながらじつくりと事業を進めている。

中でも牧畜には父子共に趣味あり、氏はスイサ耕地時代、百数十頭の養豚をして居り、現家長の俊一氏も、牛の飼育に熱心なことは近隣の模範となっている。

現在は子女もそれぞれ成人し、長男は氏の後を継ぎ、次男勇三氏はサンパウロ市で商業に従事し、長女、次女、三女、四女皆、それぞれに結婚して幸福な家庭に入り、五女一人家に在って在学中である。孫も二十人に殖え、氏は樂隠居の身分となり、嗜む酒に陶然として、謡曲をうなるを楽しみとしている。

氏の後半生は「樂しき哉人生」と深い味わいを含ませて、言うことが出来よう。

山田 武一氏

俊治氏

(静岡県小笠郡河城村)

(写真)

養鶏で最も技術を要し、困難なのは育雛である。周到な用意と細かい神経と緻密な頭脳を要する育雛は特に日本人に適して居り、伯国養鶏が邦人の専業となっているのも、そこに原因がある。この育雛に要する育雛器に新考案の理想的傘型器を広めたのが、山

田武一氏である。

武一氏は、少年時代より濱松市のブリキ屋に弟子入りし、青年時代には東京に出て、更に腕を磨き、濱松市でブリキ屋を開業するつもりで帰郷したところ、父が渡伯を計画していたので、父母に従いブラジルの天地に新しい人生を求めて渡来したのであった。もともと氏の渡伯二年前に、實兄と實姉が既に渡伯して居て、ブラジル事情をよくわきまえ、覚悟をきめて、バストスに直接に一家七人で入植したのであった。

ファルツーラ区に十域の土地を購入し、同区最初の開拓者として唯一の日本直来の家族であった。棉作好況の波に乗り、相当の余裕を生じたので、第二期計画として、北パラナ・アプカラーナ附近にも土地を買い、養蚕景気華やかな時代には、産組の原蚕飼育をしていた。ところが養蚕不況と共に産組の台所は火が消えかゝり、氏等の預金もこげつき、遂に北パラナの土地も手放さざるを得なかった。産組崩壊後はブラ拓の原蚕飼育をしていたが、いよいよ行きつまり、養鶏に転じたのであった。「芸が身を助ける不幸」とか、不況時代には市街地に副業としてブリキ屋を開いたりしたが、養鶏の将来性が見通し出来るに及び、鶏專業にかえって今日に及んで居る。

現在土地三十域、点燈給水の完備した鶏舎を建て二千七百羽を飼育し、十三域は他に貸興している。

棉作時代には全バストス品評会に棉を出品して一等賞を獲得したが、一九五二年のバストス卵祭りの品評会に出品した鶏卵にも優勝杯を授興された。近郷切つての勤勉實直な篤農家としても知られて居り、ウニオン在住の石澤氏の長女キミヨさんをめとり二児の父としてよい家庭を営んでいる。

實弟悦治氏も一時、聖市でメカニコとなりウニオン区栗田氏四女と結婚してランシヤリア市のフォード代理店に勤務していたが、現在は帰植して、兄弟二家族共に仲よく生活して居る。兄武一氏の養鶏に対して、弟悦治氏は専ら養蚕にたずさわり、末だ健在の両親に兄弟でよくつかえている。

兄武一氏は区開植当時の初代青年団長として活躍し、弟悦治氏も亦、青年団の指導者として、信望の厚い方である。現在二児の父であるが、スツーパーマンらしい若々しさを失わない朗らかな人である。

兄武一氏はブリキ職人として立派な腕を持ち、バンデイランテス組合の注文に應じて新案傘型育雛器を製作し、最近はソロ線方面の養鶏家からも、多くの注文を受け、余暇を製作に当てゝいる。

片寄 寿一氏

(福島県石城郡平市)

(写真)

五十年後の伯国の社会と国際的位置などを予想し、噴茫無限の麻州に瞳を向け、日本人の発展地を、そこに定め、百年の計を建てゝいる人に片寄氏がある。

土地の舊家片寄家、八人兄弟の長男として生まれた氏は、高第小学校卒業後、立身出世を目指して、東京に出た。父の知人が経営する神田錦町の紅梅館に勤め、商業学校や正則英語学校、東京工手学校等に籍を置いて苦学を続け、十六歳で番頭となったが、今川小路の江戸商会にかわり、鉾山用ランプの製造にたずさわつ

た。二十一歳の時帰郷し、長男として家業の農を継いだが、長い間、都会生活になじんで来た為、純粹の農業人になり切ることが出来ず、懸命に働いてもなお負債の残る始末であつた。そこで二十五歳の時より玩具類の行商人となり、三十歳の時より、好間炭坑所在地に雜貨店を開き、六年間を細々と営業したが、事業の發展もおぼつかなく、轉身の期を見ていた。その時、「南米の楽天地」としてブラジルの宣伝がさかんであつたので家督は弟にゆずり、妻子と弟妹二人を連れて三十六歳の時渡伯した。

ノロエステ線アラサツバ駅アグアリンパ耕地に一年間のコロノ生活を送り、昭和八年バストスに入植した。バストスは文化施設が完備して居り、子弟教育に便がある。その上独立農になり易い土地購入條件が気に入つたので、同耕地十一家族が共に手を携えて入植。

最初ファルソーラ区に十域を求めて入植したが、土地が痩せていて、働きに比較して、それ程の効果が上らず、希望を失いかけていた時、棉作不況から退植者が相次いで現われたので、同区十六号地を購入し、ようやく腰を落着けることが出来た。

早くより牧畜に着眼し、漸次土地を買いたしながら牛を飼いはじめた。これは、ファルソーラ区牧畜の先驅をなすもので、養蚕不況時代にも、じりじりと牧畜業の充實を計っていた。戦後は雑作を主とし、近年蚕糸の高騰を見越して再び養蚕にかえり、今日に至っている。現在土地五十域、内牧畜十六域、牛七十頭、桑園八域、繭年産三千キロ、堅實な経営振りを見せている。尚、氏は、日本人農業者の發展地として麻州に目を向け、クヤバー市より百キロ、バーラデブーグレに一千域の土地を求めた。この地方は世界に有名なアミーバ特効薬を精製する薬草地帯である。また

牧畜の賓庫地背といわれる麻州シングレー河地方にも別に二百城の土地を買い、将来発展の夢を麻州に馳せている。

氏は人々に麻州の将来を語ると共に農閑期を利用して、同地方の開発運動に携り、土地の売出しにも協力している。氏は東北人一流のねぼり強さを事業の上に發揮しているが又バスでも最もよく公共の為に力をつくした人で、区長、副区長を、困難な家庭の事情をおして永年つとめて来た。又学校の建設や道路の開通などに当っては率先して植躍したのであった。

新谷 市 次 郎氏（和歌山県伊都那花園村）

（写真）

事業が好きで酒が好きで、浄瑠璃が趣味という明朗潤達な人新谷氏は、農家の長男として生まれ、二十八歳の時父がスペイン風邪で斃れ、以来一家の柱として奮闘して来た。實弟二人が先に渡伯していて渡伯をすゝめて来たので、今のうちに一苦勞しておけば子供の代になれば安楽になろうと考えて、大体、十五年計劃で渡伯を決意した。昭和五年ノロエステ線ブリグイ駅ブレージョ・アレグレ植民地に配耕されたが、その途端耕主が病死し、一万六千本の既植珈琲園を購入することになった。この地は低地で、降霜により、珈琲は枯死し、おまけに家内一同マレイタに罹り筆舌に盡くし難い苦難の連続であつた。六ヶ年を頑張り通して、昭和十一年バストスに移った。近隣に信望が厚かつたので氏と同行を欲する家族が多く、同地方より三十家族を連れてバストス入りをした。最初グロリア第二区の渋谷氏地区に入り、後フアルツーラ区

田中氏地区で棉作二年の後、ボンフィン区に土地を購入して独立農となった。入植と同時に養蚕を大々的にはじめ、好況の波に乗って同区の儲け頭と言われた。余裕を以て現在の地に六十域買込み将来の飛躍に備えた。不況襲来と同時に養鶏をはじめ以来、養蚕、雑作、養鶏を以って今日にいたっている。

現在所有地六十域、桑園五域、雑作二十域、鶏一千初、繭年産二千キロ、文化農園を経営している。長男嘉四郎君は分家して同地区で養蚕をし年産三千キロの繭を挙げて居り、次男久治君はさきにパナマパネマ河沿岸に四十域の棉作をし、父ゆずりの事業家魂を発揮したが現在は父を助けて家業を進めているが、氏の實母は八十四歳バストス第一の高齢者として健在である。長女トシ子さんはバウルー在の佐藤光治氏と結婚、次女みよ子さんはアダマンチーナ在の田沼正一氏と結婚、三女ヨシ子さんはパウソセリア在の長崎清美氏と結婚、それぞれ幸福な家庭を築いている。孫は全部で二十人を数える祖父様であるが、氏はなお壯者を凌ぐ元気を以って自家用トラクトール（三十馬力）を自ら操縦して農園を走り廻って働いている。

氏はまた、他人の面倒を親切に見る、どちらかといえば義侠的な人なので、多くの人に親しまれている。一入植当時、過去の體驗から修得した勘と腕とを有って、馬の医者として、折から馬耕時代の区民をよく面倒見、世話したことなど、今なお語られている。温厚篤實、その円熟した人柄は近隣に聞えが高い。

豊島 喜一氏

(北海道北見国網走郡女満別村)

(写真)

氏の父は歐洲大戰時の好況に乗り大金を握ったので、保養のつもりで一家をまとめて九州の別府に移った。氏は大分商業学校に入学した。父は充分英気を養って单身鹿児島市に移り大島紬の織元を事業としたが、思わしくなく別府に帰って養鶏をはじめた。氏の伯父に海外事情に詳しい方があり、ブラジルの話を聞き憧れていた時、たまたま大人毎移民の企てがあり、それに加って、氏が二十一才の時、父母と妹二人の一家五人で、大正十三年に渡伯した。

最初アラクワラ線カンブイ耕地にコロノとして入耕したがすぐにドラデンセ線イビチング駅グラミンニヤ植民地に移り、一家マレイタに苦しんだので、同線イタポリス植民地に移った、氏は此処で結婚し、五年の後、バストスに移った。昭和七年現ファルソーラ区に二十域を求めて入植、同区の草分けとして開拓の苦しみを嘗めたが、新婚時代の氏にとって、夢は未来にむかつて無限に広がっていた。入植二年目、氏等夫婦は、同区三組に新しく上域を求めて入植し、満八ヶ年、果樹の栽培に当った。一九四一年、再び父と同居したが、「この年父逝く。そこで三組の地を売却し、落着いて今日に至った。

戦時には野菜栽培に力を入れ、バストス町に出荷しつづけ、傍ら養鶏や雑作もして、次第に事業の基礎を固めて行った。

角田 秀夫氏

（群馬県佐波郡上陽村）

（写真）

氏の父故寅治氏は純朴な農業者であつたが子供等の将来を考え、昭和八年、氏が八才の時、一家をあげて渡伯した。

ノロエステ線プロミッソン駅、宮本耕地にわらじを脱いだ、祖母がその年の暮に死亡し、次の年氏の見米重氏が落馬して腕の骨を折り、農業に耐えず、町に出たので、一家は両親及び氏と姉三人妹二人になった。昭和十年バストスに移り、ボンフィン区の石岡氏の地区に歩合棉作者として入植した。氏の父は成長する子供の教育を充分にする為、独立農になる事に努力した。二年目に同区に十域を購入して移ったが、湿地帯であつた為、家族の内七人がマレイタに罹り、事業は頓挫し、経済的に逼迫したので、土地を売り、同区谷脇氏地区に移り再び契約農として出発した。棉作三ヶ年の後今度は健康地帯を見立て、同区内に十域を求め、棉作止養蚕を励んだ、養蚕は丁度好況期で、家運の挽回を成就することが出来た。一九五〇年、現地区二十域を求め、養蚕を専業として今日に至っている。

氏の兄米蔵氏は早く家を出て、コチア産組に入り現在ソロカバ出張所長として活動している。そこで氏は早くより父を助けて農に携り、青年時代には、陸上競技の選手として野球マンとしてバストススポーツ界に活躍し、父の死を見送り、姉三人はそれぞれかたづき、妹たちの世話をし、今日を築き上げた。

貝 岐 辰 吉氏（和歌山県東牟婁郡那智村）

（写真）

中年になってから妻を亡い、子持ちの婦人と再婚して、人生を再出発する人も多いが、美わしい家庭を再編成し、複雑な家庭をよく修め、なさぬ仲の子女からも、尊敬と信頼をいよいよ深められていく人は余り多くはない。貝岐氏は、中年にして四人の子を残し糟糠の妻に死なれ、五年後に、六人の子供を持つ佐藤未亡人と結婚し、「美しい家庭を営み、成人した子女はそれぞれ分家させ又は嫁がせて、現在二十一人の孫にしたわれて、よき老祖父母となっている。これというのも、氏は熱心な「生長の家」の信者としてかつては生長の家ボンフィン相愛会の代表者であり、現在は世話人として、信者の信頼をあつめている。氏が信仰の人であつたことが大きな原因であると思う。

氏は農家の三男末っ子に生まれ、高等小学校卒業後、大工見習いに入り、二十一才で独立し渡伯まで大工職をしつゝ、村の青年幹部として大いに活躍した。

パウリスタ本線モンテアルト駅イザベル耕地に入り、四年の後、バストスに昭和八年に移転、現在のボンフィン区に十域の土地を購入して入植した。最初は棉作をはじめ、二年間で全域を拓き、大々的に棉作をしたが、棉花価格の下落により事業は失敗に帰した。尚不幸にも、四人の子供を残して妻に死なれ、一時は途方に暮れたが、勇気を振いおこして農業に励み、五年の後、佐藤未亡人と再婚、五人の家族が、これにより一度に十二人となり、一躍大家族となった。

しばらくして、バストスは養蚕時代に入り、氏も又養蚕に移る

と共に成人した、氏の長男、後妻の長男を相次いで分家させ、次々と成人した氏の長女、次女、三女、又後妻の次男三男を独立させていった。

先妻死亡の時も、男手一つに子供を抱え、その苦労は言語に絶したが、これまでの一家の奮闘により、経済的にも恵まれ、成長した子供も巣立って行きつゝあつた一九四九年、子息と息女の結格式を間近にひかえて、新築したばかりの真新しい家屋と家財道具を不慮の火災にあい、一夜にして灰盡に帰きしめたことがあつた。

この災難は氏の事業に大きく禍したが、神を信ずる心厚く、不撓不屈の精神の盛んな氏は、よく耐えて、次第に家運を挽回して行つたり養蚕不況期には、雑作にかわり、利益を以て、退植者の土地を買い、段々と耕作地を拡めつゝ、近年は再び養蚕をしつゝ、牧場を作り、牧畜にも手を染めて行きつゝある。

現在、土地六十域、牧場二十域、桑園七域、繭年産四千キロ、区でも屈指の農家として事業を推進せしめつゝある。

田中 謙二氏 (鹿児島県鹿児島市)

(写真)

ブラジルには種々の技術を日本で身につけた人が来ているが、何かの技を身につけていることは、その人一生の強みである。芸が身を助ける不倖せ、といった境涯にある人もあれば、持った技故に身を渡した人もあろう。しかし、技を踏切り台として、新しい人生を力強く踏み出し、幸運を招いた人も多い。田中氏は、そ

の中の後者であって、日本で身につけて来た自動車運転の技を以って道を拓き、今日の大を為した人である。

市の中心にある大ホテル業の三男に生まれた氏は高等小学校卒業後、義兄がフォード会社の技師だったので、それを頼って上京し、自動車工場に入り、運転と修繕の技を、三年間、みっちりと修業した。腕に自信もついたので故郷鹿児島に帰り、市の山形屋デパートの自家用車の運転手となったが、氏の志は別にあつたので、一年で止め、円タク業にかわり、三年間資本の蓄積につとめ、遂に、「鹿児島田中自動車商会」を興し、自動車販売、修繕、と貨物運搬、の大事業に着手した。一時は県下第一の盛業振りであったが、昭和六年に斯業界に不況の嵐が襲来し、殆ど破産の状態に陥入ってしまった。挽回の為日夜奔走していたが、實弟が渡伯を希望して居り、伯国事情などをよく調べていて、「日本よりも伯国の方が有利ではないか」とすゝめられ、遂に渡伯を決意したのであつた。

氏等は夫婦と子供二人、賢弟夫婦、養弟妹三人、他に渡伯希望の青年を合わせて、十人と言う大家族を構成して故郷を後にした。昭和八年バスロスに直接入植し、ボンフィン区十域を求めて腰を落着けたが、バスロス収容所時代に構成した家族は、それぞれに分散し、氏の家族だけが、現地区に落着いた。農業の経験がなかった為、大いに苦勞したが、翌年カミニヨンを買ひ、腕に覚えの運搬業をはじめ、続いて、バストスーボンフィン区間の乗合自動車業とし、戦時まで継続した。

戦時となりガソリン不足からやむなく中止した。しかし、自動車業の盛大な時代に、退植者の土地を片端から買い込み、当時既に百二十域の地主になっていたので、伯人契約者を入れ棉作と雑

作をした。氏は、養蚕にかわり、好成績をあげていった。戦後は、雑作と牧畜にかわり、また、近年は養蚕を再びはじめて現在に至っている。

土地八十域、牧場八域、牛二十五頭、桑園九域、繭年産三千五百キロ、橋本蚕種場の原蚕飼育に当っている。

家庭は夫婦と三男二女、長女ミヤさんは、青木久雄氏と結婚して、現在ロンドリーチに住み、他の子女はよりよき氏の協力者であり孫も三人あり、立派な家庭をきずき、バストスの模範的農家といわれている。

斯うした成功を収めたのも、氏が若き日に身につけた技をよく生かして用い、自動事業全盛期に、利益を皆土地につぎ込んで置いたことによる。これも、氏が故郷にあつて、あれ程盛大にさせた事業が一度不況の嵐にあつて、あえなく破産状態におい込まれた苦い経験によつて得た教訓が身に沁みていた為であろう。

寺本林次郎氏（和歌山県東牟婁郡那智村）

（写真）

農家の次男に生まれ、小学校卒業後、家業を手伝い、造林業に従事していた。二十一歳の時、寺本家の婿養子となり、独立して造林の仕事をつづけていった。事業の盛んな頃は他県にも行き、二十人位の人夫を備用していた。

しかし、大正末期から昭和三年頃は、世はあげて失業時代で、造林請負業者も殖え、仕事は取り合い奪い合いのせち辛さとなり、仕事はしにくくなり、儲けも少く、不景気になつて行き、先の見

込みも立たない状態であった。

当時、ようやく、ブラジルの宣伝は盛んになり、移住者が多くなって来つゝあった。文書に、シネマにブラジル事情が伝えられ、不況におびえ、前途に不安を抱く者に、明るい希望を抱かせた。寺本氏も、家業の造林は思わしくなく、何か他に転じ度いと思つていた矢先であつたので、一層、南米の新天地に活路を発見するにしくはないと考え、移住組合に加入の手続をしたが、急速には事が運ばないので、普通移民として一家六人、勇みに勇んで渡伯した。一九二八年六月ハワイ丸であつた。

アララクワラ線サンタ・エルネスチーナ駅サンタ・エルネスチーナ耕地に入り四年間のコロノ生活を送った。比較的良い耕地であり家族も手が揃つていたので、経済的に因ることもなく、幾分の余裕も出来た。しかし耕地生活は、自分の企劃によつて物事を進める事も出来ず、又伯人社会に打混つての生活であるから、総べてひかえ目な暮し方になり、子弟教育の面からいっても不都合なことが多かったので、何とか、独立して、日本人独特の農業経営をやつてみたいと考えていた。

バストス移住地は邦人の集団地で日語学校、病院ありの宣伝文書を読み、一度は移住組合加入の手続もした事があるので、同耕地の佐藤、高須賀両氏と共に視察に赴き、移住地の開拓状態を見て、大いに心動き、昭和七年、現在のボンフィン区に十域を求めて入植した。

棉の好況期で、順調に事業を進めて行つた。一九三七年長男正保氏は、市街地に出て呉服店を開き、結婚して北パラナに移った。一九三八年次男文勇氏が腸捻転に罹り急死したので、正保氏は家に帰ったが、地力減退して棉作不可能となつたので養蚕に転じ、

養蚕不況時代は雑作により、近年再び蚕株価の安定するに及んで再び養蚕にかえって今日に到っている。

尚長男正保氏は再び家を出て分家しパウリスタ線マリアポリス駅附近で棉作に従事し、三男五美氏が家を継ぎ、養蚕の傍ら、北パラナーツパン間の運搬業にたずさわっている。現在土地二十域、牧場二域、桑園三城、繭年産二千数百キロ氏は老来なおかくしやぐとして働いている。

氏はボンフィン区の草分けとして、区長二回、副区長兼会計二回をつとめ、バストス二十五周年記念祭の時、聯合日本人会より、最も多く公共につくした人の一人として、ボンフィン区を代表して表彰された。資性温和にして、明朗円満な人で、バストスを永住の地として愛し育んで来た方である。

佐藤 金作氏

(北海道函館外湯川村)

(写真)

菜の花に道あり本家別家かな

葱の香にうすら寒さの鼻をつく

この俳句は、葩仙と号して俳句をよくする氏の近作である。苦難に満ちた人生を戦い抜いて、人間的に磨かれた奥床しい人柄と、たどりついた老境の平安さが、しみ出ているではないか。俳誌「南天」の指導的な立場にあつて、老後をいよく俳句の研鑽にいそしんでいる。

氏の本姓は海和といい、山形県山形市の半商半農の家に、十二

人兄弟の四男として生まれた。高等小学校卒業と同時に北海道の函館に渡った。函館で手広くガラス製造、電気器具商を営んでいる伯父の家に商人見習として勤めた。そして、この伯父の妻の生家が絶家していたので、この家を興すことになり、氏が海和を棄て、佐藤姓を名乗ることになった。

商人として、伯父の片腕となり敏腕を揮っていたが、明治四十年の函館大火に逢い、家は全焼した。専心復興につとめ、店を元の姿にかえし、大正二年に結婚し、大正六年に独立して、米穀及び木炭商として店舗をかまえたが、大正十年の大火に逢い、再び全焼のうき目を見た。復興後、しばらくして方向を転じ風呂屋を開業したが、三年後またまた火事に逢い家屋を焼失してしまった。この度は保険に加入していなかったので、大損害を蒙り再起もおぼつかない程の傷手を受けた。

生涯に三度の大火に逢い不運を嘆いた氏は日本に見切りをつけ、渡伯を志した。最初、アララクワラ線サンタ・エルネスチーナ駅サンタエルネスチーナ耕地に三年間のコロノ生活を送り、現在のバストスはボンフィン区に上域の土地を購入して、昭和七年に入植し、同区の草分けとなった。

棉作好況の波に乗って、翌年は更に十域を加え、棉作雑作では、常時区内切つての大農で、契約者も三家族入れ、年産棉二千アローバを収穫した事さえあった。戦時には養蚕に転じたが、やゝ転向がおくれた為、養蚕景気の絶頂を逸したが、既に土囊の出来上った農家であった為、それ程の困難にもあわず、不自由な戦時下経済をしのいで、近年蚕室をそのまゝ利用して養鶏に全力を注いでいる。

現在、土地六十域、牧場四十域、牛五十頭、鶏三千羽、産組の

種卵採取場に指定されている。

少年時代より商人として苦勞して来た人だけに事業の経営は堂に入ったものであるが、氏は子供達に恵まれず、在日時代に二人、耕地時代に一人、バストスで一人と四人の子供を儲けたが、日本より伴った二人の娘以下は幼にして死亡し、次女も結婚後四年にして他界し、現在は長女茂子さんに養子して家督を継がせている。養子彌門氏は長野県人単独渡航者で、アマゾンよりバストスに來た人、この人も耕雨と号して俳句をたしなみ、養父金作氏と共に、「や、かな」を楽しみ、ホトトギスにも多数の入選句ありとの事である。

金作氏はボンフィン区の草分けとして、重きを為し、区長一回、副区長一回、産業組合幹事などをつとめて公共につくし、又産組衰微期には實行委員として回生の為に活躍した。

貝 岐 保雄氏

(和歌山県東牟婁郡那智村)

(写真)

高等小学校を途中で退学し、十五歳で父母と共に渡伯した。

昭和三年、パウリスタ本線モンテアルト駅イザベル耕地に配耕され、後アラクワラ線サンタ・エルネスチーナ駅、サンタエルネスチーナ耕地で四ヶ年コロノ生活をして、バストスに移った。昭和八年ボンフィン区に入植したが、二年目に母を失い、家庭は灯の消えた寂しさであった。一九四〇年父の再婚により、氏は妹二人を連れて、同区三二号地区に独立し、棉作を二年、後養蚕に転

じた。この間にエスペランサ区在住藤倉氏の三女イナさんと結婚し、妹安恵さんを他に嫁がせしめ、母なき後の父を助けてよく家庭をさゝえていった。

養蚕も不況に入ったので、一家をあげて、ブ・ブルデンテ地方に移転し、棉作を五ヶ年程続けたが一九五二年再びバストスに帰り、借地養蚕を一ヶ年して後、現在の父所有地に移り、養蚕を専業として今日にいたっている。

現在所有地十域、繭年産二千六百キロ、五男二女の家である。氏は少年時代に渡伯し父母と共に移民の子としての労苦を嘗めて来たが、一人息子として、よく孝養をつくし、一家の推進力となって事業を進めて来た。そして氏の夫人も亦、よく氏を助けて、今日を為さしめたのである。

熊谷喜代己氏

（北海道天塩国中川郡中川村）

（写真）

農家の三男に生まれたが、兄二人が早逝したので、長男同様に働いて来た。高等小学校卒業後冬期間だけ村役場につとめたが青年団に加入してからは幹部として活躍し、三郡連合青年団の会計となり、又内閣統計局調査員や森林防火組合長をつとめ又、国勢調査員など、公共的事業を担当した為、農業には碌に手がまわらない状態であった。兵役を済ませ今度は農に身を入れようとしたが、氏の父は事業好きで、種々な仕事に手を出し、又貸した金が返らなかったりして、家計も左前になって来たので、昭和六年海

外に出稼ぎする気になり家は弟にまかせて渡伯した。

移住組合に加入し、昭和六年バストスに入植し、カスカッタ区に腰をおちつけ、主として棉作に携り、珈琲も植えたが、二年後に此の土地は他に譲り、新に第二エスペランサ区に十域を買い棉作専業で約十ヶ年過した。契約者も一家族入れ、可成りの成績であったが或る貸借の保証人になった為、他人の借金のと始末の為、土地を売らねばならぬ悲運にみまわれた。その後隣接パジジェツテ植民地に二年棉作、第一モンテイロ植民地で養蚕、続いてアルモニア耕地で棉作契約という具合に転々としたが余り幸運に恵まれず、一九五二年にビットリヤ植民地で養蚕をし、次の年現在のバストスはボンフィン区に転じ養蚕契約として今日に至っている。

原 春 治氏 (岡山県都窪郡早島町)

農家の三男に生まれ、高等小学校卒業後、家業に従事した。長兄が分家し、次兄は他家の養子となったので、家を継ぎ十九歳で結婚した。大正十年岡山騎兵二十一聯隊に入隊した。除隊して帰郷後も水田米作を主とする農業に励んでいたが兄に奨められ、五年か長くて十年一稼ぎのつもりで夫婦と子供五人、そして甥を一人連れて、大正十五年に渡伯した。着伯二日にして昭和元年となった。モジアナ線ジョアキン・フェルミーナ駅サンタリータ耕地でコロノ三年、労働力が揃っていたので懐中には余裕が出来た。甥の結婚と同時に分家させ同線セラナ駅の耕地を一二転々し、ソロカバナ線アグードス駅ドットール・リーバ耕地で棉と米を当てた。斯うして、常に経済的に行き詰る事なく、耕地生活を過して

来たが、子供の成長と共に教育面の事も考えられて、昭和十一年バストスに移り、最初ウニオン第二区に十域を求めて入植し、二年後に現在のボンフィン区に十域を購入して移った。その後三年間程、日語教育に携ったが、再び農にかえり、雑作より養蚕に替って、今日に及んでいる。

現在所有土地十域、うち桑園四域、繭年産二千四百キロ、余裕ある農業を営んでいる。

家族は二男三女、長男豊君は十年前より家を離れ、商業を志し、現在ツパン市岡田商店に勤務して居り、次男義清君は、農に興味があり現在一家の中心となつて居り一九五二年にファルソーラ区竹内氏次女ヨシミさんと結婚し、長女次女他家に嫁しよき主婦となつている。

伊 藤 熊 三 郎氏 （新潟県中蒲原郡新開村）

高等小学校を卒業後も家業に従っていたが、何しろ小作農で、米、養蚕に専心しても、なかなか自作農に漕ぎつけることはむづかしく悩んでいた時、海興のブラジル移民の宣伝があり、大地主が皆土地を占めている新潟での百姓にさじを投げ、ブラジルの大百姓、特に養蚕をやってみたいと思い、昭和九年に渡伯した。

モジアナ線サン・ジョアキン駅。ローバ耕地に入りコロノをしたが、賃銀が安く好きな煙草も喫えない有様であつた。昭和十年、歩合作者を募集に来た森氏と契約を結び、バストスに入植した。一ケ年はカマラーダをし翌年森氏の地区で歩合作をし、次の年ボンフィン区七組に二十域の土地を購入して、待望の独立農となつた。十域の地を拓き棉作で一儲けを企んだが、意外に収穫が少く、

二年連続の失敗で、遂に土地を放棄し、谷脇氏の地区に歩合作に入った。四ヶ年の後、現在の所に十域を求め、独立農を再出発した。今度は堅實に経営して、棉から養蚕に移り、好況にぶつかって、大いに懷を温めた。不況時代には雑作をして、又近年養蚕にかえり、今日に至っている。

現在所有土地三十域、内牧場四域、牛十頭、桑園入域、繭年産二千キロ、ミリーヨ六域、ユーカリ一域、これはバストス第一の優秀ユーカリ林といわれている。

氏は、かつては学務員をつとめ又現在副区長として、村の重要なポストを担っている。バストスに永住して果樹園の経営を夢見ている。

藤 本 栄 治氏

(熊本県菊池郡陣内村)

移民の中には、モジアナの石ころ耕地で赤土にまみれて、人生の死闘を続け、不幸にも憤死した人もあり、十数年を各地に放浪し、妻を失い子を逝かせ、忍苦の半生を送った人も多数にある。藤本氏も、借地農時代に、日本より手をたずさえて来た伴侶を逝かせ、二人の子供を抱えて十年間、言語に絶した苦痛を嘗め、今日カミニヨンや乗用車を備えた六十域の農場主となった人である。「艱難汝を玉にす」と言う言葉があるが、今日までの努力と忍苦の姿こそ思い見るべきである。

氏は余裕ある自作農家の一粒種として生まれ、高等小学校卒業後、数人の傭人の先頭に立って、家業に励む傍ら青年団や農事組合の指導者として活躍していた。しかし欧州大戦後の世界的不景気により社会不安は増大し、生活は息苦しくなった。活路を見出

す為、十年間出稼のつもりで渡伯を計劃した時、親戚にも希望者があり、共に渡航した。

アララクワラ線アララクワラ駅レデンソン耕地を経て附近の耕地で前後六ヶ年をコロノとして過し、さらに四ヶ年の米作借地農をし尚五、六年を同地方で送った。米作時代に米の大当りを採り、相当の利益をあげ、親戚の同航者は帰国した。氏は、故郷に残して来た長男を呼寄せた。が、この時代に妻を失い、十年間男手に二人の子供を苦しみ育て、又再婚して、新家庭をも作り、多くの子女をあげた。

子供達の育つにつれ、日語教育に悩み、邦人集団地たるバストスに移住した。現ボンフィン区に二十域の土地を求め、棉作に従事した。先妻との間に生まれた長男と次男は、その希望に委せて商店員とし、農業は三男以下の子供をつれてやっていた。棉より牧畜に手を広げ、戦時は養蚕や薄荷もやり、戦後は棉と雑作を主として来たが、近年又養蚕が興って来たので、副業として養蚕を取入れ、牧場に主力を注いでいる。牧場二十域、桑園八域半、繭年産四千キロ、雑作など、自家労力で立派に経営している。

早くより商業見習の為、家を離れた長男始氏、次男博氏は、現在チエテ移住地に在り、治氏はノロ線切つての大百貨店主として、盛業して居り、博氏は製米所を経営して、繁昌を極めている。

現夫人との間に五男三女の子賓に恵まれ、農場は三男孝氏が中心となって、経営にあたっている。孝氏はスポーツマンとして知られて居り、青年団の副団長から現在は団長となり、後進の指導に当たっている。

栄治氏は十年一稼ぎの積りで渡伯したが、いつしかブラジル生活四十年となり、子女は立派に成人して、伯国にゆるぎの無い地

盤をきずき、安らかな老後を迎えようとしている「一度祖先の墓参に訪日し度いとは思うが、もう帰国の心は失せた。バストスに骨をうずめる覚悟だ」と、氏は微笑をうかべていた。公職としては区長をつとめた事もあるが、現在は、相談役の立場にあつて、静かな余生を趣味園芸にたくしている。

なお、特筆せねばならぬことは、氏が借地農時代に始めた米作は、当時の伯国の産業経済情勢からして、農業の中核をなすものではなかった。何故なら、米は伯人間に於いて常食とはなっていないからである。しかし、氏等が在日時代の経験とその技術を以て試みた米作は俄然、ブラジル農業界に革命を齎し、米作勃興の機運をつくったのである。伯国米作の創始者としても藤本氏の苦闘の半生は、その名を實らせているのである。

西 ケ 迫 信 秀氏 （大阪府北河内郡守口町）

事業は人である。気宇広大にして、不撓不屈、見果てぬ夢に永遠の憧れを抱き、山の彼方の幸を求めて進む人、日々是好日、その日その日に人生の意義を発見し、充實した精神を以て、事に当る人、こうした人こそ本当の事業家であり、本当の人生を過して行く人である。筆者は、斯うした人の典型を西ケ迫氏の姿の中に見た。氏の今日までに至る人生航路は、多事多端、七転八起の生涯であり、波濤万丈の難路をたどった末に行きついた、今日の至楽境ということが出来る。

氏の本籍は戸籍面では大阪となっているが、實は、北海道札幌郡幌向村の農家の一人息子として生まれた。二才の時母を失い、五才にして父に連れられ、父の故郷島根県濱田市に移った。これ

より氏の流転の人生がはじまったのであった。故郷で父は再婚し、一家三人で下ノ關に移った。氏の父は請負業者であつたので、仕事を迫って各地に奔走していた。時あたかも日露戦争の最中で、父の活躍舞台は広く、氏が七才の時一家は小倉市に移り、父は慈恵病院の御用商人として、諸物品を調達した。戦争も日本の大勝利に終結し、一家は佐賀県東松浦郡打上村に移り、父はセメント工場に勤めた。ここで氏は高等小学校に入学した。平穏な生活がつゞき卒業を待って、氏は八幡に移り、父は八幡製鉄所の弁当調達を請負った。こうした幼少の時より父に連れられて中国九州地方を転々として十六才をむかえた時、父は樺太の開墾事業を思い立ち、豊原郡大富村字波川村に五十町歩の無償附與を受けて、はるばると、極寒涯果の地に移住して行つた。馬鈴薯を作り、燕麦を蒔き、一家は一心に開拓を進めていった。やがて十八才になった氏は結婚し、父と二人で、造林に着手した。伐り出す材木は製紙用として飛ぶように売れて行くので、段々に事業を拡大し、七十人、八十人と多数の山伐り人夫を使用し材木の販売に當つた。この仕事は大当りで、またゝく間に二十数万円を儲けることが出来た。しかし、氏は、余りにも荒涼殺伐な樺太の風土氣候になじめぬものを感じ、同じ開拓事業なら、生渡をこの仕事に打込むとすれば、九州宮崎県の方がよくはあるまいか、その方が意義も深いと考えたので、宮崎県の開拓事情を調べ、大いに希望が持てたので、一家をあげて宮崎移住を思い立ち、儲けた金をふところに、一先ず、第二の故郷佐賀県打上村に帰ることになった。

大正九年の暮れに樺太を出発し、東京を経て大阪までやって来た。大阪には母の妹が住んで居り、久々の会合に喜んだ妹一家は、樺太生活に荒んだ氏等の心をやさしくつゝみ、切に休養をすゝめ

て呉れた。半歳を雪に埋もれて何一つ見る物の無い地から、繁華な都市に来て、久々に悠々と滞在して、名所古蹟の見物に日を暮していたが、二ヶ月も経ると、それにも飽き、そして商取引きはげしい市中の活気ある生活に刺戟されて、勃勃たる生活意欲が動いて来た。これから宮崎県に行つて開拓事業を始めるにも、産業施設について研究しておく必要がある。樺太では専ら材木を伐出す方であつたが、今度は材木販売の方を研究する目的で、材木商をはじめ、次いで製材工場の経営に乗出した。眼から鼻に抜けるような大阪商人を相手に、なかなか骨の折れる商売であつたが、氏の素朴正直一途の商法がかえつて信用を得、事業は確實な發展を示して行つた。氏には大口上得意が多くなつたので、段々と高級材木を取扱つて居り北米よりの輸入木材を多量に揃えそ居た。ところが、關東に大義災が起り、下級木材は、復興の為に羽根がはえて飛ぶような売れ行きを見せ、引つぱりだことなつたが、高級木材の需要はバツタリと止り、価格も下落して行つた為、氏の事業は急に経営困難に陥つてしまった。そこで一應事業を整理して、再出發し、再び製材所を起し、工場を整備し、いよく運転に取りかゝろうという前夜、隣接工場に火を發し、一千三百坪の新工場は一夜にして跡かたもなく全焼した。

再出發の途端であつた為火災保険にも加入していなかつたので損害は甚大であつたが、日本海上保険会社が、一万五千円の見舞金をくれたので、これを資本として立ち上り、小規模ながら三度製材業をはじめた。しかるに二年の後またく隣家より起つた火事によつて工場の半ばが焼け、財政的な傷手は大きく、破産宣告を受けたので、名義を変更して、尚も死物ぐるいで復興に努めていた。

しかし、どこまでも不運は続き、昭和三年但馬地方の震災の影響により工場の機械が破損して事業は停滞し勝ちになった。すっかり意気を沮喪した氏は、工場を債権者に渡し、一切を整理して裸一貫となってしまった。遂に一介の労働者となり、昨日まで肩を並べていた同業の製材工場に職を求めて行ったところ、工場主も氏の思い切りの良いわるびれない態度に感動すると共に「貴君は一介の労働者で終るべき人ではない。私にはとても貴君は使えないから、他の事業で、又盛り返して下さい」と心をこめて励まして呉れた。この言葉を聞いて、氏は、永い間忘れていた新しい土地を開発するという初志を思い出した。「そうだ、俺には、開拓事業があつた。製材業は、本来俺の仕事ではなかつた」飄然と覺つた氏は、南米への転進を策した。

最初ソロ線サンタクルース・ド・リオパルド駅サント・アントニオ耕地に配耕され約三ヶ年を過して退耕した。この耕地は貧乏耕地で、耕主はコロノに賃金支払をしぶり、コロノは皆難渋していた。

そこで他の邦人十家族を、氏は退耕させ、海興に、今後この耕地には日本移民を入れないように進言して、バストスに移った。

昭和七年グローリヤ区に入植、その翌年、現在のボンフィン区に二十域を求めて移った。

棉作を大掛りにはじめ、二年目には全域を伐り棉を植え、山喰い虫の異名を取ったが莫大な利益をあげた。紀元二千六百年祭をしおとして、単身故国を訪問し、日本各地を巡遊して、永い労苦のしわをのばし、心身を新たにして帰伯した。戦時中は養蚕をし、これも好況の波に乗って懷を温め、戦後の不況時代を雑作にかわり、再び養蚕に転じて現在に至っている。

現在土地をボンフィン区に百八十域、ヴィトリヤ植民地に四十域を持ち、牧場百域、牛三十頭、桑園十六域、繭年産三千六百キロ、という事業内容である。常に憧れに生きる氏は言う、「まだまだ事業の輪劃が出来た丈だ。完成するには二代三代を要する」と、家族は二男一女、長男、次男はそれぞれ結婚して、仲よく父を中心に事業に当り、長女は、バストス町太郎田氏に嫁し、氏は既に十四人の孫のよき祖父となっている。初一念を貫いて、大事業を仕上げた氏の健在を祈る。

なお、氏は言う。『植民事業の成功は植民地にブラック建てをしたときに既に決まるものだ。夢を追えば植民事業は果てしない。しかして悲観は嚴禁、飽くまで積極主義で進め、一生涯を一日として働きまくる気概がなくては駄目だ』と。まさに植民事業を志すものへの金言となろう。また氏は、近年日本より養蚕移民を数家族導入し、自地区に於いて植民事業の手ほどきをなしているよき移民父でもある。

面 川 千 賀 雄氏

(福島県東白川都棚倉町)

物置小屋の隅に古ぼけたパン製造器具を積んで、鶏を飼い牛を養っている人がいる。このパン製造器具こそ、面川氏をはるばると南米に移住させた動機をなしたものである。

氏は、高等小学校を卒業した後、家兄が電気事業の請負業をしていたので、兄の助手の形で電工をしていた。十八歳の時より二十歳まで、変電所に招かれて勤務していた。ところが、その頃村の金満家が自動車を買い込み、さつそうと乗り廻しているのを見て、自動車の運転手になりたくなった。そこで東京に出て自動車

学校に入り二ヶ月勉強して一年間助手を勤めた後、東京に寄留し警視庁の試験をうけて、やつと運転手の免状を得た。帰郷して白川町で乗合自動車の運転手となった。

一年後に会津若松と田島間の乗合自動車の運転手に転じたが、この路は、山の中腹を登り下りする断崖絶壁上の危険な路であった。自動車会社としては、腕の確かな面川氏を得て、はじめて、同路に乗合自動車を開通させたのであった。

この地方は冬期は雪の為、自動車は交通不可能となるので、氏は雪どけを待つ間、十一月から三月頃まで、鉄砲を担いで雉うちを楽しんだと言う。これもものんびりとした雪国の運転手生活の一面であって面白い。一瞬の油断が生命を左右するこの稼業もいやになったので、帰郷し、家業の布団綿製造に従事していたが、面白くないので、仙台市に移りパン屋の見習職人となり、一年後、郡山市でパン屋を独立開業しようとしたが適当な家が見つからず、困っていた時渡伯の話をきき、パンの国ブラジルでパン屋をやろうと思い立ち、移住を決意した。

渡伯ときまって、妻を迎え、従弟夫婦と四人でブラジルに渡航した。最初モジアナ線ジャタイ駅リモエロ耕地に入り、一農年後、ペルー帰りの同級の友人渡邊扇造氏がバストスにいたので、氏を頼って昭和九年に入植した。

ボンフィン区に入植して、パン屋の夢も捨て、生涯農業で行く肚であったが、同区の清水氏に懇望され、同家のカミニヨン運転手となった。これがきっかけとなり、後にカミニヨンを買い独立して運搬業をはじめた。

バストスに移転する時は引越しの金しかなかった氏も、孜々と働き帰国の金も溜まったと思われた時、大戦勃発となり、帰国の

望みも断たれたので、同区内に二十域を求め棉作をはじめ次いで養蚕に移り、養蚕も不況となるに及んで更に四十域の土地を買い、養豚をなしたが、一九四九年より養鶏専業とする傍ら、牧場を完成しつつある。

現在、土地六十域、牧場三十域、牛十頭、鶏二千五百羽を経営している。将来は牧畜を主とし、バストスに永住して、子孫永遠の発展の為、土台を築くことを念願としている。

一家は夫人と共に三男五女あり、家庭的にも経済的にも恵まれ、比較的順調に今日の堅實な農家としての土台を築き得た人で、副区長兼会計を五年間もつとめ、徳望家として近隣の信頼を集めている。

小屋の隅に積んだパン製造器具も、二度と日の目を見ることは無いであろうが、それでよいであろう。恐らく、その器具も、ほこりにうずもれながら、出る幕の無いことを氏の為に喜んでいるにちがいない。

戸 田 東氏

(北海道札幌市北七條)

(写真)

ブラジルの百姓は企業的で、当った年に百万長者次の年は不作で素寒貧といった工合の人も多く見うけるが、戸田氏は事業に一切山を掛けない。合理的で綿密な事業計画を樹て、その線を固く守って實行して行く。そこでバストスを吹きまくった棉作、養蚕の不景気風にも、何処吹く風といった顔で、健實に事業を完成し

て行けたのである。伯国では稀な存在ということの出来る篤實な人であろう。

商家の五男として生まれた氏は空地農林学校の林科を卒業し、道庁地方林課に奉職して、函館森林事務所に技手としてつとめていた。

その頃、北海道では南米移住熱が高く、氏の父兄は雑貨商をたゝんで渡伯を決意した。俸給生活者には気楽な時代であったので、氏としては考えてもみなかつたが、ブラジル事情などを開いてみると、丸で黄金の只取りのような話なので、「それなら五・六年も居て大金を握り錦衣帰郷も悪くない」というので、父兄に誘われるまゝ、氏は二十七歳の時、新婦を伴って、一家十七人、華々しい郷党の見送りを受けて渡伯の旅にのぼったのであった。

時に昭和八年。直ちにバストスの収容所に入り、アルト区に土地を購入したが、カスカッタ区にも既植珈琲園を求め、両方をかけもちで経営した。一九三七年に氏はアルト区の農園に分家し、綿作を主として来たが、ブラ拓が養蚕を奨励し、蚕種を分頒したので、養蚕をはじめ、上田蚕種、橋本蚕種を経て元のブラ拓蚕種にかえり、斯業を継続して来た。現在は、その養蚕技術を見込まれて、原蚕飼育を行っている。

バストスの養蚕好況時代には、景気の波に乗って事業を拡張する人が続出し、大々的にやらない者は腑抜けのように言われたが、氏は一切耳を籍きず、堅實に堅實にと歩んで行った。そこで一朝不況の嵐にあらうと倒産養蚕家続出の時も、氏だけは、悠々として乗り切って来たのであった。一九五二年より桑園の肥料を自給する目的で養鶏を副業としている。

氏は言う、見ると聞くとは大間違い、日本を出る時は一攫千金

を夢見ていたが、現地に入り鋤を握ってみて、ブラジルの生活がはじめて解った。数年を出ずして、錦衣帰郷はさりと捨て、金を儲けるよりも生活を楽しく、そして子弟の教育に重点を置くことにした、と、本当に大地に根を張った農家というのは氏の如き心構からのみ期待出来る。子女は二男三女、長女は家政学校卒業、長男次女は中学在学中、三女は幼少時代に病死し、又老父も一九五二年八十歳の長寿を以って逝く、子として又親として、二人の骨肉をこの地に埋めたことは悲痛の限りであつたが、そこに又伯国永住の心も据えられ、将来の飛躍にそなえての準備もとのえられるわけである。

人生は實にあざなえる縄の如く、禍福常なしとは言え、何時の場合にも禍転じて福となすの努力を惜しまなかつた氏が、区長として村内に重きをなし、精神的にも経済的にも恵まれている事は、真にむべこそと言わなければならぬ。

弓削 敬太氏

(福岡県八女郡中広川村)

(写真)

商家の長男として生まる。

兄弟は三人。四歳にして父君を亡い、母方の實家で育てられた。八女中学を二年まで通つたが、家業たる製菓を手つだうために退学した。二十歳で結婚した。

三年間ほど、久留米絣織機の見習をやり、技術に自信が出来てから、職工二十人ほどを使って独立して工場の経営を行った。し

かし一般紡織界は不況に陥り、氏の工場またその例外ではあり得なかった。苦心経営も甲斐なく、遂に破産の止むなきに到った。

家運の挽回を計ろうにも、日本内地ではどうにも動きのとれないような気がした。北海道移住も考えたが、祖父母を抱えているので暖い九州の気候と考え合わせて中止した。ブラジルには、大した希望も、期待もあつたわけではないが、祖父母、母君、令弟夫妻、氏ら夫妻親子九人家族で渡伯することとなった。氏二十五歳の時である。

配耕先はパウリスタ線ビラチニンガ駅サンタ・カタリーチ耕地であつた。着伯四十八日目に祖母君はアミーバ赤痢で長逝した。さなきだに、移住者の誰もが心ここにないような寂寥と不安に包まれている配耕早々、この不測の出来事は、言語に絶する悲痛事であつた。ここにコロノとしての三年半は経過した。

バストス移住地の教育施設を考慮して、この地に移住すべく、まず令弟夫妻を一年半ほど先に同移住地に入植せしめた。石橋を叩いて渡る式の、堅實なやり方であつた。大家族を擁する氏としては、軽々しく動くことは戒めねばならなかったのであろう。バストス移住地の現地区アルトに二十域の土地を求めて入植したのは一九三三年のことであつた。令弟の家族は在植五年で分家、アルモニア耕地に移転した。

棉作を行い、三年目には二十域全部を拓いた。多数のカマラーダを雇傭してのめざましい奮闘ぶりに、区の人々は氏を呼んで、アルトの鬼と舌を卷いたほどであつた。いかにも九州人らしい淡泊な氏であるが、事業にかけては鬼と呼ばれる活動家だった。好況の上潮に棹さして契約者二家族を入れ、事業は益々伸長し、年産四千アローバに上った。しかし、地力減退を考慮に入れて、戦

時中は区の人に率先、養蚕を始め、好況に恵まれ年に三千キログラムの産繭を見せた。棉作は休みなく続け、養蚕と併行している。四七年からは、土地を買い増して、牧畜を開始した。

現在所有面積は百十域に及び、うち牧場は七十域を占め、これに飼育の牛は百六十頭。五域の桑園を有する。棉、玉蜀黍栽培には十域をあて、トラクトール一両で大いに能率をあげている。

氏は区長の職に就くこと二期、副区長にも選ばれ、多年区のために盡くし、バストス移住地開植二十五周年に、自治功労者としてバストス連合日本人費から表彰された。現にバストス産組理事の職にあり、また福岡県人会バストス支部長を勤めている。

祖父君は三九年に七十七歳で、母君は四三年に六十一歳で逝去した。家族は夫妻に二男三女。長男隆美氏は投手としてコロニア球界に知らる。選抜されてパウリスタ線主戦投手として全伯大会に二年出場した。左腕剛球で戦後バストス野球の黄金時代を復活させた。

橋岡 千里氏

(広島県安芸郡江田島町)

(写真)

江田島は、日本海軍華やかなりし時代、海軍士官を育成した兵学校の所在地である。

その兵学校に隣した自家の畠で、高等小学校を卒えた氏は、農事にいそしんだ。五人兄弟の長男である。

一九二一年に、広島歩兵第十一聯隊機関銃隊に入隊し、二年後無

事除隊した。帰村すると農事の傍ら数人の使用人を置いて商売を営み、極めて盛況を呈し、一万円近い納税をするほどだった。氏が中心になって大いに活躍した。

盛業ではあるが、社交の出費がかなりの額に上り、比較的利益は少なかった。大きく伸びたい、と若い心に輝しい未来を描いていた氏は、生活は恵まれていても、現状に満足して、そのまゝに埋もれてしまうことは諦め切れなかった。

たまたま同郷の人で、すでにブラジルに在った川橋氏からの現地通信は、大いなる刺激を橋岡氏に與えた。すなわち氏ら親子三人に令姪一人を加えて家族を構成し、家郷の人々の止めるを聞かず、渡伯の途に上った。氏、時に二十八歳。昭和三年であつた。

コロノ生活第一歩はノロエステ線アラサソーバ駅アグア・リンパ耕地に始まる。この地には、前記同郷の先輩川橋氏があつて、大いに氏らの力となってくれ、辛苦多いのが常である新来のコロノの生活も比較的順調であつた。在ること四年の間に、当時としては多額の六コント余を得た。

バストス移住地の現アルト区に草分けとして十域の土地を求めて入植したのは、一九三二年のことである。開拓の労苦一方ならぬものがあつた。棉を作った。三年後には十域を拓いて棉と米を作り、成果見るべきものがあつた。四〇年には、現地区を求めて之に転じ両地区十五域を兼営した。数名の使用人があつたとは言え、顧みて感慨深いものがある。

戦時中は、区でも率先して養蚕を行い、好況の波に乗った。これも不況来と共に、四七年養鶏に転じて、爾来、専業としている。幸運に恵まれている一方、氏の精農ぶりは棉、米栽培を始め、養蚕、養鶏各方面にあらわれて、その挙ぐるところの成果は何れも

優秀なるものがある。

現在所有土地面積十域。成鶏三千羽。パラナ州パラナバイに二十域を購入し、これは五五年から開拓に入る予定ときく。マツト・グロツソ州クヤバー植民地に一千域を求めて居り、将来の一大飛躍に資している。

長男武氏は、五〇年から、パウリスタ線ツパン市で洋服店を経営し、五人の職人を使つて盛業を見ている。氏は十七歳の頃から斯業に入り、その裁断の手腕は、同地方で折紙付といわれる。

長女艶子さんは、ウニオン第一区在住の小谷讓君と結婚し、円満なる家庭の主婦であり、次男と次女とは、共にツパン市の中学に在学中である。

氏は農事に精励の傍ら、よく公共のために力を端し、戦後の混乱期に区長としてつぶさに辛労を嘗めつゝ重責を果し、また養蚕組合幹事たり、産組評議員として活躍。

趣味は、釣、将棋をはじめ、演芸方面では、一かどの芸能人である。

西 忠 良氏

(和歌山県東牟婁郡宇久井村)

(写真)

西氏を語るとは柿を語ることである。しかし、農家の三人兄弟の、長男としては生まれても、青年時代から、柿に志があつたわけではない。京都の立命館大学経済科に学んだ。在学中、ドイツへ行こう、と考えたことがある。ハイデルベルヒあたりで、経

済学の研鑽に傾倒するのであつたらうか、というと、然らず、ビールの本場でその醍醐味に陶酔したい、との留学目的であつた。さなきだに左の行ける氏の将来を慮つて、父君の許可は下りなかつた。

大学を卒えると、一九二八年、県下の篤農家巡りをした。この巡行での一大収穫は、インテリ篤農家で、富有柿栽培では日本一といわれていた笹尾大次郎氏に出会つたことである。一町歩から年一万二千円を挙げているこの人の、柿栽培を目の当り見てから、西氏の柿一邊倒の人生が始まつた。

幸い、自分の土地が柿栽培に好適だったので、田の真中に、四百本の柿を植えた。新たに開墾するのは大仕事だし、決心すると邁進して止まぬ青年らしい仕事への熱情からだった。四百本のうち二割は次郎柿で、残りは富有柿であつた。家の廻りの蜜柑も伐り払つて五十本ほどの柿を植えた。同地方は蜜柑の産地で、柿も御所柿はあつたが、富有柿は郡では最初のことであつた。大学出の坊ちゃんが先祖代々の田に柿を植え出した、と、当座は保守的を村の人たちの嘲笑の的となつた。

その村の人たちも、翌年からは柿を植え出したのである。蜜柑畑は柿畑に変貌し始めた。五年のうちに、氏の果樹園は、理想的な施設を完備していた。

これより先、氏の令弟は一九三一年、両親と共に、移住組合に加わり、バストス移住地ウニオン第一区の草分けとして入植していたが、半年後、両親のみ帰国した。大規模の柿栽培ならブラジルに限る、と氏は、勇躍して渡伯、バストス移住地に入った。両親は故郷の果樹園を守っていたが、三年ほどして再渡伯の途中、父君は永眠した。

現アルト区に十域を求めて入植した氏は、初年に柿を植えた。ブラ拓に依頼して富有柿七十本を中央線モジ・ダス・クルーゼス駅本多果樹園から購入した。母君が再渡伯の折、種子を持参した。氣候が暑すぎ、幼樹の育成に一方ならぬ苦心があつた。

最初の三年だけ雑作をし、柿樹の成長を待ち、以後は柿一本槍で進んで来た。当初は、そのため収入も少く、米食を廃して玉蜀黍食二年、マンヂオカ食一年、また甘藷を掘り、里芋を主食として生活した。棉作、養蚕景気には目もくれず、純粹に柿に生き、柿に死ぬ覚悟であつた。そうした悲願のうちに、後日西柿と稱されるに到ったバストス独特の変種の柿が出来始めた。四四年のことである。この間の苦心は全く筆舌に盡くせぬものがあつた。安い頃は一箱七、八十ミルレイスに過ぎなかつたものが、今日では種類によつては二百クルゼイロの高値で、パウリスタ、ソロカバナ両線各地に出荷されるに到つた。現在四百本。種類は三十種に上り、近年は苗木を仕立て、全伯に売り出している。両柿の全伯市場制覇の日はさして遠くないであろう。

小橋宇三郎氏

(岡山県倉敷市)

(写真)

農家の次男として生まる。

高等小学校を卒業間際に退学して、伯父君の家に手伝いに行つた。同県都窪郡中庄村に雜貨店を営んでいた伯父君は、花筵組合長をしている一方、鉾山事業にも関係していたので、多忙を極めてい

た。同家に在ること二年足らずで、自宅へ戻り、爾来、徴兵まで家事に従った。広島歩兵第四十一聯隊に入隊三年後、満期除隊したが、一九〇四年、日露戦争のため召集され、第三軍に予備隊として編入、普蘭店で守備に当り、後、奉天に進発中、得利寺の戦鬪に於いて砲弾の破片を右脛に受けて重傷し、三ヶ月目に広島に後送された。治癒後、原隊に復帰し、七ヶ月間炊事係助手として服務後、除隊した。その後二十年間、郷里で雑貨と穀物の店を独立して営んだ。

穀物組合の組合員中に、ブラジル帰りのいわゆる成功者があって、この人からブラジルの事情を種々聞いているうちに、心大いに動いた。「二苦勞して来るのもいいだろう。思わしくなかったら、すぐ帰って来ることだ」と周囲の人たちも言うので、十年計劃で帰国と決め、一家五人で渡伯の途に上った。途中印度洋からの家郷への通信の中で、再び故郷を見ない、との永住の決意を披瀝した。

コロノ生活の振り出しは、アララクワラ線モンテ・アルト駅サント・イザベル耕地であったが、アミーバ赤痢で、母君と令妹は非常に苦しんだ。一年四ヶ月ほどいるうちに、耕主が亡くなったので、止むなく退耕し、同線ウパル―バ駅カンブイ耕地にコロノとして六年間奮闘した。真面目な氏の就働ぶりに、耕主のうけもよく、優遇されて、経済的には比較的恵まれ、若干の貯えも出来た。独立を志し、同耕地の人々とバストス移住地を視察に行き、五家族一緒に同移住地に入植したのは三二年冬のことであった。氏は、グローリア第一区に二十域を求めた。

棉作を行い、多い年には八域を試みた。契約者を入れてからは十三域栽培した。四〇年契約者に後を譲って、現アルト区に十域

を購入して移転した。四年間棉作をしたが、適地でもあったので、成績はよかった。戦時中は養蚕室を二棟造り、繭の年産三千キログラムに上った。同区屈指の大規模な経営だった。上田氏の原蚕飼育を行っているうちに不況となり、四八年からは養鶏に転じ、之を専業として今日に及んでいる。

現在所有地面積十域。成鶏六千羽を飼育し、同区で一、二を争う大養鶏家である。産卵實続の上からはコチア産組員中、随一と言われる。水道施設完備している。試験的に珈琲四千本を植栽し、果樹としては蜜柑と柿を植えている。氏の永住の策と見るべきか。グローリア区在住当時には二期に亘って区長、副区長を勤め、区の役員として活躍しなかったのは、僅か一年に過ぎなかった、囲碁、将棋に興味あり、関西棋院の前身から初段の免許を得て居り、パウリスタ線に於ける名人格である。

夫人との間に二男一女を儲けたが、隣家の松井家に嫁していた愛嬢は三十五歳をもって聖市日本病院で永眠した。

今や家業を長男に任せ、三夫婦むつまじく共に和やかに暮している。

木内 篤氏

(長野県南佐久郡大澤村)

(写真)

男子ばかり六人の四男として生まる。高等小学校卒業後は、その頃臨時に設けられていた一年半の課程の教員養成所に入り、これを卒えたが教員にはならず、全く方面違いの銀行員となって、

上田市で暮すこととなった。土地が変わると脚気になる質の氏は、すぐに之に罹り、長野市に転勤となると、また脚気を患った。一年半で郷里に帰り、教員生活を始めることになった。

今兄がブラジルへ移住することになり、家族構成上、氏はその一員となった。氏自身は、ブラジルへ行こうなどという考えは全くなく、なろうことなら長崎あたりで船から脱れるくらいの意であったが、結局、ブラジルまで来てしまった。大正七年、十九歳の時である。

モジアナ線ジョアキン・ファイルミアノ駅サンタ・リタ耕地にコロノ生活の一年を送った。前年にひどい降霜があつて、珈琲の實はつかなかった。この間にも、脚気は氏を苦しめつけ、あまつさえスペイン風邪に罹った。頼みの間作物は蝗の大群の襲来によつて全く荒廃に帰した。

その甚大なる被害に、意気阻喪した全耕地の人々を更に落膽せしめたのはさきの蝗の大群が産付けて行つた卵からの蝗の発生であつた。この徹底的な大打撃。しかし、不幸はいつもただ一人では来ない。義姉はこうした最悪の事態の中で病逝した。

一家は、ソロカバナ駅レンソエス駅周辺の耕地を転々として、棉作の歩合や、賃労働に暗い三年の歳月を送つたのであつた。その後同線セルケイラ・セーザル駅サンタ・バルバラ・ド・リオ・パルド植民地で棉作の借地農として、半独立の二ヶ年を過し、折柄の棉作好況で若干の収益を挙げるを得た。

令兄と二人で、アローバ当り三十ミルレイスで八百アローバを売り込んだが、棉花会社は一九二四年の革命のため半金しか支払わなかった。翌年は不作の上、棉値の暴落だったので、あくせく働くよりは日本の両親の下で、と言つた気持から、氏は單身、帰

国した。

良縁あつて結婚し、一家を成してみると、新しく将来への希望も盛り上つて来た。僅か四ヶ月の滞日で、新妻を携え、再び渡伯の途に就いたのであつた。

帰伯すると、もとの古巣に戻つて、七年間借地をして棉作を行つた。三二年、バストス移住地の現アルト区に十域を求めて入植した。教育、衛生施設の備つていることに、心を惹かれたのであつた。

契約者一家族を入れて棉作を行い、二、三年のうち全面積を開拓した。経験を積んでいたので、成績見るべきものがあつた。太平洋戦の始まると同時に養蚕に着手し、区の先駆をなした。好況に恵まれてかなりの収益を見た。ブラ拓の原蚕飼育で、繭の年産一千二百キログラムを挙げた。

不況となりかけるや、家族の手も少いところから、之亦、区の人々に率先して養鶏に転向した。氏は、漸次土地を買増して牧畜を始め、現在の所有土地六千域のうち五十域を牧場にあて、七十頭の牛を放っている。之と二本建ての養鶏は成鶏一千六百羽を擁している。トラットール一台で能率向上を計りつゝある。区長を勤めること二期、評議員数回、現在コチア産組出張所相談役である。

中浦伊勢松氏

(愛媛県東宇和郡俵津村)

(写真)

農家の長男として生まれた。弟妹は四人。高等小学校を卒えた。

十六歳から二十一歳まで反物の行商をして大分県の湯の町別府から、宇佐八幡の方へ廻った。世態人情の機微にふれ得たと共に、資本も出来たので、郷里へ帰り、独立して雑貨店を経営することになった。商売の傍ら、養蚕をやり、半農半商という手堅い方針をとって進んだ。

四十二歳の頃、当時全国的に暴威を逞しくした不況の攻勢に抗し得ず、雑貨商の方は破産の憂目を見た。親戚からの援助で、どうにか商売を続けているうち、当局のブラジルに関する宣伝よろしきを得ていたのであろう。氏もすっかりブラジルに魅力を感じるに至った。県の移住組合に入り、宇都宮紋次郎氏を団長とする愛媛団體二十四家族中に加わって、一家九人打揃ってブラジルへ渡ることとなった。

氏、時に四十四歳であつた。昭和九年であつた。

ノロエステ線チエテ移住地東アレグレ区に十域の土地を求めて入植した。米作を試みたが市価一袋七、八ミルレイスという安値で、全然振わない。かてて加えて、まだ幼い子息をアミーバ赤痢で失ってしまう、という悲痛さであつた。二年目から棉作を行ったが、土地が悪く、成績は少しも挙げがらなかった。

この年は、一家残らずマラリアに冒され、氏もまた百日近く病床に呻吟する身となった。

不作と病気で困惑し果てた氏は、愛媛団體の保證でブラ拓事務所に借款を申し込んだ。不調に終つたため、氏の家族を含む十七家族は、連袂退植ということになった。

ノロエステ線バルプライーゾ駅の英人耕地に棉作の借地農として居ること二年、この二年目に、大降雹に見舞われた。借地農の多くは夜逃げ同様に退耕し去ったが、氏の家族は未收穫のまま整

理し、耕主との正しい話し合いの上で耕地を後にした。知り合いの同県人に誘われて、隣接地ビトリア植民地の榎本常孝地区に十域の棉作の契約をした。一年後、友人の世話で、現地区アルトに十域を求めて入植した。時に一九四〇年。

殆んど全地区を開拓し、棉を行った。家族の手もようやく揃うに至って、このように事業を拡張し得たのであった。四四年の好況期から、養蚕事業に入った。六域の桑園を擁し、全くの自家労力で年産四千キログラムの繭を挙げた。いくばくもなくして繭価の暴落を見たが、不況時も依然、継続した。

五〇年からは、養蚕から養鶏へと切り換え以来、養鶏を専業とすることになった。飼料運搬その他のために、カミニヨン一台を購入した。

現在、所有土地四十域。成鶏三千五百羽を飼育し、成績極めて良好、所属のハンディランチス産組で、卵の出荷量是一位を占める。

また産卵率の高さでも一、二位を争う程の優秀な養鶏家である。点燈、水道諸施設完備の文化的農園である。

家族は四男四女。うち次女節子さんは、隣家の田中幸一氏と結婚したが、五二年に、産後悪く六人の子を残して急逝した。中浦氏夫妻の、生涯最大の痛痕事というべきであろう。

河西 静男氏

（長野県諏訪郡湖東村）

（写真）

氏の父君に当る故万衛氏は、自作農家の長男であつた。

近衛歩兵第三聯隊を満期除隊すると、故郷で農事に従つた。

生活には恵まれていても、信濃の山々に限られた村から、一度、広漠たる南米の原野に想を馳するとき、高原の若者の胸には、その緑野に群なす牛馬や、羊群を牧する大牧場の主たる自らの姿さえ描かれて来るのであつた。

令妹を含めた五人家族で、ブラジル指して自由渡航の途に上つた。一九二二年のことである。この時、静男氏は三歳の幼児であつた。

モジアナ線クラヴィニョス駅ダス・フロレス耕地にコロノ生活が始まる。この耕地にあること二年六ヶ月で、アララクワーラ線カンブイ駅カンブイ耕地に一年間のコロノ生活を過した。ついで同線ピンドラーマ駅クバトン耕地に、珈琲コロノと、棉作借地農とを兼ねて始めた。棉はその前年、アローバ当り三十ミルレイスの好値であつたので、棉作を行つたのであつたが、耕主側は約束を履行せず、一年にして同耕地を出た。同線カタンヅーバ駅ボア・ソルテ植民地に借地農として棉作を行つた。全くの自家労力のみで、二ケ年間、奮闘した。

そうするうち、父君は、就学期に入つた静男氏たちの教育のことを考えて、学校の施設があるとの話に、同線カシヨエイラ駅カシヨエイラ耕地に転じ、二年の棉作契約を行つた。この二年間は、氏一家には特に苦勞多い時代であつた。父君は終日の激しい労働に疲れた身を鞭うつて夜に入つてなお働いた。この心身の酷使は、氏の早逝を招いた因となつたに違いない。期待した学校の施設など全く無く、アローバ当り十六ミレレイスの棉は十四ミルレイスで耕主に仕切られ、借金すら出来てしまった。希望の燈とも大切

にしていた出稲の米は、耕主が放った豚に荒らされて物にならず、ポルトガル語には通ぜず、全く言語同断の苦しい日々を送った。

ノロエステ線リンス駅サン・ジョオン耕地に転じたのも、そうした境涯から一日も早く脱出したい一念からに他ならなかった。が、この耕地での三年の珈琲コロノ生活も決して楽なものではなく、珈琲値の暴落期で、不況は甚しかった。

バストス移住地の現アルト区に二十域の土地を求め、同区の草分けとして入植したのは三二年のことである。教育、衛生施設が充分で、それに邦人の集団地であることが、伯人ばかりの間で過した氏一家には何よりの魅力であった。契約者を入れて、棉作を行い、ここに渡伯以来始めて、本格的な独立農としての第一歩を踏み出したのである。

同家の明るい将来が開け初め、更に次の飛躍を、という三九年、この年は稀にみる天候不順であったが、ノロエステ線時代のマリアの再発と、過労と、持病の喘息で、父君万衛氏はその薄倖の生涯を終えた。静男氏、時に二十二歳。氏と母君だけが残された。

清家 平治氏（愛媛県東宇和郡俵津村）

（写真）

少壮三十二歳にして既に村会議員に推され、特筆すべき治績を挙げた氏も、十九歳にして父を喪い、以来一家の中堅として、社会の辛酸を知っていた苦勞人であった。後郷里愛媛県から大分県に移り開拓に従事したが、阿蘇山の火山灰土壌のため不成功、三年後帰郷したが、開拓事業の無理から肺を患い、十年間の涙ぐま

しい闘病生活がつづいた。ために中産以上の資財も失い、健康回復を待つて裸一貫、勇躍渡伯した。時に四十七歳。

バストスに直来、現アルト区に十域を求めて入植する、区の草分けである。養蚕を大々的にやり、相当の成功を見たが、不況到来と共に、雑作、養鶏に代わり、一九四八年から養鶏專業して今日に到る。

現在土地三十域、鶏二千五百羽。産卵成続はバンデイヤンチス産 組中、拔群の成績であるのも点燈、水道が完備し、長男寿郎君の精農精神の現われであるといえる。同君は同区在、中浦氏の三女と結 婚し二児があり、三男利郎君は青年団長として活躍し、長兄を扶け 農に励む模範青年として知られている。

氏は三男五女に恵まれ、全部家庭を持ち、孫も現在三十人。しかし四八年に労苦を共にした夫人を六十三歳で喪なう。若い頃から、胃腸の弱かった為である。

益 岡 勇氏 (岡山県御津郡横井村)

(写真)

高等小学卒業後、菓学校に入学したが志に反するとして二年で中退、独立して花筵商、材木商などを経営する。齡僅かに十八歳、通例ならまだ親の世話にならなければならぬ齡、既に事業家の風貌を具えていた敏腕の氏であった。岡山歩兵第五十四聯隊に入隊、二年間、満州守備隊として奉天にあり、除隊後、大阪に出て大林組建築請負会社の工事監督となる。氏の腕になるもの、神崎川の鉄橋、平野町女子師範学校、山口県岩国の絹糸紡績工場其の

他で、氏が日本に残した足跡は余りに多い。

たまたま、伯国の事情を開き、五年計劃で渡伯を決し、義父母と氏夫妻子供六人家族でパウリスタ線、モンテ・アルト駅に入耕した。そこにあること一年、後アララクラ線に移つて二年、ドウラデンセ線に二年、再びパウリスタ線リベイロン・ポニート駅と転々し、努力の末七十コントスを残したが好事魔多しの例えに洩れず中風に罹り半身不随となつたため、農を捨て、飲食店を経営しつゝ闘病すること五年。後ノロエステ線にて養豚二年、四八年にバストスに転じて来た。グローリア第一区の津山氏地区に野菜栽培をすること三年にして現アルト区に移り養蚕及び雑作をしそ現在に到る。繭は年産三千キログラム、雑作七域、一切を子息武志君に護り、氏は趣味である養豚に専心しているが年四十コントス以上の利益を上げている。

田中 幸一氏

（愛媛県東宇和郡俵津村）

（写真）

全国的に襲つた農村の不況時代、高等小学を卒えた当時の氏の心にも、生活苦は容赦なく反映した。五、六年後は郷里に錦を飾ろう、と常夏の国を夢に描いて、氣の進まぬ母君を勧めて渡伯。当時ようやく十六歳だった。チエテ移住地に直来し、六月に入植すると間もなく九月にはアマーバ赤痢で母を喪つた。少年の感じ易い胸に、美しい夢は破れて行つた。苛酷な現實に喘えぐ少年の精神的苦悩は言語に表せないものがあつた。棉作を始めると同時に、

一家マラリアに罷り氏は十二指腸虫病を患い半年臥床した。植えた棉は木ばかり、チエテ河畔の朝霧の中で、健康地を求めて移ろうと決心した。そして、バルパライゾ英人耕地に移り二年目、棉の開花期に大降雹に遭い、未收穫のまゝそこを脱耕、隣接ビトリア植民地に在ること五年間、その間養蚕に成功し、独立農を目指して現アルト区に十域を求めて入植し、以後雑作に転じて今日に到る。

所有土地三十域、雑作地八域に落花生、馬鈴薯、玉蜀黍等を栽培。自動車一台を所有する。氏の渡伯以来の過去は不幸の連続で、その不遇は更にビトリア時代、九歳を頭に六人の愛児を残して夫人が三十三歳の若さで急逝し、又父君が中耳炎から骨髄病を併発し大手術をしたりして、畑は荒れ、看病生活に次の道を喘えいだ苦の人生航路であつた。現在は、母君と夫人を養つた不幸に屈することなく、時には短歌に自分を慰めつゝ、明かるい生活を送っている。

小野 清志氏

(岡山県吉備郡総社町)

(写真)

兄弟六人の農家の長男。高等小学校を出ると家業を助け、二十三歳で結婚すると、両親をうながし、弟妹と共に、渡伯した。一九三四年のことである。

ノロエステ線リンス駅ゼツリーナ町アリアンサジンニヨ耕地に入ったが、三ヶ月で退耕し、同駅サンタ・ゼツリーデス耕地に一

年を送り、更に隣接タボカール耕地に一年の後現アルト区に草分けとして二十域を求めて入植した。

バストス移住地には、教育施設があつて弟妹の教育に好適と考えたからである。すくなからぬ幻滅を味いながらも、一家を引具して率先渡伯の責任上、齒をくいしばつて頑張った。

棉作を専業として年産三千アローバに上り区では一、二を争う棉作業者であつた。四四年に、養鶏と養蚕とを同時に始め、原蚕飼育では好成績をあげた。養蚕の好況時代ではあつたが、地力の減退防止と、農業経営の多角化とのため、鶏糞の利用目的で養鶏を行なつた。不況時もこの二本建をつづけた。これによつて養鶏技術に精通し、順次養鶏に転向し、のち之を専業化するに至つたのである。

現在所有土地面積は五域、成鶏四千羽を擁し、点燈、水道等の施設完備して遺憾ない。年三回育離の元祖は氏で、この流儀を倣う者が増して来ている。カミニヨン、自家用車各一台。元区長、副区長を務めた。

伊藤 關一氏

(大阪府中河内郡巽村)

(写真)

冬期は海面氷結し、砕氷船がエンジンを轟ろかす霧の港、北海道稚内町に生まれた氏は、五歳の時に北見を去り大阪市東成区生野田島町に移つて人となつた。父君は養鶏業で大きな成功を見た人である。氏もこゝにあること十四歳まで。その後渡伯となつた。

昭和三年である。

モジアナ線ジャタイ駅リモエル耕地に一年、後ソロカバナ線サツペザール駅セーラ・プレータ耕地に珈琲四年契約する。が氏はその中途、単独で三二年、現アルト区に二十アルケールを購入し、米、玉蜀黍、の栽培を開始し、やがて契約年限修了するのを待って、翌年、一家は同地に移った。棉作十四アルケール、しかも自家労力で補ったことを見ても、如何に氏の一家が奮闘家であるかが窺われる。が地力減退と共に、漸次養蚕に移り、六人の労力で、毎月二百グラムの蚕をはきたて、区でも羨やまれた程の成績を挙げた。

四〇年にカスカッタ区在住杉村信一氏養女と結婚、次いで弟妹が順次独立分家するに伴い、労力も減少したが、なお一回に蚕種百グラムをはく盛業振りである。所有土地二十アルケール。長男である氏は、父代りとなって多くの弟妹の独立に就いても親身の世話を惜まなかった。氏の思いやりの深い、床かしい人格がうかがわれる。読書、繪畫觀賞の高尚な趣味の持主であり、農業にいそしみながら、近代畫觀賞の優れたセンスを併せ持つ人である。

中 田 肇氏

(広島県佐伯郡原村)

(写真)

若冠二十歳にして青雲の志を抱き、単身大阪市に出て、旭ビル会社に勤務した氏は、二歳にして父君を喪い、十八歳にして母君を亡くし、兄君と一緒に励んでいた勤勉な少年だった。既に兄

君が在伯しその呼寄せとして、先ず郷里で結婚し、五、六年後は、必ず成功して帰る意で、兄君夫妻と共に渡伯したのであった。先ず氏は蜜月の旅を南海航路に托し、幸多い夢を温めていた。大正十四年であつた。

ソロカバナ線モンソン植民地に兄君と共に、棉作を初めたのも束の間、義姉は着伯一年後逝き、つゞいて兄君もこの痛手より煩悶、ついに三ヶ月後、兄君の霊を送る悲運に逢着したのであった。異郷の空に、頼るものとてもなく、悲数に明け暮れる日々がつゞいた。

が土地の有力者蔵力氏の助力を得て再び起ち上り、同植民地に半独立農として三年間、そして暴風雨にひしがれた若木が甦るように、新しい希望を持ってバストス、現アルト区に十アルケールスを求めて入植し、棉作の好況に堅實な経営法を以って相当の事業を進めたが、またしても四四年に、最愛の夫人を喪なうといった不孝を見た。が、こうした不運は、氏の再婚を余儀なくさせ、現夫人を迎えた。

現在所有土地十アルケース、うち桑園二アルケールス。繭年産一千二百キログラムに上り、鶏八百羽、伯人契約者一戸をおく。

平井喜見三郎氏（愛媛県喜多郡大州町）

（写真）

努力家で、気質快活、實直の性の氏は曲つたことが大嫌いである。勤勉努力、どこにあれだけの精力が潜んでいるのかと疑われる程の働き手である。

高等小学卒業後、兄君有利氏に連れられ、先に渡伯していた兄君熊幸氏の呼寄せとして渡伯した。それも氏の父君が海外進出の熱心な唱導者であつたことによる。

ノロエステ線リンス駅に、熊幸氏を扶けてコロノ一年、後、共にバストス移住地カスカッタ区に十域を求めて入植、時に三三年、この三年目から、第二エスペランサに十域、後にモンティロ区に十域購入、両地を開拓し力闘すること五年間。青年期の大半を全く土と取組んで送った。

四〇年に結婚し、現第二エスペランサ区に新居を構え、十域を求めて、独立、裸一貫のスタートをした。資力なく夫婦の労力で棉作主義十年間、その間、薄荷、養鶏を試みたが再び棉作に帰り、後養鶏に転じて現在に到る。副業として牧畜を営む。

現在所有土地二十域、桑園三城、繭年産一千五百キロ、これが僅かの労力で進めらるゝことは尋常でない。牧場三域に牛十一頭を飼育し、他は休閒地である、夫妻の間に四男二女あり。健康一家である。人望ある氏は三年間、副区長兼会計として活躍し、若い篤農家の将来には多くの期待がかけられている。

松 井 元 三氏

(広島県深安郡加法村)

(写真)

氏の郷里は、海外発展の熱盛んで、早くから北米、ハワイ等に進出し多くの成功者を出している所であつた。あたかも、氏の遠縁の人が伯国から成功して帰国したことから、志を決し、率先して、親族とともに渡伯した。又氏は十九歳にして母の喪に遭い、農

家の次男として生れていたことも独立精神の意気をかり立てる大きな動機となっていた。

アララクワラ線トリバ駅レオポルディーナ耕地に三ヶ月間珈琲採集に従事、以後、本格的コロノとして二年。同線ウパローバ駅コレゴ・フンド耕地で六年契約を終了し、結婚とともに独立分家、三二年、グロリーア一区に十アルケーレスを購入して、新入生の第一歩を踏み出した。棉作に初まり、二年後、現アルト区に転住、十アルケーレスの棉作から、養蚕に転じ、次いで不況に逢い、四七年から養鶏を専業として今日に到る。

現在、所有土地七アルケーレス。鶏二千三百羽、氏は篤農家としてバンディランテス産組員中最も實績を挙げていることは全村周知の通りである。

然し、現今の盛業を見るまで、氏にも耐え難い苦難の道はあった。四二年に糟糠の夫人を喪い、新生活をスタートした直後、凡ての方面に挫折し、痛手を受けた。しかし強く生きる者の特権は、不幸の中から立ち上る大いなる生の力であり意志であつた。やがて再婚し、五人の子女に恵まれ、孜々営々と生活を築いている現在の氏の心境には、晴天のように澄んだものがある。

氏は前区長、産業組合評議員を務め、治績は又特筆するに足るものがある。以つて氏の社会的人望が如何に厚いかが推して知られる。

池戸信二郎氏

(岐阜県郡上郡和良村)

(写真)

一八九五年、農家の次男として生まれた。三人兄弟であつたが

次々に亡くなり、結局、氏一人が残っている。十歳の時、父君を失いあとは母君の手一つに育てられた。高等小学校を出ると、家に在って農事にいそしんだ。十八歳、志を立て、東京へ上った。親戚に洋服屋があり、そこで仕事を手伝った。二十二歳の時、令兄死去の報を受けて帰郷し、家督を継いだ。翌年結婚した。土地の舊家ではあり、財もあつたので、村の世話をして暮していた。狭い日本を出て、自由で広い世界で存分に活躍したい、という気持はかねて抱いていた。親戚でブラジルに行っている人があり、そのため、ブラジルの事情には、かなり詳しく通じていた。一獲千金といった考えはなく、楽土に安住するつもりで、ブラジルへ渡った。

長兄の遣児に家をつがせ、母君を見させることにして、一家六人、一九三四年に着伯、この時氏は三十九歳であつた。

ソロカバナ線。パラグアス―駅丸林久次郎耕地に一年三ヶ月ほどいた。もともとここに永く留る気はなく、各地を視察して歩いた。日本を出る時には、もう養蚕などこりごりだと思っていたが、珈琲園の除草に閉口し、それに家族の手もないので、やはり養蚕を心がけていた。バストスを視察に来た時、たまたま同郷の人上田平吉氏に合った。そのころまでこの地方の養蚕家に日本からの経験者はなく、技術的に劣っていたので、経験者が欲しい、との上田氏の言に應えて、現更生区に十域を求めて、一九三五年に入植した。繭値は四ミルレイスであつたが、之を専業として年産二千五百キログラム、当時としては大規模であつた、と言える。やがて来つた好況期に、年産三千キログラム、事業は拡張につぐ拡張を以つてした。四地区を買増したのもこの頃のことであつた。不況になつても、どん底値の蚕を養うことを止めなかった。戦後の

日本人社会の混迷期が来た。日本への引揚げ説が飛び、人心が浮足立った時に、氏は、黙々として、池を掘り始めた。何だ、今ごろ、池など造り始めて　―と囁く人も少なくなかった。海魚の入手不自由な内奥地に、養鯉事業は絶対確實、有利である、との見込みをした氏の慧眼に狂いはなかった。

戦時中から、牧場の完成を目指していたが戦後は、このために土地を買増した。「牧畜より、養鯉の方に興味が持てる。わしは好きだ」と氏は言いながら、一方、五二年までは一年も休まず養蚕を続けた。が「ブラジルの農業は時々、仕事を転換しないと、若い者の心に新風が吹き込めぬ」という氏の考えから、これを止めてしまった。一時、二年半ほど、養鶏をやったこともある。

もともとブラジルで、広い面積の土地を持つとも考えたことはなかったそうであるが現在の所有面積百域、うち三十域は牧場である。養鯉池は約一域で、鯉の年産三千キログラムで、バストス一、二と呼ばれる養鯉家である。雑作二十域をトラットールで処理している。

氏は前区長を勤め、更生区の重鎮である。

森元　武雄氏

（長野県諏訪郡米澤村）

（写真）

森元氏と言えば、誰でも、バストス養蚕と結びつけて語らない者はない。それもその筈、氏はバストスに於ける養蚕業の先覚者であり戦前早くより養蚕に着手して、年産二千キロの繭を挙げ、

当時としては驚異に価する成果をおさめて、衆人を瞠目せしめたものであった。そして戦時の養蚕好況期に入り、養蚕組合の創立に奔走し、いよく創立成つてからは専務理事に就任し、縦横の大活躍を為し、バストス養蚕業の上に偉大なる足跡を残した人である。

氏は農家五人兄弟の長男として生まれ、不幸四歳の時父に死別した。義父の手に育てられて高等小学校を卒業し、十八歳の時、伯父一家の渡伯に際して、妹二人と共に、伯父の家族に加わって渡伯した。

氏は幼にして實父を亡したのみならず、少年時代に家運衰え、一家没落にひんしたのであった。武雄青年は、森元家復興の悲願を立て、海外雄飛の熱情に燃えて渡伯したのであった。

モジアナ線ヴィラコスチーナ駅ヴィラコスチーナ耕地に配耕されたが、耕配と同時に伯父一家との構成家族を解き、妹二人を連れて独立の第一歩を力強く踏み出した二二年間のコロノ生活を経てノロエステ線ピーザ駅ピーザ耕地に一ヶ年を過して後カフェランジャに移った。その間に一妹を結婚させ、一妹を連れて副島商店の店員となった。性来機を見るに敏なる氏は商法にも秀れた手腕を示し、大いに商店の発展を助け、店主や顧客の信用を博した。六ヶ年を同商店に勤務したが、その間に結婚し、又氏と同じく幼にして父を亡った妻の弟西尾氏にいたく同情し、これをも引取つて養育した。次いで平野植民地に独立し雑貨店を開業したが、事業は日の出の勢を示し、拡張に次ぐ拡張を以て発展し、一九三四年にはバストス町に支店を設けるに至った。一九三五年に母と弟妹を日本より呼寄せ、美わしい家庭を築いた。しかし人生は塞翁が馬の如く、禍福はあざなえる縄にも似て、棉の仲買いに手を拡

げ過ぎ、遂に失敗して、本店支店共に閉店のやむなきに立ちいたった。だが百折尚屈せぬ氏は、現在のエスペランサ区に十域の土地を求め、再興を期して雌伏した。農場は實弟と義弟と三人の共同経営とし、養蚕業の将来性あるを見越して、養蚕の先駆を為し、戦時の好況期にもりもりと家運を復興し、養蚕組合専務として活躍した。そして不況を予測して組合専務を隠退し、今度は牧畜に主力を移した。退植期にはよく不況に耐え、しかも土地を買いたし、新しい機械應用の多角農業に入り、實弟義弟互に手となり足となって氏の事業を助け遂に今日の大を為したのであった。

現在土地百域、鶏三千羽飼育、牧畜百域牛二百五十頭、蔬菜栽培、特に、メロン栽培は現在試栽を終え、完成の域に入りつつある。

家庭は賢夫人と共に七男三女の子寶一家で、農場主として、移住地の模範的存在であり、社会人としては養蚕業の伸展に貢献し、現在も区長として信望厚い。人生の苦難を乗り越えて、今や円熟の境をむかえつつある氏の自愛を所ること切である。

緒方 時夫氏

（山口県大津郡菱海村）

（写真）

一九一六年、嘉作氏の長男として生まれた。九歳の時、両親に連れられて渡伯した。

ソロカバナ線アルフレッド・グエーデス駅の同名の耕地に配耕された。ここで二農年を終ると同線ピラジュー駅バルベリス耕地に

転じ、四年間を送った。今日のいわゆる準二世の大部分がそうであつたように、幼少の折から、両親を助け、弟妹の世話をし、珈琲園の過重労働に耐え、従つて、その間、学校教育らしいものを正規に受ける設備も、時間的余裕もなかつた。

しかし、父君は、さすがに時夫氏の、余りにも恵まれぬ環境を見るに忍びなかつたのであろう、当時、教育機関の比較的整つていたノロエステ線カフェラシジア駅平野植民地に転ずることになった。ここで日本語教育を受けた。

この間に、土地を求めて、独立農となつたが、一家は悉くマレットに雇つてしまつた。

氏たちより二年早くバストス移住地に在つた伯父の招きに應じて、一九三四年、バストス移住地プログレッソ区に地区を求めて入植した。何よりも健康地であることが氏一家にとって大きな満足であつた。

たまたま棉の好況の波に乗つて、父君を助けつゝ、青年時夫氏の奮迅の活動が始まる。一九三九年、同区在住藤林元七氏次女を迎え四二独立してエスペランサ更生区に、一年の養蚕を契約した。満の自信と、青年の血氣とに任せて乾坤一擲の事業だつたが、不運にも霜にやられて桑園は全滅の憂目を見た。

商業への転向を志した氏は、まず店員として勤めて、将来の基盤たらしめようとの目的から、オズワルド・クルース町の一雜貨店に勤務した。が、これまた不運にも、かの戦後の動搖期に於ける所謂オズワルド・クルース伯人暴動事件によって、店は襲撃を受けた。

父君は、時夫氏の安否を気づかい、危険を冒して、物情騒然たる同町に到り、時夫氏を伴つてバストスに立ち帰つた。

ブ로그レツソ区で一年の養蚕を試みた氏によりやく運命の神の微笑みかけたとみえたが不況のために産組は極度の経済的逼迫に陥ってしまった。やがて、ファルソーラ区に三年の養蚕の契約を結んだが、この間に計らずも蜂巢を破壊するのに青酸加理を使用するその中毒のため腎臓病を起し二年間、これに呻吟した。重畳する不運である。

ここに到って養鶏に転じた。けだし、養蚕は家長が倒れてしまうと万事休するの他ないが、養鶏はまさかの時、家人だけで結構やって行ける、養鶏に如かず、と決心した。これと同時に、人は契約農をやっている限り、いつまで経っても契約農たることから脱れることが出来ない、と痛感、奮起した。更生区に十域を求めて、独立農として起ったが、これは氏の輝しい人生再出発と見るべきであろう。西見氏及びコチア産組デポジト主任田中氏の二人の親身な盡力がなかったならば、この独立への道は容易に、氏の前に開けなかったかも知れなかった。

五二年から始めた養鶏は今日に及んでいる。成鶏二千七百羽である。所有土地十域のうち六域を棉作、伯人歩合二家族がいる。

亀田 久義氏

(広島県豊田郡瀬戸田町)

(写真)

一九一三年の出生「父君元右衛門氏は舟大工として横浜市子安町に、一時は多数の職工を擁し造船業を大規模に行ったこともある。が、欧州大戦後の不況に、事業は不振に陥った。

高等小学校も途中で、両親に伴われブラジルに渡ったのは一九二七年のことで、一家は六人家族であった。

ノロエステ線ブリグイ駅マリオ耕地に一年を過したが、家族の手がよく揃って、比較的恵まれたコロノ生活であった。同駅コレゴ・フエイジョン植民地にまた一年のコロノ生活を送ったが、母君が過労のため、八ヶ月に亘る長患いをした。同地のコレゴ・コロニア植民地に四年の琲珈契約農として入ったが、父君の病臥と、耕主の謀略とで、二年にして退耕し、一九三二年、バストス更生区の草分けとして入植した。

入植と共に三千本の珈琲を植えた。が、四二年の降霜で伐払った。棉作をやったが地味が良くなり、思わしい成績を見ることが出来なかった。そこへ、更生区の騒動が始まり、入植二、三年にして植民者の大挙退植があったが踏とどまり、活路を養蚕に求めた。四一年、勉学を志して出聖したが、二年にして帰植、好況期の養蚕を令兄と営んだ。四六年、牧内百々子さんと結婚した。五年から養蚕を養鶏に切換え、現在成鶏三千羽、所有土地五十域のうち、十域は牧場で、牛を飼育している。

佐藤栄治郎氏

(山形県北村山郡楯岡町)

(写真)

一八九六年、農家の次男として生まれた。兄弟は四人。高等小学校を一年まで修め、後は専ら家業に勉めた。仙台輜重兵第二大隊に補充兵として三ヶ月服務。二十五歳で結婚した。

甥二人を加えて一家九人という賑やかな陣容で、一九三五年、渡伯した。

遠縁にあたる管井氏がバストス移住地ボンフィン区に在ったので、ここに直来。一年の棉作の後、第二エスペランサ区諸角氏地区に棉作契約二年。ついで現地区に二十域を購入して念願の独立農となる。働きの手は多し、当時としては瞠目に値する十域の棉作を絶えず続けた。戦時中、副業的に養蚕を三年ほどやったが止めた。着伯五年後に甥の一人（令兄の長男）を日本に帰し、四二年に、残った甥と長女正子さんとを結婚させたが、五年後に、正子さんと三人の子供を遺して急逝した。

所有土地面積は四十域で、十域は常に棉作にあて、使用せぬ土地は休閒させ、循環して連作を避けた。南京豆をも栽培し、年産棉二千アローバ、南京豆一千五百俵を挙げつゝある。トラットー
ル使用。一家は夫妻に三男四女。長男はソロカバナ線ブレジデン
テ・プルデンテ駅在半谷義雄氏長女と、次男はパウリスタ線トッ
パン在宮田国雄氏三女と、次女はアルモニア区在近藤信治氏と
夫々結婚。

虎岩 力松氏

（宮城県栗原郡清瀧村）

（写真）

一八九五年、米作、養蚕の自作農家で七人兄弟の四男として出生した。小学校を卒えて家業を手伝っていたが、二十二歳、令兄と共に樺太へ渡った。たまたま尼港事件突発し、日本軍の保障占

領下にあつたサガレン州亜港市の陸軍病院に従卒代用傭人として採用され八年間勤務し、日本軍引揚げとなって帰郷した。令兄の家族構成員となつて二十九歳（一九二六年）の時、渡伯した。ノロエステ線カフェランジア駅セルボン耕地に一年。附近のベンツラ耕地に四年の珈琲契約を終るや、令兄一家はバストス移住地に転じ、氏は両親を奉じて同線グリセリオ駅フォルモーザ耕地に六年の契約をした。これを終えた三十八歳の時、現夫人を娶つた。

これから同線ビラツキ奥ノーポ・プロミツソン植民地に三年の珈琲契約をなし、パイネイラ植民地に棉作三年。ついで岳父居住のサントポリス町近くのミルアルケレス植民地に転じて棉作を行った。

ここで、独身時代から孝養至らざるはなかつた両親を相ついで失つた。五一年バストス第二エスベランサ区の令兄の地区に入つて養蚕を営み、現在に及んでいる。五四年に土地十域を求めて、養蚕一筋に活躍中である。三城の桑園を擁して繭の年産一千六百キログラム。夫妻には一男三女あり、氏が晩婚であつたために、十九歳を頭にまだ年少である。

清 藤 作氏

（静岡県駿東郡金岡村）

（写真）

氏は若年より篤農の志厚く、常に伯国の新天地に憧れを抱きし甲斐ありて、一九二四年八月二十日サントス港に上陸、アララク

ワラ線カンブイ耕地に就働中、渡伯半歳にして妻の病死に遇いしも、志堅く独身にて当時十二歳の長男（金太郎）を頭に五人の幼児をかゝえ、筆舌に盡くし難き労苦と闘いつゝ子等の成長を樂しみに各地にて契約農をすませ、一九三三年九月バストスに入植し、第二エスペランサ区の草分けとなり、以来棉作及び養蚕に全力を盡くし家運の繁栄を計りたるも、遂にバストス二十五周年を待たず、昭和二十七年十一月四日、七十五歳の高齢を以て長逝せられた。

金太郎氏は十一歳の時父母と共に渡伯し、早く母に死別し、父の手によって育てられ、ドラデンセ線アサヒ植民地で八ヶ年珈琲の契約農をしたが、この間に日語学校を終え、葡語学校にも通学し、成長するに従って、父を助けて、一家の支柱となり、弟妹をいたわって来た。

バストス第二エスペランサ区に二十域を求めて入植し、一九三四年、同区諸角氏次女キン子さんと結婚し、弟妹はそれぞれ成長に従って分家させ或は他に嫁せしめた。

高橋清五郎氏

（山形県酒田市）

（写真）

高等小学校だけで、あとは独学を以って酒田市の裁判所の書記を勤めること八年に及んだ氏は、若くして才豊、誠實な精神の人として多くの人から望みをかけられていた。氏の仙台に於て兵役に在る時も、善行證を授興されたほど徳の篤い人であった。

併し、氏の希望は完全な子弟の教育にあった。教育のため、五年計劃で海外に出て、将来に備えるべく渡伯したのである。が、ソロカバナ線サンタリーナ駅に入耕すると間もなく、風土病で足腰立たず、半年を病床に呻吟し、それに加えて義妹夫婦の逃避、働き手とてなく塗炭の苦しみに喘えいだるのであった。渡伯前の夢はこゝで挫折。病氣快方に向うと共にバストスに移り、ユーカリの苗作り、綿作をし、好況に乗り、ソロカバナ線サント・アナスタシオ駅パラナ・バネマ耕地に土地を求めて移った。教育機關の乏しさから、再びバストスに戻る。棉作契約就働中次女弘子さんを日射病で、続いて長女養子さんを心臓麻痺で喪い、重なる不幸に悲歎のどん底に陥った。

更に十二歳の長男と共に棉作をしたが、持病の腎臓病で苦しむ。幸い棉作は好況の波に乗り、儲けたが、氏の心境には満たされないうものがあつた。後、養蚕に移り、パゼツテ時代に得た資金で第二エスペランサ現地区を求めて再び独立農となる。多角農を営み現在に至る。

諸角 興吉氏

（北海道空地郡栗澤村）

（写真）

日露戦争直後、当時北海道開拓の雄国を抱くまゝ、徳島県名加郡の田地を後に、寒い北国へ一家を挙げて移った。営々開墾に従事すること十七年、相当の成績を挙げたにも拘わらず、更に志を伸ばして一九二四年十二月、神戸港を後に南米ブラジルの新天地

開拓に運命を投じて来たのである。

アララクワラ線トリバ駅にコロノとして就働すること五年、経済的困苦時代を克服し、ドウラデンセ線に珈琲の歩合作をなすが、珈琲暴落の為、折角の資金も失い、後棉作に転じたがこれも害虫に襲われ、農薬品の使用不備から失敗、尚屈せず三三年九月に現第二エスペランサ区に二十域を求めて入植。当区の草分けとして、また純農精神に生きる人として、努力家の聞え高く現在に到る。なお棉作一点張りで今日を成した人。当初は契約者二戸を入れて大農式に経営したが、戦時中は養蚕を副業として五年、戦後は棉と落花生で堅實主義を採ることを忘れない。肥沃な土地に恵まれ、且つこれを上手に運営した所に今日の成功の鍵があった。

現在土地十域、雑作六域。しかしながら、入植後、長女に婿を迎えたが、四三年に、ふとした打撲傷から腰部骨髓炎に罷って他界、三人の男の子を抱えた未亡人となった長女と、老夫妻の努力一途の農業をつづけている。なお今日、七十を数えても壮者を凌ぐ元気で働いている。

福岡 昌信氏

（島根県那賀郡渡津村）

（写真）

一九二二年に、故昌造氏長男として出生。父君は大工職で有能な請負師であった。昌信氏が五歳のころ、たまたま、地方新開に、ブラジルからの帰国者談が掲載された。それは大きな期待と希望を人に抱かせるに充分なものであった。父君は三十六歳の働きざか

り、親戚の養女を加えて五人の家族を構成し、大正が昭和と改元された一九二六年、神奈川丸でブラジルに渡った。

ノロエステ線カフェランジア駅サンタ・イザベル耕地にコロノとして配耕され、新しい生活の幕は切って落された。が、いくばくもなく、構成員の一人だった女子が結婚してしまった。大切な働き手を取られてしまったので、五歳を頭に幼い子が三人もある両親は、蟹がハサミを奪われたかたちである。耕地の人々は非常に親切だったので、この一家を気の毒がつて、同駅の平野植民地へ移住を世話した。入耕後四ヶ月のことである。この平野植民地で八年間、大工の傍ら、コロノをしたり、建築の請負をしたりした。この間昌信氏は日本語学校で勉強した。

真面目な一家なので、耕主からも至極信用された。リンズ駅ゼッリーナ町サンタ・アメリカ植民地に、前耕主の所有する珈琲園があり、二年間、歩合で働いた。ここから隣接地アルモニアへ移ったのが、一九三六年のことであった。棉作の歩合として五年間、氏は両親を助けて、ひたすら農事に精励した。

アルモニアに移って三年目に、父君は、僅か二十日ほどの患わで、あつけなく急逝した。急性肺炎である。十七歳の氏は、今や、一家の柱として人生の關頭に立たされたわけである。肅々として棉畑を渡る風は、主を失った家のサツペ葺の小屋を吹き過ぎ、そして、また荒涼たる地平の彼方へ流れ去って行く。悲歎のどん底に叩きこまれた暗い谷間の日々が、一家の上へのろく、また、あわただしく過ぎ去って行った。母君の、男勝りのはげしい労働が始まる。昌信氏の必死の奮闘がつづけられる。しかし、棉作の出来の思うに任せぬ年々が多かった。

やがて、バストス移住地エスペランサ更生区の吉岡地区に、棉

作歩合として転じ来り、これに従事すること二年に及んだ。同地の池崎家には、氏の令妹が嫁いで来ていたので、その縁から、池崎地区に入つて、三年間、養蚕にたずさわつた。そののち、現地区に二十域を池崎氏から譲られ、ここに初めて、独立農として起つた。しかし、折悪しく不況期に遭遇し、養蚕を養鶏に切換え、五ヶ年これ続けた。やがて訪れ来つた養蚕景氣に、さいわい、残してあつた桑園を利用して再び養蚕に転じて現在に及んでいる。五〇年からは、伯人契約家族を入れて、事業を拡張した。

現在、所有土地二十域、うち五域は桑園である。繭の年産二千五百キログラムに上っている。伯人歩合作三家を入れ、落花生その他を作らせている。

氏は母君と弟妹との四人暮しで、まだ独身。母君を一家の中心として極めて円満な、平和な日々を送っている。少年の日から、準二世の味うあらゆる辛酸を嘗めて来た氏は、しかし、生来の温厚篤實な資性を毫も失うことなく、区の人々を始め、一般からの信用も厚い。

郷原 周良氏

(岡山県都窪郡中庄村)

(写真)

僅か五歳で、父寔市氏と共に渡伯した氏は、移民の子として幼少からあらゆる辛苦を経験して来た。幸にして教育機関の完備したバストスに於いて人となつたので、氏の勉学は意まれたものであつた。とは云え、幼時から開拓に従事し、繁忙中の寸暇を少し

も無駄にせず、学校卒業後も、専ら独学で今日のような高い教養を積むことが出来たのである。

モジアナ線からバストス移住地カスカッタ区に移転したのが三年、戦後、一家とともに第二エスベランサ区に土地を購入して転じた。棉作を主とした雑作であつたが、弟妹が幼少のため、一家の中堅となって奮闘した。やがて二十歳で美代子夫人と結婚、同時に分家して独立し、今までの経験を生かした新生活第一歩を踏み出した。時に五一年。義父諸角氏の地区にあること二年、後、現森下地区に移り養蚕を専業として今日に到る。現在、前年産一千六百キログラムを超える。これが氏夫妻の手で行われることによつてもいかに氏が努力家であるかがうかがわれる。どんなことにもでも熱情を傾け、大いなる野心に燃え、意志の強固な独立心の旺盛な氏の行き方は、多くの人々からその将来を期待されている。また、氏はマンドリンを弾く音楽趣味の人で、自ら田園に情緒を豊に盛り、詩情にひたる一面を持つ人である。

西尾 降三氏

(広島県広島市横町)

野澤 一衛氏

(長野県諏訪都米澤村)

(写真)

氏はソロカバナ線オウリンニヨス駅四十キロ奥の地に生まれ、一歳の時父の死に遇い、後義父に育てられた。八歳の時實姉がノ

ロエステ線カフエランジャ市の森元武雄氏と結婚した。そこで姉に従って森元家に入り、以来森元氏に育てられた。森元氏と共にバストスに入植し、日語校、グルツポを卒業して、義兄一家の事業に従う。二十一歳の時、森元氏が日本より呼寄せた氏の實妹梅子さんと結婚して一家を成したが、事業面は森元農場の一翼たる蔬菜部を担当し、共営の形で続けて来た。一九五四年、三男一女の子女の教育を完成する目的で、義兄と別れ、モジ市に於て商業を志した。

野澤一衛氏は森元氏の異父弟として生まれ、五歳にして父に死別、小学四年の時、昭和十年森元氏に呼寄せられ、母妹と共に渡伯、カフエランジャ市の森元家に入り、同年森元一家と共にバストスに入植、日語、葡語共に卒業して、今日まで森元氏の片腕としてやって来た。青年時代には野球部長として区青年団の指導にたずさわり一九四七年、サウデ区平野氏の長女宮子さんと結婚して、新居をバストス町に構えた。そしてシネマ館機械技師を二年、産組純棉工場機械部に一年を務めたが健康を害して、再び森元農場に帰り、牧畜部を担当して今日に及んでいる。

森下 政吉氏（熊本県上益城郡秋津村）

（写真）

六人兄弟の農家の次男として一九〇八年出生。高等小学校を卒業、家業にたずさわっていたが、一九二四年、二十一歳の時、結婚して渡伯した。

モジアナ線ボア・ソルテ駅サプカイ耕地に配耕されたが、九ヶ

月目に去り、同線フランカ駅サンタ・テレザ耕地にコロノ二年。一九三二年バストス移住地カスカッタ区に十域を求めて入植した。草分けの一人として目ざましい活躍をした。同区に在ること九年、この間、当時としては大農だった十域の棉作を主として行った。好況時に、年平均、域当り二百五十アローバをあげた。

第二エスペランサ区に四十域を購入して入植したのは四十一年のことで、棉作專業であつた。栽培面積は三十域に及んだ。戦時下の好況期に、二、三年、副業的に養蚕を試みたが、不況来と共に止め、五〇年頃から再び始めている。地力の減退のために、棉作は五〇年頃から縮少し、遂に止めた。一万、四九年から牧畜に手をつけた。

少しずつ買増した土地は現在九十域に上り、このうち五十域は牧場にあてている。飼育の牛は百頭。桑園は十域で繭の年産二千五百キログラムである。雑作地は十域。麻州クヤバーに五百十六域を有しているが、将来の牧畜業の拡張を目指してのことである。カミニョン、自家用車各一台所有。

松永 清市氏 (鹿児島県出水郡阿久根町)

(写真)

頼まれたら嫌とは言わない。どこまでも責任を全うする氏の氣質は又、七転八起の多難な人生を氏に味わせもした。保証倒れ、貸倒れなどで苦しい経験をしたことなどは数え切れぬ程あつた。しかし氏の如く清廉の気を全うした人は珍らしいと言われている。一八九八年、農家の次男として生まれ、大望を抱いて单身神戸市に出る。消防署、造船所に勤務すること四年、後独立して炭團工

場を起し、多くの職工を入れて盛業を極めたが、隣家の出火で丸焼けとなり、保証金、当時の千六百円を得て帰郷した。時に二十二歳。

神戸港でブラジル移民船を見送ったこと幾度、夫人が病弱のため、海外進出の意志も實現に到らず、生死を共にする気持で、ついに「病妻を残して行け」という人のすゝめも斥けて渡伯。

バストスは三一年、グローリア第二区に十アルケースを得て珈琲六千本を植付け、三年後更に五十アルケースに増し、当時としては移住地随一の大地主であつたが、前記の通り貸倒れで皆人にとられ、丸裸となつて第二モンテイロ区に棉作契約、後再び独立農となつて養蚕、棉、牧畜と多角農を以つて今日に到る。現在所有土地三十アルケース、牧場二十七アルケース、牛三十頭、繭年産一千キログラムを超える。

夫妻の間に二男児あり、長男光永君は結婚してツパン市に在る。

宮城 安市氏（長崎県北松浦郡柚木村）

（写真）

農業と呉服商を兼ねていた寺崎家の三男に生まれ、農学校卒業後十九歳で宮城家の婿養子となった。菊地鋳業会社、静鋳業会社等に事務員として十三年を勤め、独立して烏嶽砲台下の扇平炭坑を経営、一時は八十余人の坑夫を使用して事業を進めたが不況の爲中止し、佐世保海軍燃料廠及び市役所の石炭木炭の調達を一手に引受けた。これも一時は盛大したが、次第に思わしくなくて止め、軍港新聞と大阪朝日新聞の共同経営であつた佐世保乗馬クラ

ブを譲受けて三年間経営した。その当時、親友富吉堪策氏がブラジルより帰国した友に、伯国事情を聞かされ、氏もまた渡伯を懇願され、クラブ経営も行き詰りを感じていた時とて、俄に決心し、一家八人、昭和二年ラブラタ丸に乗込んだ。

ノロ線カフェランジャ駅セルボン耕地に配耕されたが、支配人の不法行為に慣激して八ヶ月で退耕し、平野植民地に移り二ヶ年コロノ生活を送った後、昭和五年にバストスに移った。バストスは丁度施設期であつたので、腕に栄えの建築請負業をはじめ、学校病院を建築し、次いで職人十数人をやとつて、各区の住宅建築を請負った。斯うして、二ヶ年間に過ぎたが、バストスで氏の手にならぬ建築物は珍しい位であつた。氏は現区長を務め、村の世話役としても信望が高い。

平井 熊 幸氏 （愛媛県喜多郡大州町）

自作農家の長男として一八九五年出生。中学を中退すると、十三歳まで家業に精励した。経済恐慌下の日本の住み難さを痛感した氏は親子四人に令弟を加えて家族を構成し、一九二七年、ブラジルへ渡った。

モジアナ線ボア・ソルテ駅サプカイ耕地に一年半の義務農を終えノロエステ線リンス駅ビリグイジンニヨ植民地に珈琲コロノ三年を送った。この間に二人の令弟を呼びよせた。一九三一年、バストス移住地カスカッタ地区に十域を求めて入植した。

直ちに棉作を始め、二年目に第二エスペランサ区に十域、三年目モンテイロ区に十域この三ヶ所を同時に開拓した。入植七、八年後に、七、八家族の契約農を入れ、四十域の棉作を行った。時

あたかも棉作の好況期で、大いに恵まれた。戦時中、副業的に養蚕をやつたことはあるが、棉一邊倒で貫いて来た人である。一九三九年、カスカッタ域の土地を売って第二エスペランサ区に移り、同年、令弟を分家させた。

現在所有土地四十域、棉、南京豆を自家労力で堅實に栽培している。麻州クヤバーに一千域を有する。夫妻の間に三男二女あり、長女美代子さんは第二エスペランサ区在山根安美氏に嫁し、長男はプログレッソ区在豊田仁吉氏三女を迎えた。次女幸子さんはバストス人気投票で一位獲得の妙齡の美人である。氏は太平洋戦争勃発当時の難局に区長として敏腕を揮った、区にはなくてほならぬ存在である。

西 見 伍 市氏

(福岡県浮羽郡福富村)

一八九二年出生。兄弟十人の三男。代々土に生きる農家で、氏が小学校を卒えた頃は、米、麦を栽培する自作、小作半々であった。二十歳で母君を失い二十二歳で結婚と同時に分家、独立し、三十七歳で渡伯するまで、豊饒な筑後平野で、黙々、純農精神に生きて鋤をとっていた。

当時、日本は、世界的不況から例外ではなかった。真摯な勤勉家の胸に、その努力に酬いることの余りに薄すぎる、狭隘な国土の外に、自由な希望にあふれた活動の世界が切に想われたことは極めて自然のことといわねばならぬ。ことに、氏の地方は、海外発展の先駆者を多く出している。同村には、ブラジルから帰った成功者さえあった。これらの人達から、海外―就中、ブラジルの實情を耳にして、氏の決意は今や不動のものとなった。時に三

十七歳。一家四人で、渡伯の途に就いたのは一九二九年のことである。

パウリスタ線サンタ・エウドシア駅イタラレ耕地のコロノ生活一年が振出し。四人家族でも手はよく揃い、五千本の珈琲を受け持って、比較的恵まれた渡伯一年生であった。未だ珈琲の値がよかったのである。ところが、ノロエステ線グアイサーラ駅ウニオン植民地に入るに及んで、メサーダは一千本営り五百五十ミルから一挙に三百五十ミルに暴落してしまった。しかし、がむしやらに働き、二年間に三コントス余を残した。残したのはよいが耕主に貸したため、結局、返えず、一九三一年、バストス移住地へ移転の折には、自家の豚を売り払わねばならぬ、という始末となった。

バストスには、ウニオン植民地から多数入植者があつたので、無視察でいきなり現更生区に十域を求めて、同区の草分けとして入植した。草分けの人たちで、現在まで踏み止まっているのは、氏一家のみである。

入植すると、雑作の外、珈琲五千本を植え後に買い足したのと合して一万本になり、年産六百俵だったが、四二年に、霜害と安値のため、伐り払ってしまった。これより先、四〇年、一家を挙げてマリリアへ転じ、バールを経営したが、純農の一家には思わしい成果も挙げられず、在ること一年で、またバストスへ帰った。本来の道は、大地の中にあつたのであろう。長男政行君はこのマリリア在任中鈴江武一氏長女と結婚した。

養蚕を始めたのは更生区の人々と同じ三四年からで、この方面での先駆者と言えるわけである。棉作も行ない、多忙時は十人、常時数人のカマラーダを使役していた。四二年に伐払った珈琲園あ

とに桑を植え、戦時中は蚕種が悪質で成績よくなく、いわゆる養蚕景気なるものの恩恵には浴さなかったが、それでも相当の利益を挙げた。不況来と共に養鶏に転じ、また同時に牧畜を始め、土地を買い増した。現在、牧畜と養鶏の二本建てで進んでいる。

所有面積は七十域。牧場は三十域でこれに飼養する牛は百二十余頭を算する。成鶏は二千五百羽。雑作を二十域に亘って行い、トラクトールを使用。契約伯人三家族を入れている。

家族は氏夫妻に一男一女。政行君はマリリア在住の頃結婚、敏腕の働き盛り。愛子さんは渡邊時弘氏に嫁し中央線モジ市にある。氏は区長を勤めること二期半。戦時中の困難な時代に処して名区長と呼ばれた。義侠心に富み誠實に溢れた氏の人柄に鑑み、けだし故なしとしない。

寺 岡 豊氏 (岡山県津山市)

(写真)

鐘の音に明け鐘の音に暮れる耕地生活をくぐつて、やつと一人前のブラジル百姓になるのが移民の常道であるが、中には、そうした苦しい泣きの涙の道を経ずして、立派な農家を築くことを得た幸運の人も間々ある。寺岡氏は、その幸運者の一人で、地道なブラジルの農業道を歩んで今日に至った人である。

農家の四人兄弟の末っ子に生まれた氏が、十三歳の時、父が他人の借金の裏書きをした為、一家は破産の悲境に陥った。次いで父の死にあい、氏は十四歳の時から十年間、津山市の自転車屋に勤めた。その店では息子を東京の大学に送っていた為、青年とな

り、真面目で腕のよい氏を信頼して、営業一切を氏に委せていた。結婚すると共に店を出て独立し七年間、自転車業を営んで来た。隣家の松田重一氏家が、さきに渡伯して折々ブラジルの珍らしい様子を手紙で知らせていたので、日頃からブラジルに興味を持っていたところ、同郷の柿内氏が帰国していることを聞き、正月の雪の日に訪ねて、ブラジル事情を詳しく聴くに及び、益々南の新天地に心惹かれ、遂に渡伯を決意した。

柿内氏の手づるにより、在伯の味野氏に迎えられ、味野氏が五年契約をしていたソロカバナ線ランシヤリヤ駅コンチネンタル植民地に直接、棉作歩合作者として入植し、自由農業者の形でブラジル生活第一步を踏出した。渡伯三年目には多少の経済的な余裕も生じたので味野氏の斡旋により、バストスはサウデ区の一等地を購入して入植した。以後七ヶ年棉作と米作を行ったが土地が肥沃であつたので豊作に恵まれ、事業は着々と進行して行つたがその頃より、棉価が下落し、植民者の移動が激しくなり、退植者が相次ぎ、近隣に人家が少くなつて来た。環境のさびしさと、成長した子供の教育上の便宜の為、土地を売って市街地近くのシヤカカラに移り一九四二年、現在の地区を購入して養蚕業をはじめた。丁度養蚕景気の絶頂で、渡伯以来はじめての大金を手に入れ、家屋も新築して、此处にどっしりと腰を落ちつけることが出来た。やがて襲来した養蚕不景気時には、早くも養鶏に切りかえ、百五十羽の飼育からはじめて、年々数を殖やし、現在五千羽を飼つて、有数の養鶏家となつて事業計画に秀れた才能を持ち、地道に進めて行く氏の農業は、何をやっても、失敗することなく、研究心の旺盛さは常に他にぬきん出て来ている。養蚕時代にはブラ拓から原蚕飼育を依頼され、桑園肥沃化の為に鶏糞を利用して行き、養

鶏家となつては、鶏舎の設備に力をつくし、自家発電による点燈など移住地で第一番に施した人であり、給水の為には水道を設けるなど、實に完備した養鶏施設を持っていて、理想的な経営を進めている。現在は養鶏の外に牧畜をも取り入れ、牧場五域に乳牛十六頭を飼い、この面でも、事業の進展が計られている。

平田 光男氏 (福岡県三井郡大堰村)

(写真)

国を出る時は、胸に溢れるような希望を抱き、新天地開拓の戦士として渡伯するのであるが、移民はそれぞれ苦難の半生を辿つて今日を成したのである。中でも、平田氏は二度愛妻に先立たれ又愛する子供をも失うという、悲痛な人生航路をたどつて来た人である。

農家の四男に生まれた氏は、高等小学校卒業後、家業に従つて居たが、甲種合格となつて佐世保重砲大隊に入営した。品行方正で砲術に秀でていたので、二年目には上等兵に昇格三年目には砲射長となった。除隊後、土地を少し売って株を買い漁業に従事した。漁業の本場尻港に渡航したいと思い両親に計ったところ、末っ子を特に愛していた両親の大反対にあい、その上、何時までも伴に住むことを両親が希望して止まないのです、その老後をみながら、結婚して農業をつづけていた。ところが大正十五年に、若い妻はふとした病気が因で三人の子供を残して他界した。氏の落胆は大きく、その後鬱鬱として楽しまなかったが、昭和四年再婚するに及び、大いに勇を鼓して南米移住を思い立ち、再婚間もな

く身も心も晴ればれとブラジル目指して渡航した。

日本で長年の間、農耕の傍ら養蚕を副業としていたので、渡伯したら腰をすえて、養蚕する心算であつたが、最初は珈琲園コロノとして、モジアナ線タンバウー駅サンタカタリーナ耕地に配耕された。その後、バウルー駅バラコン植民地に移り棉作に励んでいた。政府が棉作に力こぶを入れていた頃で棉は高値を呼び、三年後には、大いに余裕を生じたので、附近の富士植民地に二十域の土地を買い、草分けとして入植した。植民地初代開拓者として大きな功績を残したが、この時代に二度目の妻を失った。幸い義弟夫婦と共に住んでいたのも、小さい子供たちは、弟嫁がよく世話して呉れ、日本から呼び寄せた先妻の残した三人の子女は既に成人して居り、二人の娘は他家に嫁がせたので家事に苦しむことは無かったが、精神的な打撃は大きく、索莫たる日々の連続に苦しんだ。五年間を富士植民地で過し、バストス隣接地のモンテ・アレグレ植民地に百域の土地を求めて入植したが、日本から抱いて来た養蚕の夢を現實に施行するに至らず、十年間を棉作に暮した。この間に日本から呼び寄せた長男を病魔に奪われた。二十二歳の血氣盛りの息子の死は、氏の氣力を一度に奪つて行つた。孫たちも後成長して、学齡期に達したので、学校の在るバストスに移ることを決意し、現在のシャーカーラ区に果樹園二域半を購入して入植した。果樹を栽培し、モンテ・アレグレの土地は牧場として大部分を人に渡し、更に麻州に五百ヘクタールの土地を買い、これから成長して行く子供達の礎石をすえてやることを得た。

現在、子息は二人とも共に住み、長男は結婚してカミニオンを持ち運搬業にたずさわり、既に四人の子供がある。次男は氏と共に果樹園を経営している。

氏の半生は難路にあえぐ険しさであつたが、今や落ちつくべき所に落つき、安楽な老後を迎えている。富士植民地時代に村を建て、学校を二校も建設し、万年会計として村政に励んだことも、氏の人柄をよく表わして居り、美しい語り草として伝えられるであらう。

山口 金丸氏 (静岡県田方郡川西村)

(写真)

氏の郷里は暖国静岡で果物とお茶が銘産である。氏の生家も果樹と茶の耗培を業としていた。農家の三男として生まれ、独立して生計を営む道を早くから考究していたが、十八歳の時志を立て、東京に出、一時兵役の為帰郷したが、浅野造船所に勤務して十数年を東都で暮した。資性温厚篤實な氏は、その頃ようやく盛んになった労働争議などの渦中に捲きこまれることもなく、上長の信任も厚かつたが、如何にも狭い日本が嫌になり、海外雄飛を志した。はじめ満蒙を望んだが道が展げず、伯国移住に転じ、昭和九年八月一家をあげて渡航した。

最初モジアナ線オーランジャ駅タペラツバ耕地に入った。此処で、馴れぬ気候風土に禍されて五歳の長男を亡くした。大衝撃をうけて、しみじみ健康に想をめぐらし、当時、衛生施設の完備した邦人植民地として名高かったバストスに、一ケ年の義務年限も放棄して移った。最初はカスカッタ区の田中氏の土地で二ケ年歩合作をし、ブラ拓直営地に移り、棉作と、ユーカリ植付け請負いをし、一年後にシャーカラ区に土地を求め、四年後には、十五

域に土地を増し、野菜果樹を栽培して今日に至っている。

一九五一年に胃癌に罹りサンパウロ市で手術をした。一時は絶望視されたが奇蹟的に回復した。七男三女の子寶家庭のよき父である。

大倉 遺 一氏 (岡山県都窪郡妹尾町)

氏は本姓を手島と言い、山口県都濃郡中須村の農家の三男に生まれたが、バストス在任中、縁あつて、大倉熊四郎氏養女八重子さんと、結婚して、大倉家を継いだ。青年時代日本で貨物自動車の運転手をしていたが、實妹夫婦が渡伯するにつき、家族構成上の必要から渡伯をすゝめられ、氏としても海外飛雄は望むところであつたので、妹夫婦と共に、昭和九年ハワイ丸でブラジルにやつて来た。

聖市郊外コチアの山下亀一氏耕地に入り、四ヶ月後にバストスに移った。はじめは、アルト区の倉本氏の地区に入り、一年半棉作に従事して後、大倉家の養子となる。野菜栽培者としてシラカラ区の先駆者を為し、以来十二年間今日まで継続している。養蚕好況期には養蚕もしたが糸価の下落により養鶏にかわる、鶏舎の設備を完全にし、今日二千五百羽を飼育しているが、数年前までは契約者一家族を入れ、三千数百羽を飼っていた。副業としての野菜栽培は堂に入つて居り、特にトマト、西瓜を大量生産し、聖市に出荷した最初の人として居られている。

家族は二男五女、長男治郎君は中学在校ジュニオール野球選手であり少年野球時代には左翼手として活躍した。そこで、氏も又野球を愛し、全伯大会の時はサンパウロまでも見物に行く程であ

る。氏は二男五女の子賓に恵まれ、長女寿美子さんは家政学校卒、次女信子さんは家政学校在学中である。これら子女は皆、シヤーカーラ生れ、つまり氏の人生はこの区より始ったのである。健闘を祈る。

信太 順治氏

(北海道北見国紋別郡湧別村)

(写真)

ブラジルの農業は大家族でなければ成功しないと言われている。事実、労働力の揃った家族が栄えているが、やがて分離して水平線下に没するのが慣いである。ところが、げんに毛利元就の弓矢の訓を守り、三人の兄弟が、それぞれの資質に應じて相協力し、栄えを万代にしようとしている一家がある。それは順治、寿雄、龍吉、三氏一族の信太氏一家である。

北海道北見国で農業をしていた信太家は緑滴る常夏の国に雄大な牧場経営を理想として昭和七年、父母兄弟六人打揃って渡伯した。

ノロエステ線プロミッソン駅、シントラ耕地に配耕され一農年を過して上塚第二植民地ゴンザカにコロノ生活一ヶ年を送った。

家族はよし、伯国の農業も一通り身についたので、独立農として立つ足場を物色していた時、邦人集団地として衛生文化施設の完備したバストスの名を開き、入植を希望した。昭和九年ウニオン区千田氏地区に契約者として入植、一ヶ年後、バストス隣接地グイトリア植民地に十五域の土地を購入して、草分けとなった。

以来八年間棉作で進み、戦時には、その需要を見越して薄荷栽培に着手し一九四一年より三年間、薄荷景氣に乗って、莫大な収入を得た。この三年目頃から、一般農家がようやく薄荷に転じはじめたが、氏は薄荷も峠を越したと見て、主力養蚕に転じた。以後二年間は好況の養蚕と薄荷で行き、三年目蚕糸価の下落と同時に養蚕を廃して雑作と棉に替った。雑作を主力とするからには機械化の急務を覚り、實弟達吉氏をピラスヌンガ農学校の機械科に進学させ、帰郷を待つてトラットールを購入した。これはバストス農業機械化に先鞭をつけたもので、一九四九年には二十五域の雑作を機械でやり、バストス産組員の耕地八十域をも耕耘した。

そして、一九五三年、バストス、シャーカラ区に更に四域の土地を買い、そこで養鶏にも手を伸ばし、ユーカリ植林請負、トラットール耕耘請負、養鶏二千五百羽を行って今日に至っている。

氏等一家が、ヴィトリア植民地を出て、バストスに移ったのは、第一に子弟教育の為であった。ヴィトリア植民地は氏等を草分けとして多数の邦人が入植し、学校もよく経営されてきたが、棉、薄荷、養蚕と、農業の主力は興り廃って、多くの人は退植して行った。そこで学校の経営も不可能となってしまった。信太氏は特に教育熱心で、学校経営の主導者であったが、遂にヴィトリア植民地の解散に至って、子供達のエデュケーションを失い、バストスに止むなく移ったのであった。

信太一家が、斯くもバストス地方最初の大農式農業を行い、数々の事業を円滑に行い得ているのは、實弟寿雄氏夫妻、龍吉氏夫妻の協力によるものである。只一つ氏等の家族にとつての痛恨事は、ピラスヌンガ農学校に学んだ運吉氏が、一九五一年トラットールの事故で即死した事である。仲陸じい兄弟であった丈に、

この時は傍の見る目にも、その嘆きは深いものがあつた。

順治氏は趣味を文学に有ち、短歌も詠めば俳句もつくるが近年は近眼の度がひどくなつたので好きな読書も止め、仕事に精励、これを趣味とする植地に在つて事業計画を進めている。

本田 正雄氏 （和歌山県海南市内海町）

バストスが邦人集園地の文化村として、大きく喧伝され、スポーツに学芸に、娯楽に、全伯に覇を唱えた時代があつた。そうしてバストス黄金時代の現出の為の土台固めをし、うまずたゆまず、あらゆる文化事業の推進に力をつくし、やがて絢爛の花を咲かしたバストス文化の貢献者の一人として今尚バストスに居住し、後進のよき顧問として、蔭の力となつている人に本田正雄氏があつた。今日のバストスのあらゆる文化機関の歴史をくつてみると、そこに必ず本田氏の名が出て来る。仮令え、本田氏が声を大にして、全伯にむかい、必要あつて「バストスは俺の村だ」と言つたとしても、誰一人、その言葉を認めない人はないであろう。

中学野球の王国和歌山県出身の氏は無類の野球好きである。バストス第一回入植者として中央区に居を構えたとすぐに移住地事務所員達を集めて野球チームを作り、青年層に野球を普及して行つた。監督は樋口謙三氏、マネージャ本田氏、この二人の指導により、球界の名門バストス軍を産み出し、その伝統的強豪派は全伯に喧伝された。戦後、バストス體育協会を結成して委員長として活躍し、又バストス野球審判協会を創設し、協会長となつて、

バストス野球の向上と発展につくした。戦後、日伯毎日新聞社主催の地方対抗野球大会にはオール・パウリスタ軍の監督として檣舞台に勇姿を見せ、絶妙の統卒振りを示し、満場をうならせたものである。

氏の斯うした野球に対する情熱は、全バストス青年を振立立たせたばかりでなく、氏の子息忠臣君にも、伝えられた。忠臣君は少年野球の主将として遊撃、一塁手を兼ね、全伯少年野球大会に出場二連覇を遂げ、名門バストスの名を、いやが上にも高からしめたものであった。そして現在も尚、ジュニオールチームの主将として、父ゆずりの名手振りを發揮している。バストス野球の生みの親にして育ての親たる本田氏も以て本懐とする所であろうと察する。

野球と共に氏の趣味は機械いじりにあり、特に自動車の運転の名手で、バストス最初のタクシー業者となり、次いで、映画業をはじめバストス最初の娯楽文化事業の創始者となった。又植民地の殺伐さをゆるめ、植民者の胸にうるおいを興える為にハーモニカバンドを創り、よろこびと朗らかな旋律を振りまいて行った。

スポーツを愛し、音楽に親しみ、時代の尖端を行く映画業者として、バストスの化形となった氏は、植民地のホープであり、若き女性の憶がれの的であった。ロメオにはジュリエッタの出現なかるべからずであって、何れをあやめ、かきつばた、多数の乙女の中より選ばれて、恋の女神の金矢をかざし、遂に本田氏のハートを打ち抜いたのは、その性も等しい本田一男氏の實妹たね子さんであった。

手芸と活花は堪能な大和なでしこと、花も實もある美丈夫とが、手をたずさえて、春花咲く野邊に、秋は椰子の樹蔭の月光に、美

しい愛のさゝやきを交したのであった。誰がこの二人に祝福を送らない者があるうか。全バストスの若人は、羨望と祝福の思いを込めて拍手を送ったのであった。

花形職業人として華々しい存在となり、高嶺の花と仰がれた佳人と結ばれて、この世の幸を一身にあつめた本田氏も、その少年時代には、如何なる不運の星のもとに生まれた人かと世の人の涙をさそった人であった。氏は商家の長男として生まれ、幼時は何不自由の無い満ち足りた生活の中に父母兄弟に囲まれて育つて来たのであったが、大正七年より、一年間に一人ずつ連年、祖父母、父母と四人の兄弟と死別して大正十五年には、氏が只一人のみに残きるという悲運に見舞われたのであった。涙の乾くひまもない七年間を経て、天涯の孤児となった氏は、伯父の手許に引きとられ、養育されたのであった。小学校を卒業すると伯父は氏を教育者として立たしめようとして師範学校への入学をすゝめたが、氏は電気工学に興味を持っていたので、わざと師範入学を避け、大阪市今宮職工学校の電気科に優秀な成績で入学し、専ら機械の知識を身につけた。事情あつて中途退学し、東亜映画甲陽撮影所カメラ部に勤務した。当時は月形龍之介、高堂国典等が全国フアンの人気を集めていた頃で、映画は新興娯楽文化として、華々しく社会にむかえられ、撮影所勤務の氏なども、花形職業人として羨望されたものであった。

この頃、全国的に海外移住の機運が醸成され、氏の伯父本田彦右衛門氏も憂国の情熱からブラジルに移住を志し、和歌山県海外移住組合に關係し、和歌山県人の分村を伯国に建設するつもりで、組合とも談合の上、バストスに移住した。氏も家族の一員として来伯し、新天地の開拓にいそしんだが、現地の事情は彦右衛門氏

の理想たる分村和歌山移住地とは大いに相達し、ことごとくが移住組合連合会の方針に従って進められているので、氏は大いに憤激して数年ならずして帰国した。氏一人は青春の希望に燃えていたので、一人バストスに踏みとどまり、自らの人生を独力で広くことにした。第二次大戦まで映画業をして植民者をよろこぼせ、戦時にはトラックに精米機を積んで農家を巡回する移動精米業をして便を計って重寶せられた。又戦前戦後を通じてバストス発電所の燃料を一手に供給した。戦時には伯人社会からの圧迫に耐えながら、町の電燈を消さない為に、苦心惨憺して、この事業を続けたものであった。常に伯人薪切り人夫七八十人を使役して燃料を集めて行く仕事も、氏の強い責任感と、スポーツで鍛えた敢闘精神によつてのみ継続されたものである。一九五〇年、球友弓場勇氏の「人間は土に生きるべきである」という持論に賛し、これまでの自動車業をやめ、シャーカラ区に土地を求め農業をはじめた。鶏舎を完備して養鶏をはじめ、一九五四年度からは、トラック二台を購入して二十域の土地に落花生、ミーリヨの栽培に乗出した。この方は現在は専ら、事業熱心な長男道弘君の担当する所であり、順調な発展を見せている。長男道弘君は、現在一家の事業方面の中心であり、父の音楽方面のよい素質を承け、バストス・ヒバリ楽団の重要メンバーであり、アコーデオンの名手として知られている。

氏には他に二女あり、長女ナイルさんは中学在学中、次女可南さんは聖市遊学中、夫人は良妻賢母のほまれ高く、氏は、青年時代より統卒者として多くの社会団體を指導して来たが現在も、シャーカラ区の万年区長であり連合日本人会総務部長、サンジョゼー中学校父兄会総務部長として公共の為に盡瘁している。何事

によらず、事バストスに関する限り絶対に重要な人であって、その存在は年と共に輝きを加えつゝある。

以上の如く氏の半生は全く波瀾に富んでいるが、それだけに如何なる逆境に逢うとも真剣に人生と取組む、即ち、自力更生の氣慨を全身に漲らせている人である。親から譲り受けたものは裸一貫だけ。唯我独尊を地で行った本田氏なればこそ、移住地の無くてはならぬ世話人としての特異な存在を作り得たのであろう。ともかく植任地一般から親しまれ、愛されている本田氏である。

小 澤 勇氏

(岡山県津山市)

在伯邦人の多くは、今でこそ永住を叫んで居るが、その多くは一旗組であつたのではなからうか。小澤氏も、十年出稼ぎ、錦衣帰郷のつもりで故郷を後にし、遂に、バストスに根を張り、子孫永遠の発展を劃策している一人である。

小澤氏は津山中学校卒業後、家業の製麺業に従事し、一時は工員二十余名を擁して、作州に於ける麺類相場を左右する程の盛業振りであつたが、兵庫県岡山県南部に麺業組合が組織され、その勢力が強くなったので、前途に見切りをつけ、渡伯した人である。ブラジルに就いては、早くより關心を持ち、種々な書物によつて伯国事情を研究して来て居た。それは、青年時代に岡山県幹部青年講習会に参加し、海外発展が日本の人口食糧問題解決の一端を為し、国策に沿うものである事などを聞き共鳴していたからであつた。

製麺工場をたゞみ、店は父母に營業を続けて貰い三女を日本に残して、十年一稼ぎの心算で国を出た。ソロカバナ線。パラグア

スー駅サントアントニオ耕地に配耕されたが二ヶ月後に退耕、附近で二ヶ年借地農をし、文化植民地に、四ヶ年契約の棉作者として、入植した。文化植民地の四ヶ年は、新地開拓より始めたので非常な労苦を嘗めさせられた。日本での生活とは余りにもかけ離れた原始的な生活であつた為、意のまゝにならず、二十数コントスの借金まで背負つたが、最後の年の棉作が当つて、借金を支払つて尚二十数コントスの金が余つた。この金を以て一仕事と、サンターナ駅附近にあつたマンジョカのラスパ製造工場を買取つたが、工場購入契約書の不備のため、所有する事が出来ず、一ヶ年後にはこれも放棄の止むなきにいたり、又元の裸一貫にかえつてしまった。これも身の不運とあきらめて、バストスはシャーカラ区に五域を求めて入植した。時は丁度、第二次大戦中で、戦火は刻々と拡大して居り、伯人社会に混つて生活する事の不安と、養蚕有望の見通しから、バストスへの移転を決意したのであつた。入植と同時に桑を植え、区で最初の養蚕業者となり以来終戦後の不況まで専業として来た。蚕糸の暴落と共に養蚕から養鶏業に切りかえ今日に至っている。

現在は鶏五千羽を専心飼育しているが、周囲に先だつて、新しい事業に手をつ吋て来た氏の進取性は、鶏舎の設備にも文明の利器を大いに利用している。全てが電化されて居り、又中雛飼育場の完備している事など、バストスでも、最新方式の養鶏場と言われている。

氏は前途の見通しに明かるい頭脳明晰の人であるが、物質一緊張りの人ではない。シャカラ組長を三期、バストス産組の評議員を六期、蚕糸業組合の区代表を連続に務めていた。又現在はバンデイランテ産組出張所の相談役として公事に重きを為し、日本民

族発展の最適地伯国に子孫永遠の発展を考え、バストスを如何にして、日系人の楽土たらしめるかに苦心している。

慶子夫人との間に長男将男、長女幸子、次女美代子、在日の三女と四人の子女あり、それぞれ恵まれた結婚をして、孫も既に十七人を数え、子息と共に剣道初段の氏は、斯道にはげみ、生長の家信者として、その円満な人柄を知られている。

富吉 勘策氏（長崎県佐世保市清水町）

全伯を股にかけて渡り歩く、インチキ馬喰も、バストス附近を徘徊することは禁物とした。それは、ヴィトリヤ植民地に、獣医富吉氏が頑張っていて、一度氏の目に止まると、どんなにゴマカそうとしても、疫馬、悪馬は見破られてしまうからである。氏はバストス産組の嘱託獣医として、全バストスの牛馬の世話をし、植民者に家畜に関する諸々の知識を興えた。言わば畜産バストスの恩人とも言うべき人である。

富吉氏は、長崎県佐世保の果樹蔬菜業家の長男に生れ、佐世保塾夜間部を卒業し、獣医を志して東都に出、麻生獣医畜産学校を卒業した。それは、氏の郷里長崎は霧の多い土地で牧羊家は羊の病気に苦しんでいた、将来牧畜を業としたいと思っていた氏は、先ず獣医学を修める必要を感じたからであった。帰郷して、手はじめに乳牛を飼い牛乳屋をしながら牧畜業を研究していた。毎月購入している雑誌「中央獣医」を読んでいると、中に「ブラジルの畜産」と題して、伯国連邦政府畜産課嘱託となっている邦人石橋恒四郎氏が、ブラジルの牧畜の将来性を論じた文章を発見した。これを読んで、氏の胸に大きな夢が広がった。将来への希望に胸

をふくらませ伯国移住を決意した。

最初ノロエステ線セルボン耕地で一ケ年、平野植民地で二ケ年コロノ生活を送り、昭和五年にバストスに入植した。はじめにブラ拓直営地に入り四ケ年後、ヴィトリヤ植民地に十域の土地を求めて入植した。一九四〇年までは棉と米を作り、以後、養蚕を副業に取り入れた。一九五二年、孫の教育上の便宜の為、現在のバストス、シャーカラ区に移り、氏夫妻と三男次女の手で、原蚕飼育をしている。

又長男、次男等は、バストスはサウーデ区に一家を構え、区有数の養蚕家として、大々的に事業を進めている。

氏は牧畜業を目的として渡伯したが、遂に牧畜は営まなかった。しかし、氏が青年の日々に修めた獣医学は無駄ではなかった。バストス地方一帯の耕馬の改良、疫病の駆逐に大きな役割を果たしたのであった。

富吉先生といえば名獣医として誰知らぬ者はなく、家畜に関する限り、植民者は、何事も、氏に相談し、氏の指導を仰いだ。そこで氏が馬の世話で一ヶ月も家に帰らねことは珍しくなかったものである。

今日ようやく老いて、孫達の進学と成長を樂しんでいる氏であるが、馬や牛の病氣ときくと、どこまでも出掛けて、親切に診てくれる氏を村民は徳としている。

氏も亦、牧畜業を以て民族発展の歩を大いに進める筈であったが、運命は氏を獣医として終らしめたことを後悔していない。子供は四男二女、それぞれ成人して、孫も十二人を数え、洋々たる未来が展げようとしている様を眺め、生涯を獣医として社会に貢献するところあったことをよろこびとしている。

ブラジルに於ける邦人発展の蔭の人として氏の如き存在こそ尊ばれなければならないと思うのは筆者ばかりではあるまい。

文美江夫人は佐世保高等女学校卒業の移住地には数少ないインテリ婦人。それだけに子弟教育には関心が深く、現シヤーカーラ区に移ったのも孫たちの通学の便を考えたからだという。インテリ夫妻の静けき老後に好日が毎日訪れているかのようにある。

移住地居住者名簿

グローリア第一区

今野林次郎 山形県南村山都大和田橋戸村字 西見。大正四年十

二月十六日出生、渡伯大正八年一月十五日

妻 千代 大正十三年二月廿九日出生

實母 かる（八十歳）

子息 浩（四四年）とし子（四六年）道子（四七年）敏夫（四八年）かつえ（五〇年）

初貝勘三 岩手県東磐井郡生母村字赤生津、

明治三七年九月二十日出生、渡伯昭和五年 七月三十日、リオ
デジャネイロ丸、直来者

妻 ケキミ、明治四十三年十二月七日出生子息 京子（四〇年）耕
平（四一年）あつ子（四二年）文平（四七年）

岩野耕一和歌山県日高郡和田村三百五番地 大正三年二月十九日
出生、渡伯昭和四年六月三日、ラプラタ丸、バストス直来者

妻 静香 大正八年十一月二十日出生子息 勝子（四二年）鎮彦
（四三年）かずゑ（四五年）英子（四七年）芳江（四九年） 雄吾
（五一年）

桑原久治郎 和歌山県有田郡糸我村字中番一〇三四番地、明治三
十四年九月二十四日出生、渡伯昭和四年六月三日、ラプラタ丸、
バストス直来者

妻 芳子 明治四十二年十月十六日出生
子息 マリア（三二年）久仁男（三五年）寿 男（三七年）三郎
（四一年）清文（四五年） 浄治（四七年）

河村忠雄 山口県久賀郡久賀町、大正十三年 二月二十五日出生、
渡伯大正七年七月二十八日、若狭丸、在伯入植者
實母 チカノ 明治二十九年四月八日出生
實弟 国武（二七年）正男（三〇年）五月（三三年） つたえ（三
七年）満男（三九年）

栖原義一和歌山県有田郡栖川村字栖原 明治二十四年五月十五
日出生、渡伯昭和四年六月三日、ラプラタ丸、バストス直来者
妻 菊枝 昭和三十年十月一日出生
子息 信子（二四年）同女婿 清（二五年）孫 郁子（四二年）重
剛（四四年）忠弘（四 五年）賢司（四八年）

山根敬二 香川県小豆郡大部村大字少部、明治十九年九月十九日
出生、渡伯昭和三年二月四日、サントス丸、在伯入植者
妻 テル 明治二十四年十一月七日出生
子息 三郎（一四年）同妻 キクミ（二〇年）孫 弘佑（四〇年）
テルエ（四二年）条夫（四四年）喜美子（四六年）昇（四九年）ゑ
み 子（五一年）

古川誠三 和歌山県東牟婁（ムロ）郡下町二九一三番地、明治二
十三年一月四日出生、渡伯昭和四年六月三日、ラプラタ丸、バス
トス直来妻 貞 明治二十三年十二月十日出生

子息 亘（一五年）同妻 久子（二五年）要子（二九年）孫 伸
（四六年）可南（四八年）

岩田喜代次 宮城県都城市蔵原町、明治二十九年十二月十四日出生、渡伯大正十四年八月三十日、河内丸、在伯入植者

妻 直 明治三十四年六月八日出生

子息 喜一郎（二五年）悌二郎（二八年）鶴子（三三年）三千人
（三七年）武夫（四二年）實姉 福島フイ 明治二十七年一月十五日出生

清川宇之吉 鹿児島県川邊郡芽野村、明治二十六年十二月二十七日出生、渡伯大正二年九月十日、清丸、在伯入植者

妻 マリア・コンセイソン （ボルトゲーザ）一九〇五年四月二十四日出生

子息 オブリーナ（三二年）パウロ（三三年）リーノ（三七年）
ラニー（三九年）マリオ（四一年）マリア・エレーナ
（四四年）マリーナ（四七年）ネルソン（五〇年）

浮田現爾 香川県香川郡下笠居村字神在、明治三十一年一月三十一日出生、渡伯昭和四年二月十一日、モンテヴィデオ丸、在伯者妻 ジツエ 明治四十年二月十三日出生

子息 文子（二五年）栄二（三九年）ヒロ子（四一年）恭子（四四年）

増田駒一 香川県香川郡佛生山町、明治三十五年十月一日出生、渡伯昭和五年二月十日、マニラ丸、在伯入植者

妻 リツ子 明治四十年十一月二十日出生

子息 邦夫（二四年）哲夫（二六年）叔彦（二八年） ルリ子（三一年）千鶴子（三七年） 秀彦（三八年）淑弘（四〇年）恵子（四四年）美智子（四六年） サチ子（四八年）

成松政市 宮崎県都城市東上町角、明治三十四年十一月二十二日出生、渡伯大正十四年 八月三十日、河内丸、在伯入植者

妻 勇子 明治三十二年十二月二十日出生

子息 弘（二七年）豊（二九年）猛（三一年） 弘妻 マリナ（三一年）

坂口房吉 和歌山県日高郡野口村字野口、明治十六年五月二十日出生、渡伯昭和六年五月九日、ブエノスアイレス丸、直来入植者
妻 ツタ 明治二十七年三月二十七日出生

子息 義一（明治四十年）同妻 常子（大正四年）

孫 修身（三九年）春代（四一年）重雄（四二年）貞雄（四四年）
秀子（四六年）

坂東米吉 和歌山県日高郡野口村字上野口、 明治二十四年四月二十日出生、渡伯昭和六 年五月九日、ブエノスアイレス丸、直来者

妻 富 明治二十八年二月二十日出生

養子 森川淳 大正十三年三月二十日出生、

同妻 栄子 昭和七年八月二十三日出生

養子 杉並アンナ（三五年）

篠崎長五郎 群馬県多野郡入野村字多比良、 明治三十年一月十四日出生、渡伯昭和八年 二月三日、ブエノスアイレス丸、直来者妻 さと 明治三十五年一月二十五日出生

子息 才八郎（三〇年）まつ（三二年）五郎（三四年）としゑ（三六年）英侍（三八年） 正幸（四〇年） よしの（四三年） 才八郎妻 佐和子（三三年）

矢野定一 愛媛県今治市近見町、明治二十三年七月四日出生、渡伯昭和三年八月十六日、 マニラ丸、在伯入植者

妻 朝代 明治三十年十月五日出生

子息 武信（二二年）同妻 君江（二七年） 清香（三二年）實（三六年）英治（三八年）

孫 勝志（五二年）町子（五四年）

越智嘉春 愛媛県今治市近見町、大正七年二月二十七日出生、渡伯昭和三年八月十六日 マニラ丸、在伯入植者

妻 八千代 大正八年四月五日出生

子息 巖（四六年）豊美（四八年）紀雄（五〇年）貢（五三年）

坂東喜八郎 和歌山県日高郡野口村字野口、 明治二十二年五月二十五日出生、渡伯昭和 六年五月九日、ブエノスアイレス丸、直来

妻 ハツ 明治二十九年

子息 亟一（一四年）同妻 清美（二六年）

孫 陽子（四七年）孝（四九年）弘子（五〇年）幸子（五二年）

馬場俊衛 福島県相馬郡福浦村大字神山、明治四十二年十月三日出生、渡伯昭和七年二月七日、ラプラタ丸、在伯入植者

妻 静代 大正五年二月二十二日出生

子息 俊夫（三一年）衛（三五年）弘子（三六年）誠夫（三八年）信子（四〇年） ルイザ（四六年）和義（四七年）寿夫（五〇年）

輝夫（五一年）登美枝（五三年） 八重樫純（三七年）黎子（三九年）光伸（四一年）行秀（四三年）

水本 彰 岡山県上房郡豊野村大字稔、大正四年七月二十七日出生、渡伯昭和四年六月三十日、博多丸、在伯入植者

妻 幸子 大正十三年二月二十五日出生

子息 隆子（四三年）裕（四五年）宏（四六年）巖（四八年）美智恵（五〇年）典満（二年）

斎藤 強（ツヨシ）福島県伊達郡伏黒村大字伏黒、明治四十四年二月十日出生、渡伯大正十四年一月二十日、カナダ丸、在伯入植者

妻 シチ 大正十年十月八日出生

子息 ミエ子（四〇年）富夫（四三年）みはる（四四年）ふき子（四七年）千賀子（四九年）みどり（五四年）

ブログレツソ区

長橋 智 愛媛県越智郡乃万村字矢田、大正四年十月三十日出生、渡伯昭和四年九月十日、モンテビデオ丸、直来入植者

妻 幹枝 大正九年九月二日出生

子息 淳己（四一年）要（四四年）妙子（四五年）浄（四七年）住
子（四八年）信子（五〇年）英子（五三年）
實母 キヨノ 明治二十年十月二十六日出生
實弟 齋（二五年）實妹 多寿子（二八年）

藤林延蔵 兵庫県明石郡林崎村字藤江、大正四年五月十五日出生、
渡伯昭和七年十一月八日、リオデジャネイロ丸、在伯入植者
妻 民子 昭和二年一日二日出生

子息 育江（五二年）武徳（五三年）

實父 元七 明治二十一年七月八日出生

實母 しう 明治十八年十月十二日出生

實弟 克治（二七年）三三（三〇年）

實妹 正子（三八年）

上田 寿 山口県美禰郡赤郷村字末原、明治四十二年八月十四日
出生、渡伯昭和八年五月二十七日、アフリカ丸、在伯入植者
妻 せい 大正七年十月三十日出生

子息 功（四三年）勝（四七年）剛（四九年）

實母 のぶ 明治二十二年十月三十日出生

實弟 芳人（三〇年）

梅山喜三郎 神奈川県横須賀市公郷郡一五二 九番地、大正十
四年十月二十五日出生、渡伯昭和七年八月二十五日、ブエノスア
イレス丸、直来入植者

妻 津美江 昭和三年九月二十五日出生

子息 吉雄（五一年）仁（五四年）

實父 岩五郎 明治十七年二月二十七日出生
實母 イキ 明治二十年八月二十七日出生

吉田千衛作 長崎県南高来郡土黒村字八斗木 明治三十二年十月二十九日出生、渡伯昭和三年十一月十日、ハワイ丸、在伯入植者
子息 優（三四年）三郎（三六年）三保子（三八年）勝子（四二年）逸子（四七年）

古谷清一 滋賀県高島郡川上村大字日置前、大正六年三月三十一日出生、渡伯大正十五年三月十八日、マニフ丸、在伯入植者
妻 君江 大正十三年三月二十三日出生
子息 徳夫（四二年）徹夫（四四年）文江（四七年）秀夫（五一年）

豊田正次 山口県阿武都生雲村大字生雲中三七四番地ノ五、大正三年二月十六日出生、渡伯大正十五年三月十八日、マニラ丸、在伯入植者

妻 春江 大正十年一月八日出生
子息 千鶴子（三七年）進路（三九年）幾夫（四二年）オズワルド（四八年）正美（五〇年）

實父 仁吉 明治十八年五月二十三日出生
實母 スエ 明治三十四年十月十三日出生
實弟 光男（二九年）智之（三七年）

杉浦一男 神奈川県津久井郡中野町字又野六八六番地、大正十年十一月九日出生、渡伯大正十二年六月十二日、神奈川丸、在伯入

植者

妻 澄子 大正十四年十一月二十六日出生

子息 由美子(四八年)浩一(五〇年)俊次 (五一年)美枝子(五二年)

實母 ナカ 明治三十五年六月十二日出生

祖母 シゲ 明治六年九月十七日出生

實弟 駿(二九年)昭和(三一年)幸子(三六年)功(三七年)

緒方嘉作 山口県大津郡菱海(ヒシウミ)村宇久留、明治二十二年三月二十五日出生、渡伯大正十三年十二月三十日へ阿波丸、在伯入植者妻 ソヨ 明治三十年五月二十三日出生

子息 満秋(二〇年)同妻 貞子(三三年) 昭(三〇年)嘉正(三五年)芙美子(四〇年)

孫 和巳(五二年)寿(五四年)

秋澤幸三郎 栃木県上都賀郡加蘇村字加園、明治三十六年五月五日出生、渡伯昭和五年二月七日、マニラ丸、在伯入植者

妻 モトメ 明治四十二年九月十二日出生

子息 三千男(三四年)幸子(三七七年)千鶴子(三九年)昌子(四一年)勝子(四四年) 栄子(四六年)睦子(四九年)直枝(五二年)

富田健児 熊本県鹿本郡六郷村大字上永野三一五番地、大正十一年七月九日出生、渡伯昭和五年二月七日、マニラ丸、在伯入植者妻 澄子 大正十四年四月三日出生

子息 勉(四八年)千恵子(四九年)美砂子 (五一年)真知子(五四年)

新家友一 愛媛県温泉都生石村字南吉田、明治二十八年一月七日
出生、渡伯大正十五年六月六日、ハワイ丸、在伯入植者
妻 ミツル 明治二十八年七月十二日出生

吉田 寛 三重県鈴鹿郡井田川村字和田、明治二十六年十月二十
日出生、渡伯昭和三年六月八日、ラプラタ丸、直来入植者
妻 よふ 明治三十年四月一日出生
子息 よし子（三〇年）伯生（三二年）

三次武雄 熊本県玉名郡小田村字下小田、明治三十年七月五日出
生、渡伯大正二年五月七日、第二雲海丸、在伯入植者
妻 モミ 明治三十四年二月二十日出生
子息 武信（二〇年）静雄（二七年）益雄（三二年）重子（三八
年）敏雄（四一年）千代子（四五年）

首藤新一 大分県大分郡判田村字下判田六五六、大正四年十一月
二十五日出生、渡伯昭和四年十月二十二日、ハワイ丸、在伯入植
者

妻 静江 大正三年九月八日出生
子息 治子（四〇年）節子（四三年）輝昭（五〇年）清美（五三
年）實父 静馬 明治二十一年十月二十五日出生
實母 キミ 明治二十八年十二月三日出生

カスカッタ区

遠藤常治 福島県安達郡荒井村字荒井、明治 二十八年十月十七

日出生、渡伯昭和五年一月一日、ブエノスアイレス丸、在伯入植者

子息 伊左衛門（一六年）同妻ミエ（二二年）安正（二三年）同妻 セイ（二四年） マサエ（三九年）

孫 伊左衛門子息 裕一郎（四三年）ミヨシ（四六年） スミ子（四九年）清志（五一年） 裕三郎（五三年）

安正子息 カツヨ（四四年） アキ子（四八年）武男（五〇年）孝次郎（五二年）

大名門政吉 愛媛県越智邸亀岡村字佐方、明治二十九年十一月二十六日出生、渡伯昭和八年十月二日、リオデジャネイロ丸、在伯入植者

妻 スミエ 明治三十七年二月二十五日出生

子息 政利（二四年） ヒロミ（三六年）操（三八年）實（四一年）登志夫（四四年）政利 妻 和子（二八年）

森中兵吉 広島県安芸郡江田島町、明治二十二年四月五日出生、渡伯大正十五年三月十八日、マニラ丸、在伯入植者

子息 桂（一九年）同妻 松枝（二七年）守（三〇年）幸子（三四年）

孫 秀重（五〇年）馥（フク）枝（五二年）三代栄（五四年）

青木大入 山形県米澤市割出町四五二市番地 明治二十二年三月二十一日出生、渡伯昭和九年五月三日、ラプラタ丸、在伯入植者妻 いし 明治二十五年四月二日出生

子息 博（二〇年）同妻 美智（二五年）富 男（二三三年）同妻

清香（二六年）繁（三〇年）

孫 博子息 義昭（四六年）紀世子（四九年） 瑞枝（五〇年）逸夫（五二年） 富男子息 孝美（五三年）

渡部喜助 愛媛県周桑郡丹原町字池田、明治二十三年三月二十三日出生、渡伯昭和二年 七月二十二日、若狭丸、在伯入植者

妻 きわ子 明治二十九年八月七日出生

子息 彌生（三四年）和夫（三六年） 善和（一三年）同妻 チエ（二二年）

孫 眞利夫（四〇年）シズエ（四一年）富恵（四四年）

田中里二 鹿児島県肝付郡高山町字野崎、大正五年二月二十五日出生、渡伯昭和七年六月六日、リオデジャネイロ丸、在伯入植者妻 翠 大正七年九月二十四日出生

子息 房子（四六年）小夜子（四八年）絹代（五〇年）譲二（五四年）

狩屋一男 岡山県吉備郡神在村字下原、大正五年一月一日出生、渡伯昭和五年四月十六日、ハワイ丸、在伯入植者

妻 定子 大正十三年六月十三日出生子息 セツエ（五〇年）高秋（五二年）

實母 リカ 明治二十八年九月二十八日出生

實弟 勝太郎（二一年）孫一（二一年）四一（二三三年）

浅野武雄 北海道十勝国河東郡士幌村字士幌 明治四十四年四月一日出生、渡伯昭和八年五月十四日、マテフ丸、直来入植者

妻 ヒロシ 明治四十四年一月一日出生

子息 勉（二九年）恵子（三六年）進（三八 年）ユウ子（四〇年）哲（四二年）静子（四四年） ヒデ子（四六年）明子（四八年）純子（五〇年）孝（五二年）

渡部 孝 兵庫県神戸市梅ヶ香町一丁目十四番地、明治三十八年五月十九日出生、渡伯 昭和四年六月三日、ラブラタ丸、バストス 直来入植者

妻 ミドリ 大正三年七月二日出生

子息 道子（三八年） 孝二（四二年）一誠（四四年）譲二（四六年）転（四八年）貴 光（五〇年）

東 豊 愛媛県喜多郡久米村大字阿蔵甲七五七番地、明治三十六年五月二十一日出生、 渡伯昭和二年六月十七日、ラブラタ丸、在伯入植者

妻 キヌ子 明治三十八年二月二十日出生

子息 幸男（二四年）同妻 美代子（二七年） 清（二六年）同妻 和子（三一年）誠（三 四年）葉子（三五年） 貞子（三七年） 勉（四三年）

孫 幸男子息 武幸（五〇年）恵子（五二年） 靖子（五三年）清子息 日出男（五三年）

山下正一 山口県大津郡三隅村字小島、明治三十年一月一日出生、渡伯大正三年五月十二日、帝国丸、在伯入植者

妻 タツ子 明治三十八年十二月十五日出生

子息 蘇生（二八年）満（三〇年）黎児（三二年） サカエ（三

三年）健児（三七年）富 雄（三九年）ミサエ（四二年） スミ
エ（四三年）勝治（四五年） ハツエ（四八年）光 政（四九年）

尚橋久雄 宮城県名取郡館腰村字本郷矢口五七番地、明治三十九
年三月四日出生、渡伯昭和五年二月七日、マニラ丸、在伯入植者
妻 ちよこ 明治三十九年三月十七日出生

子息 恵一（二七年）節子（三〇年）啓雄（三二年）茂雄（三四
年）久子（三六年）淑子（三八年）隆雄（四〇年）和子（四二年）
輝雄（四四年）芙美子（四七年）稔雄（四九年）

猪熊才八 香川県綾歌郡林田町字新開四〇二八番地、明治二十五
年十月二十七日出生、渡伯昭和五年三月三日、モンテビデオ丸、在
伯入植者

妻ニサ 明治三十一年九月三十日出生
子息 資昌（三八年）

古賀 實 福岡県三潞（ミヅマ）郡安武村字北古賀、明治四十五
年二月十一日出生、渡伯昭和七年十一月二十五日、マニラ丸、在
伯入植者妻 八重子 大正六年六月二日出生

子息 幸子（三八年） 暁（四〇年） 美恵子（四二年）学（四五
年）勉（四七年）美年子（四九年）馨（五三年）

實父 済 明治二十三年市月六日出生
實母 アサ 明治二十一年六月五日出生

万谷虎一 山口県玖珂郡神代村第一五三五番地、明治三十年五月十
八日出生、渡伯昭和五年六月四日、ブエノスアイレス丸、在伯入

植者

妻 豊子 明治三十九年二月十一日出生

子息 真佐子（三三年）進（三七年）輝子（三九年）節子（四一年）光江（四三年）孝子（四七年）昭（四八年）

森田金蔵 福岡県糸島郡怡土村大字末永、明治四〇年三月二十三日出生、渡伯昭和三年七月六日、博多丸、在伯入植者

妻 朝野 明治四十三年一月十日出生

子息 春子（三六年）忠志（三八年）良作（四二年）優穂（四五年）捷子（四七年）照造（四九年）

平井有利 愛媛県喜多郡大津町字阿蔵、明治四十年十月二十四日出生、渡伯昭和五年六月八日、ブエノスアイレス丸、在伯入植者
妻 トキワ 明治四十三年六月二十三日出生

子息 晃（三三年）ヨシ子（三六年）久子（四〇年）正男（四四年）入江子（四七年）

上村大八郎 熊本県鹿本郡山本村字清水、大正三年十月十七日出生、渡伯昭和四年一月三日、サントス丸、在伯入植者

妻 綾子 大正十五年十月二十七日出生

子息 信子（四三年）世一（四五年）満知子（四九年）美知子（五一年）博（五三年）

及川一郎 岩手県江刺郡藤里村字浅井、明治二十七年一月二十四月出生、渡伯昭和八年三月十九日、アリゾナ丸、直来入植者

妻 マサノ 明治三十一年四月十五日出生
子息 リウ（三五年） ミツ（三八年） 八朗（四二年）

山村吉右衛門 東京府佳原（エバラ）都大井町五八五一 明治三十年一月十日出生、渡伯昭和六年十二月十六日、リオデジャネイロ丸、在伯入植者

子息 清一（二四年）同妻 雅子（二五年） 昇（二七年）同妻
テル子（三一年）幸子（三五年）茂子（三七年）健（三九年）
孫 恒（四九年）武治（五一年）勇夫（五二年）

垣本左武郎 奈良県吉野郡小川村字小栗栖、明治三十七年十月十八日生、渡伯昭和九年五月二十五日、アリゾナ丸、在伯入植者
妻 きよの 明治三十九年九月五日出生

子息 彌平（三四年）高士（三六年）憲保（三八年）彌右衛門
（四〇年）博子（四三年）寿美（四四年）正枝（四六年）

石田已一 石川県石川都一木村字村井、明治三十年四月二日出生、
渡伯昭和八年五月三十日、マニラ丸、在伯入植者

妻 美和子 明治三十九年二月七日出生
子息 明（三三年）博英（三八年）和子（四三年）道子（四六年）

興水利国 静岡県田方郡三島市六反田、明治三十二年一月二十四日出生、渡伯大正十三年八月二十日、河内丸、在伯入植者
妻 みよ 明治三十八年一月十五日出生

子息 輝雄（三〇年）潔（三二年）敏子（三七年）芳子（三

九年）満（四二年） 豊子（四五年）

山中權吉 北海道常呂郡訓子府村字タンネップ市街本通東十番地、明治十三年五月七日出生、渡伯大正十三年三月七日、パナマ丸、在伯入植者

子息 三郎（一九〇九年）同妻サイ（一九一〇年）

孫 富子（三六年）久恵（三七七年）安彦（三九年）幸夫（四〇年）圭三（四三年）興治（四五年）みどり（四四年）泉（四八年） 倫子（五〇年）

小野義種 宮崎県都城市上長飯町五七七一番地、大正八年五月二十一日出生、渡伯昭和十年三月二十五日、アリゾナ丸、在伯入植者

妻 静女 大正八年八月二十一日出生

子息 佐安子（四六年）義雄（四七年）義治（四九年）利志子（五一年）真理江（五三年）

實母 ノブ 明治三十三年三月二十四日出生

實弟 弘美（二七年）好子（三四四年）多美子（三七七年）幸子（四〇年）文子（四二年）

味野光夫 岡山県倉敷市粒江、明治四十二年 五月一日出生、渡伯昭和二年十二月十三日、ラプラタ丸、在伯入植者

妻 艶子 大正六年一月十二日出生

子息 稔（三八年）俊子（三九年）政恵（四〇年）富子（四一年）八重子（四五年）功（四七年）三郎（四九年）四郎（五〇年）久（五四年）

富山 太 岡山県御津邦字甘東村字宇甘、明治三十四年一月一日出生、渡伯昭和七年十一月二十七日、マニラ丸、在伯入植者妻 ヨシノ 明治四十三年一月十八日出生

子息 栄（三七年）博子（三八年）豪（四〇年）綾子（四二年）高志（四四年）典康（五〇年）武男（五二年）

實母 とよ 明治十三年五月十八日出生

上山明彦 和歌山県有田那鳥屋城村字中野二三四番地、明治三十四年六月八日出生、渡伯昭和四年六月三十日、サントス丸、直来入植者

妻 愛子 明治四十四年二月十五日出生

子息 明（三〇年）敏美（三一年）治（三二年）喜四郎（三三年）紀美代（五二年）

青山数男 岡山県勝田郡勝加茂村字西中三四五番地、明治二十五年三月二十二日出生、渡伯昭和四年九月九日、モンテビデオ丸、在伯入植者

妻 加禰代（ネヨ）明治二十七年二月二十五日出生

子息 仁士（一九年）同妻 貴志子（二五年）幸夫（二五年）同妻 峯子（三二年）

孫 仁士子息 みどり（四七年）静香（四九年）秀子（五二年）香（五四年）幸夫子息 孝（五二年）

義弟 中島幸太郎（明治二十九年）同妻 邦子（明治三十二年）同子息 猛（二八年）敏（三二年）

中岡隼人 広島県豊田郡沼田東村大字釜山字 生田、明治三十八年十二月一日出生、渡伯 大正十二年二月二日、シカゴ丸、在伯入植者

妻 松枝 明治四十二年一月二十三日出生

子息 等（三一年）幸枝（三三年）了（三八 年）圭（四三年）常子（四五年）栄（四九年）満（五一年）

眞野四郎 岡山県都窪郡妹尾町大字箕島、明治三十五年十二月十日出生、渡伯大正十五年六月二十八日、ラプラタ丸、在伯入植者
妻 千里 明治四十年二月十三日出生

子息 謙一郎（二九年）邦子（三三年）康雄（三五年）博志（三九年）信子（四三年）通夫（四五年）俊子（四八年）秀子（五〇年）

赤澤満徳 熊本県宇土郡松合町八百七番地、 明治二十年一月六日出生、渡伯昭和八年一月十一日、アフリカ丸、在伯入植者

妻 サカ 明治二十五年四月十八日出生

子息 多喜彦（二五年）多賀雄（二八年）

實娘 山川寿子 大正九年一月三日出生

同子息 敬久（四三年）千恵子（四五年）

渋江秀一 岡山県倉敷市倉敷新田三〇三八番地、明治三十六年七月三十日出生、渡伯大正十五年十二月十九日、ラプラタ丸、在伯入植者

妻 千代野 明治三十九年二月十六日出生

子息 隆弘（三七年）智恵子（三九年）博史（四二年）

味野謹子 岡山県倉敷市黒石四九六番地、明治二十一年七月二日出生、渡伯昭和元年十二月十九日、ラプラタ丸、在伯入植者

妻 カノエ 明治二十六年十二月二十日出生

子息 平吉（一四年）同妻 和子（一八年） 敬（一七年）同妻

君子（二四年）成男（二一年）同妻 節子（三二年）靖（三二年）

加典子（三四年）

孫 平吉子息 芳郎（四二年）準一（四四年） 早苗（四六年）テ

ル子（四八年）幸一（四九年）アヤ子（五一年）日出子（五三年）

敬子息 巴（四六年）絹江（四九年）美智男（五二年）美子（五

四年） 成男子息 スミ子（五三年）

上村六郎 熊本県鹿本郡山本村字清水、明治四十五年三月二十四日出生、渡伯昭和五年一月三日、サントス丸、在伯入植者

妻 多寿恵 大正五年八月十二日出生

子息 初子（三八年）常子（三九年）菊江（四一年）篤（四二年）

智恵子（四四年）俊次（四七年）春恵（四六年）円美（四九年）

正則（五〇年）節子（五三年）

實父 九五郎 明治五年五月二十三日出生

實母ニキ 明治九年六月十二日出生

グローリア第二区

石田光助 山口県山口市吉敷区五番地、明治十七年三月一日出生、渡伯昭和四年十二月十四日、サントス丸

夫人 フサ 明治十三年十月二十四日出生

養子 石田良一 同県美禰郡眞長田村字武士河内、大正二年十二月六日出生 妻 幸子 大正八年七月十二日出生

孫 良昭(十九歳)初枝(十七歳) マリ子(十五歳) 君枝(十三歳) 光枝(十歳) 清人(六歳) 昭仁(四歳) 喜代子(二歳)

都築 實 愛媛県西宇和郡日土村字新堂 明治二十一年九月二十五日出生、渡伯昭和五年二月七日、マニラ丸、直来入植者

妻 スガヲ 明治二十七年一月九日出生

子息 佐津子(二四年) 美代子(三〇年) 多利子(三三年) 寿昭(三八年)

森(モリ)亀重郎 (カメジユウロウ)長崎県合波郡平島村宮崎町、明治十二年一月十六日出生、渡伯昭和四年十一月三日、河内丸妻 芳江 明治二十五年七月一日出生

子息 啓(三十九歳) 八代子(三十二歳)

伊勢島省一山口県大津郡宇津賀村字津黄、 明治十五年十一月廿日出生、渡伯大正十五年七月三十一日、若狭丸

妻 いね 明治十九年八月二十五日出生

子息 (戸主)義忠 明治三十六年九月十五日出生、妻一美 大正三年一月十七日出生

孫 寿一(廿一歳) ヒトミ(十九歳) 光春(十七歳) ハルミ(十四歳) シズエ(十二歳) 正雄(九歳) スミエ(七歳) 忠(四歳) 信 夫(二歳)

村上 章 (ムラカミ、アキヲ)岡山県倉敷市粒浦、大正六年一月

八日出生、渡伯昭和五年三月三日、モンテビデオ丸、バストス直来者妻 とし子 大正八年八月二十二日出生

子息 輝子(十一歳) 澄弘(十歳) 富貴子(九歳) 富弘(七歳) 裕子(六歳) 寿満子(五歳)

萩原宅治 岡山県倉敷市八軒屋、明治四十一年十一月二十四日生、渡伯昭和五年一月廿六日、若狭丸、バストス直来者

妻 はるえ 明治四十四年三月三日出生

子息 房枝(三五年) 博(三七年) 昇(三九年) 勝(四一年) 愛子(四四年) 義雄(四九年) みえ子(五一年)

井上繁雄 福岡県粕屋郡久原村字下久原、大正三年二月二十日出生、渡伯昭和四年六月七日、ラプラタ丸、バストス直来者

妻 敏子 大正五年七月三十日出生

子息 紀代子(四〇年) 由紀子(四二年) 博 (四三年) 健二(四五年) 明(四七年) 孝子(四九年) 明美(五一年) 寿美子(五三年) 功(四六年)

井上源次郎 福岡県粕屋(カスヤ)郡久原村字下久原 明治三十四年十二月十七日出生、渡伯昭和四年六月七日、ラプラタ丸、バストス直来

妻 サイ 明治四十一年十二月十六日出生

子息 誠(三五年) 恵美子(三八年) 博計(四一年) 政則(四三年) 功(四六年)

溝部 優 山口県大津郡宇津賀村字津黄、明治四十二年四月八日出生、渡伯昭和二年十一月十日、ハワイ丸、在伯入植者

妻 静子 大正三年十二月二十五日出生

子息 貞子(三五年)政子(三九年)美恵子 (四二年)正二(四四年) ルイス(四六年) 綾子(四八年)

三宅亀一(カメイチ)岡山県浅口都金光町、明治四十二年十月二十日出生、渡伯昭和二年五月廿日 若狭丸、在伯入植者

妻 末恵 大正三年三月二日出生

子息 喜代美(三八年)圭子(四一年) かおる(四三年)秀子(四六年)靖子(四八年) 輝男(五〇年)等(五二年)

萩原友四郎 岡山県倉敷市八軒屋、明治三十五年十二月一日出生、渡伯昭和五年一月廿六日、若狭丸、バストス直来者

妻 十代香 明治三十八年一月一日出生

子息 繁(三三年)泰子(三五年)綾子(三六年)潔(キヨシ)(三八年)

三宅利喜松 岡山県倉敷市粒浦、明治二十六年三月十二日出生、渡伯昭和五年三月三日、モンテビデオ丸、バストス直来

妻 寿和野 明治三十三年二月十一日出生

子息 一男(二〇年)同妻美代子(二四年) 楨市(二四年)澄子(二八年)既婚、龍男 (三二年)芳子(三四年)節子(三八年) 栄(四〇年)

孫 幸子(四七年)明(四九年) マリ子(五一年)正男(五三年)

吉浦秀次郎 福岡県糸島郡可也村大字松隈、明治二十五年十二月五日出生、渡伯昭和四年十一月十三日、ラブラタ丸、直来者

實母 カネ 明治二年一月十日出生

子息 悟(二二年)同妻 美代子(三〇年) 徹朗(二五年)同妻

多利子(三三年)恒喜(二八年)伯子(三四年)和子(三六年)

絹代(三八年)守(四四年)雅人(四五年)

孫 智(五三年)

岡森嘉平 三重県阿山郡山田村字富岡、明治二十九年八月二十日出生、渡伯昭和七年六月二日、リオデジャネイロ丸、直来入植者妻 とらえ 明治三十三年十月二十一日出生

子息 嘉男(二五年)すや子(二九年)洋一 (三二年)美智子(三四年)宏(三八年) 浩二(四二年)克己(四二年)長男嘉男妻 英子(三三年)

上田敏夫 三重県阿山郡山田村字眞泥、明治四十五年四月十四日出生、渡伯昭和五年五月一日、ラブラタ丸、バストス直来入植者妻 マサ 大正六年六月十五日出生

實父 義七 明治二十一年六月五日出生

寮母 くまえ 明治二十四年六月六日出生

子息 晶代(四四年)稔(五二年)妹 トミコ (三四年)

吉田興三吉 石川県石川郡吉野谷村字吉野、 明治三十四年五月二十日出生、渡伯大正十三年九月一日、在伯入植者、マニラ丸妻 きみ江 明治四十二年十二月十三日出生

子息 功（三二年） 幸子（三〇年） 好子（三三年） 勳（三五年）

高柳寅雄 北海道雨龍郡納内村字納内、 大正五年五月五日出生、渡伯昭和五年五月三十日、神奈川丸、バストス直来者

妻 正枝 大正十四年九月一日出生

子息 清治（四七年） 志力（四八年） 広正（五〇年） 誠（五一年）
国治（五四年）

風間啓蔵 山梨県東八代郡錦村字金ヶ原、明治三十八年九月十三日出生、渡伯昭和四年 八月十三日、マニラ丸、在伯入植者

妻 定乃 明治四十年四月十二日出生

子息 貞子（三三年） 正美（三六年） 修（三 九年） 美佐子（四一年） 智佐子（四四年） 重男（四七年） 国男（五〇年）

上ヶ島惣太郎 北海道紋別（モンベツ）郡西興部村字中藤興部、大正二年二月二十日出生、渡伯昭和八年四月十五日、アラビア丸、直来入植者

妻 コマ 大正三年五月六日出生

子息 初子（三三年） 菊江（三五年） 一男（三六年） 光江（三八年） 静江（四二年） 實（四四年） パウロ（四六年） 幸子（四八年） 實母 志やみ 明治廿年九月廿九日出生

上ヶ島照吉 北海道紋別郡西興部村字中藻興部、大正八年六月二十九日出生、渡伯昭和八年四月十五日、アラビア丸、直来入植者妻 セツ子 昭和二年九月二十六日出生
子息 和恵(四六年) 則子(四九年) 万里夫 (五一年) 浄児(ジヨウジ)(五三年)

金川 悟 広島県神石郡油木町油木、大正三年十月二十八日出生、渡伯昭和二年十二月十四日、ラプラタ丸、在伯入植、契約農妻 さき 大正四年十月二十日出生
子息 照子(三六年) 美津枝(三九年) 悟一 (四一年) 一高(四四年) 満明(四七年) 敏子(四九年) 澄枝(五〇年) 八重香(五二年)

竹原 恵 広島県双三郡和田村大字向江田、 明治四十年九月二日出生、渡伯昭和六年三月十九日、ラプラタ丸、在伯入植者妻 ヨシコ 明治四十年十二月二日出生
子息 孝士(三二年) ミキエ(三五年) 年子 (三七年) 稔(三九年) 清(四一年) ミエコ (四六年)

山内ミツ 北海道桑戸郡裏白村字裏臼内、明治十七年十二月二十日出生、渡伯昭和七年七月二日、アフリカ丸、在伯入植者

管井国三郎 山形県西村山郡宮宿町大字和合 明治三十年十二月十五日出生、渡伯大正九年三月三十一日、土佐丸、在伯入植者妻 みつ 明治三十三年一月二十七日出生

子息 集(二十一年)同妻 幸子(三〇年) ラウラ(二六年) ローザ(二八年) 〆男(シメヲ)(三二年) 邦子(三四年) 文子(三七年) 覚(サトル) (三九年) 裕喜(四四年)

草野岩吉 鹿児島県河鍋郡西南方村字草野、 明治三十年六月一日出生、渡伯昭和八年一月十一日、ラプラタ丸、直来入植者妻 キエ 明治三十七年二月二十七日出生

子息 隆(二六年)同妻 ラウラ (二六年) 明(二七年) 弘子(三二年) 順一(三五年) 律子(三七年) 幸子(四五年)

溪(タニ)立雄(タツヲ) 山口県徳山市字大島、明治四十年三月三十日出生、渡伯昭和五年六月二十四日、博多丸、バストス直来者

妻 砂子 明治四十年一月五日出生

子息 徹(三二年) 多磨子(三四年) 寿栄 (三七年)美南子(三八年) 照代(四一年) 八重子(四二年) 松栄(四三年)「シユン」(四五年)

長瀬春吉 岐阜県加茂部東白川村出身、明治十五年二月十九日出生、渡伯大正十三年五月十五日、メキシコ丸、在伯入植者妻 きむ 明治十三年四月六日出生

子息 一市(一九〇九年)同妻 静子(一三年)

孫 好郎(三六年) 春代(三九年) 昭三(四一年) 則男(四二年)

正男（四三年） 秀男（四八年） 小夜子（五一年）

茂庭一郎 岩手県江刺郡愛宕村字田谷、明治十八年六月二十二日出生、渡伯大正十一年五月二十七日、神奈川丸、在伯入植者

妻 シウ 明治二十二年十月二十日出生

子息 憲亮（一九一〇年） 同妻 イス（一一年）

孫 ケイ子（三四年） 剛（三六年） 力（三八年） ツヤ（四〇年） 勝（四二年） 猛（四四年） ダルシ（四六年） カツエ（四八年） イク子（五〇年） ジュウリオ（五二年） 愛子（五四年）

佐竹万四郎 北海道紋別郡西興部村字上藻部 明治三十年八月二十二日出生、渡伯昭和八年四月十七日、リオデジャネイロ丸、バストス直来者

妻 さわえ 明治三七年十月二十九日出生

子息 マサ子（三一年） キミ子（三四年） 美代子（三七年） 正見（四〇年）

新津牛丸 北海道網走郡女満別村、明治十四年六月二十四日出生、渡伯昭和五年四月三十日、ラプラタ丸、在伯入植者妻 りわ 明治二十六年十一月十九日出生

子息 聖子（三一年） 普（三三年） みつ子（三五年） なつ子（三七年）

新津夏好 北海道網走郡女満別村、明治四十三年八月一日出生、渡伯昭和五年四月三十日、ラプラタ丸、在伯入植者妻 そのえ 大正八年一月十八日出生

子息 弘和（四三年）明子（四三年）友子（四七年）和雄（四八年）和平（五一年）

中浦三司 愛媛県東宇和郡俵津村、大正十年三月十四日出生、渡伯昭和九年六月二日、ブエノスアイレス丸、在伯入植者

妻 富子 大正十四年八月五日出生

子息 眞理男（四七年）悦子（四九年）雅則（五〇年）則子（五二年）

前田甚吉 三重県志摩郡磯部村大字下之郷、明治二十六年四月八日出生、渡伯昭和五年七月一日、サントス丸、バストス直来者
妻 フユ 明治三十九年一月八日出生

子息 義家（三四年）勇（三六年）日出夫（四二年）節男（四四年）末男（四五年）幸吉（四八年）政子（二八年）

従兄 前田栄吉 大正十五年二月十三日出生

同妻 絹枝 大正十三年四月二十六日出生

同子息 弘子（四二年）初男（四五年）パウロ（四八年）マリア（五〇年）ガルセース（五三年）

同 米澤勇（三五年）米澤マリ子（三八年）

大貫留次郎 栃木県那須郡境村大字小原澤 明治二十二年一月十一日出生、渡伯大正十四年二月十八日、河内丸、在伯入植者

妻 トメ 明治二十九年六月十四日出生

子息 盛義（二二年）同妻 京子（二七年）三吉（二五年）同妻 さく（二九年）昭治（二八年）好美（三〇年）為義（三三年）

照子（三六年）栄達（一五年）同妻 幸子

ウニオン第一区

隠岐重彌 鳥取県西伯郡境町、明治二十八年八月二十日出生、渡伯大正十三年八月二日、カナダ丸、在伯入植者

妻 マサヲ 明治三十三年八月七日出生

子息 重義（二二年）和子（三〇年）種次（三三年）進次（三四年）彌生（三五年）健二（三六年）早苗（三八年）

大野英雄 岐阜県武儀郡富野村字小野、明治四十二年九月十二日出生、渡伯昭和三年三月二十一日、モンチビイデオ丸、在伯入植妻 初美 大正八年十一月二十八日出生

實父 清一郎 明治十四年八月二十日出生

實母 まつの 明治二十四年九月二十六日生

子息 悟朗（三六年）寿子（三九年）貞子（四一年）愛子（四七年）弘美（四九年）恵美（五二年）

松浦勝芳 愛媛県上浮穴郡弘形村大字上黒岩五四番地、明治二十年四月九日出生、渡伯四十五年四月二十九日、厳島丸、在伯入植妻 静代 明治二十六年三月十日出生

子息 茂（一五年）同妻 節江（二十年）要（二十一年）

孫 祥恵（四一年）清（四三年）實（四五年） 寿美恵（四七年）正（四九年）好恵（五一年）和恵（五三年）

戸川 守 岡山県赤磐郡仁堀村大字平山、明治二十二年十二月五日出生、渡伯昭和三年三月二十一日、モンテヴィデオ丸、在伯者妻 喜代野 明治二十五年六月十日出生

子息 卓一（一五年）同妻 龍子（二二年） 至誠（二九年）

孫 久子（四二年）悦子（四四年）禮子（四八年）貞夫（五〇年）幸男（五二年）

木口正功 福島県西白河郡西郷村大字米字米村、大正二年二月六日出生、渡伯昭和三年 三月二十一日、モンテヴィデオ丸、在伯者

妻 ふみ 大正五年九月二十三日出生

子息 法子（三六年）明則（三八年）常治（四一年）あや子（四四年）妙子（四七年）誠（四九年）

佐藤一男 広島県豊田郡船木村大字茅田字清 大正二年十二月一日出生、渡伯昭和五年四月十六日、ハワイ丸、在伯入植者

妻 雅子 大正十二年十二月三日出生

實父 環 明治二十一年九月一日出生

實母 サツノ 明治二十五年八月十日出生

子息 新一（四二年）憲二（四三年）千鶴子（四五年） キミ子（四七年） ミサ子（四八年） 静子（四九年） 孝行（五〇年） イツ子（五二年）

藪田紀元 和歌山県有田郡御霊村大字東丹生圖、昭和十一年二月十一日出生、渡伯昭和五年六月二十五日、博多丸、直来入植者
實母 房枝 明治四十一年十二月一日出生
弟妹 静子（三一年）道子（三二年）千津（三三年）文子（三八年）修（四一年）博（四五年）

谷中唯支 北海道小樽市奥澤町三丁目、大正五年一月六日出生、
渡伯昭和五年十二月十一日、サントス丸、バストス直来者
妻 雪 大正十年三月二十九日出生

子息 文雄（四三年）治男（四五年）千恵子（四七年）陸男（五〇年）清子（五一年）

實父 清治郎 明治十六年三月十九日出生

三鼓梅夫 岡山県都窪（ツクボ）郡清音村字輕部、大正五年七月二日出生、渡伯昭和四年四月十五日、河内丸、在伯入植者

妻 万寿子 大正五年二月五日出生

子息 頼（四〇年）英二（四二年）昭公（四四年）徳治（四六年）
暁美（四八年）須恵（五〇年）万利夫（五二年）

藤川一秀 長崎県北高来郡諫早町大字下本明目代名二二三四ノ一
明治四十五年一月四日出生、渡伯昭和二年九月二日、マニラ丸
在伯入植者

妻 初校 大正七年十月八日出生

子息 洋子（四〇年）準一（四三年）朋子（四六年）妙子（四八年）珠美（五一年）邦明（五四年）

實母 ミサ 明治十九年十二月二十六日出生

向井 勘 長崎県北高来郡諫早町大字下本明目代名二〇七、大正四年四月二十日出生、渡伯昭和二年九月二日、マニラ丸、在伯者妻 聡子 大正八年一月十三日出生

子息 晃（四五年）栄子（四六年）良一（四九年）朝子（五三年）秀教（五一年）

磯谷喜右衛門 山口県豊浦郡川棚村字小野一五三五番地、明治二十五年七月二十四日出生、渡伯大正十五年九月十一日、マニラ丸、在伯入植者

妻 ツキノ 明治三十五年七月十七日出生

孫 静江（四〇年）進（四一年）高子（四四年）

小倉一三男 岡山県吉備郡阿曾村字西阿曾 明治三十一年八月二十六日出生、渡伯昭和五年二月七日、マニラ丸、在伯入植者妻 つるえ 明治三十六年六月十八日出生

實母 きわ 明治十一年二月一日出生

子息 毅（二三年）保（三一年）豊（三三年）主計（三五年）洋子（三七年）優留（四〇年）勇（四三年）毅妻 フミ子（二九年）

小倉杉夫 岡山県吉備郡阿曾相字西阿曾、大正十四年十月二十五日出生、渡伯昭和五年二月七日、マニラ丸、在伯入植者

妻 くになえ 昭和三年七月十日出生

子息 恵子（五四年）

霜出静二 鹿児島県川邊郡知覧村西元区五二八番地、明治二十二年七月十四日出生、渡伯昭和四年七月三十一日、若狭丸、バストス直来者妻 トメ 明治三十一年十一月十八日出生

子息 猛（一七年）同妻 敏子（二七年）守（二三三年）同妻 絹枝（二四年）絹子（三二年）吉（三六年）牧（三八年）広（四三年）

孫 静雄（四八年）義雄（四八年）文子（五〇年）

小倉京市 岡山県吉備郡阿曾村字西阿曾、明治三十三年十一月三十日出生、渡伯昭和五年二月七日、マニラ丸、在伯入植者

妻 照 明治三十七年六月二十六日出生

子息 恵美子（四五年）

樋口敏郎 広島県佐伯郡五日市町字揚二、一七四、明治三十三年四月十日出生、渡伯昭和三年九月二十三日、モンテビデオ丸、在伯入植者妻 ヒサヨ 明治四十一年十月十五日出生

子息 司郎（二七年）寿郎（三〇年）広海（三四年）眞澄（三六年）吉企（三九年）賢三（四一年）律子（四七年）禮子（五〇年）甥 悟六（四二年）

吉田重太郎 岩手県岩手郡盛岡市中野町、明治三十五年三月十五日出生、渡伯昭和五年八月三十一日、モンテビデオ丸、直来者

妻 チヨ 明治四十一年三月五日出生

子息 正治（三三年）義松（三四年）共（三七年）朝（三七年）重
（三九年）美佐子（四一年）国雄（四四年）キリエ（四八年）

小谷 讓 兵庫県美方都照来村字丹土、昭和

三年十二月二十五日出生、渡伯昭和二年十月三日、モンテビデ
オ丸、在伯入植者

妻 艶子 昭和五年十月二十日出生

實母 いま 明治二十六年五月十六日出生

實妹 敏子（三三年）

武山貞美 宮城県塩釜市佐捕町五二番地、大正二年十一月二十六
日出生、渡伯昭和七年二月八日、ラブラタ丸、在伯入植者

妻 實枝 大正八年七月二十五日出生

子息 テルミ（三六年）貞次（三七年） トモ子（三八年） サト

子（三九年） セイ子（四一年） マス子（四四年）貞義（四五年）

ヨシ子（四七年） ヒサ子（四八年） ヤス子（四九年）貞利

（五三年） 弘子（三九年） アサ子（四一年）安次郎（四二年）洋

子（四四年）光利（四六年）

實母 アサノ 明治十九年三月一日出生

ウニオン第二区

池田佐次郎 佐賀県西松浦郡大坪村字古賀、明治三十六年六月七日出生、渡伯昭和五年四月一日、備後丸、在伯入植者

妻 ツネ 明治四十三年八月二十八日出生

子息 ツル子（三二年）謙司（三四年）一三（三六年）松子（三八年）達（四〇年）梅乃（四三年）

實母 ワイ 明治十七年一月三日出生

岩橋茂登 佐賀県西松浦郡伊万里町脇田、大正十二年十一月十五日出生、渡伯昭和五年四月一日、備後丸、在伯入植者

妻 光枝 大正十四年十一月二十三日出生

子息 茂幸（四八年）フク子（五〇年）清人（五二年）

實父 茂太郎 明治二十六年十一月二十七日出生

實妹 悦子（三三年）

島崎勝己 熊本県下益城郡豊福村大字両仲間 明治三十五年十二月二十五日出生、渡伯昭和五年四月一日、備後丸、在伯入植者

妻 美喜江 大正六年二月九日出生

子息 豊（三四年）豊志（三六年）正三（三八年）愛子（四一年）

テル子（四三年）正 利（四六年）富雄（四九年）幹雄（五一年）ユキ子（五四年）

吉本 厚 宮崎県北諸県郡志和池村字下水流 明治三十七年三月三十一日出生、渡伯昭和十二年八月十一日、ラプラタ丸、在伯入植

妻 ウメ 大正元年十月二十日出生

子息 信雄（三三年）弘子（三五年）幸子（四一年）康子（四六年）保夫（四九年）豪男（五一年）

藪内伊一奈良県奈良市都跡六條町一一四七 明治二十七年十一月二十五日出生、渡伯昭和十六年一月十五日、モンテビデオ丸、バストス直来者

妻 茂野 明治三十四年一月二十五日出生

子息 武夫（二六年）弘（二八年）繁雄（三四年）勝（三六年）喜美子（四四年）忠信（四五年）

畑中留太郎 青森県下北郡東通村大字砂子又 明治三十六年七月二十三日出生、渡伯昭和七年二月八日、ラプラタ丸、バストス直来

妻 種子 明治四十一年八月四日出生

子息 俊二（三八年）

山口喜代次 佐賀県西松浦郡大山村字山谷 明治四十年十月二十三日出生、渡伯昭和三年八月十六日、マニラ丸、在伯入植者
妻 マキ 明治四十四年二月七日出生

子息 和男（三三年）守男（三六年）静子（三八年）勝之（四一年）晃（四四年）

鈴木信夫 北海道札幌市北十二條西二丁目、大正三年三月七日出生、渡伯昭和七年二月八日、ラプラタ丸、バストス直来者

妻 昌子 大正十年三月十日出生

子息 智恵(四一年)雅恵(四三年)恵美子(四四年)邦彦(四六年)和浩(四七年) ひろみ(四九年)

實母 ミサ 明治二十二年四月十九日出生

實弟 哲夫(二七年)

實妹 セイ子(三〇年)

西川統平 静岡県小笠郡上内田村大字板澤二三五番地一、明治三十九年一月十二日出生、 渡伯昭和三年十二月六日、ラプラタ丸、在伯入植者

子息 幸吉(三八年) トミエ(四一年) クニエ(四四年)利勝(四七年)美代子(四九年)

實父 元吉 明治十六年三月十三日出生

實母 ふく 明治二十一年一月十日出生

實弟 芳夫(二七年)

實弟 金作 大正五年十一月二十九日出生

同妻 ひで 大正九年十一月十五日出生

子息 大作(四一年)洋輔(四三年)節子(四六年)泰彦(五一年)

栗田實竿(ミサオ) 静岡県小笠郡河城村澤水加、明治四十四年三月十九日出生、渡伯昭和五年二月七日、マニラ丸、在伯入植者
妻 チエ大正六年六月二十六日出生

子息 柳子(三八年)泰(四一年)修二(四四年)なを子(四六年)正志(四七年)

實母 さき 明治二十五年一月二十一日出生

三宅初治 サンパウロ州ノロエステ線リンス駅ウニオン植民地、
一九一九年十二月十五日出生、在伯入植者

妻 みよ子一九二五年一月二十四日出生

子息 一男(五〇年)二男(五〇年)秋子(五一年) マルシア(五
三年) マリーナ(五三年)

實弟 敬(三〇年)功(三八年)

實妹ミス子(三二年)良子(三六年)

實父 鉄松 香川県小豆郡福田村、明治三十四年一月二十九日出
生、渡伯大正三年五月十日、帝国丸

實母 マキ 明治三十三年一月十三日出生

京野万治郎 山口県大津郡向津具村字平坊、明治四十四年九月十
日出生、渡伯大正十五年七月三十一日、若狭丸、在伯入植者

妻 シヅ 大正四年七月三十日出生

子息 吉男(三五年)キヌエ(三七年)重子(三九年)安治(四
一年)敬三(四三年) 勝利(四五年)しつゑ (四七年)辰雄(四
九年)夏枝(五二年)

實父 辰五郎 明治十年五月二十七日出生

實母 キヌ 明治十九年四月三日出生

木場仙次郎 鹿児島県川内市勝目町五八二一番地、明治三十二年
十一月二日出生、渡伯昭和六年二月二十三日、ハワイ丸、バスト
ス直来者妻 タケ 明治三十五年二月一日出生

子息 己義（二三年）三次（二九年）

三宅久吉 香川県小豆郡福田村大字福田、明治二十八年十二月十四日出生、渡伯昭和九年十二月一日、サントス丸、直来者

妻 春野 明治三十五年二月二十七日出生

子息 熙（ヒロシ）（二五年）同妻 梅子（二八年）澄子（三五年）
聡（四四年）

山口輝治 鹿児島県出水郡高尾野町下高尾野内野々上、大正八年七月二十九日出生、渡伯昭和八年六月二十九日、ラプラタ丸、在伯入植者妻 登美子 大正十二年三月十六日出生

子息 良子（四四年）房子（四六年）義治（四八年）徳治（五一年）紀夫（五三年）

新井深美 長野県更級郡塩崎村、明治三十八年五月二日出生、渡伯昭和九年四月二十九日、ハワイ丸、バストス直来者

妻 アサ子 明治三十八年十一月三十日出生

子息 敏雄（三五年）英夫（四三年）

森王旨義 山口県吉敷郡秋穂町天神町、大正十年二月十二日出生、渡伯昭和八年七月二十七日、アリゾナ丸、在伯入植者

妻 信子 昭和二年一月二日出生

子息 宗光（四五年）崇允（四七年）陸（四九年）信義（五一年）敏子（五三年）

實父 棟直 明治二十七年七月十五日出生
實母 キヨ 明治二十八年二月一日出生

板垣梯市 山口県阿武郡徳佐村一〇八三番屋敷、大正七年七月十三日出生、渡伯大正九年九月四日、河内丸、在伯入植者

妻 光枝 大正十一年七月四日出生

子息 祐恵(四四年)八重子(四六年)千恵子(四七年)隆一(四八年)健一(五〇年) 良江(五二年)

三鼓一 岡山県都窪郡清音村字下軽部、明治四十四年十一月十日出生、渡伯昭和八年五月二十四日、モンテビデオ丸、直来入植者
妻 樂美 大正五年二月二十五日出生
子息 慶子(四二年)延之(四六年)久之(五〇年)

板垣達志 山口県阿武郡徳佐村一〇八三番屋敷、大正三年十一月十五日出生、渡伯大正九年九月四日、河内丸、在伯入植者
妻 トシ子 大正八年四月一日出生

子息 清成(四〇年)律夫(四一年)春恵(四三年)節子(四五年)紀美子(四六年)卓夫(四七年)清子(四九年)千登恵(五〇年)、實母 ハル 明治十四年二月一日出生

原田甚五郎 広島県広島市三笹町、明治十五年十二月二日出生、渡伯大正十四年十一月九日、カナダ丸、在伯入植者
妻 サグ 明治二十五年三月二十二日出生

本田 好 福島県安達郡新殿村、明治三十二年二月二十二日出生、

渡伯大正二年三月四日、若狭丸、在伯入植者

妻 正子 大正元年十一月二日出生

子息 満（三一年）昭（三二年）直（三四年）剛（三八年）潔（四〇年）房子（四一年）仁（四三年）和恵（四四年）純（四七年）
紀美子（五〇年）

溝越平八郎 佐賀県小城郡牛津町友田、明治三十八年十月一日出生、渡伯昭和五年九月二日、河内丸、在伯入植者

妻 文枝大正二年七月十四日出生

子息 雄一（三二年）美喜子（三八年）登美子（四四年）昇（五三年）

中原寅一 山口県大島郡和田村字泊、明治三十五年一月十八日出生、渡伯昭和七年七月四日、モンテビデオ丸、バストス直来者
妻 冬子 明治四十年十一月二十八日出生

子息 克巳（三三年）義充（三六年）清司（三八年）和子（三九年）豊（四七年）

岩原鈴市 岐阜県武儀郡下牧村字神洞、明治三十七年九月五日出生、渡伯大正十年七月四日、河内丸、在伯入植者

妻 静 大正四年九月二十三日出生

子息 稔（三六年）静枝（三九年）広子（四一年）房子（四三年）、ミツエ（四五年）トメノ（四八年）ナナ子（五〇年）チエ（五三年）

森谷兵三 岡山県川上郡高倉村字飯部、明治二十三年九月二十三日出生、渡伯昭和五年五月三日、ラプラタ丸、在伯入植者

妻 大古登 明治二十八年一月二日出生

子息 行雄(二九年)清志(二三三年)憲国(二六六年)操(二八年)愛子(三〇年)由子(三三三年)新一(三六六年)

星島 實 聖州パウリスタ線バストス移住地 ウニオン第二区、一九三四年一月二十六日 出生

兄弟 進(三七年)良子(四〇年)栄子(四二年)悦三(四五年)万里男(四八年)正 男(五〇年)泰子(五三年)

實母 絹枝 岡山県児島郡藤戸町、大正三年五月十三日出生、渡伯昭和五年三月十二日、モンテビデオ丸、バストス直来入植者
養父 小田儀雄 岩手県膽澤郡金ヶ崎町、明治四十二年十月二十九日出生、渡伯昭和五年七月十二日、リオデジャネイロ丸、バストス直来者

岩橋満雄 佐賀県西松浦郡伊万里町、大正五年十月十二日出生、渡伯昭和五年三月三十日、備後丸、在伯入植者

妻 澄子 大正七年九月十三日出生
子息 八重子(四二年)忠昭(四三年)良枝 (四五年)恵美子(四七年)智恵子(五〇年)茂(五三年)

入江寛之助 岡山県吉備郡日美町、明治二十五年四月二十八日出生、渡伯昭和五年四月十五日、ハワイ丸、在伯入植者
妻 品 明治三十五年六月一日出生

子息 均（二八年）文子（三四年） テル子（三六年）富男（三八
年）澄男（四〇年）

坪井 楸（シゲル）北海道札幌市北三條西三丁目一番地、明治二
十七年九月十六日出生、渡伯昭和九年二月二日、サントス丸、在
伯入植者

妻 美代 明治三十一年九月十四日出生

子息 政（二五年）同妻 和代（二九年）保（二七年）大（二八
年）茂子（三三年）光子（三六年）三好（三九年）満里子（四二
年）

内山正道 北海道札幌市江別町、大正十一年一月十六日出生、渡
伯大正十四年二月二十一日、河内丸、在伯入植者

實母 ヨシ 明治二十六年五月十二日出生

實妹 マリア（三三年）

木場茂盛 鹿児島県川内市勝目五八二一番地 大正十四年九月二
十四日出生、渡伯昭和七年四月二十四日、ハワイ丸、直来入植者
妻 ツキ 昭和六年一月十五日出生
子息 茂文（五三年）

森川史郎 山口県玖珂郡今津町、大正五年七月十九日出生、渡伯
昭和三年三月十七日、鎌倉丸、在伯入植者
妻 美代子 大正七年七月二十三日出生

子息 民子（三九年）道子（四一年）久子（四二年）千鶴子（四六年）

サウーデ区

白岩 峩（タカシ）岩手県江刺郡梁川村字館下、明治三十年十一月三日出生、渡伯昭和五年七月二十三日、リオデジャネイロ丸、直来入植

妻 タマ 明治三十八年十二月十日出生

子息 和子（三六年）慶子（三八年）勳（四一年）貢（四三年）裕（四五年）

北谷幸雄 岡山県吉備郡日近村字日近、明治二十六年四月二十日出生、渡伯昭和五年六月三日、ブエノスアイレス丸、在伯入植者妻 小波 明治二十九年三月二十一日出生

子息 寛（二二年）同妻 エミ子（二五年）喜美子（三四年）孫 登代子（四八年）多加子（四九年）千代子（五一年）

海野武男 岡山県御津（ミツ）郡宇甘西村字紙工、明治三十五年一月十日出生、渡伯昭和二年十月三日、モンテビデオ丸、在伯入植者

妻 キサノ 明治四十二年十一月二十三日生

子息 房江（三二年）晴男（三四年）幸子（三六年）良子（三七

年）清（三九年）茂（四一年）勳（四三年）静夫（四五年）パウ
ロ（四七年）アメリカ（四七年）

新谷十太郎 山口県阿武郡生雲村字銅、明治三十三年一月十五日
出生、渡伯昭和四年六月二十九日、サントス丸、在伯入植者

妻 キヨ子 明治三十九年十一月十八日出生

子息、ミツエ（三三年）キクエ（三五年）巖（三八年）シゲコ
（四二年）恒雄（四四年）辰志（四六年）延行（四八年）

沖山知己 北海道旭川市三條十一町目右一号 明治四十四年四月
二十一日出生、渡伯昭和七年六月一日、リオデジャネイロ丸、在
伯 入植者

妻 マサオ 大正九年九月十五日出生

子息 晴子（四四年）統一（四五年）剛士（四六年）元彦（四九
年）實母 ハナ 明治十九年十一月十七日出生

松原秀喜 熊本県下益城郡守富村字廻江、明治三十年一月二十五
日出生、渡伯大正十四年五月三十日、ハワイ丸、在伯入植者

妻 紀和 明治三十四年九月十八日出生

子息 亨（二〇年）同妻 美枝子（二一年）克己（二二年）利隆
（二九年）章（三二年）津代子（三三年）稔（三六年）義之（三
九年）芳枝（四〇年）猛（四三年）克己妻 富美枝（二七年）
孫 昭義（四五年）忸（四七年）光恵（四九年）昭子（五一年）誠

（五三年）悦子（五三年）

加藤 勇 香川県香川郡由佐村大字由佐字天神前六二番地、明治三十七年四月十日出生 渡伯昭和二年十月三日、モンテビデオ丸、在伯入植者

妻 政子 明治四十一年一月八日出生
子息 富子（三三年）香代子（三五年）澄子（三八年）和子（四一年）勇次郎（四五年） 孝治郎（四八年）

塩飽康夫 岡山県児島郡藤田村宇部、大正元年十月十一日出生、渡伯昭和六年五月九日 ブエノスアイレス丸、バストス直来入植者

妻 昌枝 大正六年八月二十五日出生
子息 好夫（三五年）和枝（三七年）昭（三九年）久子（四一年）徳子（四三年）悟（四五年） 八重子（四八年）貞子（五〇年）

川本好治 埼玉県児玉郡旭村字小島、明治三十五年三月十五日出生、渡伯昭和八年六月三十日、ラプラタ丸、在伯入植者

妻 ハツ 明治三十六年十一月三日出生
子息 光治（二八年）同妻 栄子（三〇年） 實（三二年）敏子（三七年） 広次（三九年） 治子（四二年）

木内雅雄 長野県南佐久郡大澤村字本郷、明治三十年十月二十四日出生、渡伯大正七年十月二十六日、讃岐丸、在伯入植者

妻 トクヨ 明治三十二年十一月二十八日生

子息 伯雄（二八年）同妻 カスミ（三二年）満（三二年）君江（三七年）

孫 美恵子（五二年）

戸来（ヒライ）金太郎 岩手県稗貫郡花巻町大字里川口、明治三十年五月一日出生、渡伯昭和五年七月二十三日、リオデジャネイロ丸、直来入植者

妻 キク 大正元年十二月十八日出生

子息 庄蔵（一八年）善治（二七年）健治（三四年）ルイ子（三七年）正治（三九年）照子（五〇年）芳子（五二年）

田地 昭 茨城県久慈郡世矢村大字大森、昭和二年一月三日出生、渡伯昭和三年三月十日、モンテヴィデオ丸、在伯入植者

弟 好（三五年）

實母 志知 明治二十四年九月十八日出生

姪 節子（三三年）

古賀広市 佐賀県佐賀市道祖元町四三番地、明治二十七年一月一日出生、渡伯大正十四年九月十五日、マニラ丸、在伯入植者

妻 サダ 明治三十四年六月十八日出生

子息 シゲ子（三一年）實（三三年）義男（三四年）三枝（四〇年）

加藤興太郎 香川県香川郡由佐村大字由佐六二番地、明治二十七年十月十日出生、渡伯 昭和二年十月三日、モンテヴィデオ丸、在伯入植者

妻 トヨ 明治三十年八月五日出生

子息 義信（一六年）同妻 富子（二〇年） 義高（二二年）同妻

国枝（二四年）義治（二九年）清江（三五年）

孫 寛（四九年）忠良（五一年）光子（五三年）和代（四九年）政春（五一年）義治郎（五三年）

大井 浩 長野県小県郡依田村字中山、明治三十六年二月九日出生、渡伯大正十年六月三日、河内丸、在伯入植者

妻 嘉代 明治四十一年一月十一日出生

子息 敏子（三二年）克彦（三四年）澄子（三七年）嘉彦（三九年）敬司（四三年）

木口正兄（マサエ）福島県西白河郡西郷村字米村、明治四十一年一月三日出生、渡伯昭和三年三月二十二日、モンテビデオ丸、在伯入植者妻 シノブ 大正三年三月二十七日出生

子息 日出子（三三年）久男（三五年）美智子（三七年）宣夫（三八年）孝子（三九年）彌生（四二年）

高園喜六 佐賀県小城郡岩松村大字松尾、大正五年十一月十八日出生、渡伯大正六年八月九日、河内丸、在伯入植者

妻 正子 大正八年四月一日出生

子息 初枝（三八年）茂子（四〇年）一（四二年）シズエ（四五

年）君子（四九年）チエ子（五一年）幸子（五三年）

荻原玉吉 群馬県勢多郡黒保根村字水沼、明治十九年八月十二日出生、渡伯昭和十年二月二十日、ハワイ丸、直来入植者妻ユキ
明治二十一年十二月七日出生子息 弘太郎（二三年）同妻 敏江（二四年）

孫 みどり（五一年）

吉田朝二 香川県小豆郡福田村、明治四十五年四月一日出生、渡伯大正十四年五月二十五日、河内丸、在伯入植者

妻 久子 大正八年一月一日出生

子息 朝弘（四二年）朝治（四四年）清（四七年）輝雄（四九年）博子（五二年）

丸山嘉一（かいち）新潟県南魚沼郡藪神村字芹田（セリタ）一四番地、明治四十四年五月九日出生、渡伯昭和三年九月二十五日、備後丸、在伯入植者

妻 ナミヨ 大正元年八月二十五日出生

子息 健一（三九年）康治（四一年）寛治（四四年）ワシントン（四六年）、ミネ子（四八年）正弘（四九年） マリオ（五三年）

實父 象三 明治十九年十月二十二日出生

實弟 政二（一四年）同妻 淑子（二一年）同子息 パウロ（四六年）良平（四八年）晃（五〇年）芳夫（五二年）

青木運平 岡山県阿哲都本郷村字花木、明治三十六年二月二十二日出生、渡伯昭和三年二月十五日、マニラ丸、在伯入植者妻 照代 明治四十一年四月十日出生

子息 恵美子（三一年）和子（三三年）隆男（三五年）登（三九年）多美子（四二年） 正信（四四年）悟（四六年）

北森万太郎 三重県名賀郡瀧川村字柏原、明治十三年九月二十三日出生、渡伯昭和三年六月十日、ラプラタ丸、在伯入植者妻 やすの 明治十八年三月二十日出生

孫 和子（三三年）寿雄（三五年）

野田清松 愛知県東加茂郡盛岡村大字桑原田 大正五年二月五日出生、渡伯昭和八年七月二十七日、アリゾナ丸、在伯入植者妻 周子 大正七年七月二十四日出生

子息 豊（四一年）耕三（四二年）広（四三年）和子（四五年）康人（四七年）

平野和佐一 広島県安佐郡中原村大字中野字上中、明治二十八年七月十五日出生、渡伯大正八年三月二十五日、博多丸、在伯入植妻 ミサヲ 明治三十二年九月十四日出生

子息 照仁（二七年）富美栄（二九年）光善（三四年）万里夫（三七年）

吉原久一郎 広島県神石都田頭村八番屋敷、明治四十三年五月五日出生、渡伯大正七年九月二日、博多丸、在伯入植者

妻 キクヨ 大正六年六月十一日出生

子息 芳子（三九年）幸江（四一年）まり子（四三年）豊子（四四年）ルイザ（四六年）秀逸郎（四八年）照代（五一年）妙子（五三年）實父 浅市 明治十五年十二月四日出生

實母 サト 明治十七年九月三十日出生

弘田明身 高知県吾川郡三瀬村字正賀瀬、明治三十年十一月七日出生、渡伯大正二年六月十一日、第二運海丸、在伯入植者

妻 米寿 明治三十三年一月一日出生

子息 茂穂（二二年）同妻 トミ（二四年）稔（二八年）文江（三〇年）春子（三二年）スミエ（三四年）幸一（三七年）万里雄（四〇年）光男（四四年）

孫 晃（四九年）修（五〇年）清香（五二年）

堤 仲蔵 神奈川県横浜市磯子区磯子町一〇四〇番地、明治四十一年二月二十五日出生 渡伯昭和十年十一月二日、リオデジャネイロ丸、直来入植者

子息 恵子（三九年）政江（四〇年）哲男（四二年）良三（四三年）信一（四四年）栄子（四七年）

中島正人 熊本県飽託郡沖新村字高砂、明治四十二年六月六日出生、渡伯昭和十一年十一月二十八日、ブエノスアイレス丸、在伯入植者

妻 マツエ 明治四十四年五月十三日出生

子息 正昭（三一年）照子（三四年）綾子（三九年）仇（四二年）、ミヨ子（四五年）正子（四七年）由子（四九年）代子（五一年）

伊藤亮一 静岡県周智郡水窪町大字奥領家、明治二十五年一月十二日出生、渡伯昭和十一年八月三十日、リオデジャネイロ丸、在伯入植者

妻 ヒサ

子息 盛生（一九年）同妻 サツキ（二八年）しげ子（三二年）博（三五年）俊雄（三九年）實（四二年）

孫 喜久子（五一年）節子（五三年）

岡野庄平 長野県上伊那郡西春近村字小出、明治三十九年十月二日出生、渡伯昭和七年五月七日、サントス丸、在伯入植者

妻 古登女 明治四十二年五月十八日出生

實弟 敬治 明治四十一年九月十二日出生

湯原有米吉 岡山県赤磐郡山方村字黒本、明治四十四年八月十六日出生、渡伯大正十五年九月十七日、マニラ丸、在伯入植者
妻 薫 大正二年十月十日出生

子息 温子（三三年）省吾（三五年）省爾（三七年）省三（三九年）荷苗（四三年）治（四一年）紀代子（四五年）眞沙子（四六年）友子（四八年）優（五〇年）淳人（五二年）美沙子（五四年）
實母 勢津 明治二十二年二月十日出生

緒方辰雄 熊本県下益城郡豊福村大字内田、 明治三十六年四月二十八日出生、渡伯昭和七年九月二十六日、マニラ丸、在伯入植
妻 ハル 明治二十九年二月二日出生
子息 光幸（三〇年）数則（三四年）幸子（三五年）

フアルツーラ区

西村英一 岡山県後月郡高屋町一七一九番地 明治三十五年四月十八日出生、渡伯大正十一年五月二十五日、神奈川丸、在伯入植者

妻 シノ 明治三十四年十一月二十二日出生
子息 一郎（二六年）囊二（二九年）勇三（三〇年）四郎（三三年）富夫（三五年）睦枝（三九年）信夫（四一年）安枝（四五年）

片寄寿一 福島県石城郡平市大字上片寄字柳澤十一、明治二十九年四月十五日出生、渡伯昭和六年十一月九日、サントス丸、在伯入植者

妻 キクヨ 明治三十二年十一月七日出生

子息 一正（一七年）同妻 好（二一年）えエ（二四年）同妻
輝子（三三年）

孫 順子（五〇年）雅子（五二年）慧子（五三年）

白須千之助 広島県豊田郡鷺浦村字佐木、明治十七年十月十七日出生、渡伯大正三年五月十四日、帝国丸、在伯入植者

妻 ミエ 明治二十四年十二月二十日出生

子息 禮三（二六年）明（三二年）美笑子（二九年）豊（三五年）
戸谷虎雄 サンパウロ州ノロエステ線リンス市、一九一四年十月一日出生、在伯入植者

妻 緑一九二〇年四月二十日出生

子息 キミ（四三年）エミ子（四五年）正輝（四六年）レイ子（四七年）ミサ子（五〇年）ヒデ子（五一年）

中川利行 広島県深安郡大津野村字津野下、明治四十三年五月十六日出生、渡伯昭和四年十月三日、備後丸、在伯入植者

妻 文枝 大正十年四月二十四日出生

子息 尚雄（四三年）小枝子（四四年）

茅野甚吾 鹿児島県川邊郡坊之津村字泊、明治四十四年六月十一日出生、渡伯昭和八年一月八日、ラブラタ丸、直来入植者

妻 草枝 明治四十四年十二月三日出生

子息 光子（三七年）輝男（四一年）

木皿代志美 北海道虻田郡倶知安町北二條東一丁目二番地、大正五年六月二十六日出生 渡伯昭和八年四月十五日、アラビア丸、

在伯入植者

妻 愛子 大正七年八月十二日出生

子息 弘志(四〇年) 貞子(四四年) 寿美夫(四六年) 智恵子(四八年) 美恵子(四九年) 久子(五一年) 直美(五三年)

阿部米重 福島県信夫郡余目村字北矢野目、 明治三十六年一月二十日出生、渡伯昭和五年四月三十日、ラプラタ丸、在伯入植者
妻 ノブ 明治三十五年九月二十日出生
賢弟 長三 大正五年三月二十日出生
同妻 リン 大正十一年四月十六日出生
同子息 静江(四七年) 富美江(四八年) 芳江(五〇年) 芳夫(五三年)

竹内時夫 島根県能義郡此田村大字東比田、明治四十四年十一月二日出生、渡伯昭和四年五月二十九日、神奈川丸、在伯入植者
妻 朝子 大正四年二月二十三日出生

子息 住枝(四〇年) 進(四二年) 一恵(四四年) マリオ(四六年) さとし(四九年) 綾子(五二年)

實父 茂市 明治二十四年四月十九日出生

實母 カツ 明治二十八年二月五日出生

實弟 茂孝(三二年)

竹内義輝 島根県能義郡比田村大字東比田、 大正十一年三月一日出生、渡伯昭和四年五月二十九日、神奈川丸、在伯入植者
妻 ソフィア 一九二九年二月一日出生

子息 輝子(五〇年) 義昭(五一年) 茂(五三年)

小谷虎一 兵庫県加西郡九會村字中野、明治十九年九月一日出生、
渡伯大正十五年七月三十日、若狭丸、在伯入植者

妻 フク 明治二十六年二月二日出生

子息 俊一（一四年）同妻 静摩（二〇年） 勇二（二八年）季子
（三二年）

孫 信雄（四四年）俊雄（四五年）節子（四七年）

山田武一 静岡県小笠都河城村字渾水加、明治四十二年三月二十
日出生、渡伯昭和七年二月八日、ラプラタ丸、直来入植者

妻 キミヨ 大正五年八月一日出生

子息 和男（三五年）博（四四年）實父 重治郎 明治十六年四
月十五日出生

實母 トリ 明治二十年三月三日出生

實弟 俊治（二三年）同妻 すみ（二九年）

同子息 靖子（五一年）繁治（五二年）

小林正名 福井県吉田郡中藤島村字燈明寺、明治四十五年七月二
十日出生、渡伯大正十三年十二月十二日、メキシコ丸、在伯入植
妻 イセ 大正六年十二月十七日出生

子息 初子（三八年）茂子（四一年）正弘（四二年）勝治（四四
年）ヤヨイ（四五年）シズエ（四六年） ミサ子（四八年）ユキ子
（四九年） フサエ（五三年）

清家道春 愛媛県西宇和郡三崎村大字三崎、大正八年一月四日出
生、渡伯昭和八年四月十五日、アラビア丸、直来入植者

妻 千代子 大正八年四月十三日出生
子息 晃（四六年）俊美（五〇年）留美子（五二年）

清家虎三 愛媛県西宇和郡三崎村大字三崎、明治二十四年八月二十五日出生、渡伯昭和八年四月十五日、アラビア丸、直来入植者妻 ロク 明治二十四年五月十八日出生

長男 徳一 大正五年七月二十八日出生

同妻 好子 大正六年二月二十日出生

同子息 忠志（三九年）猛（四二年）勳（四四年）敬三（四六年）朝美（四九年）伯美（五二年）

四男 重雄 昭和四年五月五日出生

同妻 留美 昭和七年六月十日出生

五男 親秀 昭和六年六月六日出生

六男 正夫 昭和八年八月八日出生

谷口繁雄 愛媛県西宇和郡三崎村大字三崎、大正八年十月十七日出生、渡伯昭和八年三月二十四日、サントス丸、直来入植者

子息 瞳（四二年）孝（四五年）豊幸（四七年）唯男（五一年）進（五三年）

妻 雪子 大正十二年九月十六日出生

藪田きぬ 静岡県加茂郡田甲村、明治二十九年三月二十九日出生、渡伯昭和八年三月十九日、アリゾナ丸、在伯入植者

子息 博（二七年）賓（二九年）仁（三三年）繁（三五年）万里

子（三十七年）正行（三十九年）

池田広近 埼玉県北足立郡六辻村字辻、明治二十一年三月二十一日出生、渡伯昭和八年六月十四日、ハワイ丸、在伯入植者

子息 巖（一四年）同妻 ふみ（一五年）健（二五年）同妻 定子（三〇年）博（三五年）巖 子息 共栄（四二年）清子（四四年）幸 子（四六年）英樹（四八年）瞳（五一年）篤（五三年）健 子息 玲子（五一年）和春（五二年）正知（五四年）

池田俊男 埼玉県北足立郡六辻村字辻、大正六年三月二十一日出生、渡伯昭和八年六月十四日、ハワイ丸、在伯入植者

妻 シズ 大正十一年九月七日出生

子息 美千代（四二年）郁子（四四年）稔（四六年）敏子（四八年）裕子（五〇年）朝子（五二年）

福田良三郎 愛媛県伊予郡北山崎村字市場、明治三十七年三月七日出生、渡伯昭和二年十月二日、モンテヴィデオ丸、在伯入植者妻 春江 大正三年四月十九日出生

子息 修（三三年）敬吾（三六年）真澄（三八年）信子（四二年）稔（四五年）孝（四七年）吉良（五〇年）英雄（五二年）恵美（五三年）

豊島喜一 北海道北見国網走郡女満別村字東女満別、明治三十七年十一月三十日出生、渡伯大正十二年九月一日、たこま丸、在伯入植者妻 スエ 大正二年十月一日出生

子息 重幸(三四年)喜夫(三六年)昭夫(三八年) ナツエ (三九年)八重(四一年) ハルエ(四三年) フジエ(四五年)節三(四六年)

實母 コユミ、明治二十年五月二十日出生

谷口又之助 愛媛県西宇和郡三崎村大字三崎 明治二十五年十二月五日出生、渡伯昭和八年三月二十四日、サントス丸、直来入植者

妻 マン 明治二十七年一月七日出生

子息 嘉平次(一一年)同妻 スミコ(一六年)春雄(三六年)孫 英二(三六年)二郎(三八年)妙子(四〇年)喜久男(四二年)和子(四四年)健二(四七年)照子(五〇年)百合子(五二年)

堂前幸太郎 北海道虻田郡留寿都村字三ノ原 明治四十二年八月十日出生、渡伯昭和十二年六月十日、サントス丸、在伯入植者妻 ハナヨ 大正二年十月五日出生

子息 岩男(三五年)昭雄(三七年)武雄(四〇年)幸光(四四年)光男(四六年)国男(四八年)隆夫(五〇年)康雄(五二年)

新出菊夫 神奈川県藤澤町字藤澤、明治四十年八月二十三日出生、
渡伯昭和八年六月二十七日、ラブラタ丸、直来入植者

妻ユキエ 明治四十四年二月二十三日出生

子息 晴男（三四年）

新谷市次郎 和歌山県伊都郡花園村大字久木 明治二十五年三月
十八日出生、渡伯、昭和五年二月十一日、マニラ丸、在伯入植者
妻 ツチエ 明治二十八年二月五日出生

子息 久治（二八年）同妻 キヨ子（二八年） 楠五郎（三八年）
孫 精市郎（五〇年） ヨネコ（五一年）美津雄（五二年） サエ
子（五三年）

實母 マツ 明治五年八月二十八日出生

内馬場七郎 宮城県黒川郡富谷村字明石下櫻木一七番、明治四十
四年十月二十二日出生 渡伯大正十三年二月十五日、マニラ丸、
在伯入植者

妻 みせ 大正四年十一月二十九日出生

子息 マリア・クレリア（三六年）偉出雅（三七年） カストロ
（三九年） セシリア（四一年）エミールア恵美子（四五年）ファ
ビオ 美徳（四三年） アラシー文子（四八年） セリーナそよ子
（五〇年） ウバルド満（五二年）

中原一郎 山口県宇部市二十区参宮通、明治三十五年十月二十日
出生、渡伯昭和五年四月十六日、ハワイ丸、在伯入植者

妻 ミテ 明治三十七年三月二十一日出生
子息 照子（三五年）信（三七年）巧（三九年）武（四一年）末
子（四四年）光子（四六年）

ボンフィン区

貝岐辰吉 和歌山県東牟婁郡那智村大字市野野、明治二十五年十月二十五日出生、渡伯昭和三年四月十九日、河内丸、在伯入植者
妻 トラエ 明治三十五年一月十七日出生
子息 広瀬栄吉（二二年）同妻 ミユキ（二八年）佐藤猛（二五年）延（二九年）カズエ（三二年）晃（三六年）貝岐キヨミ（四三年）

孫 清（五〇年）美代子（五二年）明美（五三年）

奥山忠三 山形県北村山郡楯岡町大字楯岡新町、明治四十二年六月十九日出生、渡伯昭和十年三月三十日、ブエノスアイレス丸、在伯入植者

妻 キクノ 明治四十五年二月二十三日出生

子息 勝美（三四年）英子（三九年）昭子（四二年）暘子（四四年）忠信（四七年）忠良（五〇年）

熊谷喜代巳 北海道天塩国中川郡中川村字安平志内、明治三十九年八月六日出生、渡伯昭和六年五月十九日、ブエノスアイレス丸
直来入植者

妻 順子 明治四十二年九月二十五日出生
子息 君子(三一年)操(三四年)雪子(三七年)博(四三年)芳夫(四八年)

貝岐保雄 和歌山県東牟婁郡那智村大字市野野、大正二年八月二十四日出生、渡伯昭和三年四月十九日、河内丸、在伯入植者
妻 イナ 大正六年二月四日出生
子息 文代(四五年)一男(三八年)弘博(四七年)博明(四八年)博三(五〇年)諭(五三年)君江(五四年)

原 春治 岡山県都窪郡早島町大字早島、明治三十四年三月十五日出生、渡伯大正十五年十二月二十三日、ラプラタ丸、在伯入植妻 トミ子 明治三十五年二月二十八日出生
子息 豊(二〇年)義晴(二六年)同妻 ヨシミ(三〇年)マリ
ア(三一年)ミドリ(三六年)テレーザ(三九年)マリオ(四三年)

孫 伊三男(五三年)

西ヶ迫信秀 大阪府北河内郡守口町字土居六五二番地ノ二、明治三十年十月三日出生、渡伯昭和四年十二月三十一日、ブエノスアイレス丸、在伯入植者
妻 ジョアーナ 明治三十一年九月二十一日出生
子息 秀男(一五年)同妻 フジ(二一年)琢美(二〇年)同妻 米(二七年)

孫 秀男氏息 信弘(四二年) フサエ (四四年)讓二(四七年)
秀次(四九年)義男(五二年) 琢美氏息信一(四九年) 琢二(五
〇年) 由利(五三年)

小林春雄 群馬県新田郡木崎町大字赤堀、大正十三年一月十二日
出生、渡伯昭和七年八月二十五日、ブエノスアイレス丸、在伯入
植者

妻 光枝昭和二年十一月十四日出生
子息 初枝(五一年) 正樹(五二年) 秀樹(五四年)

清水宗平 群馬県群馬部室田町大字中室田四六番地、明治四十二
年一月三十一日出生、渡伯昭和七年六月二日、リオデジャネイロ
丸、在伯入植者

妻 ハル子 大正四年四月十四日出生
子息 宗弘(三八年) 一恵(四二年)「たかし」(四三年) 愿(あ
つし)(四五年) 敬子(五〇年) 恵子(五二年)

角田秀夫 群馬県佐波郡上陽村大字藤川一四八、大正十四年八月
十日出生、渡伯昭和八年八月二日、ブエノスアイレス丸、在伯入
植者

實妹 久子(三四年)
實母 やい 明治二十六年三月二十五日出生

高木 定 熊本県菊池郡泗水村字住吉、明治三十八年一月十五日
出生、渡伯昭和二年七月二十一日、サントス丸、在伯入植者

妻 久子 明治四十五年六月十二日出生

子息 富枝（三四年）勳（三七年）節子（四五年）

田中謙二 鹿児島県鹿児島市東千石町一四番地、明治三十三年十
月十三日出生、渡伯昭和八年四月十五日、モンテビデオ丸、直来
入植者妻 トキエ 明治四十年六月二十三日出生

子息 広子（三五年）實（四〇年）時男（四三年）満二（四五年）
面川千賀碓 福島県東白川郡棚倉町大字棚倉 字新町九二番地、
明治三十八年十月十一日出生、渡伯昭和八年十一月二十九日、ラ
プラタ丸、在伯入植者

妻ユキ 大正三年十月二十二日出生

子息 絹江（三五年）照徳（三七年）信浩（三九年） マスミ（四
一年）賀久雄（四三年） 美砂子（四六年）豊美（四九年）恵美子
（五二年）

渡邊俊四郎 宮城県仙台市東七番町一三五番地、明治三十三年十
二月二十七日出生、渡伯昭和五年七月二十三日、リオデジャネイ
ロ丸、在伯入植者

子息 俊彦（二八年）俊英（三一年）孝之（三 六年）

佐藤金作 北海道函館市外湯川村大字下湯川字上野二番地、明治二十年十一月二十五日出生、渡伯昭和四年十月二十二日、ハワイ丸、在伯入植者

妻 ソウ 明治二十三年十一月三日出生

子息 茂子（一六年）同婿 彌門（二二年）孫 眸美（四一年）昌一（四二年）英輝（四四年）信雄（四六年）眞里雄（四九年）秀雄（五一年）昭雄、和雄（五二年）

寺本林次郎 和歌山県東牟婁郡那智村大字市野々、明治二十一年六月七日出生、渡伯昭和三年六月十三日、ハワイ丸、在伯入植者
妻 とめの 明治十九年八月四日出生

子息 正保（一三年）同妻 武子（一三年） 五美（二四年）同妻 マリ子（三二年）

孫 正保息Ⅱ巧（三八年）浄治（四〇年）満 男（四三年）君江（五〇年） 五美息Ⅱ幸男（五一年）幸次（五四年）

濱本 渉 北海道札幌市南四條西五町日四番地、明治二十一年二月二十五日、渡伯昭和八年四月十六日、アラビア丸、直来入植者
妻 サナ 明治三十年四月一日出生

子息 綾子（二四年）良三（三七年）美智子（三六年）

伊藤熊三郎 新潟県中蒲原郡新開村字羽下、明治三十年十二月三十一日出生、渡伯昭和 九年八月二十四日、アフリカ丸、在伯入植

妻 カツノ 明治三十八年九月十三日出生

子息 清三郎（二〇年）同妻 葉子（二八年） 昭治（二八年）
孫 眞知子（五三年）

藤本栄治 熊本県菊池郡陣内村字森、明治二十四年三月二十七日
出生、渡伯大正六年六月十五日、若狭丸、在伯入植者

妻 シマ 明治四十四年七月十日出生

子息 孝（三一年）栄吉（三六年）幸男（四〇年）昇（四二年）光
男（四六年）節子（三二年）清子（三四年）正子（四四年）

相川 清 群馬県勢多郡黒保根村大字水沼、明治四十年一月一日
出生、渡伯昭和十年一月一日、リオデジャネイロ丸、直来入植者
妻 富子 明治四十五年二月二日出生

子息 和義（三一年）忠昭（三二年）トキ（三四年）キク（三六
年）信子（三七年）クニ子（三九年）智江（四〇年）八重子（四
二年）貞子（四四年）晴美（四六年）千代子（四八年）芳夫（五
〇年）

岩崎茂男 熊本県八代郡千丁村大字大牟田、明治二十二年七月七
日出生、渡伯昭和十年一月二十二日、アリゾナ丸、在伯入植者
妻 マス 明治三十四年四月三十日出生

子息 茂行（二二年）巖男（二五年）義茂（二七年）公男（三五
年）秀喜（三六年）

アルト区

戸田 東 北海道札幌市北七條西五丁目、明治三十九年十一月二十五日出生、渡伯昭和八年一月九日、ラプラタ丸、直来入植者

妻 フサ子 明治四十五年三月十八日出生

子息 洋子（三四年）敦子（三八年）薰（四〇年）喬（四三年）明美（四七年）一己（五三年）

清家平治 愛媛県東宇和郡俵津村字大浦、明治二十年十一月十四日出生、渡伯昭和八年六月二十四日ハワイ丸、直来入植者

子息 寿郎（二〇年）同妻 仲恵（二四年）利郎（三〇年）

孫 祥子（五〇年）恒雄（五三年）

尾下正和 愛媛県東宇和郡俵津村字大浦、明治四十二年一月二十三日出生、渡伯昭和九年六月二日、ブエノスアイレス丸、在伯入

植者

妻 房子 明治四十四年七月十八日出生

子息 美和子（三七年）和彦（四〇年）禮二（四三年）真由美（四六年）昇三（四八年）清文（五一年）

鮫島満天 鹿児島県川邊郡万世町、明治四十三年三月五日出生、渡伯昭和二年十一月十四日 ハワイ丸 在伯入植者

妻 キヨ 大正四年六月五日出生
子息 満忠（三八年）賢次（四〇年） ミチ子（四七年）

伊藤關一 大阪府中河内郡巽村字四條、大正四年二月二日出生、
渡伯昭和三年十月二十日、モンテヴィデオ丸、在伯入植者
妻 コト 大正七年三月二日出生

子息 栄子（四二年）勝男（四四年）
實父 栄三郎 明治十九年十月六日出生
實母 キク 明治二十四年十月二十三日出生
實妹 ヤエ子（三四年）

中浦伊勢松 愛媛県東宇和郡俵津村字脇浦、明治二十四年十月二十六日出生、渡伯昭和九年六月五日、ブエノスアイレス丸、在伯入植者

妻 フク 明治二十八年六月二十三日出生
子息 芳幸（二七年）同妻 栄子（二七年） 成一（二九年）同妻
時枝（三四年）克子（三一年）

孫 芳幸子息 誠子（五二年）幸栄（五三年）

田中幸一 愛媛県東宇和郡俵津村字脇浦、大正七年十一月十八日出生、渡伯昭和九年六月二日、ブエノスアイレス丸、在伯入植者

子息 耕作（四五年）豊子（四四年）瑞恵（四七年）千津枝（四九年）幸生（五一年）節男（五二年）
實弟 秋好 大正十四年九月十日出生
同妻 初枝 昭和五年十二月一日出生

同子息 愛子（五二年）三千校（五三年）

實弟 龍一（二八年）徹（三〇年）

實妹 三代子（二三年）

實父 豊太郎 明治十七年四月三日出生

弓削敬太 福岡県八女郡中廣川村字太田、明治三十八年五月二日出生、渡伯昭和四年十二月三十一日、ブエノスアイレス丸、在伯入植者

妻 フミエ 明治四十二年一月一日出生

子息 隆美（二六年）同妻 マリア（二八年） 信子（三八年）等（四〇年）

孫 芳恵（四九年）久恵（五一年）君恵（五四年）

田中庄太郎 兵庫県神戸市苅藻通二丁目十六番地、明治十九年十月十八日出生、渡伯大正十三年二月十八日、河内丸、在伯入植者妻 つぎ 明治二十一年七月二十三日出生

子息 保（二六年）同妻 愛子（三一年）

孫 清讓（セルジオ）（五二年）

工藤勘一 大分県日田市南部町、明治三十七年三月二十二日出生、渡伯昭和十一年十一月一日、ラプラタ丸、在伯入植者

妻 時枝 大正二年五月十日出生

子息 久子（三五年）破磨子（三七年）教彦（四二年）千鶴子（四五年）由紀恵（四七年）春海（四九年）秀海（五三年）

中田 肇 広島県佐伯郡原村字後畑、明治三十四年四月十六日出生、渡伯大正十四年十月十日、神奈川丸、在伯入植者

妻 シズ 大正三年五月五日出生

子息 長輔（三五年）すみ子（三六年）紗恵子（四六年）一彦（四七年）正則（四九年）

木内 篤 長野県南佐久郡大澤村字本郷、明治三十三年四月十五日出生、渡伯大正七年九月三日、讃岐丸、在伯入植者

妻 とめ 明治三十八年十月三日出生

子息 恵美子（二九年）同夫 正之（二二年）八重子（四二年）
孫 正美（五三年）

大貫勝義 栃木県那須郡境村大字小原澤 大正九年四月二十日出生、渡伯大正十四年二月十八日、河内丸、在伯入植者

妻 キミ 大正十四年十二月二十二日出生

子息 幸子（四八年）伯明（五〇年）勲（五一年）和子（五二年）

斎藤力男 秋田県由利郡本荘町右脇町三〇二番地、大正十一年十二月七日出生、渡伯昭和十年三月二十日、ブエノスアイレス丸、直来入植者

妻 イサヨ 大正十四年五月十五日出生

實父 芳次郎 明治二十四年一月二十五日生

實母 イチ 明治二十八年八月二十八日出生

羽入田スミ 長野県上水内郡三水村字芋川若宮、明治四十二年四月六日出生、渡伯昭和五年七月二十三日、リオデジャネイロ丸、在伯入植者

子息 渡（三十一年）早苗（三四年）信夫（三七年）由子（三九年）紀子（四六年）

小野田 登 静岡県濱名郡鷺津町字古見、昭和六年十月一日出生、渡伯昭和五年八月二十八日、モンテビデオ丸、在伯入植者

實母 富美 明治四十二年九月五日出生
弟妹 千恵子（三十三年）和明（三六年）敏子（三八年）綾子（四〇年）賢子（四四年）

木原清治 山口県阿武郡徳佐村字三原、明治四十三年三月十五日出生、渡伯大正十五年六月二十日、神奈川丸、在伯入植者

妻 稱子 大正九年五月七日出生
子息 安光（四一年）光子（四二年）富子（四五年）節生（四八年）重子（五〇年）

益岡 勇 岡山県御津郡横井村字中原、明治二十九年七月七日出生、渡伯昭和三年一月十五日、若狭丸、在伯入植、

妻 松輿 明治三十六年十一月三日出生
子息 武志（三〇年）繁子（三十三年）美智子（三九年）辰夫（三六年）登美子（四二年）

西 忠良 和歌山県東牟婁郡宇久井村、明治三十七年三月十一日出生、渡伯昭和八年五月二十七日、アフリカ丸、直来入植者
妻 ムラエ 明治四十三年十一月二十九日生
子息 英子（三十一年）睦子（三十九年）慶子（五〇年）

山芝一一 和歌山県東牟婁郡宇久井村字宇久井、明治三十八年一月三十日出生、渡伯昭和四年七月三十日、若狭丸、直来入植者
妻 つるゑ 明治四十年十二月十五日出生
子息 一郎（三〇年）宏（三四年）富子（三六年）實（三九年）光子（四一年）昭（四六年）武志（五一年）

小橋宇三郎 岡山県倉敷市船倉町一二四二番地、明治十三年十一月二十五日出生、渡伯大正十五年八月二十九日、河内丸、在伯入植者

妻 政 明治十九年三月一日出生
子息 博知（一三年）同妻 幸江（一六年） 光之（一九年）同妻

寧江（二一年）
孫 博知子息 孝昭（三七年）敏昭（三九年）清治（四一年）多恵子（四四年）陽子（四六年）多美子（四八年）保太（五一年）光之子息 勝（四四年）俊治（四七年）徹（四九年）直子（五一年）智（五三年）

橋岡千里 広島県安芸郡江田島町字中郷、明治三十四年七月三十日出生、渡伯昭和三年 七月五日、博多丸、在伯入植者

妻 おまつ 明治四十一年五月十八日出生

子息 武（三三年）勉（三六年）美千枝（三九年）等（四二年）正（四五年）幸子（四八年）

河西静男 長野県諏訪郡湖東村 大正七年六月十日出生、渡伯大正十年三月十日、パナマ丸、在伯入植者

妻 千代美 大正十三年三月二十日出生

子息 静一（四六年）衛二（四八年）和子（五〇年）巖（五三年）
實母 やすの 明治二十六年五月二十五日生

松井元三 広島県深安郡加法村字下加茂、明治三十八年二月十三日出生、渡伯大正十三年六月十八日、シカゴ丸、在伯入植者

妻 節 大正六年二月一日出生子息 賢一（四四年）勇（四六年）
信之（四七年）正志（四九年）省吾（五二年）

小野清志 岡山県吉備郡総社町字井尻野一三四五番地、明治四十一年三月十二日出生、渡伯昭和五年四月十六日、ハワイ丸、在伯入植者

妻 菊枝 明治四十五年十月三十日出生

子息 重埜（三二年）瀧子（三五年）道弘（四三年）始（四六年）
實父 正左衛門 明治二十一年三月十一日生

實母 希ふ 明治十九年十二月七日出生

ノーバ・エスペランサ区

郷原寔市 岡山県都窪郡中庄村字別府五一八番地ノ二、明治二十五年十月二十日出生、渡伯昭和四年九月十一日、モンテビデオ丸、在伯入植者

妻 カヨ 明治三十四年四月二十一日出生

子息 章夫（二三年）同妻 美代子（三〇年） 敏行（三一年）孝（三三年）貞子（三五年） 英子（三七年）治男（四〇年）精吾（四三年）

孫 裕子（四九年）順一（五一年）美津枝（五四年）

佐藤栄治郎 山形県北村山都楯岡町大字楯岡 明治二十九年八月二十三日出生、渡伯昭和十年三月一日、ラプラタ丸、直来入植者妻 イク 明治三十三年二月十五日出生

子息 栄太郎（二一年）同妻 ヤスオ （二六年）栄四郎（二八年）同妻 静子（三二年）栄五郎（三〇年）一子（三六年）文子（三九年）

孫 栄太郎子息 賢一（五〇年）隆（五二年）緑（五三年）栄四郎子息 嘉隆（五四年）

虎岩頼寿 宮城県栗原郡清瀧村字山田、明治十七年十月二十四日

出生、渡伯大正十五年 九月三十日、モンテビデオ丸、在伯入植者

妻 コテフ 明治二十七年十月十八日出生

子息 頼満（一七年）同妻 昭子（三二年）孫 頼利（四七年）満子（四九年）頼昭（五一年）愛子（五四年）

虎岩力松 宮城県栗原都清瀧村字山田、明治二十八年三月二十四日出生、渡伯大正十五年九月三十日、モンテビデオ丸、在伯入植者

妻 カネ 明治三十八年三月二十五日出生

子息 勝子（三五年）節子（三七年）美代子（三九年）良子（四一年）一男（四四年）

森下政吉 熊本県上益城郡秋津村字中無田、明治四十一年十二月二十日出生、渡伯昭和四年三月十八日、備後丸、在伯入植者

妻 夏子 明治四十四年八月二十日出生

子息 義春（三二年）重雄（三四年）ヨシエ（三六年）

松永清市 鹿児島県出水郡阿久根町字大川牛之濱、明治三十一年三月六日出生、渡伯昭和六年七月六日、リオデジャネイロ丸、直来入植者妻 キクノ 明治三十二年八月二十三日出生
子息 成行（四〇年）

郷原周良 岡山県都窪郡中庄村字別府、大正十四年五月二十日出生、渡伯昭和四年九月十一日、モンテビデオ丸、在伯入植者
妻 美代子 昭和六年十月十八日出生
子息 興市（五二年）

松田金徳 沖縄県国頭郡屋我知村字饒平名、明治三十八年五月十九日出生、渡伯大正十三年一月十六日、パナマ丸、在伯入植者
妻 マツ 明治四十一年五月十七日出生
子息 秋子（三八年）マサ子（四一年）峻金（四三年）峻功（四五年）ヨシ子（四七年）裕和（五二年）

清 金太郎 静岡県駿東郡金岡村東熊堂三番地ノ内二、大正二年十一月二十五日出生、渡伯大正十三年八月二十日、河内丸、在伯入植者

妻 キン子 大正四年三月九日出生
子息咲子（三五年）浪子（三八年）富美子（三九年）春江（四〇年）賢一（四三年）みどり（四五年）和夫（四六年）光枝（五一年）

（二年）諸角興吉 北海道空地郡栗澤村字モロシ一〇五五番地、明治十九年二月十三日出生、渡伯大正十三年三月七日、パナマ丸、在伯 入植者
妻 キミ 明治二十四年八月二十一日出生
子息 ハツ 明治四十四年七月十八日出生

孫 嘉一（三十七年）忠男（四十一年）三郎（四十三年）

新垣盛正 沖縄県島尻都大里村字稱峯、明治二十三年十一月十一日出生、渡伯大正六年八月二十八日、シャートル丸、在伯入植者妻 田鶴 明治二十六年六月六日出生

養女 デイナー（伯人）一九二八年出生同婿 糸数 一九一三年出生孫 松男（四十七年）正昭（四十九年）幸男（五十二年）敏和（五三年）

高橋清五郎 山形県酒田市北千日堂前字四反百六番ノ二、明治三十四年二月二十三日出生、渡伯昭和十年一月三十日、モンテビデオ丸、在伯入植者

妻 いもせ 明治四十四年二月二十四日出生
子息 清（三十二年）忠（三十六年）三四治（四十三年）志女（四十六年）五郎（四十八年）ヤヨイ（五三年）

平井吉見三郎 愛媛県喜多郡大州町字阿蔵、大正三年七月四日出生、渡伯昭和五年六月十六日、ブエノスアイレス丸、在伯入植者妻 モト 大正六年五月八日出生
子息 斎（四十二年）・道春（四十三年）省三（四十五年）初子（四十六年）信子（四十八年）勉（五十一年）

平井熊幸 愛媛県喜多郡大州町字阿蔵、明治二十八年七月六日出生、渡伯昭和二年六月十六日、ラプラタ丸、在伯入植者妻 シゲル 明治三十三年九月十一日出生

子息 慧（二四年）同妻 ハマ子（二七年） 馨（三二年）幸子（三五年）尚（三九年）
孫 敦子（五三年）

大名門幸利 愛媛県越智郡亀岡村宇佐方、大正四年二月二日出生、
渡伯昭和八年十月三日、リオデジャネイロ丸、在伯入植者

妻 いち子 大正八年四月四日出生
子息 甲一（四四年）信子（四八年）柳二（五二年）

宮城安市 長崎県北松浦郡柚木村大字柚木 明治二十四年二月十三日出生、渡伯昭和二年十二月十三日、ラプラタ丸、在伯入植者
妻 トセ 明治二十五年六月五日出生

子息 敏之（二六年）艶子（二九年）嘉之（三二年） スエ子（三四年）治之（三七年）

エスペランサ更生区

森元武雄 長野県諏訪郡米澤村字塩澤七六四〇番地ノ三号、明治三十六年十一月十三日出生、渡伯大正十一年二月七日、シカゴ丸、
在伯入植者

妻 正子 明治四十五年一月五日出生
子息 正雄（三〇年）利雄（三一年）武子（三五年）光雄（三七年）咲子（三八年）菊雄（四一年）福雄（四二年）八重子（四五年）丑雄（四九年）秀雄（五二年）

西尾隆三 聖州ソロカバナ線オウリンニヨス駅、一九二二年十二月一日出生

妻 梅子 大正十年五月二十五日出生

子息 良市（四三年）清子（四五年）隆義（四七年）勇（四九年）

野澤一衛 長野県諏訪郡米澤村字塩澤七六四〇番地、大正十四年二月二十八日出生、渡伯昭和十年三月二十五日、アリゾナ丸、在伯入植者

妻 宮子 一九二四年十一月二十一日出生

子息 和雄（四七年）靖雄（四九年）哲雄（五一年）

池戸信二郎 岐阜県郡上郡和良村、明治二十八年十二月一日出生、渡伯昭和九年六月二十二日、アラビア丸、在伯入植者

妻 かね 明治三十三年五月十一日出生

子息 伯介（二三年）陽一郎（三二年）万里子（三六年）絃八朗（四一年）

孫 寿世（五二年）

西見伍市 福岡県浮羽郡福富村字屋形 明治二十五年十二月二十日出生、渡伯昭和四年一月一日、博多丸、在伯入植者

妻 ハヤノ 明治二十八年六月十一日出生

子息 政行（一五年）同妻 武子（二四年）孫 慶重（四一年）清

子（四三年）秀和（四六年）すみ子（四八年）紀美子（五一年）
芳子（五三年）

亀田久義 広島県豊田郡瀬戸田町字澤村、大正二年十一月十日出生、渡伯昭和二年十月二十二日、河内丸、在伯入植者

妻 百々子 大正十二年

子息 和恵（四七年）剛（四九年）久光（五二年）

福岡昌信 島根県那賀郡渡津村字加戸、大正十一年五月一日出生、渡伯大正十五年十二月九日、神奈川丸、在伯入植者

實母 スエ 明治二十五年三月二十日出生

弟妹 トモエ （三二年）安昌（三五五年）

緒方時夫 山口県大津郡菱海村大字菱海、大正五年五月十日出生、渡伯大正十三年十二月二十九日、阿波丸、在伯入植者

妻 弘子 大正九年二月九日出生

子息 初江（四〇年）和子（四二年）朝子（四三年）弘一（四五
年）嘉和（四七年）ひとみ（四九年）そよ子（五二年）

シヤーカラ区

石川忠吉 山形県山形市香澄町、明治四十二年五月十日出生、渡伯昭和九年二月七日、サントス丸、在伯入植者

妻 トシ子 大正八年六月十七日出生

義母 フサエ 明治二十六年十一月三十日生

子息 雅宏(四四年)豊宏(四六年) アサ子 (四八年)道宏(五一年) 幹男(五三年)

西 敏雄 和歌山県東牟婁郡宇久井村字高津気、明治四十年九月十八日出生、渡伯昭和六年二月十三日、モンテヴィデオ丸、直来

實母 ムメ 明治十五年三月十七日出生

子息 孝子(三三年) 広子(三六年)

杉田要蔵 静岡県熱海市熱海町七六六、明治三十九年四月十三日出生、渡伯昭和五年九月十日、鎌倉丸、在伯入植者

妻 那み子 大正五年十月一日出生

子息 喜代司(三七年) 亜佐子(四〇年) 均(四二年) 阿矢子(四四年) 真佐子(四九年) 早苗(五一年) 武志(五三年)

平田光男 福岡県三井郡大堰(オセキ)村字管野、明治二十三年八月十日出生、渡伯昭和四年十一月十五日、ラプラタ丸、在伯入植者

妻 松代 明治二十五年

山口金丸 静岡県田方郡川西村字小坂、明治三十六年十一月十六日出生、渡伯昭和九年十月三日、ラプラタ丸、在伯入植者

妻 つる 明治四十三年三月三日出生

子息 忠夫（三四年）良夫（三七年）貞夫（三八年）行夫（四〇年）津美（トミ）夫（四四年）一枝（四六年）保夫（四八年）不二枝（四九年）光子（五二年）彰（五三年）

梶家好子 三重県南牟婁郡中立村、明治三十八年八月一日出生、渡伯昭和三年七月十九日、サントス丸、在伯入植者

子息 健治郎（三七年）喜久江（三九年）しづか（四一年）国男（四三年）勝子（四五年）和郎（四七年）

本田正雄 和歌山県海南市内海町、明治四十一年七月六日出生、渡伯昭和四年七月十二日、マニラ丸、バストス直来者

妻 たね子 大正四年九月二十三日出生

子息 道弘（三五年）忠臣（三七年）ナイル（四〇年）可南（四三年）ニナ（四六年）エウザ（四八年）

吉村米蔵 熊本県下益城郡年禰（トシネ）村大字今、明治二十一年三月一日出生、渡伯昭和三年六月二日、神奈川丸、在伯入植者妻 あき 明治四十年十一月十二日出生

子息 安光（二一年）同妻 まき（二九年）とし子（三一年）孫 孝志（五一年）晃（五三年）

今井銀一郎 岐阜県益田郡下呂町、明治二十八年十一月十五日出生、渡伯昭和九年六月二十二日、アフリカ丸、在伯入植者

妻 いちの 明治三十四年三月十日出生
子息 導子（四〇年）晴司（四二年）茂子（四五年）

大倉重一 岡山県都窪（ツクボ）郡妹尾町、明治四十五年一月十三日出生、渡伯昭和九年四月二十四日、ハワイ丸、在伯入植者
妻 八重子 大正六年三月九日出生

子息 寿美子（三五年）治郎（三七年）信子（四二年）武司（四五年）恵美子（四七年）幸子（四九年）洋子（五二年）

信太順治 北海道北見国紋別郡下湧別村字シユブノチナイ、大正二年七月十一日出生、渡伯昭和七年五月二十五日、アラビア丸、在伯入植者

妻 節子

實父 龍太郎 明治十八年出生

實母 トヨノ 明治二十一年生

實弟 龍吉 大正九年四月二十八日出生

同妻 チエ子 大正十四年七月一日出生

子息 幸子（四七年）光幸（四九年）明子（五一年）

實弟 寿雄 大正十二年出生

同妻 綾

子息 寿治（五二年）

實妹 チヤ子

菅野次郎右衛門 岩手県気仙郡気仙町、大正十年十一月十六日出生、渡伯昭和七年七月十七日、ラプラタ丸、在伯入植者

妻 梅子 昭和五年九月十二日出生

子息 賢吉（五四年）

實母 トメヨ 明治二十五年八月一日出生

實弟 三郎右衛門（三一年）

小澤 勇 岡山県津山市神戸、明治三十年十二月二十七日出生、

渡伯昭和九年五月二十一日、アリゾナ丸、在伯入植者

妻 慶子 明治三十二年一月元日出生

子息 将男（一九年）同妻 八重子（二五年）

孫 耕司（四四年）淑子（四五年）妙子（四七年）重毅（四九年）

貞子（五一年）可寿子（五二年）

寺岡 豊 岡山県津山市二宮、明治三十二年十二月二十日出生、

渡伯昭和九年五月二十一日、アリゾナ丸、在伯入植者

妻 久代 明治三十四年十月三日出生

子息 元男（二四年）同妻 操（二八年）治（三〇年）強（三六

年）千恵子（三九年）

孫 圭市（五一年）弘子（五三年）

貝田信男 北海道室蘭市、大正三年十二月十八日出生、渡伯昭和三年七月五日、サントス丸、在伯入植者

妻 鄙佐子 大正五年七月十八日出生
子息 久美子（四一年）佐枝子（四三年）徳昭（四五年）稚幸（五一年）

實父 為四郎 明治十五年一月十五日出生

中 央 区

佐伯時春 京都市左京区下鴨松ノ木町、明治三十五年三月二十一日生、渡伯大正十三年二月、河内丸

妻 喜代 明治三十五年九月二十四日

子息 時哉一九二九年六月二十三日生

同妻 ネイデー一九三四年九月十五日生

五男 ジューリヨ 一九四六年八月二十日生

孫 ネルソン 一九五二年四月三十日生 ローテル 一九五三年

六月三十一日生 ルシア 一九五四年十月二十日生

戸田 宰 北海道札幌市北七條、一九二六年一月二十四日生、渡伯昭和八年一月九日らふらた丸

妻 ジューリア一九三〇年九月十二日生

長女 恵子一九五四年四月二十五日

母 コト 一九〇二年十一月十日

生妹 種子 一九二九年三月八日生 恭子 一九三一年九月二十三日生）

西本清人 広島県安芸郡江田島村、明治三十五年八月十日生、渡伯昭和三年六月十三日、はわい丸

妻 トヨ 明治三十五年七月四日生

子息 昇一九二八年八月十日生 繁子 一九三〇年五月十七日生

美喜枝 一九三二年四月七日生 八重子 一九三三年十二月十

九日生 星美 一九三五年七月十四日生 美津枝 一九三七年八

月一日生

柴田重雄 栃木県上都賀郡足尾町、大正十一年二月九日生、渡伯

昭和九年十一月三日、ぶえのすあいれす丸

妻 澄江 大正十五年十一月二十六日生

子息 一幸 一九五〇年十一月二十七日生 研二 一九五二年五

月二十七日生 省三 一九五二年一月十九日生

未田修康 広島県広島市三條町、大正十二年一月一日生、渡伯昭

和三年二月五日生、かまくら丸

妻 カズエ 昭和二年九月二日生

子息 勲 昭和二十七年九月八日生 フシエ 昭和二十九年三月

十日生

横田正善 ブラジル生、一九二八年八月八日 生

妻 初枝 一九三三年五月十日生

幸初 一九五三年八月二十八日生

越智 守 愛媛県今治市大字大新田、大正三年七月六日生、渡伯
昭和三年八月十六日、まにら丸

妻 マサ 大正十二年十一月十九日生

朝子 昭和二十年一月十七日生 肇 昭和二十一年八月一
日生 清治 昭和二十三年十一月二日生 孝夫 昭和二十六
年四月十一日生

長尾隆夫 三重県名賀郡比奈知村 大正十一年九月三十日生、渡
伯昭和三年六月十五日 らぷらた丸

妻 雪子 大正十一年九月十四日生

子女郁子 昭和廿年三月三日生 完治 昭和廿一年七月二日生
暁子 昭和二十四年三月二日生 弘通 昭和廿五年九月八日生

田川七蔵 滋賀県伊香郡片岡村、明治三十六年五月十七日生、渡
伯昭和八年二月三日、ぶえのすあいれす丸

妻シズ一九〇三年五月十七日生

子女美津枝一九三十五年八月一日生 澄江 一九四〇年七月六日
生

藤原 亘 岡山県児島郡甲浦村大字宮浦、大正三年三月三十一日
生、渡伯昭和五年五月十三日、さんとす丸

妻 文子 昭和三年一月四日生

子女淑子 一九五二年二月七日生 稚文一九五三年九月十五日生

宮村雪江 山口県豊浦郡川中村、大正五年十一月二十八日生、渡伯一九一八年九月一日 はかた丸

子息 稔一九三八年十一月十五日生 嘉子 一九三四年二月十六日生 丈治 一九四八年三月二十八日生 笑子 一九四三年七月十三日生 テル子 一九五〇年十月十日生

母 ナヲ

杉山寅蔵 三重県上野市西山村、一八九六年三月二十日生、渡伯昭和十年三月一日、ラプラタ丸

妻 ミツ 一九〇一年六月七日生

子息恭吉 一九三〇年十一月二十四日生

岡田孫一 京都市左京区田中門前町、明治二十一年六月二十七日生、渡伯昭和九年九月二十七日、ぶらじる丸

妻 小春 明治二十八年十一月二十日生

高橋善實 福岡県浮波郡大石村、大正三年三月十三日生、渡伯大正三年九月廿七日、若狭丸

妻 節子 大正七年四月十三日生

子息 豊 昭和十三年七月二十三日生 保 昭和十五年十二月十九日 明美 昭和十八年十二月十四日生 司朗 昭和二十三年五月二十二日生 良子 昭和二十五年六月二十一日生

池田正雄 静岡県濱名郡曳馬村、明治三十二年七月十八日生、渡伯大正十五年九月十日 まにら丸

妻 よしの 明治四十一年三月十五日生

子息 瑞穂（昭和二年）伯子（昭和二年）優（昭和八年）登茂恵（昭和十一年）純子（昭和六年）

孫 正雄（昭和二十五年）よしの

熊谷興太夫 北海道中川郡中川村、明治十七年八月五日生、渡伯昭和六年五月十二日、ぶえのすあいれす丸

鷹啄孝江 埼玉県秩父郡小鹿野町、明治三十七年三月十七日生、渡伯昭和五年三月三日 もんてびでお丸

妻 みき 明治三十五年十二月二十九日

子息 武一郎（一九三四年）次郎（四二年） 塩江（三十一年）恵美香（三八年）

畑中忠雄 ブラジル生れ、一九一三年九月二十二日

妻 栄子一九一八年二月二十日生

子息 邦夫（一九四二年）健次（一九四四年） 長女陽子（一九四六年）次女静江（一九四八年）三女美千代（一九五一年）

岡本 勲 岡山県児島郡小阿浦、明治四十三年十一月二十一日生、渡伯昭和五年五月十五日、さんとす丸

妻 鈴子 明治四十二年十二月三十日生

子息 實（一九三七年）長女和子（一九三三年）次女福子（一九四二年）

喜多徳之助 和歌山県海草郡中之島村、明治三十年三月十八日生、
渡伯昭和九年九月三十日、もんでびでお丸

子女恵美子（一九四六年）

有北光徳 ブラジル生れ、一九三一年八月六日生

弟洋一（一九三四年）妹レイ子（一九三五年） 妹サチ子（一九三七年）

祖母 ミネ（明治十五年）

友谷千春 広島県安芸那熊野町

妻 和子 昭和六年七月

子息 春夫（昭和二十七年）

光石教嗣 岡山県上道郡高島村、大正十三年三月二十五日生

妻 美代子 大正十五年三月十七日生

子息 長男教一（一九四七年）次男教二（一九四九年）長女道子（一九五二年）

母 竹野

妹 美佐子（一九三六年）

菊池武雄 岩手県江刺郡玉星村、大正十一年三月十三日生、渡伯
一九三二年六月二十七日、まにら丸

妻 ツタエ 一九二八年六月十八日

子息 弘（一九四七年）カズ子（一九四九年） キミエ（一九五一年）稔（一九五三年）弟 万里男（一九三五年）

八重樫辰見 岩手県和賀郡二子村、明治四十一年二月廿日生、渡伯昭和十年三月一日、らふらた丸

妻 正子 大正六年一月十一日生れ

子息一男（一九四八年）たゑ（一九四一年） 光雄（一九四九年）
ジューリヤ（一九四六年） ルイザ（一九四三年）

八木喜十郎 愛知県海部郡佐織村、明治二十五年一月十日生、渡伯大正七年七月十七日 若狭丸

妻 ノシ 明治二十二年二月二十日生

白須富喜枝 広島県豊田郡鷺浦村、大正八年三月十一日生、渡伯大正十四年五月三十一日、河内丸

子息 幸夫（一九三七年）千代子（一九三八年）照夫（一九四〇年）節子（一九四二年）

房子（一九四四年）栄一（一九四七年）

伊勢忠夫 大分県東国郡来浦町、大正七年十月三日生、渡伯大正十五年十月三日生、らふらた丸

妻 スミエ 一九二十年八月十六日生

父 昌輝 明治十三年

子息 忠光（一九五三年）

甥 長瀬則男（一九四二年）

小田切 栄 福島県耶戸郡關歲村、一九二一年五月十日生
妻 君江 昭和二年一月一日生
子息 栄一（一九五一年）春美（一九五三年）

小倉秀男 岡山県吉備郡阿曾村、大正二年十一月二十四日生、渡
伯昭和四年二月十日、まにら丸
妻 光子 大正十年七月十七日生
子息 侑次（昭和十七年）喜美江（昭和十九年）博志（昭和二十
一年）千恵子（昭和二十四年）幸子（昭和二十六年）

桑元貞生 長崎県壱岐郡武生村、明治二十四年二月八日、渡伯大
正十一年十一月三十日、神奈川丸
妻 十力 明治三十年七月十七日生
子息 皓（一九二九年）昭己（一九三三年）松生（一九三七年）

山本一男 秋田県北秋田郡扇田町、明治四十年十一月四日生、渡
伯昭和二年六月十六日 神奈川丸
妻 和枝 大正二年十二月一日生
父 留蔵（明治十八年）母 サタ（明治二十五年）
子息 永子（一九三七年）恭子（一九四三年）畦子（一九四六年）

山本 力 秋田県北秋田郡扇田町、明治四十五年四月二十日生、
渡伯昭和二年六月十七日、神奈川丸

妻 香 大正四年四月三日生

子息 愛子（一九三七年）鉄身（一九三九年） 孝子（一九四〇年）
立身（一九四二年）参男（一九四三年）寛身（一九四六年）伯身
（一九四八年）

山根立太 香川県小豆郡大部村、大正五年十月一日生、渡伯もんでびでお丸

妻 美恵子 一九二二年四月三十日

子息 和子（一九四五年）彌生（一九四七年） 恒（一九五〇年）
朋美（一九五二年）敦子（一九五四年）

三野善一 香川県綾歌郡松山村、大正二年三月五日生、渡伯昭和五年四月二十九日、河内丸

妻 澄子 大正八年六月十五日生

父 藤次郎（明治二十二年）母 コイ （明治二十二年）

子息 善臣（一九四三年）和美（一九四二年） 紀子（一九四五年）
東美（一九四七年）鈴子（一九四九年）

妹 静子（一九二八年）

細江翁 岐阜県益田郡中原村、明治三九年三月十日生、渡伯昭和七年一月十七日、もんでびでお丸

妻 静子 明治四五年四月十七日生

子息 潔（昭和十二年）絢子（昭和十四年）勇（昭和十五年） 武

（昭和十八年） 純子 （昭和二十年） 彰（昭和二十二年）

永吉伝之助 鹿児島県顯娃郡十町村、明治三三年三月三日生、渡伯一九三三年六月三日 もんてびでお丸

妻 フヂ 明治三十二年三月五日生

子息 久男（昭和二年）妻 キヨ子（昭和五年）

孫 久江（昭和二十五年）清久（昭和二十七年） ヨシミ（昭和二十九年）

甥 道地静民（一九四四年）

菊地 豊 岩手県江刺郡玉星村、一九二八年一月二十九日生、渡伯一九三二年六月二七日、まにら丸

妻 房枝一九三二年九月一日

父 一八八八年

甥 本田 進一九三八年

平井俊夫 愛媛県喜多郡大淵町、大正元年二月十八日生、渡伯昭和二年六月十四日、らぷらた丸

妻 喜子 大正八年一月三日生

子息 道子（一九三八年）繁子（一九四〇年） 千代美（一九四三年）佐代子（一九四四年） 千鶴子（一九四七年） ノリ子（一九四九年） 孝一（一九五〇年） 晴美（一九五二年）

小田切敏夫 福島県耶戸部關歲村大字豊芦、 大正十四年五月二十
八日生

妻 クニ子 昭和六年十一月二十二日
生母 ユキ（明治十八年）

黒川三三夫 岡山県川上郡成羽町大字下名、一九二二年七月十二
日生、渡伯まにら丸

妻 文子 一九三三年一月二十六日生
子息 恒男（一九五一年）弘志（一九五四年）
母 リウ（明治二十四年）

高田重利 富山県東礪波郡平村、大正六年九月十三日生、渡伯昭
和三年三月二十二日、もんでびでお丸

妻 マリア一九二八年一月一日生
子息 英男（一九四八年） マリオ（一九五〇年）定児（一九五
三年）

千田留五郎 北海道釧路茂尻矢町、渡伯船名 不詳

妻 ミチ子
子息 早苗 忠明

後藤糸蔵 山口県大津郡深川町、明治四〇年十二月五日生、渡伯
昭和四年六月一日、らふらた丸

妻 ハナ子 明治四五年一月三日
生母 ツル 明治十年三月十一日生
子息 優（昭和八年）昇己（昭和十一年）隆子（昭和十四年）誠
（昭和十七年）仁志（昭和十九年）英一（昭和二十一年）昭英（昭和二十三年）行夫（昭和二十五年）

穂井田一夫 岡山県吉備郡箭由村、一八九八年三月二十日生、渡
伯一九二五年五月一日 鎌倉丸
子息 静夫（一九三二年）保夫（一九四〇年）

長瀬国松 岐阜県恵那郡付知町、明治二十一年八月十五日生、渡
伯大正十三年八月五日 神奈川丸
妻 チトセ 明治三五年四月二十三日
子息 和子（一九三七年）正敬（一九四〇年）千枝子（一九四一年）

長谷川スエ 新潟県北蒲原郡神山村、一九〇五年四月二十六日、
渡伯一九二九年六月二日、らふらた丸
子息 幸子（一九三〇年）洋子（一九三三年）宏（一九三九年）

増田正芳 香川県香川郡佛生山町、大正八年 八月八日生、渡伯
昭和五年二月十一日、まにら丸
妻ユキ子 大正十四年八月二十九日

子息 多美子（一九四九年）政代（一九五三年）

稲垣義雄 伯国生れ、一九三二年一月七日生

母 はな 明治三十年八月二十日

吉田房雄 ブラジル生れ、一九二九年十一月十日生

妹 八重子（一九三二年）君子（一九三六年） 弟 武雄（一九三九年）妹 幸子（一九四三年）

大崎五郎 新潟県南蒲原郡見附町、明治三十四年十二月十日生、
渡伯昭和九年二月五日 さんとす丸

妻 マツ 明治三十六年五月七日生

子息 弘（昭和三年）葉子（一九一三六年）和男（一九三九年）優
理子（一九四一年）三郎（一九四四年）

梶山茂平 静岡県小笠郡中村、明治四十一年 十月一日生、渡伯
昭和七年十一月十六日、 博多丸

妻 ツヤ 明治四十四年二月二十三日生

子息 敏雄（一九三一年）三千代（一九三八年）義弘（一九四三
年）ヒサ子（一九四五年）

渡部信夫 広島県安芸郡江田島村、明治三十一年三月二十四日生
子息 トシ子、イヨ子、栄一、チエ子、セリア、スミ子、カツ子、

信芳、ミチノ、以上、渡伯昭和三年三月十日、まにら丸

佐藤福太郎 岩手県稗貫郡花巻町、明治三十一年四月十五日生、
渡伯大正十一年五月二十五日、神奈川丸

妻 馨 明治三十八年七月十九日生

子息 操一（大正十五年）操一妻 千代（昭和七年）巖（昭和八年）寛（昭和十年）志津子（昭和六年）

孫 ミルトン操（昭和二十九年）

藤川義弘 長崎県北高来郡諫早町、一九二三年十月七日生、渡伯
昭和二年九月二十四日、まにら丸

妻 美恵 一九二二年四月二十六日

子息 博明（一九四七年）朱實（一九五〇年）義明（一九五四年）

村松寛之助 静岡県周知郡園田村、明治十一年十月一日生、渡伯
昭和十三年五月、らぶらた丸

妻 とり

松崎貞則 鹿児島県興日置郡伊集院町、明治三十六年八月二十九
日生、渡伯昭和六年九月一日、らぶらた丸

妻 千枝

子息 鳳子（一九四二年）禮子（一九四四年）千春（一九四六年）
千種（一九四八年）左利（一九五〇年）道子（一九五二年）

高薄勇次 北海道細走郡女満別村、明治二十八年二月十日生、渡伯昭和八年十二月二十八日、ありぞな丸

妻 明枝 明治二十七年六月

子息 弘(昭和四年)弘妻 信子(昭和八年) 美智子(昭和九年)
孫 義徳(一九五一年) ひろみ(一九五三年)

草野末吉 福島県石城郡神谷村、大正十二年四月十九日生、渡伯昭和七年十月五日、さんとす丸
妻 二三恵 大正十四年十一月五日

高田登 愛知県東賀茂郡下山村 大正七年一月十日生、渡伯昭和八年八月二十六日、あらびあ丸

妻 キヨ 大正七年十二月十七日生
子息 義男(昭和十九年)征子(昭和二十一年)伸利(昭和二十三年)登生(昭和二十五年)

織田守男 長崎県北高来都諫早町 明治二十八年十一月二十六日生、渡伯昭和二年九月一日、まにら丸
妻 てづ 明治三十三年三月十五日生

藤 好次郎 福岡県筑紫郡安德村、大正三年五月八日生、渡伯昭和四年八月十二日、まにら丸

妻 芳子 大正八年六月十三日生

子息 隆一（一九四三年）隆男（一九四五年） 敦子（一九四九年）
弘子（一九五二年）

白井久夫 和歌山県日高郡内原村、大正十五年十月十三日生、渡伯昭和四年六月二十八日、博多丸

母 しなえ 明治三十三年十二月十五日生
弟 務（昭和四年）

小松長五郎 山形県北村山郡長瀬村 明治四十五年一月十五日生、渡伯昭和十三年五月七日、らぷらた丸

妹 ソヨ子 大正十年五月八日生

緑川とく 福島県東白川郡宮東村 明治四十二年十二月三十一日、渡伯昭和八年六月三十日、あふりか丸
息子 利雄（一九三四年）五郎（一九四一年）

橘 秀雄 北海道札幌郡江別町、一九一三年十一月五日生、渡伯一九三四年十二月二日 さんとす丸

妻 キヨミ 一九二三年二月一日

子息 聖子（一九四二年）美子（一九四四年）修（一九四六年）
幸子（一九四八年）恰子（一九五一年）

湯井シズエ 大阪府泉北郡東陶器村 大正二年五月九日生、渡伯
昭和二年三月二十二日 もんてびでお丸

子息 元弘（昭和八年）弘子（昭和九年）昇（昭和十一年）貞子
（昭和十五年）弘三（昭和十六年）

松川周昭 愛媛県西宇和郡三机村、明治三十一年七月十五日生、
渡伯一九三七年五月三十日、船名不詳
妻 キクノ 明治三十四年十二月三十日生

松川一二（昭和六年）那生（一九三七年）五十生（一九四二年）
七五三生（一九四四年）三四恵（昭和三年）三幸恵（昭和八年）
節恵（一九四〇年）

左居 博 岡山県久米郡朽穴村、一九一九年三月二十六日生、渡
伯一九二五年十二月一日、はわい丸
妻 静枝 一九二四年五月二十八日生
子息 富恵（一九四七年）年恵（一九四八年）

松原ミツル 香川県木田郡平井町、明治三十五年十月十三日生、
渡伯昭和三年八月三日 若狭丸

子息 ミエ子（昭和四年）チヨ子（昭和七年） 政治（昭和十年）

茂庭徳亮 岩手県江刺郡愛宕村、大正三年六月二十七日生、渡伯
一九二二年五月二十五日、神奈川丸

妻 トク 大正六年二月三日生

子息 三四子（昭和十二年）一治（昭和十四年）誠（昭和十六年）
千代（昭和十八年） 梅子（昭和二十一年）康夫（昭和二十四年）
栄子（昭和二十六年） パウロ （昭和二十八年）

古澤清次 佐賀県三養基郡旭村、明治二十四年五月二十五日生、
渡伯昭和五年二月二日 若狭丸

妻 カツ 明治二十八年四月五日生

弟 市次（大正三年）市次妻 清子（一九二〇年）市次子息 賢
一（一九四四年） フサ子（一九五一年） サチ子（一九五二年）ミ
サ子（一九五三年）

古川鶴一 岡山県児島郡福田村大字北瀬、明治十九年二月八日生、
渡伯大正十五年十月十五日、もんでびでお丸

妻 初子 明治三十三年一月二十日生

子息 勝（一九二六年）勝妻 ヤス子（一九二五年）
孫 勝彦（一九五三年）

村上寿太 岡山県倉敷市粒浦、明治二十六年十二月二十日生、渡伯昭和五年三月三日、もんでぴでお丸

妻 小杉 明治三二年四月五日生

子息 平土（大正五年）栄（昭和十九年）

岡村林太郎 鹿児島県揖宿郡穎姓村別府、明治三九年十月九日生、渡伯昭和八年三月十九日、ありぞな丸

妻 時子 明治四十一年九月二十八日生

子息 信（一九三七年）陸（一九四一年）フサ（一九四三年）キサ（一九四八年）清（一九五一年）

中川誅須（ルイス）ブラジル生れ、一九二四年七月十七日生

妻 千代子一九二七年四月八日生

子息 照美（一九四九年）昇（一九五一年）セルソ（一九五二年）弘（一九五四年）

竹内 清 島根県能儀郡比田村 大正六年五月三〇日生、渡伯昭和四年五月三十日、かながわ丸

妻 みさの 大正十一年六月十二日

子息 よし江（一九四四年）きよ子（一九四五年）隆俊（一九四七年）さち子（一九四九年）

古田道助 山口県吉敷郡阿知須町、明治四十四年十二月七日生、渡伯昭和四年二月二日、まにら丸

妻 コツサ 大正六年七月二十日生れ

子息 行雄（一九三八年）茂（一九三九年）一枝（一九四一年）照子（一九四二年）邦子（一九四五年）トシ子（一九四七年）清（一九五〇年）

佐藤 勇 福岡県嘉穂郡千年村大字千年、大正五年十月三十日生、妻 キワ 大正十四年十二月三日生

子息 清子（昭和二十年）勇一（昭和二十一年）正生（昭和二十五年）清志（昭和二十七年）守（昭和二十八年）一男（昭和二十九年）

東 利徳 熊本県菊地郡北合志村大字小原、明治三十五年一月六日生、渡伯大正二年十月二十八日、帝国丸

妻 アサヲ 一九〇六年十二月二十九日生

子息 ジャイル（一九二九年）ヒロ子（一九三八年）利喜男（一九三五年）光男（一九三九年）輝男（一九四〇年）明美（一九四二年）登義（一九四五年）

戸田源作 北海道川上郡弟子堀村字当別御料地、明治三十九年五月十七日生、渡伯昭和八年三月二十九日、ありぞな丸

妻 ツイ子 明治四十四年十二月八日生

子息 キミエ（一九三七年）

柳浦宗一 島根県松江市灘町、明治二十五年四月二十四日生、渡伯昭和五年三月二十一日、らふらた丸

妻 クニ 明治二十四年十二月二十日生

子息 龍太郎（大正五年）龍太郎妻 正子（大正十五年）省三（一九二五年）三男妻ユキ子（一九二八年）

孫 和恵（一九五三年）禮蔵（一九二八年） 四男妻 栄子（一九三二年）

成元治吉 鹿児島県揖宿郡穎姓村別府、明治三十三年十月二十六日生、渡伯昭和八年三月二十三日、ありぞな丸

子息 邦博（一九三八年）

本田一男 岡山県久米郡大併和村大字境、明治三十五年十二月二十五日生、渡伯昭和四年七月二日、博多丸、直来

妻 寿子 明治三十九年五月二十四日生

子息 誠（昭和九年）伴江（大正十四年）満里子（昭和十二年）母 小竹 明治十四年

落亀作市 香川県善通寺市字生野、明治三十五年五月十日生、渡伯昭和十年十一月二十二日、アフリカ丸

妻 ヤスエ 明治四十三年三月十五日生

子息 敏文（昭和八年）正孝（昭和十年）登子（昭和十二年）

作間幸作 山口県下ノ關市彦島町、大正九年三月五日生、渡伯昭和三年六月二十三日、さんとす丸

妻 キク 大正十一年九月二十日生

子息 忠信（昭和二十年）常子（昭和二十二年）正幸（昭和二十四年）敏夫（昭和二十七年）茂子（昭和二十九年）

伊藤トキ子 山口県阿武郡徳佐村、明治三十八年八月二十二日生、
渡伯大正九年九月二日、河内丸

子息 チサト（一九三一年）正義（一九三四年）美枝子（一九三六年）昭男（一九四〇年）

平尾 實福岡県田川郡採銅所村、明治三十九年八月四日生、渡伯
昭和八年八月二十九日、あらび丸

妻 鈴木モト 明治三十九年九月六日生

宮崎将義 北海道札幌市外白石村、大正十年十月十日生、渡伯昭
和七年六月二十九日、まにら丸

妻 マリア 一九二八年二月九日生

子息 清（一九五二年）春美（一九五二年）隆（一九五四年）

隠岐澄雄 鳥取県堺市、大正五年四月二十七日生、渡伯大正十三年八月十六日、かなだ丸

妻 芳子 大正十一年七月二十一日生

板垣寿勢男 山口県阿武郡徳佐村、大正十二年六月二十六日、ブラ
ジル生れ

妻 悦子 一九三一年六月二十五日生

子息 千恵子（一九五三年）

裔藤院資 神奈川県足柄下郡湯河原町城堀、 明治三十八年二月二十六日生、渡伯昭和二十八年八月十一日、あめりか丸

妻 本子 大正五年三月十六日生

子息 京紀(昭和十一年)正晃(昭和十四年) 東悟(昭和十六年) 充勇(昭和十九年)加容子(昭和二十二年) 克栄(昭和二十五年)

守越外治 大阪府北河内郡四窓村字土島頭、 明治三十九年五月廿日生、渡伯昭和三年六月十三日、はわい丸

妻 まつい 明治四十一年十一月三日生

子息 誠一(一九三二年)悟(一九三三年) 康男(一九三五年) 敏子(一九四二年)

植木西二 長野県高井郡豊洲村字小島、明治四十二年一月十三日生、渡伯大正八年五月二十一日、サヌキ丸

妻 正子 大正二年一月一日生

子息 茂彬(昭和十年)正彬(昭和十四年) 博子(昭和十八年) 修子(昭和二十年) エドワルド良二 (昭和二十四年)

脇山俊夫 佐賀県西松浦郡伊万町、一九三四 年十月十四日生、渡伯昭和五年三月二十九日備後丸

祖母 静江(明治十五年)次弟 暢彦(一九三六年)同 武雄(一九三八年)

渡邊 含 熊本県菊地郡「解説不可」ページ?」川村、明治三十九年八月十五日生、渡伯昭和十一年四月二十九日、あふりか丸妻 チトエ明治三十五年三月二十五日生
子息 甲子男(昭和八年)

東 ヴィットリオ 伯国生、大正十四年九月 九日生
妻 栄 大正十四年九月二十四日
子息 ヴイルト巖(一九五二年) マルタヒトミ(一九五四年)

能見利八 福岡県鞍手郡宮田町鶴田、明治二十九年十二月二十九日生、渡伯昭和八年八月一日、ブエノス・アイレス丸妻 ヒデノ 明治三十一年七月十七日生
子息 眞一(昭和四年) 幸男(昭和六年)

林 武七 長野県上高井那須坂町、大正二年十一月二十四日生、渡伯昭和二年三月二日 もんてびでお丸妻 久子 大正九年一月二十八日生
子息 勝己(一九三八年) 千代香(一九四一年) 貞夫(一九四二年) 光夫(一九四四年)

中村国政 長崎県長崎市稱佐町三丁目、明治四一年四月三日生、
渡伯大正十三年六月二十六日、シカゴ丸

妻 ヒサ子 大正二年八月二十五日生

子息 房江（一九三一年）幸子（一九三三年） 千恵子（一九三五年）三枝子（一九三七年） 讓治（一九四一年）瑛（一九四四年）

重道永栄 鳥取県東伯都北谷村字長谷、大正二年九月四日生、渡
伯昭和十年四月二十九日、ブエノス・アイレス丸

妻 千代子 大正七年三月七日生

子息 紀一（一九四一年）領子（一九四二年） 伸子（一九四四年）
栄子（一九四九年）晃（一九四五年）延夫（一九五一年）

後藤利一 愛知県海邊郡佐織村字諸鋏、明治三十一年十一月二十
六日生、渡伯大正八年七月十四日、鎌倉丸

妻 皐月 明治三十四年五月二日生

子息 利夫（昭和六年）春江（昭和七年）美佐子（一九三五年）豊
子（一九三七年）利身（一九三九年）久子（一九四〇年） マリ子
（一九四六年）政子 四男妻（昭和三年）

島本藤吉 大阪府豊能郡北里島村、明治二十六年十一月十日生、
渡伯昭和九年九月二十三日、はわい丸

妻 サノ 明治二十六年二月二十一日生

母 エイ（明治四年）

子息 進 (明治四十五年)進妻 文子(大正七年)昇(昭和三年)

山内武彦 熊本県土益城郡六嘉村字井寺、大正七年九月六日生、
渡伯昭和九年五月廿五日、ありぞな丸

妻 幸恵 大正十二年十月九日生

子息 孝徳(昭和廿年)高志(昭和廿三年) 光男(昭和廿五年)
孝幸(昭和廿八年)

川邊正身 福岡県京都郡節丸村字節丸、大正三年十二月十五日生、
渡伯大正二年十一月一日、若狭丸

妻 キミエ 大正八年六月一日生

子息 瑠美(昭和十八年)讓次(昭和廿年) 正幸(昭和二十一年)
英領(昭和二十三年) アキエ (昭和二十五年)豊美(昭和二十
六年)弟 和義(昭和十四年)妹 昭子(昭和三年) 妹 千鶴
子(昭和六年)妹 満恵(昭和九年)

古賀 茂 福岡県朝倉郡大福村、明治四十年三月十三日生、渡伯
大正二年二月二十八日 帝国丸

妻 時子 大正四年八月十八日生

子息 實(昭和十六年)栄子(昭和十三年) 哲夫(昭和十八年)
節子(昭和二十一年) 敏子(昭和二十三年)茂信(昭和二十五年)
八重子(昭和二十七年)

奥田民蔵 鳥取県八頭郡大御門村、明治三十一年十一月二十日生、
渡伯大正七年七月、若狭丸

妻 波子 明治三十一年

子息 耕 千恵子

池田藤茂 愛媛県温泉郡東中島町、明治三十四年六月七日、渡伯
大正三年五月十日、帝国丸

妻 孝枝 明治四十三年一月十一日生

子息 米蔵（一九三二年）利恵子（一九三五年）平次郎（一九三
七年）茂（一九四二年）和栄（一九四五年）万里男（一九四七年）

阪東哲二 和歌山県月高郡野口村 大正七年一月二十日生、渡伯

昭和六年五月七日、ぶえのすあいれす丸

妻 喜美代 一九三十年一月二十七日生

子息 文雄（一九五二年）悠子（一九五三年）

伊藤栄登 山口県阿武郡徳佐村、明治四十五年七月十二日生、渡
伯一九二六年九月十日、まにら丸

妻 妙子 一九一九年二月十五日生

子息 千枝野（一九四〇年）貞子（一九四一年）登（一九四三年）
久子（一九四六年）義雄（一九四九年）男（一九五一年）

大河内勝三 東京府荏原郡浦田町、一八八八年九月十四日生、渡伯一九二三年十一月二十七日、まにら丸
妻 やす 一八九四年九月二十七日生
子息 實（一九二三年）

山川則満 熊本県天草郡本渡市、大正七年十二月二十二日生、渡伯、一九二九年十月二十三日、はわい丸
妻 富美子 一九二二年八月三十一日生
子息 彌生（一九四七年）翠（一九四九年）忍（一九五〇年）

古澤高正 岡山県浅口郡黒崎村、明治二十二年一月、渡伯昭和二年七月二十二日、若狭丸

妻 露子
子息 茂照 千鶴子 敬一 勉 昌子

中野米太郎 和歌山県伊都郡花園村、明治三十年十二月二十日生、渡伯昭和四年四月十四日、らぷらた丸
妻 チフジ 明治三十四年一月二十六日生
子息 万里（一九三二年）逸子（一九三四年）

板垣泰熊 山口県阿武郡徳佐村 明治三十二年四月三十日生、渡伯大正十年七月二日、河内丸
妻 朝子 明治四十二年八月十五日生

子息 泰（一九三三年）泰重（一九三五年） 静子（一九三七年）
妙子（一九四一年）栄子（一九四四年）

中城 桂 宮崎県東臼杵郡細見村、大正十年七月二十二日生、渡
伯昭和四年十二月十日、さんとす丸

妻 和子 大正十四年九月二十八日生

子息 三千代（一九四九年）美奈子（一九五〇年） マリ子（一九
五二年）博人（一九五三年）

増田良雄 香川県香川郡高松、大正十一年四月一日生、渡伯年月
日不詳 まにら丸

妻 栄子 昭和四年一月二十三日生

子息 鑾子（昭和二十六年）絹代（昭和二十七年）

前田幸一 山口県油谷町、明治二十三年十二月十日生、渡伯大正
十五年三月十九日、まにら丸

妻 ヒサシ 明治三十三年六月二十八日生

子息 育人（大正十一年）育人妻栄子（昭和三年）清子（昭和五
年）孝子（昭和七年） 栄人（昭和二十七年）久江（昭和二十五年）
幸治（昭和二十八年）

渡邊善和 愛媛県同桑郡円原町、大正四年五月十三日生、渡伯昭和二年七月二十四日、若狭丸

妻 チエ 一九二〇年一月十一日生

子息 マリオ (一九三九年) シズエ(一九四〇年) トシエ(一九四二年)

前山義雄 和歌山県海南市、大正三年二月十八日生、渡伯昭和九年六月一日、ぶえのすあいれす丸

妻 ツル 大正八年三月十日生

子息 義弘(一九三八年)登美(一九四〇年) 禮志(一九四一年) 裕子(一九四三年) 憲志(一九四五年) 曙志(一九四七年)

渡邊次郎吉 三重県松坂市、明治二十年六月二十日生、渡伯昭和七年六月二十日、らふらた丸

妻 くに 明治二十九年一月二十六日生

子息 光子(昭和四年) 洋子(一九三四年)

小池源衛 福島県母達郡涉川村、明治三十六年十一月十二日生、渡伯昭和四年九月三十日、鎌倉丸

妻 花代 明治三十九年四月十日生

子息 ミドリ(一九三六年) ヒトミ(一九三七年) トミエ(一九四一年)

佐々木久輔 岩手県盛岡市厨川村、明治四十年十月二十三日生、
渡伯昭和五年九月一日、もんでびでお丸

妻 サト

子息 有郷（一九三四年）君恵（一九三二年）稔（一九三七年）
照代（一九三九年）總子（一九四五年）徹（一九四七年）綾子（一
九四九年）

母 マン

白須克治 広島県豊田郡鷺浦村、大正六年六月十五日、ブラジル
生

妻 富子 大正十四年十一月二十三日生

子息 マリ子（昭和二十一年）幸一（昭和二十四年）勇治（昭和
二十六年）

木村久摩一 愛媛県越智郡波方村、明治四十四年四月五日生、渡
伯昭和五年三月三日、もんでびでお丸

妻 益子 明治四十四年十一月二十五日生

子息 伶子（一九三一年）鈴美（一九三三年）美佐江（一九四七
年）久江（一九四九年）久男（一九五一年）

上杉研司 北海道空知郡赤千村、明治三十年三月廿五日出生

妻 富栄 明治三十五年二月廿一日生

子息 雅彦（三七年）祐子（四〇年）

福森長助 鹿児島県始良郡加治木町、明治二十二年十月十日生、
渡伯大正六年六月十五日、若狭丸

妻ユイ 明治二十九年十一月廿九日生

子息 照夫（一六年）同妻 百合子（二〇年）

孫 広志（四三年）愛香（四七年）直美（四九年）秀人（五二年）

藤原荒次郎 岡山県倉敷市粒浦、明治廿八年一月四日生、渡伯昭和五年三月七日、モンテビデオ丸

妻 寿 明治三十二年五月三十日生

子息 作久栄（二三三年）同妻 良枝（三十一年）万太郎（二十九年）勝（三三年）勇（三六年）千恵子（四〇年）

亀田喜楽 広島県豊田郡瀬戸田町、明治四十三年四月十三日生、
渡伯、昭和二年八月二十九日、河内丸

妻 雪枝 大正六年十月七日生

子息 善一（三六年）頌（三九年）謙慈（四二年）善美枝（四四年）ルミ（四六年）義信（四七年）睦男（四九年）エレナ（五一年）

浅原島雄 熊本県葦北郡、一九二三年九月廿七日生、渡伯昭和十二年三月廿九日、アリゾナ丸

妻 愛子一九二八年十月廿三日生

子息 由美子（五二年）千津子（五三年）

實母 たる子 一八八九年十月二日生

實弟 義雄（二七年）

相田幸吉 東京府北豊島郡南千住、明治三十四年四月二日生、渡
伯昭和二年十一月十六日、若狭丸、
妻 カツヨ 明治三十八年七月二十八日生
養母 トウ 明治九年四月十五日生
養女 瀧澤イリア（三七年）

谷田部淳 福島県石城郡草野村、大正十二年八月一目生、渡伯昭
和七年十月十六日、サントス丸

岡本一二 岡山県都窪郡茶屋町、明治四十二年一月廿七日生、渡
伯大正十五年十二月二十五日、ラプラタ丸
妻 百十代 大正四年四月廿五日生
子息 利信（三七年）傳人（三九年）巧（四五年）恵子（四九年）

瀧本貞雄 和歌山県日高郡西内原村、大正五年二月十八日生、渡
伯昭和四年七月一日博多丸
妻 キミノ 大正五年九月二十日生
子息 清子（四〇年）勇（四二年）

相川守 群馬県勢多郡黒保狼村、大正四年八月一日生、渡伯昭和
五年五月廿六日、神奈川丸
妻 相川ミチ子 大正六年十二月十日生
子息 仁（四一年）マス子（四三年）ヒロ子（四八年）公治（五
三年）

矢野俊平 大阪府大阪市、大正六年一月八日生、渡伯昭和九年三月廿八日、アリゾナ丸

實母 たね 明治三十三年四月二日生

實妹 保子（三三年）徳子（三八年）

黒川繁定 岡山県川上郡成羽町、大正二年五月廿八日生、渡伯昭和三年八月十五日、マニラ丸

妻 仁恵 大正六年三月廿三日生

子息 弘美（四一年）美登利（四六年）智恵（四七年）富恵（四九年）百合恵（五一年） 昭美（五二年）

森 重清 山口県玖珂郡御庄村、明治四十三年一月十日生、渡伯大正十五年七月三十一日、若狭丸

妻 扶美 大正六年一月一日生

子息 義明（三六年）広司（三七年）春夫（三九年）信正（四一年）逸男（四四年）和美（四六年）栄治（四九年）めぐみ（五二年）

古賀純夫 福岡県筑紫郡大野村、大正九年八月二十五日生、渡伯昭和四年八月十二日、マニラ丸

妻 一枝 大正十三年九月二日生

子息 清美（五一年）

内館新太郎 岩手県下閉伊郡花輪村、明治四十二年二月一日生、渡伯昭和八年八月二十六日、アラビア丸

妻 米子 大正二年六月七日生

子息 叔子（三六年）則子（三七年）新一（三九年）澄子（四四年）時子（四六年）見栄子（五二年）常次（五四年）

小西ふみね 和歌山県東牟婁郡新宮市、明治四十年十一月十日生、
渡伯昭和十一年十月二日、モンテビデオ丸

子息 恵子（三〇年）宏實（三四年）

土井惣平 神奈川県横須賀市中里町、明治二十九年十一月二日生、
渡伯昭和七年十一月十日、サントス丸

妻 可津美 明治三十八年七月十一日生

子息 一郎（二八年）敏子（三四年）

谷口 章 兵庫県氷上郡生郷村、明治三十五年二月二十三日生、
渡伯昭和二年十月二日、鎌倉丸

妻 祐子 明治四十一年十一月七日生

子息 淳（三二年）滋（三七年）幸子（四〇年）朋枝（四四年）ミ
ルトン（四八年）

栢野益興 広島県広島市平塚、明治三十八年七月一日生、渡伯昭
和四年五月廿日、サントス丸

子息 憲一（二九年）喜久子（三八年）瀧（四三年）

石橋三雄 三重県南牟婁郡阿田和町、明治三十九年二月十六日生、
渡伯大正十四年二月十六日、河内丸

妻 文子 明治四十三年九月十二日生

子息 啓子（三六年）武（四四年）節夫（四七年）朝三（四九年）喜久子（五二年）正人（五四年）

浅田正義 兵庫県神戸市長田村、明治四十二年十一月五日生、渡伯大正十四年一月十八日、シカゴ丸

妻 美恵 大正七年十一月十八日生

子息 鉄男（四一年）昭二（四三年）敏夫（四六年）和子（五〇年）睦子（五三年）

吉田平三郎 秋田県北秋田郡前田村、明治二十二年八月二十二日生、渡伯昭和九年六月三十日、マニラ丸

妻 菊枝 明治三十年一月十三日生

子息 耕平（二四年）和子（二七年）萬寿子（二九年）哲男（三八年）

梅田ふみ 京都府興謝郡岩屋村、大正五年一月十九日生、渡伯昭和七年七月九日、モンテビデオ丸

子息 恵美子（三六年）登美子（三八年）猛（四〇年）南美恵（四二年）茂子（四五年）

角南 勉 兵庫県飾磨郡飾磨町、明治四十三年八月四日生、渡伯昭和五年九月廿七日、ブエノス・アイレス丸

妻 政代 大正三年一月二日生

子息 妙子（三八年）文子（四〇年）政一（四四年）イミ子（四六年）健一（四十八年）耕作（五一年）

田結庄武夫 兵庫県城崎郡奈佐村、明治四十一年一月十五日生、
渡伯大正十三年二月十八日、河内丸
妻 あや子 大正四年九月二十五日生
子息 松江（四二年）ジョージ（五〇年）

及川 充 岩手県江利都藤里村、大正六年十一月二十日生、渡伯
昭和八年三月二十二日、サントス丸
妻 富美 大正十三年十月二十一日生

宇都宮米子 愛媛県東宇和部俵津村、明治四十一年九月廿九日生、
渡伯昭和九年六月二日、ブエノス・アイレス丸
子息 シェリ（三一年）丈（三八年）タアナ（三七年）エツ子（四
一年）千津（四六年）

實母 キクノ 明治十六年九月一日生

河野シゲノ 新潟県南魚沼郡塩澤町、明治三十四年十二月十五日
生、渡伯昭和九年十月三十日、ブエノス・アイレス丸
子息 延泰（三一年）洋子（三四年）世根子（三七年）良雄（四
〇年）

古家一次 熊本県鹿本郡内田村、明治廿八年五月二日生、渡伯昭
和七年十一月廿六日、マニラ丸

内藤重太郎 広島県安佐那戸山村、明治二十三年三月二十二日生、
渡伯大正七年十二月二十九日、ハワイ丸

妻 ハルノ 明治二十九年十月五日生

子息 昌宗（三九年）芳枝（四四年）逸治（四六年）

原田宗七 山梨県甲府市愛宕町、明治二十五年五月二十五日生、
渡伯昭和九年十二月四日、サントス丸

妻 セツ 明治三十五年二月十五日生

子息 丸子（三一年）ヒフミ（三五年）稔（四二年）

佐藤武臣 熊本県熊本市光琳寺町、明治二十八年一月一日生、渡
伯昭和五年五月二十八 日博多丸、

妻 スギノ 明治三十九年一月二十五日生、

子息 武則（二八年）日本人（三〇年）信之（三三年）謙之介（三
六年）忠典（四一年）孝子（四六年）武子（四八年）

大久保健次郎 福岡県福岡市上金屋町、明治三十七年九月廿八日
生、渡伯昭和八年三月三十日、アフリカ丸

妻 好子 大正三年七月二十五日生

子息 勲（三五年）ミヅ子（三八年）正（四〇年）明（四三年）勝
（四八年）シズカ（五一年）

石橋長児 三重県南牟婁郡阿田和町、明治三十二年十月二十四日生、渡伯昭和十年三月二十六日、アリゾナ丸

妻 とし子 明治四十四年三月十日生

子息 みち子（三三年）通之進（三九年）寿子（四八年）

竹内清一 福島県郡山市麓山町、明治四十三年八月六日生、渡伯

昭和八年二月三日、ブエノス・アイレス丸、

妻 郁子 明治四十二年九月一日生

子息 美和子（三七年）正弘（四〇年）光雄（四四年）富士子（三四年）美登里（四一年）

湯井浅治 大阪府泉北郡東陶器村、明治四十二年七月二十二日生、

渡伯大正十五年十二月十九日、ラプラタ丸

妻 光子 大正五年十月二十日生

子息 保温（三七年）房枝（三四年）弘恵（四〇年）拓司（四一年）恵美代（四四年）重利雄（四六年）哲朗（四九年）

太郎田衛 石川県石川郡鞍月村、大正三年一月十六日生、渡伯昭和二年十二月八日 神奈川丸

妻 ミドリ 大正六年四月四日生

子息 ジュリオ（四三年）エウリツコ（四四年）オルランド（四五年）ジュスチーノ（四六年）レオノール（四八年）エドワルド（五〇年）

實母 すゞ 明治二十二年十二月十八日生

崎田春一岩手県下閉伊郡宮古町、大正十二年一月五日生、渡伯八年八月廿八日、あらびあ丸

妻 千歳 大正十三年六月十九日生

子息 博一（四九年）晴一（五〇年）

別府守隆 福岡県浮羽都筑陽村、大正四年一月十三日生、渡伯昭和九年十二月二十三日、マニラ丸

妻 タマ子 大正十年八月三十一日生

子息 栄子（四四年）由美子（四六年）重臣（四七年）

上西泰治 和歌山県海草郡長谷毛原村、一九〇九年九月十五日生、渡伯大正十五年九月十五日、マニラ丸

妻 君子一九一二年二月二十一日生

子息 繁行（三三年）寿雄（三五年）勉（三八年）昭（四二年）

多田忠太郎 岩手県下閉伊郡鱒澤村、明治二十七年十月二十六日生、渡伯昭和四年十二月十六日、博多丸

妻 千代 明治三十三年五月二十四日生

子息 文子（二四年）昭（二六年）實（三二年）須磨子（三五年）功（三四年）

西野仲蔵 兵庫県神戸市月見山本町、明治三十年九月二十四日生、
渡伯昭和八年六月二十三日、ハワイ丸

妻 まつえ 明治三十八年二月二十日生

子息 義明（二六年）鉄雄（三一年） マリ子（三四年）靖子（三
六年）光夫（三九年）朝代（四一年）良雄（四四年）昭子（四八
年）

山内武彦 熊本県上益廉郡六嘉村、大正七年三月六日、渡伯昭和
九年五月廿五日、アリゾナ丸

妻 幸恵 大正十二年十月十日生

子息 孝徳（四六年）高志（四九年）三男（五一年）孝幸（五三
年）

山石崎惣吾 福島県田村郡高野村、明治三十三年三月廿三日生、

渡伯昭和八年八月二十八日、アラビア丸

妻 アキ 明治三十四年十月二十八日生

子息 完秋（三一年）智恵子（二六年）

西川誠一 静岡県小笠郡上内田村、大正九年十二月二十七日生、

渡伯昭和三年十月十六日 ラプラタ丸

澄子 大正十四年一月四日生

子息 元範（五一年）敬造（五三年）

阿部二郎 茨城県多賀郡日立市、大正三年七月十七日生、渡伯大
正十四年九月二十七日、マニラ丸

妻 真佐子 大正一〇年一月二日生
子息 正毅（四六年）昭二（四七年）有三（四九年）
實父 初太郎 明治十六年九月十六日生

佃彌次郎 香川県香川郡大野村、明治九年七月三日生、渡伯大正三年十一月、ラプラタ丸
妻 コナミ 明治二十五年十月二日生
子息 薫（一五年）

奥田保徳 聖州ノロエステ線アバイ町、大正八年十一月十八日生
妻 利子 大正十二年一月三日生
子息 悦弘（四四年）修司（四五年）

古田義松 山口県吉敷郡阿知須町、明治三十一年十一月六日生、
渡伯昭和四年二月十一日、マニラ丸
妻 ヨシノ 明治三十六年七月七日生
子息 正夫（二五年）同妻 紀美子（二六年）
孫 英治（四八年）義夫（五〇年）
實父 千太郎 明治十年一月二十四日生
實母 チサ 明治七年二月二十八日生

小茂田光明 群馬県佐波郡豊受村、明治四四年七月十八日生、渡伯昭和九年一月七日、ブエノス・アイレス丸

妻 春江 大正三年二月一日生

子息 栄一（三九年）明（四〇年）弘實（四六年）幸朗（四九年）

宮武 勝 香川県綾歌郡林田村、明治四十一年十一月二十日生、渡伯昭和十年三月二十五日アリゾナ丸

妻 夏子 大正二年六月二十五日生

子息 栄子（三五年）栄一（三七年）節子（三八年） トシエ（四〇年）利幸（四一年） ヒロエ（四四年）治子（四七年）明代（四八年）清（五一年）秀子（五二年）孝（五四年）

松本久雄 静岡県榛原郡金谷町、大正二年五月十五日生、渡伯昭和二年十二月九日、神秦川丸

妻 文 大正七年七月十四日生

子息 武史（三九年）入江（四二年）君恵（四三年）誠二（四六年）静（四九年）利子（五二年）

崎田糧平 岩手県下閉伊郡宮古町、大正十五年五月二日生、渡伯昭和八年八月廿八日、アラビア丸

妻 千代子 昭和二年五月十日生

子息 勇互（五一年）

早川忠蔵 静岡県小笠郡佐朱村、大正六年十月八日生、渡伯昭和十一年二月十八日、リオデジャネイロ丸

妻 千代 大正九年八月八日生

子息 幸代（四二年）富佐代（四四年）洋子（四六年）忠志（四七年）広子（四九年）瀨（五二年）

高橋勇孝 宮城県宮城郡七北田村、大正十二年七月九日生、渡伯昭和十四年二月二十七日、サントス丸

妻 栄子 大正十五年十月二十一日生

子息 美恵子（四七年）ウイルソン（四九年）孝次（五一年）孝夫（五二年）

飯沼 弘 和歌山県海草郡西山東村、明治四十年十月二十八日生、渡伯昭和二年七月七日、マニラ丸

妻 ヤス 大正二年十二月二十八日生

子息 光守（四一年）忠行（四三年）一美（四八年）喜美代（五三年）

北海道南瀧郡多度志村、大正二年九月二十八日生、渡伯昭和八年二月三日、ブエノス・アイレス丸

妻 花子 大正八年十一月九日生

子息 弘（四二年）静江（四四年）彰（四五年）道子（四七年）雪子（四九年）

中島善次 佐賀県佐賀市水ヶ江町、大正二年五月十日生、渡伯昭和十一年一月一日、ラプラタ丸

妻 澄 大正十年四月一日生

子息 恵一郎(四二年) 弘子(四三年) 治子(四六年) 美穂子(四九年) 稔(五〇年)

海 恵樹 和歌山県東牟婁郡七川村、一九十五年生、渡伯昭和八年五月三十日、アフリカ丸

妻 千代子一九十八年生

子息 紀子(四〇年) 京子(四三年) 淳子(四六年) 彌生(五〇年)

小林平志 福井県吉田中藤島村、明治三十二年六月八日生、渡伯大正十三年十二月十七日、メキシコ丸

妻 小久 明治三十八年二月二十四日生

子息 平行

米川勝雄 茨城県広島郡夏海村、明治四十一年生、渡伯昭和九年一月三十日、アフリカ丸

妻 房子 大正五年三月二十日生

子息 久子(三六年) 忠雄(三八年) 健三(四三年) 武男(四六年) 哲男(四八年) 愛子(五一年)

古谷高一 山口県部市新川町、明治四十五年 六月十三日生、渡伯大正十三年十二月三十日、阿波丸

妻 文枝 大正五年十月十二日生

子息 静江（三八年）シゲリ（四〇年）美佐子（四三年）孝志（四七年）黎寧（五〇年）エリア（五三年）

上ヶ島晴男 北海道北見国紋別郡西興部村、大正十五年六月六日生、渡伯昭和八年四月十五日、アラビア丸
妻 光子一九三二年九月十七日生

海野秀雄 岡山県御津郡、大正十三年九月二十四日生、渡伯昭和二年十月三日、モンテビデオ丸

妻 トキ江 大正十五年八月十五日生

子息 弘（四八年）孝士（五〇年） トミ子（五三年）

水口 務 愛媛県伊予都南伊予村大正四年九月一日生、渡伯昭和二年九月十八日、ハワイ丸

妻 澄子 大正九年十二月十八日生

子息 美恵子（四一年）勇記（四三年）次男（四五年）

實弟 修（一八年）同妻 スエノ（二一年）

後 記

バストス連合日本人会の御後援を得て、本書「バストス二十五
年史」を編纂することができた。当初、未熟な私は、この大事業
と取組むことをためらったが、親友崎田春一君に激励され、また、
移住地在住諸賢の御指導、御鞭達と絶大なる御協力により、遂に
完成にまで漕ぎつけ得たわけである。

調査及び資料蒐集を開始してより約一年、その間、消え失せた
乏しい資料を、多くは在住諸賢の記憶の中に求め、或いは、埋れ
た書類の中より引き出して、それをノートにとって、更に移住者
と検討し、可及的に史實に忠實たらんことを期して書き続けてき
た。しかし、未だ調査不十分な箇所多数あり、そのため書くべき
ことを書かずにしたままのきらいもあり、省みて釈然たるものがあ
る。しかしながら一應、移住地の変遷の跡は大過なく辿り得たと
信ずる。

本書の編纂に当り、ブラ拓事務所より提供された資料は少くな
かった。また、バストス産業組合はじめ各産組出張所及び野球、陸
上、その他の諸団體からいたゞいた資料も多い。

また個人の執筆を乞うた章もある。各区開植小史は、それぞれの
区会が、私のために開催して下さった『想い出を語る座談会』の
速記を要約したものである。各区に共通した事項の重複する部分
があるが、これは各区史を夫々切離して、別個のものとして扱い、
記述したに因る。

一々芳名を列記することはしないが、移住地在住の諸賢をはじめ
とし、多くの先輩、知友諸氏の御厚意と愛情を一身に受けて、本

書を完成し得たことは、生涯の、この上ない幸福だと思っている。
こゝに更めて、御後援下さった人々に深甚なる感謝の意を表す
る次第である。

一九五五年三月十日

バストス市、崎田春一氏宅にて

水野 昌之

昭和三十年十一月五日 印刷

昭和三十年十一月十日 発行

バストス二十五年史

(非 売 品)

著 作 兼発行者 水 野 昌 之

伯国サンパウロ市アペニノス街六五〇番地

印刷者 長 久 保 慶一

東京都新宿区市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 大日本印刷株式会社